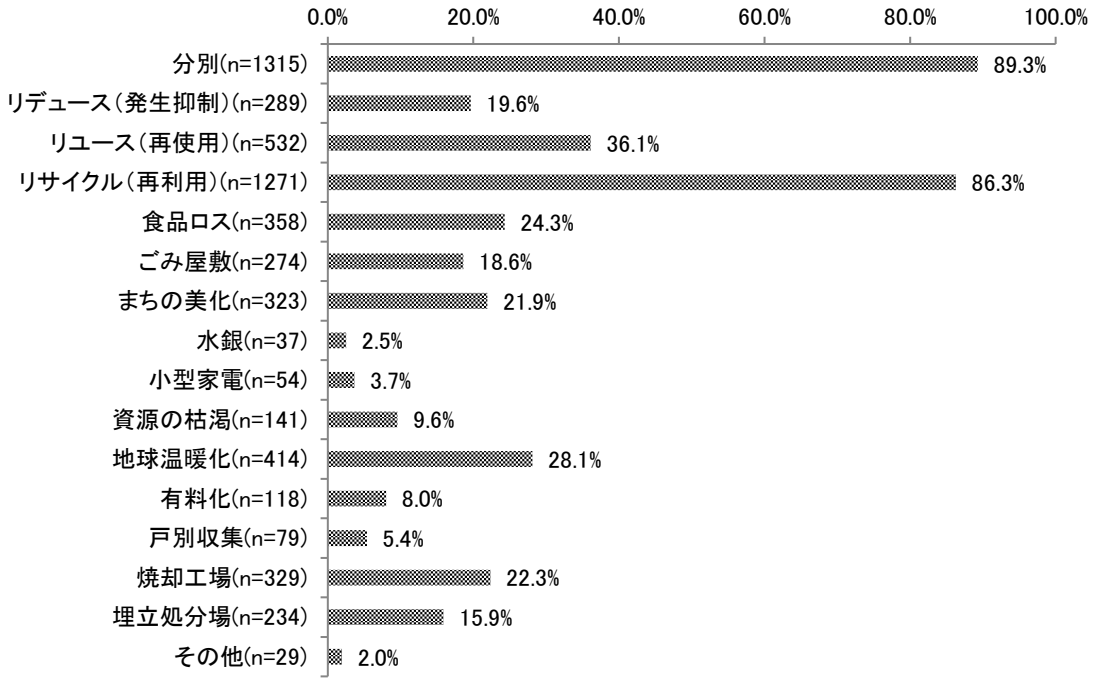
第２章　家庭から出るごみについてのアンケート調査結果の分析

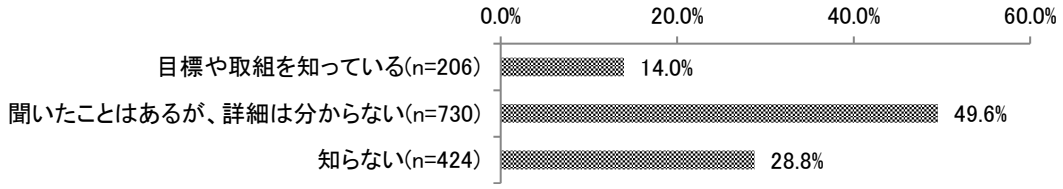
2.1　ごみ問題への関心について

問１　あなたは､｢ごみ｣や｢資源｣と聞いて何を思い浮かべますか。○はいくつでも。(n=1,473)



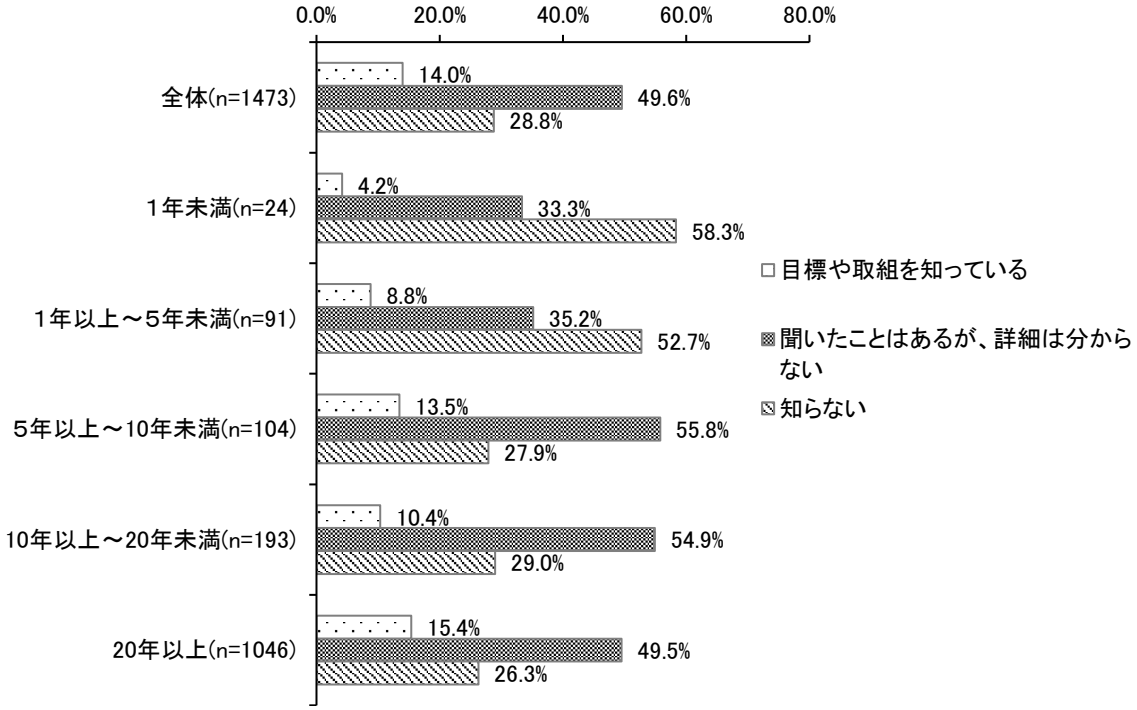
全体集計では、「分別」が 89.3％で最も高く、次いで「リサイクル（再利用)」が 86.3％、「リユース（再利用)」が 36.1％と続いている。

問２　あなたは、「ヨコハマ３Ｒ夢プラン」を知っていますか。○はひとつ。(n=1,473)



「聞いたことはあるが、詳細は分からない」が 49.6%で最も高く、次いで「知らない」が 28.8%、「目標や取組を知っている」が 14.0%と続いている。

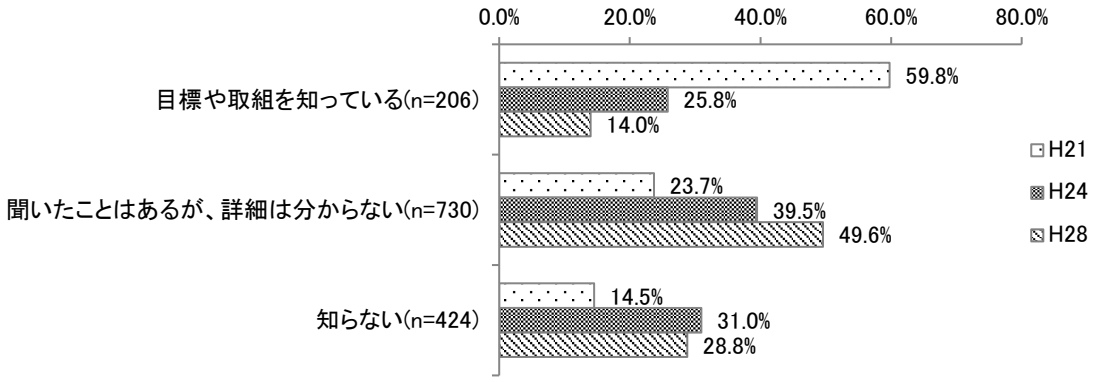
居住年数別



「１年未満」及び、「１年以上～５年未満」では、「知らない」と回答した比率がどちらも 50%を超えており、居住年数が短いほど知名度が低いことが分かる。また、居住年数が５年以上の世帯では、「聞いたことはあるが、詳細は分からない」が 50%前後となっているため、ヨコハマ３Ｒ夢プランの目標や取組の周知が課題だと考えられる。

経年変化

※平成 21 年度調査の設問は、「あなたは『横浜Ｇ３０プラン』又は、『ヨコハマはＧ３０』という言葉を知っていますか。次の中から１つ選んでください」だった。



年度別に比較すると、「目標や取組を知っている」の比率は低下しているが、「聞いたことはあるが、詳細は分からない」の比率は高くなっている。「横浜Ｇ３０プラン」と比較すると、「ヨコハマ３Ｒ夢プラン」の認知度は低いことが分かった。

■考察　ごみ問題への関心について

「横浜Ｇ３０プラン」の開始当初は、市民への分別説明会、啓発キャンペーン及び、早朝啓発指導を通じて、横浜市と市民が協働でごみの削減に取り組み、目標を上回る大きな成果を上げた。問 37 の自由意見記述において、「横浜Ｇ３０プランの取組と成果は知っていたが、その後のプランのことは知らなかった」という声があった。

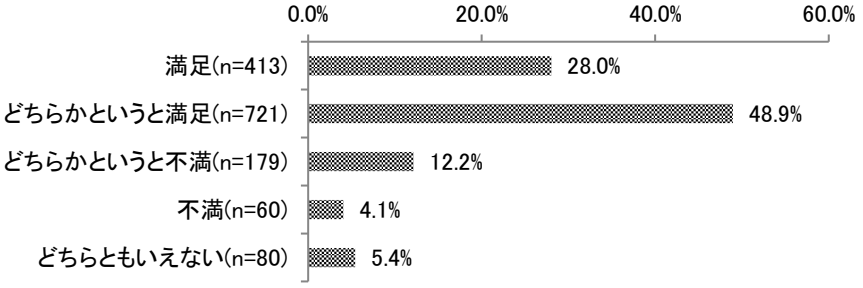
問１の回答結果を見ると、分別、リサイクル（再利用）、リユース（再利用）に関心が集まっていることが分かる。この結果は、分別収集品目を拡大し、３Ｒの推進を図った「横浜Ｇ３０プラン」の取組の成果と言えるのではないか。「ヨコハマ３Ｒ夢プラン」では、ごみそのものを減らす、リデュース（発生抑制）の強化が目標の一つであるが、問１の回答結果では、リデュース（発生抑制）は 19.6%にとどまり、リサイクの 86.3%、リユースの 36.1%とは、その差が大きく開いた。

「ヨコハマ３Ｒ夢プラン」は今年で７年目に入る計画だ。「横浜Ｇ３０プラン」と同様に、啓発キャンペーンやイベントの実施により、市民への周知を図っている。しかし、およそ半数が「聞いたことはあるが、詳細は分からない」と回答していることから、「横浜Ｇ３０プラン」と比較して、周知の取組が不十分であったと言える。プランの具体的な目標を示し、横浜市と市民が協働で取り組める活動を継続していくことが重要だ。

2.2　ごみの減量や処理についての満足度について

問３　あなたは、横浜市のごみ収集などの取組をどう思いますか。○はそれぞれひとつ。
(n=1,473)

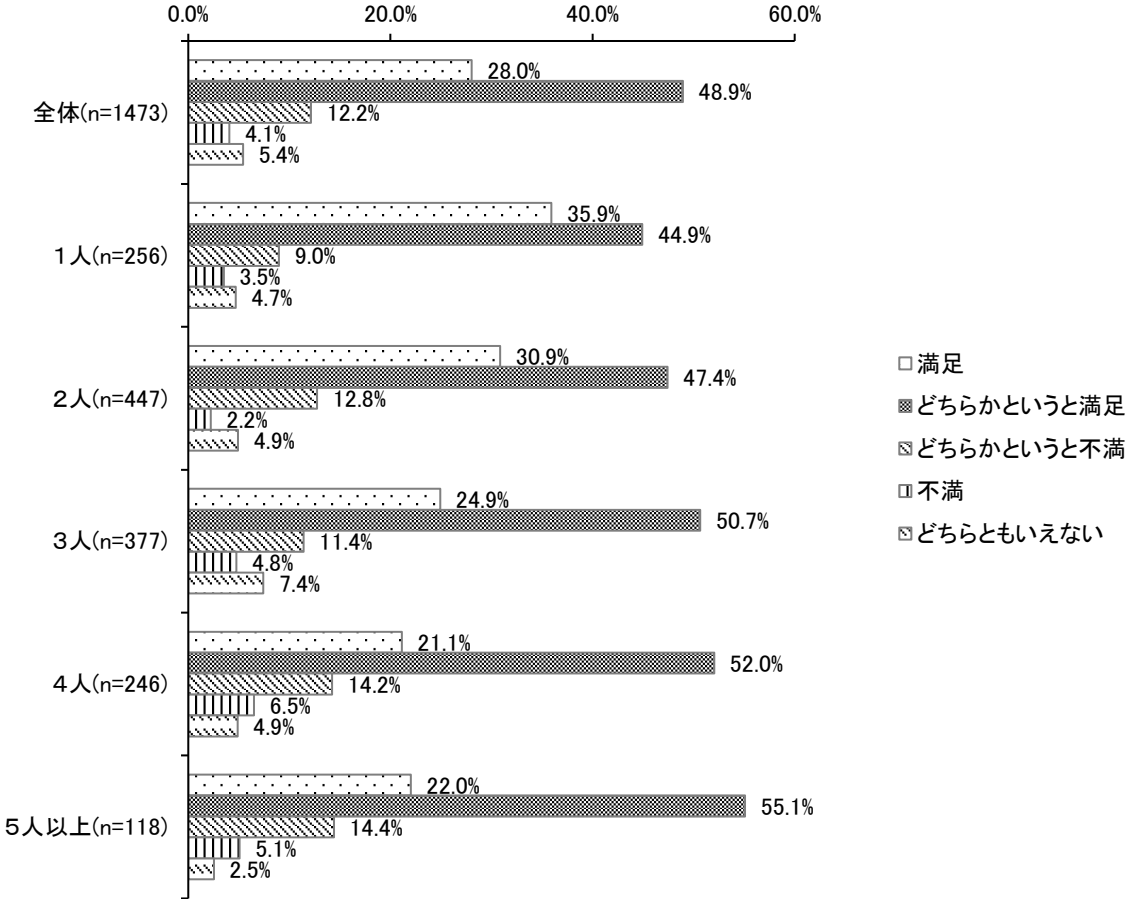
ごみの収集



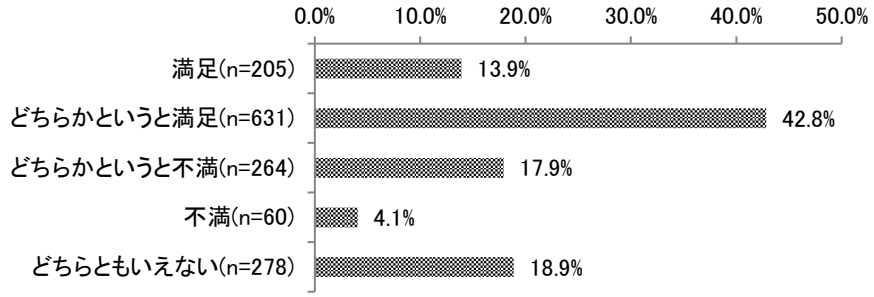
全体集計では、「どちらかというと満足」が 48.9%で最も高く、次いで「満足」が 28.0%、「どちらかというと不満」が 12.2%と続いている。

同居人数別に比較すると、「満足」と回答した比率は、「１人」世帯が 35.9%で最も高く、人数が増えるごとに比率が低下しているが、「どちらかというと満足」と回答した比率は、「５人以上」世帯が 55.1%で最も高く、人数が減るごとにその比率も低下している。

同居人数別

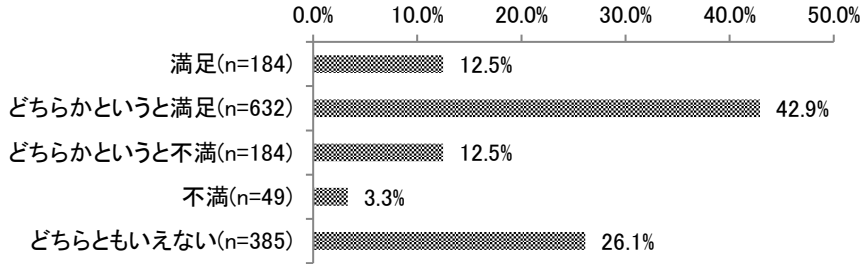


ごみに関する情報提供



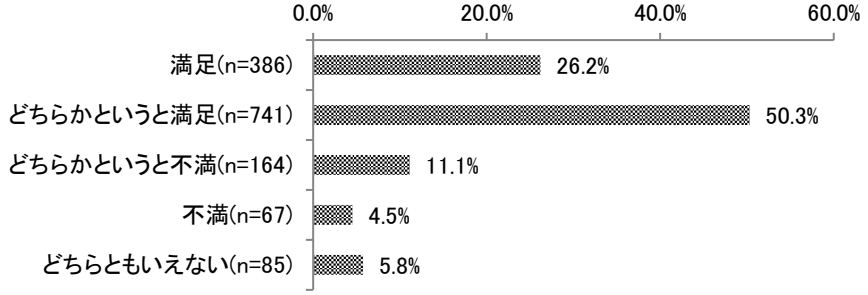
「どちらかというと満足」が 42.8%で最も高く、次いで「どちらともいえない」が 18.9%、「どちらかというと不満」が 17.9%と続いている。

ごみ減量への取組



「ごみに関する情報提供」と同様の傾向になっており、「どちらかというと満足」が 42.9%で最も高い結果となった。

住んでいる地域の清潔さ



「どちらかというと満足」が 50.3%で最も高く、次いで「満足」が 26.2%となった。「満足」と「どちらかというと満足」の累積構成比は 76.5%となることから、この設問に関しては、おおむね満足を得られているという結果になった。

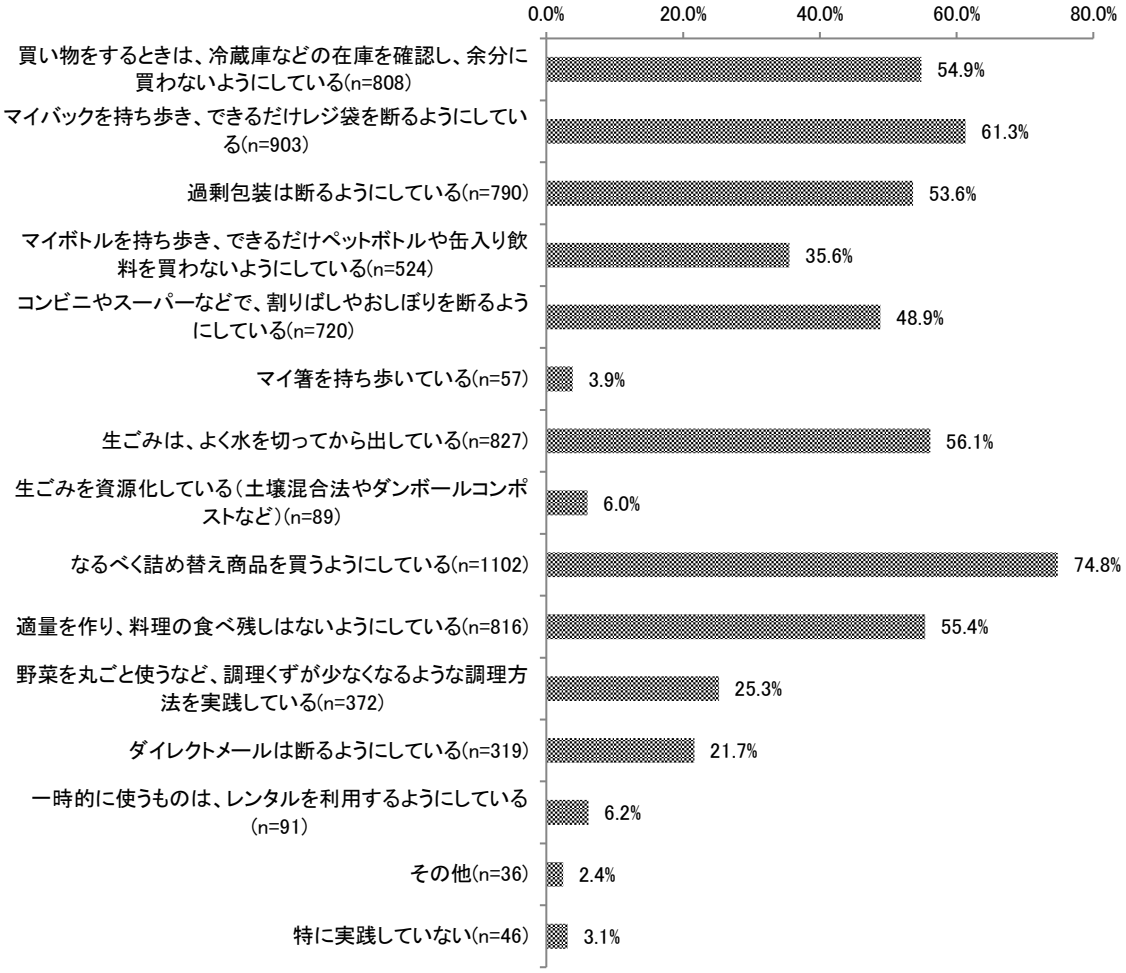
■考察　ごみの減量や処理についての満足度について

横浜市のごみの減量や処理についての取組は、多くの市民が満足している。特に、ごみの収集及び、住んでいる地域の清潔さに関しては、「満足」と「どちらかというと満足」の累積構成比は 76%を超えている。人口と排出されるごみの量は比例しており、約 370 万人という横浜市の人口規模から見ると、この満足度は決して低くはない。

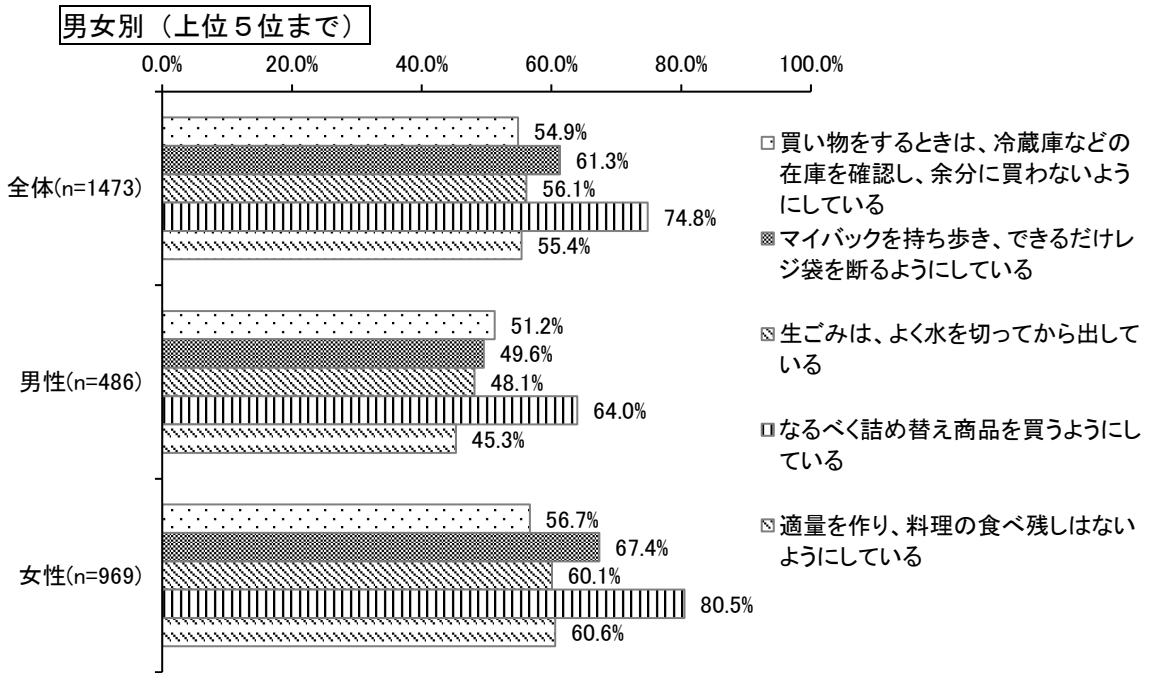
一方、ごみに関する情報提供及び、ごみ減量への取組については、「満足」と「どちらかというと満足」の累積構成比は 60%に届かなかった。ごみの減量に関して、特出した成果を上げた「横浜Ｇ３０プラン」の取組は、現在、「ヨコハマ３Ｒ夢プラン」に引き継がれている。したがって、横浜市のごみ減量の取組が市民に認知、理解されれば、満足度は上がると考えられる。取組の成果も含めた情報提供に力を入れる必要がある。

2.3　３Ｒ行動（リデュース、リユース、リサイクル）について

問４　あなたが実践している「ごみを出さない取組（リデュース）」はどれですか。○はいくつでも。(n=1,473)

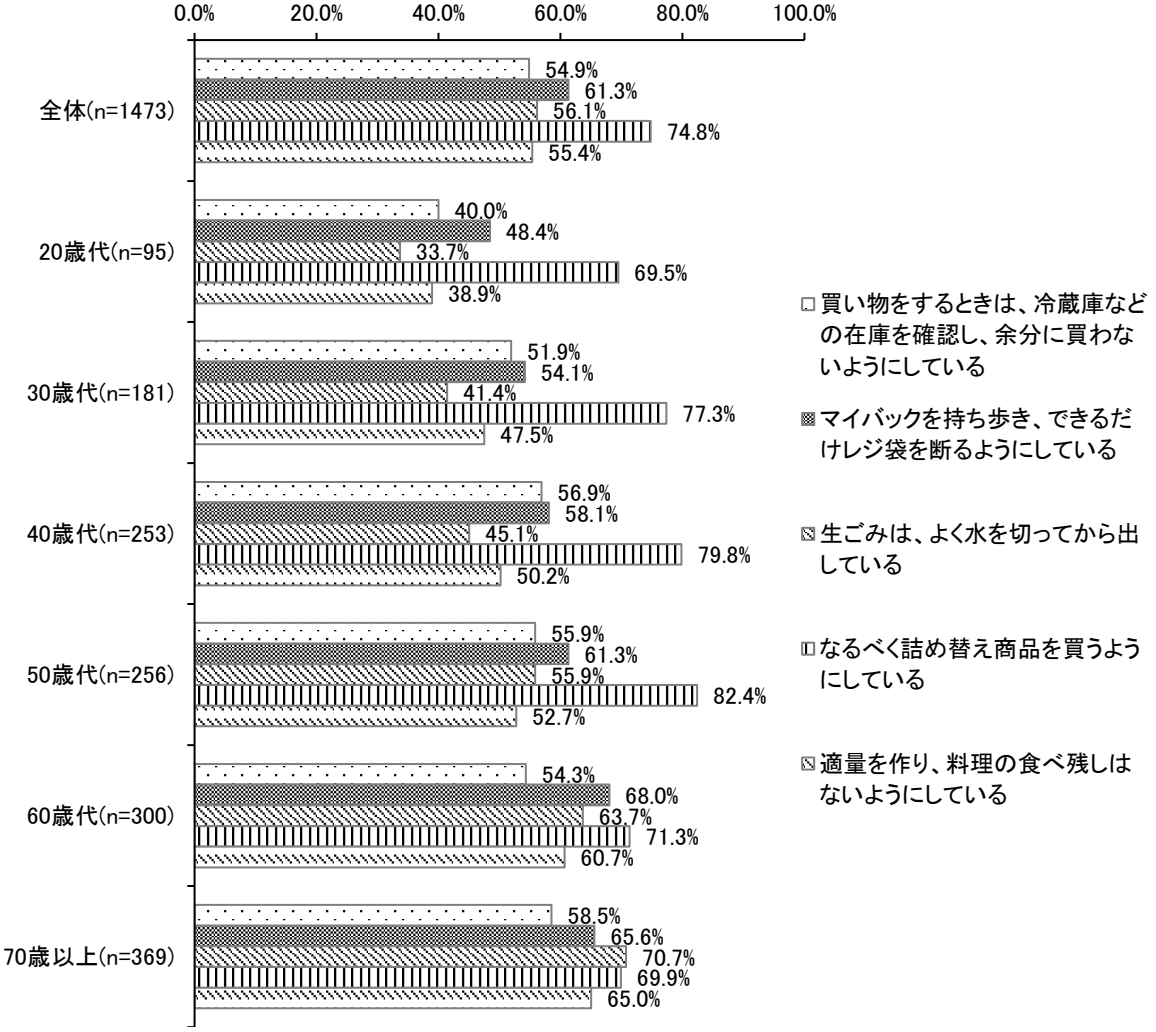


「なるべく詰め替え商品を買うようにしている」が 74.8%で最も高く、次いで「マイバックを持ち歩き、出来るだけレジ袋を断るようにしている」が 61.3%、「生ごみは、よく水を切ってから出している」が 56.1%と続いている。



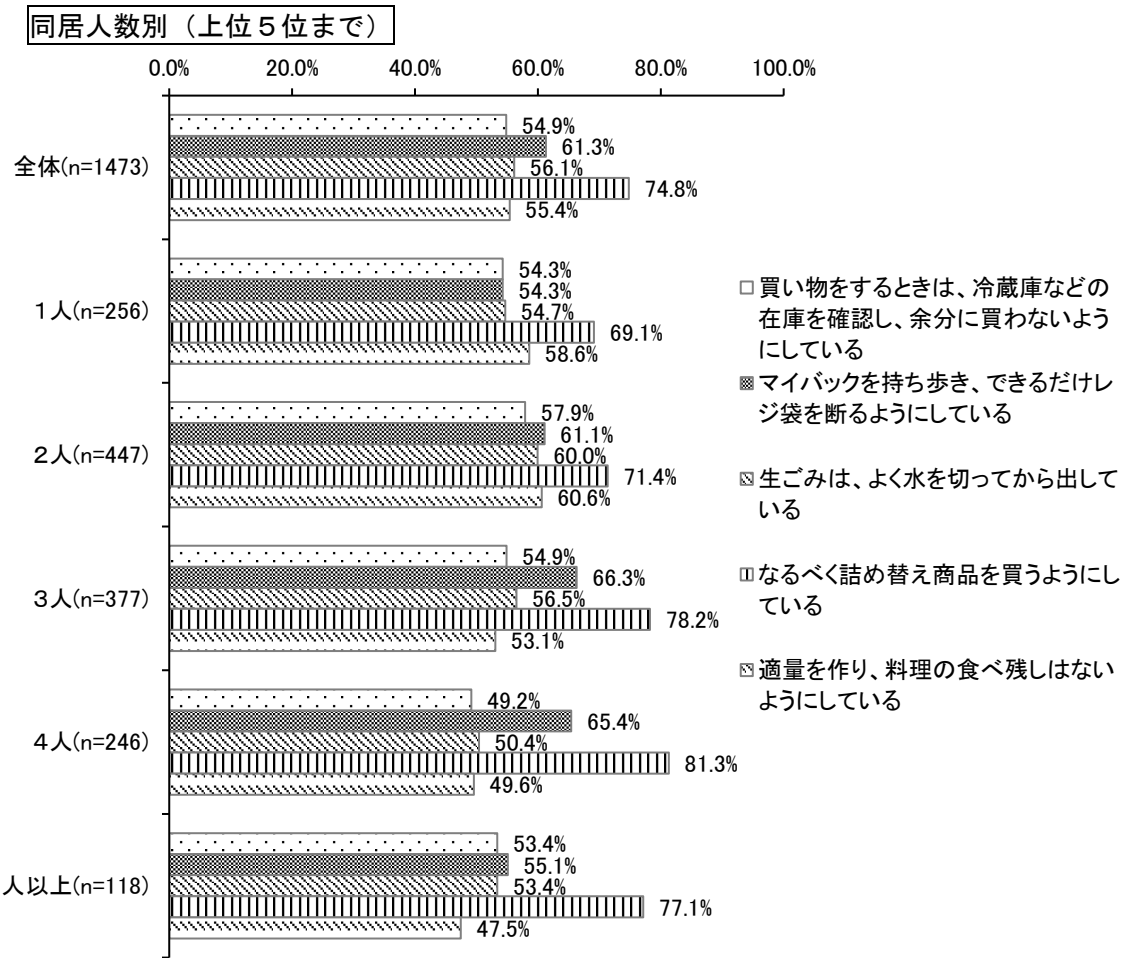
男女別に比較すると、上位５位までは、全ての項目において女性が男性を上回っており、特に、「マイバックを持ち歩き、できるだけレジ袋を断るようにしている」は、「男性」と「女性」で 17.8%の差があり、女性がよりごみを出さない取組を実践していることが分かる。

年代別（上位５位まで）



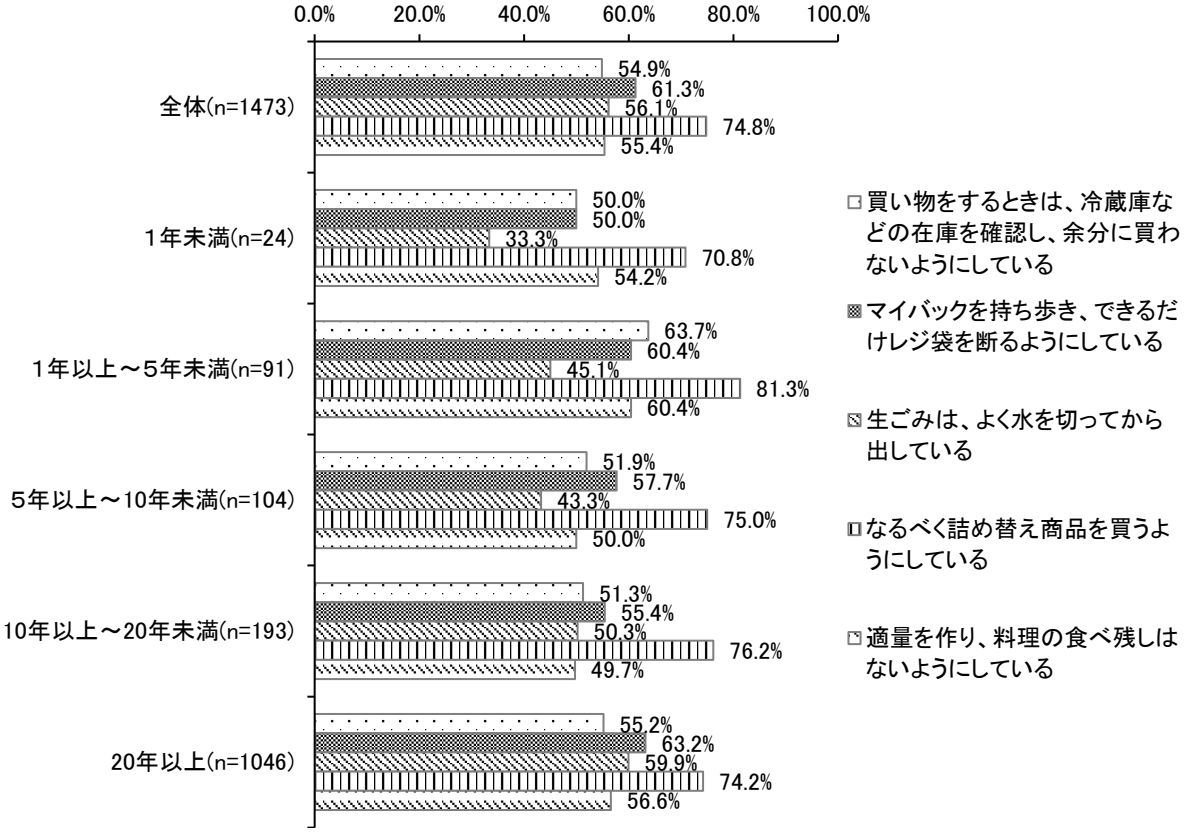
年代別に比較すると、「なるべく詰め替え商品を買うようにしている」と回答した人は、「50歳代」が 82.4%で最も高く、次いで「40 歳代」が 79.8%、「30 歳代」が 77.3%と続いている。

また、「生ごみは、水をよく切ってから出している」と回答した人は、「70 歳以上」が 70.7%で最も高く、「20 歳代」が 33.7%で最も低くなっており、年代が上がるにつれて比率も高くなっている。



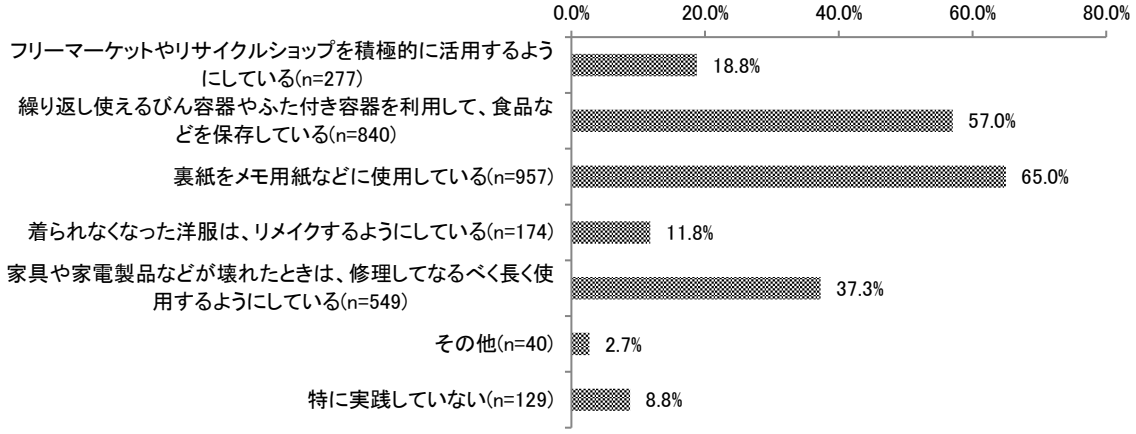
同居人数別に比較すると、「なるべく詰め替え商品を買うようにしている」と回答した比率は、「４人」世帯が 81.3%で最も高く、次いで「３人」世帯が 78.2%、「５人以上」世帯が 77.1%と続いている。

居住年数別（上位５位まで）



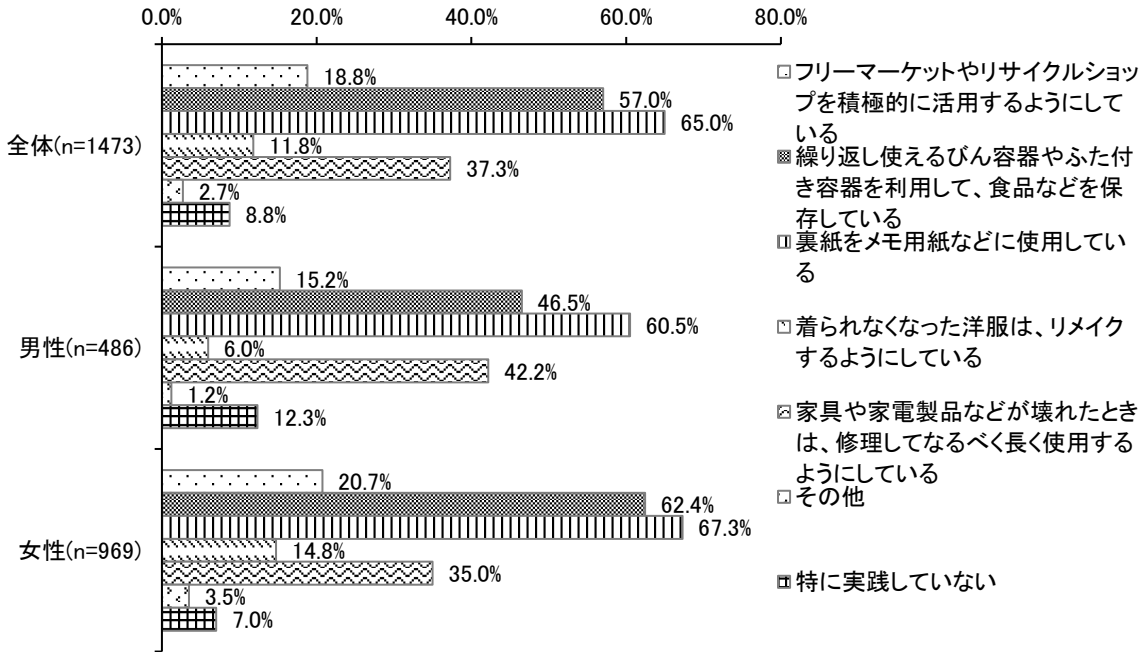
居住年数別に比較すると、「なるべく詰め替え商品を買うようにしている」と回答した人は、「１年以上～５年未満」が 81.3％で最も高く、次いで「10 年以上～20 年未満」が 76.2％、「５年以上～10 年未満」が 75.0％と続いている。

問５　あなたが実践している「繰り返し使う取組（リユース）」はどれですか。○はいくつでも。
(n=1,473)



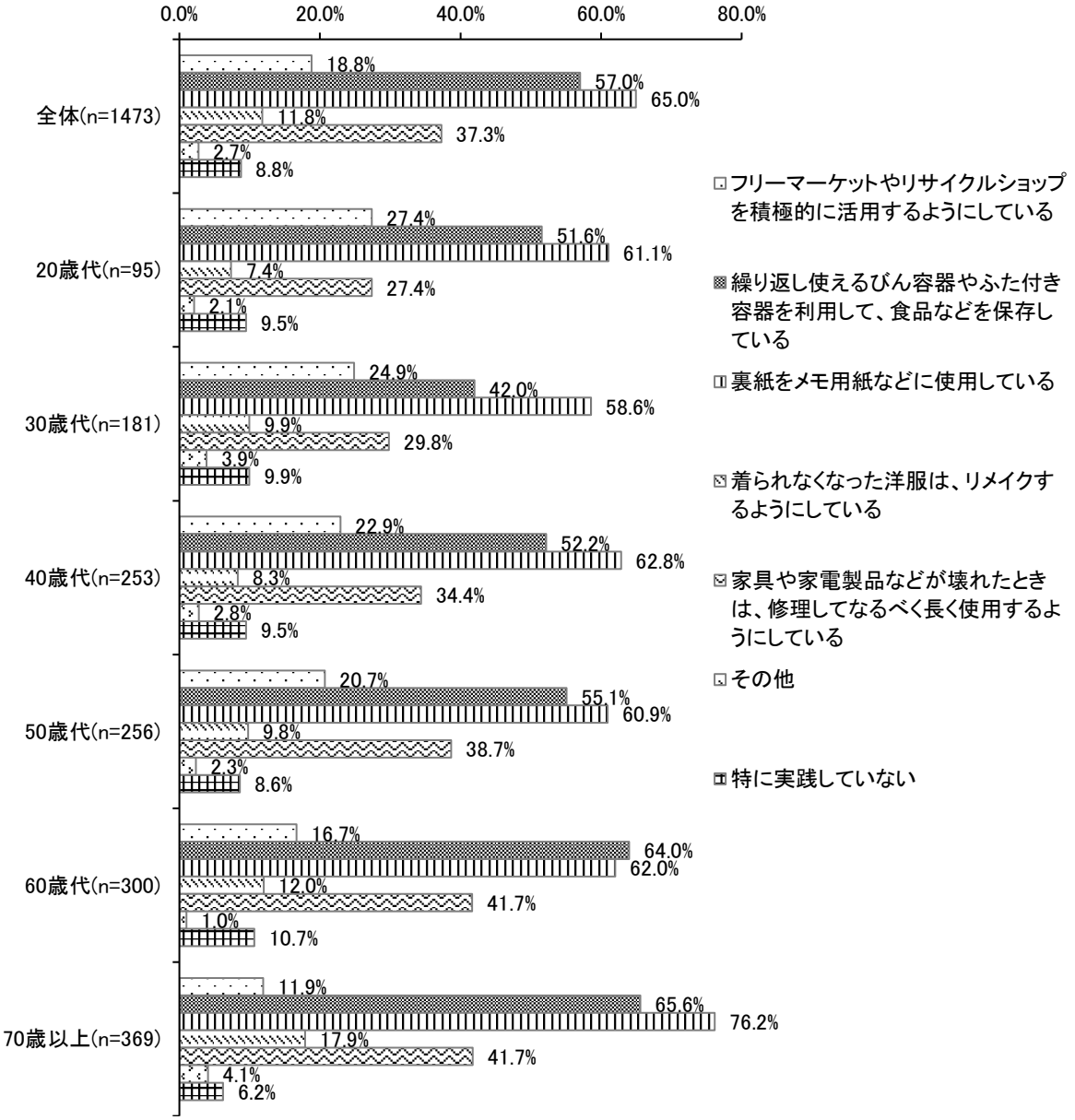
「裏紙をメモ用紙などに使用している」が 65.0%で最も高く、次いで「繰り返し使えるびん容器やふた付き容器を利用して、食品などを保存している」が 57.0%、「家具や家電製品などが壊れたときは、修理してなるべく長く使用するようにしている」が 37.3%という結果になった。

男女別



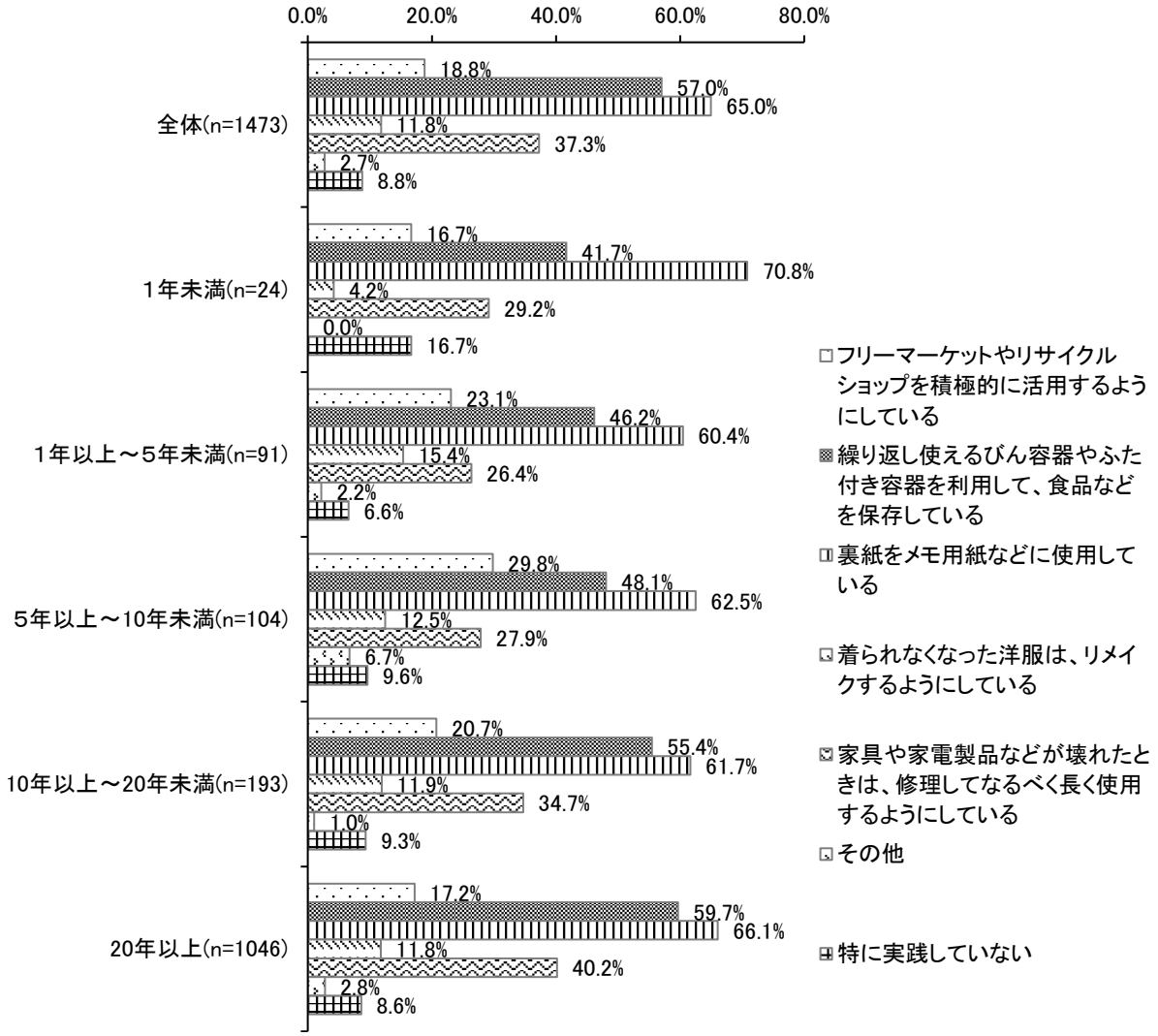
男女別に比較すると、「家具や家電製品などが壊れたときは、修理してなるべく長く使用するようにしている」及び、「特に実践していない」以外の全ての項目で女性が男性を上回っており、特に、「繰り返し使えるびん容器やふた付き容器を利用して、食品などを保存している」は、「男性」と「女性」で 15.9%の差があり、女性がより繰り返し使う取組を実践していることが分かる。

年代別



年代別に比較すると、「フリーマーケットやリサイクルショップを積極的に活用するようにしている」及び、「特に実践していない」以外の全ての項目で「70 歳以上」が最も高くなっており、年代が上がるほど繰り返し使う取組を実践していることが分かる。

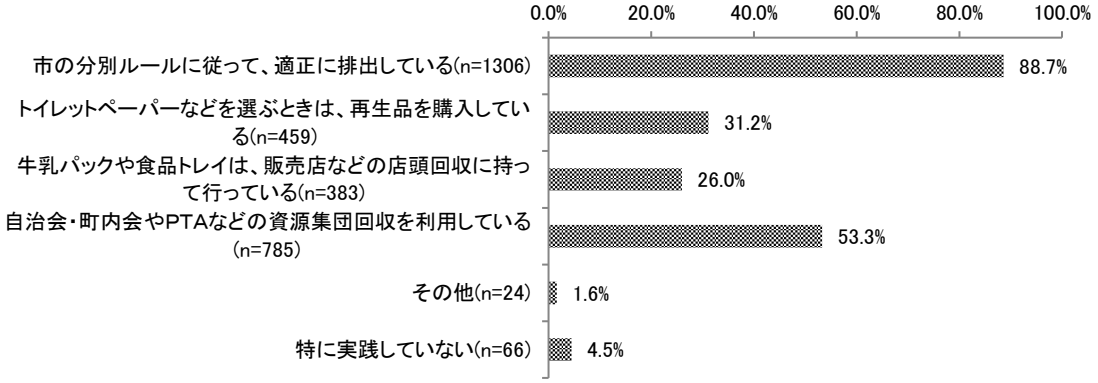
居住年数別（上位５位まで）



居住年数別に比較すると、「裏紙をメモ用紙などに使用している」のは、「１年未満」の 70.8%が最も高く、次いで「20 年以上」の 66.1%、「５年以上～10 年未満」の 62.5%が続いた。

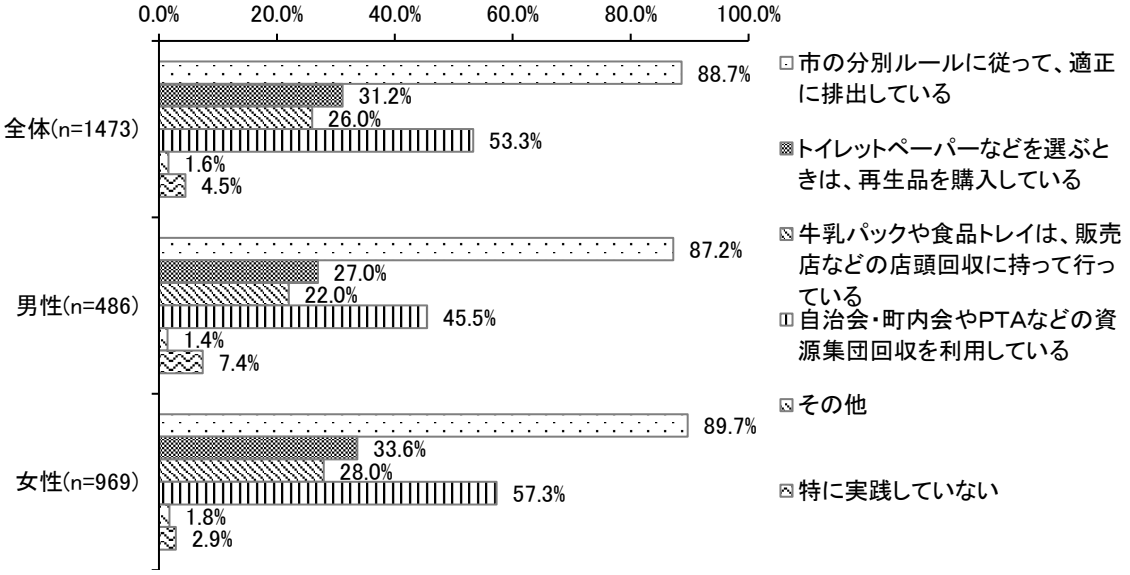
しかし、「特に実践していない」では、「１年未満」の 16.7%が最も高く、最も低い「１年以上～５年未満」とは 10.1%の差があった。

問６　あなたが実践している「リサイクルに向けた取組」はどれですか。○はいくつでも。
（n=1,473）



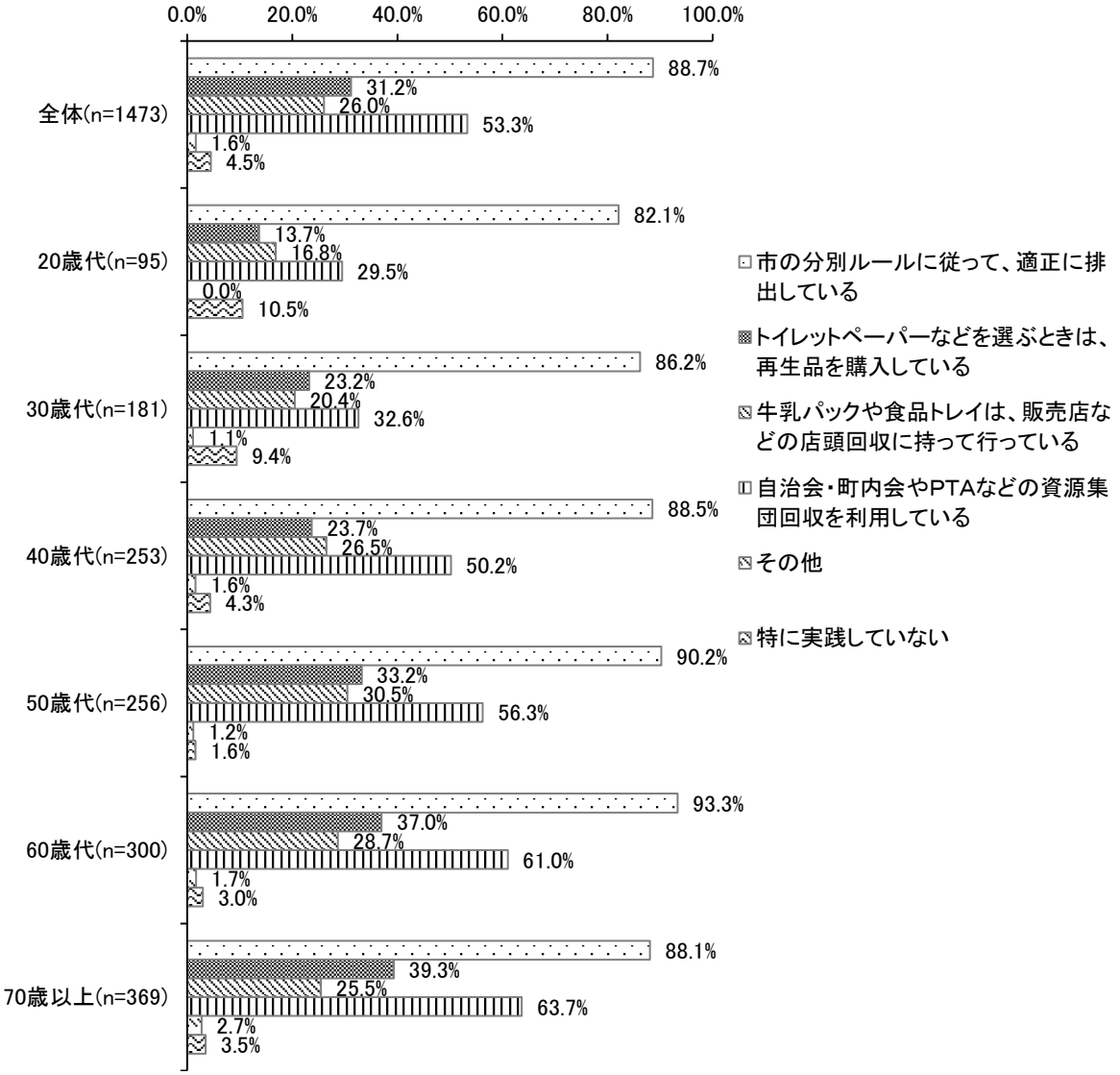
「市の分別ルールに従って、適正に排出している」が 88.7％で最も高く、次いで「自治会・町内会やＰＴＡなどの資源集団回収を利用している」が 53.3％となった。

男女別



男女別に比較すると、「特に実践していない」以外の全ての項目で女性が男性を上回っており、女性がよりリサイクルに向けた取組を実践していることが分かる。

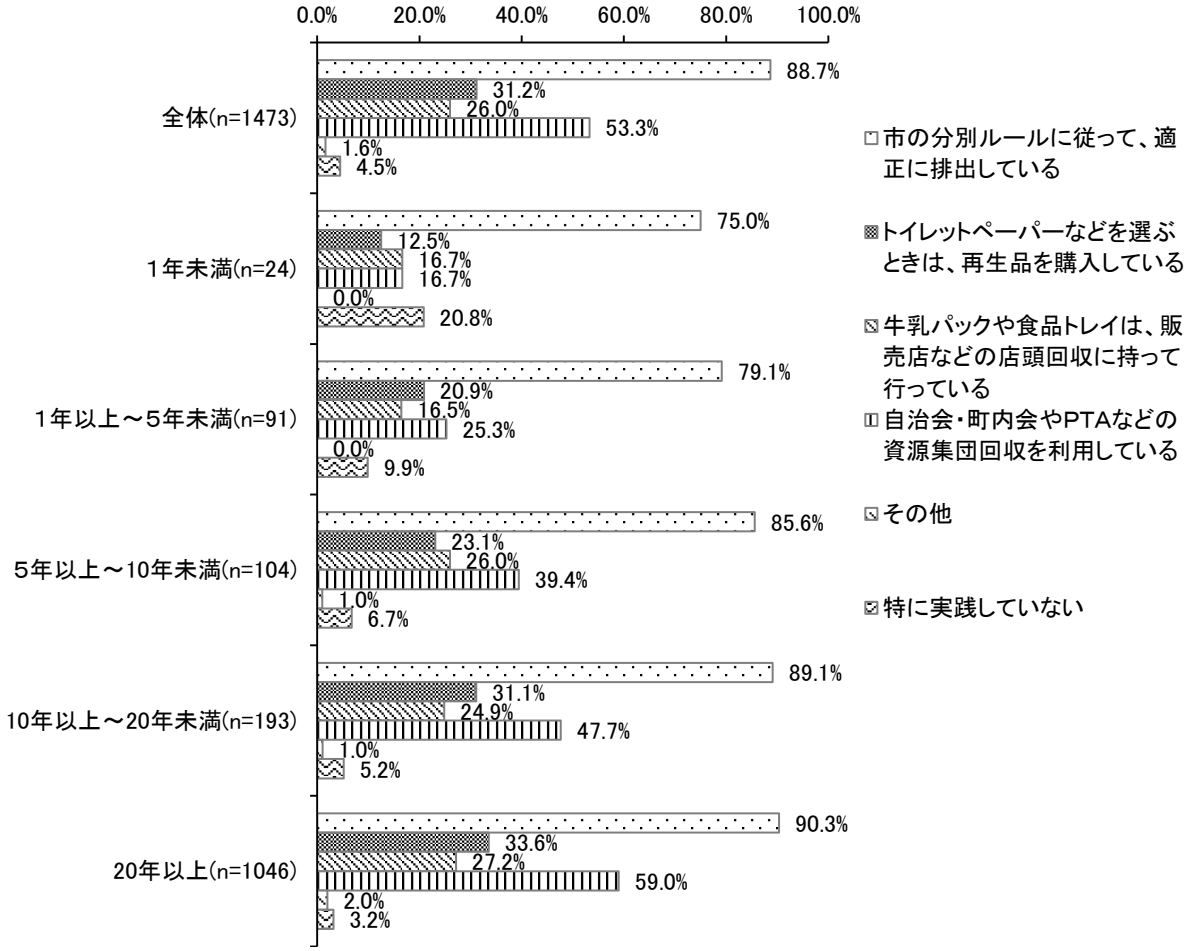
年代別



年代別に比較すると、「市の分別ルールに従って、適正に排出している」と回答した人は、「60歳代」が93.3%で最も高く、次いで「50歳代」が90.2%、「40歳代」が88.5%と続いている。

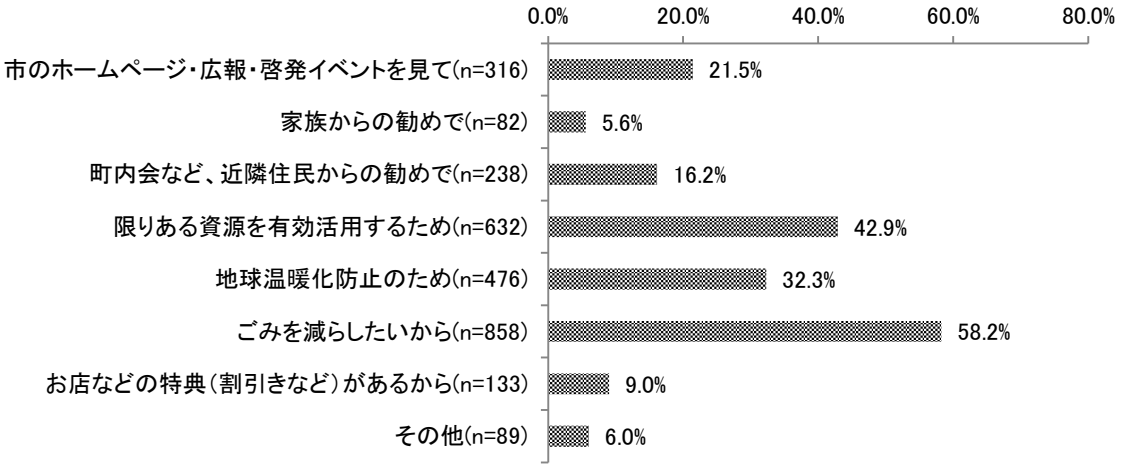
また、「トイレットペーパーなどを選ぶときは、再生品を購入している」及び、「自治会・町内会やＰＴＡなどの資源集団回収を利用している」では、年代が上がるにつれて、比率が高くなる傾向にある。

居住年数別



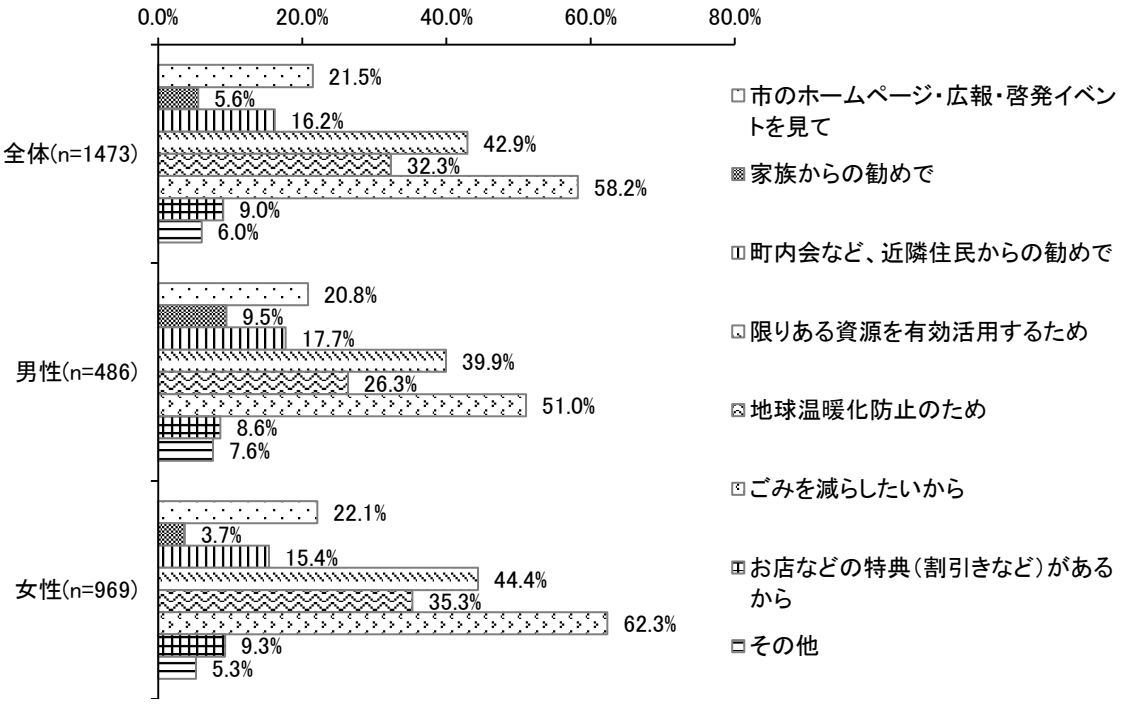
居住年数別に比較すると、どの項目においても居住年数が長いほど取組を行っている傾向にあるが、「特に実践していない」では、「１年未満」が 20.8%で最も高いという結果になった。

問７　あなたが３Ｒ行動（リデュース、リユース、リサイクル）を実践するきっかけはどれですか。○はいくつでも。(n=1,473)

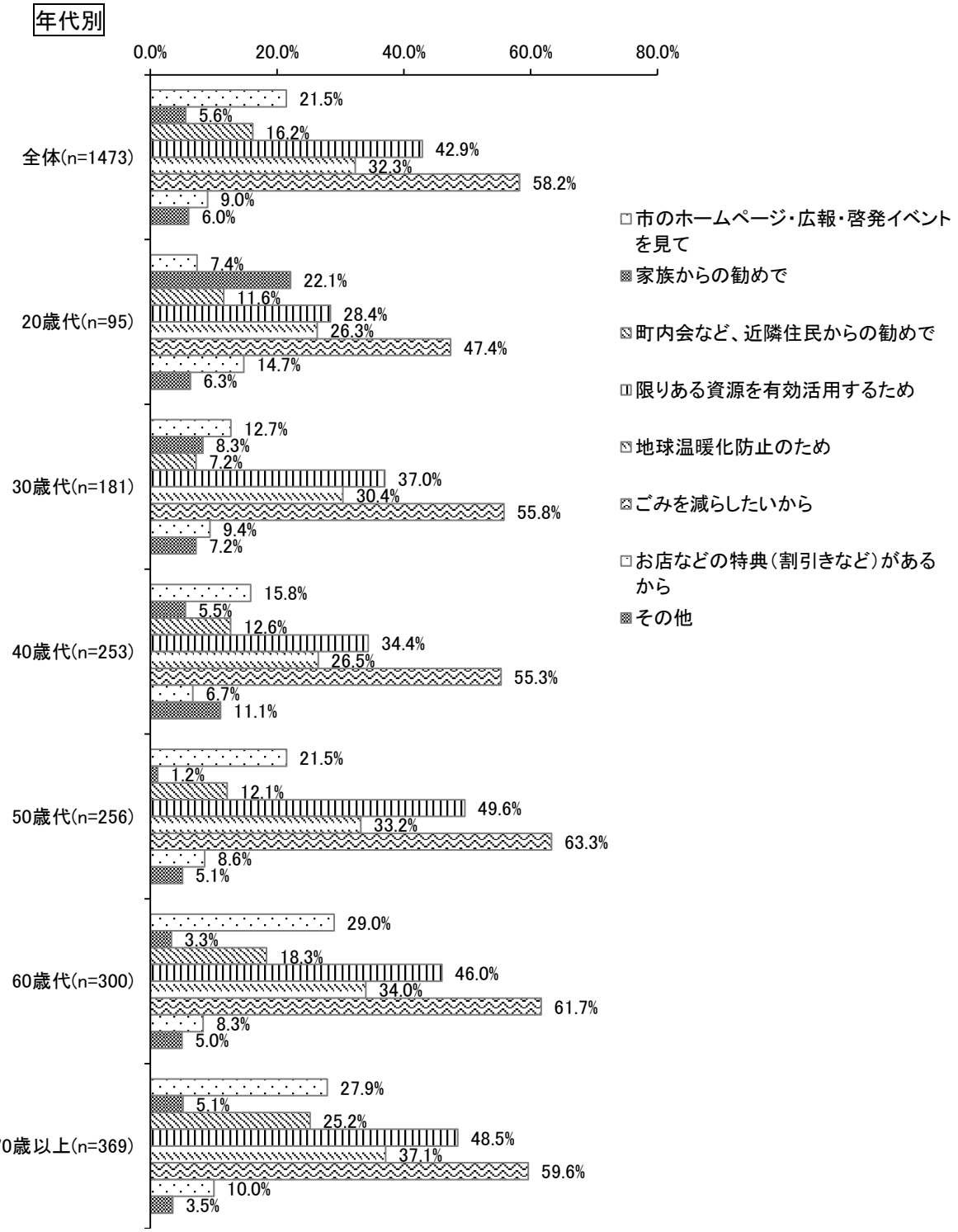


「ごみを減らしたいから」が 58.2%で最も高く、次いで「限りある資源を有効活用するため」が 42.9%、「地球温暖化のため」が 32.3%と続いている。

男女別



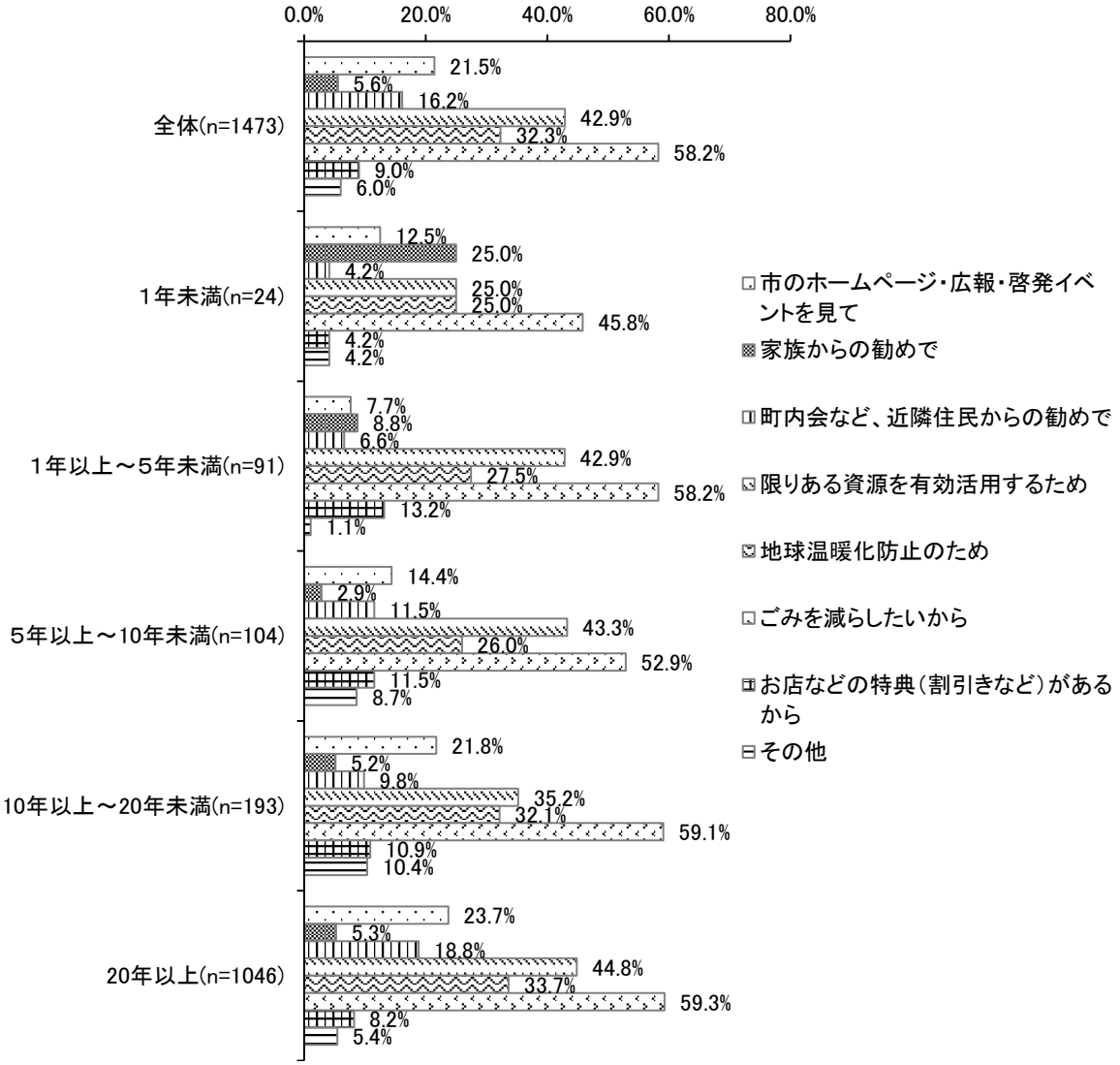
男女別に比較すると、「ごみを減らしたいから」では、「男性」と「女性」で 11.3%の差があり、女性がよりごみを減らすために３Ｒ行動を実践していることが分かる。



年代別に比較すると、「ごみを減らしたいから」と回答した年代は、「50 年代」が 63.3%で最も高く、次いで「60 歳代」が 61.7%、「70 歳以上」が 59.6%と続いている。

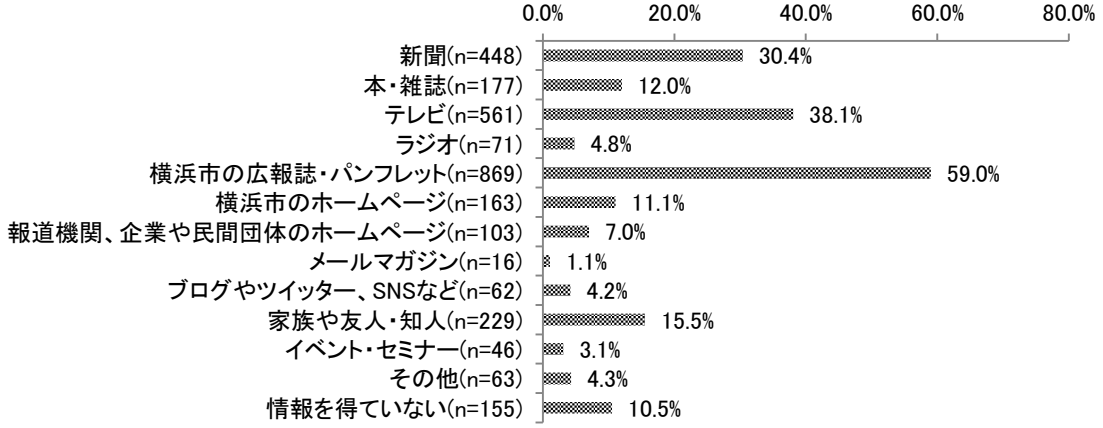
また、50 歳代以上では、「限りある資源を有効活用するため」、「地球温暖化防止のため」の累積構成比が 80.0%以上となることから、年代が上がるほど、身近な要因だけではなく、地球環境も意識して３Ｒ行動を実践していることが分かる。

居住年数別



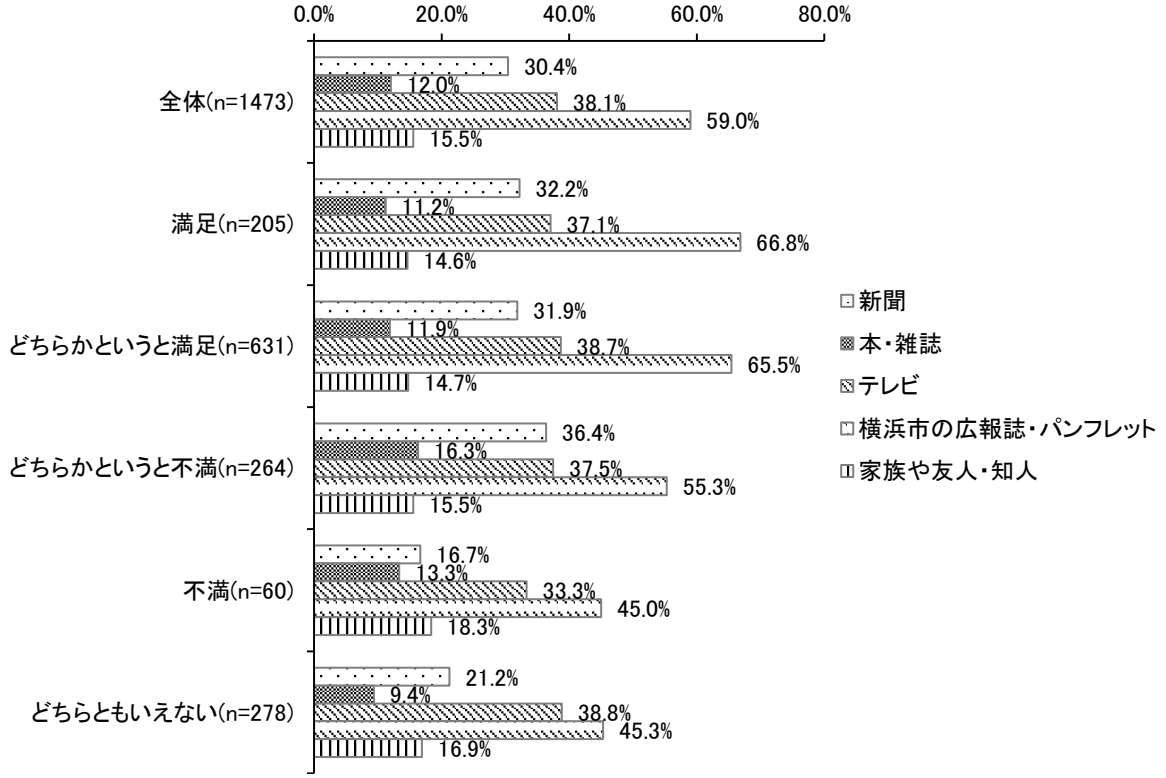
居住年数別に比較すると、「ごみを減らしたいから」と回答した比率は「20 年以上」が「59.3%」で最も高く、次いで「10 年以上～20 年未満」が 59.1%、「１年以上～５年未満」が 58.2%と続いている。

問８　あなたが３Ｒ行動（リデュース、リユース、リサイクル）などの環境に関する情報を得る主な手段はどれですか。○はいくつでも。(n=1,473)



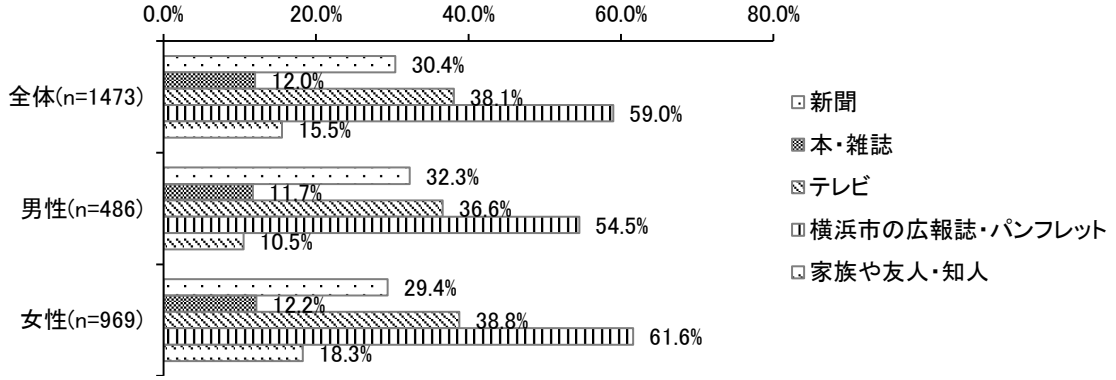
「横浜市の広報誌・パンフレット」が 59.0％で最も高く、次いで「テレビ」が 38.1％、「新聞」が 30.4％と続いている。

問３　ごみに関する情報提供の満足度との関係（上位５つまで）



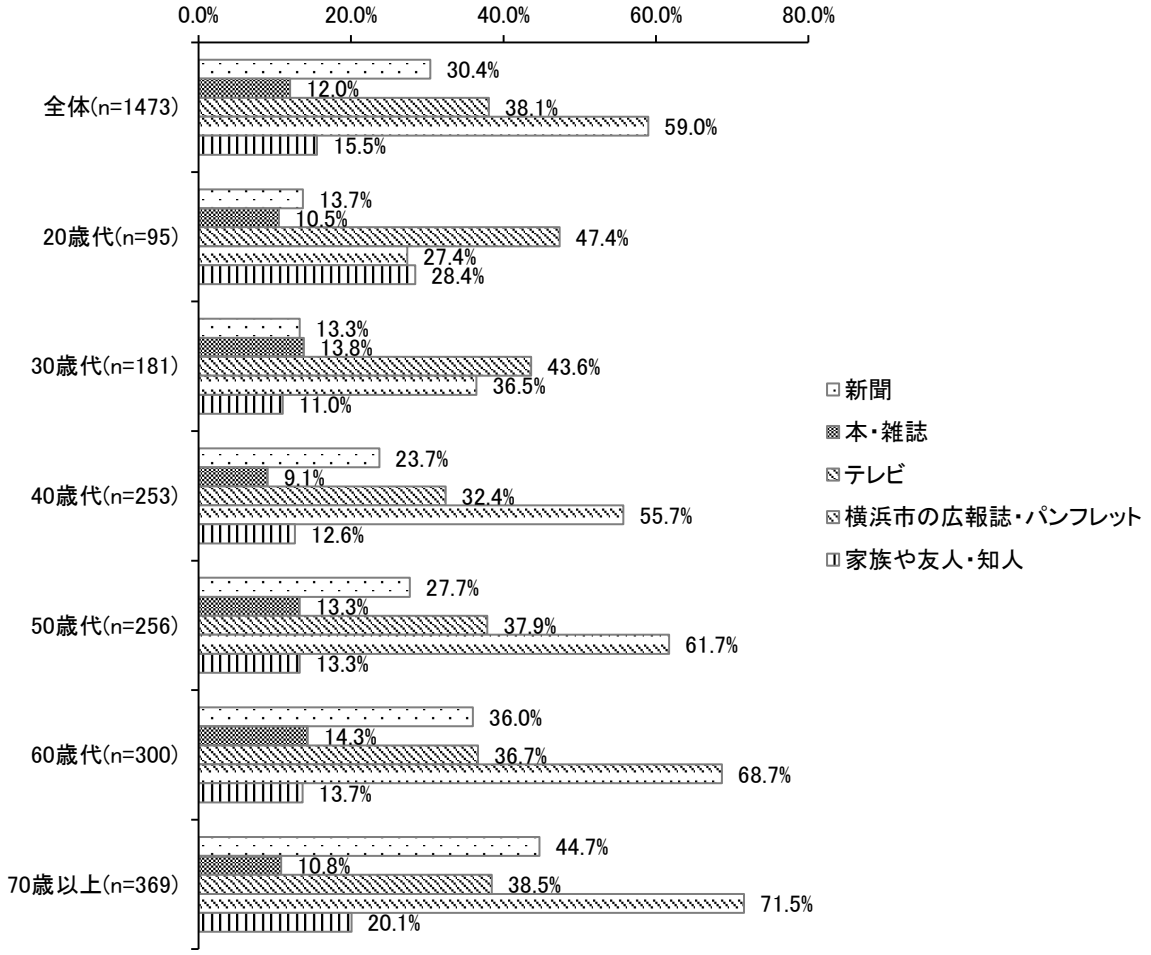
情報提供の満足度別に比較すると、「横浜市の広報誌・パンフレット」から情報を得ている人ほど、ごみに関する情報提供に満足しているという結果になった。また、横浜市の広報誌・パンフレットから情報を得ている人の比率も高いことから、横浜市の広報誌・パンフレットは、情報発信手段として非常に有効であるといえる。

男女別（上位５位まで）

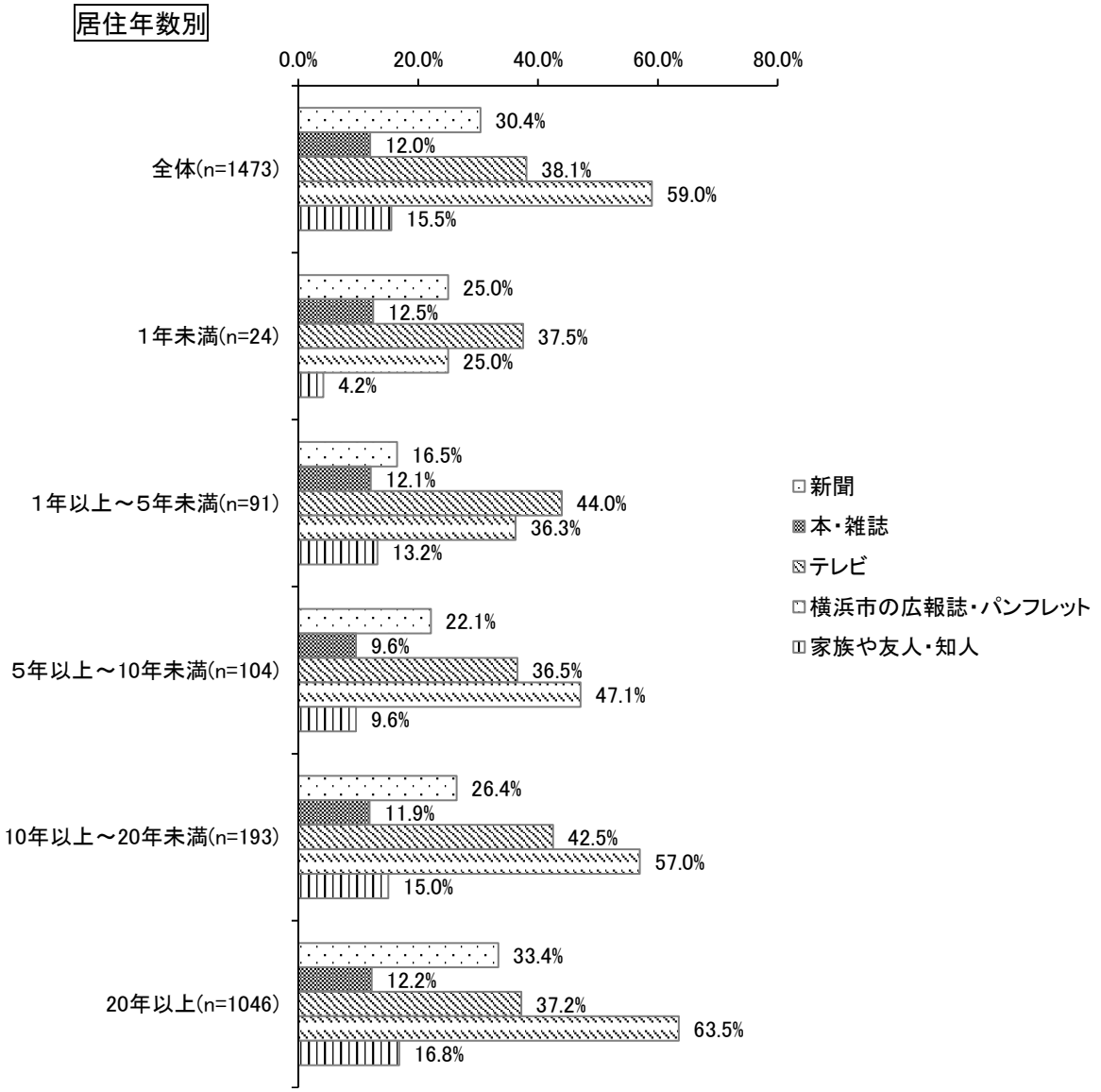


男女別に比較したところ、回答に大きな差は見られなかった。

年代別



年代別に比較すると、「横浜市の広報誌・パンフレット」と回答した年代は「70 歳以上」が 71.5%で最も高く、次いで「60 歳代」が 68.7%、「50 歳代」が 61.7%と続いており、年代が上がるほど横浜市の広報誌・パンフレットから情報を得ていることが分かる。



居住年数別に比較すると、情報を得る主な手段として「横浜市の広報誌・パンフレット」と回答した人は、「20 年以上」が 63.5%で最も高く、次いで「10 年以上～20 年未満」が 57.0%と続いており、居住年数が長くなるほど「横浜市の広報誌・パンフレット」から情報を得ている傾向があることが分かる。

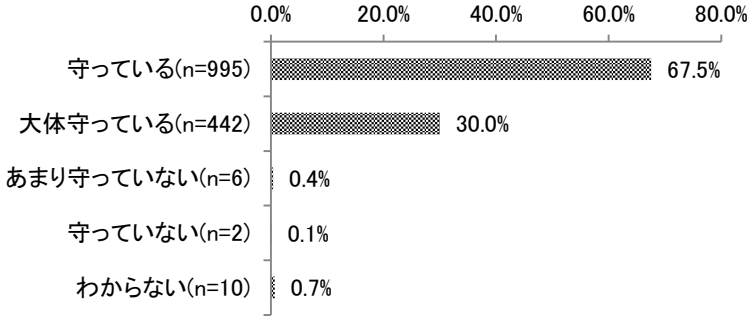
■考察　３Ｒ行動（リデュース、リユース、リサイクル）について

調査結果から、多くの横浜市民が３Ｒ行動（リデュース・リユース・リサイク）に取り組んでいることが分かる。今後、さらに３Ｒ行動を推進するためには、市民だけでなく、小売業者の協力も必要だと考えられる。レジ袋の有料化や、小分け食材商品を増やすことも、ごみの発生抑制につながる。

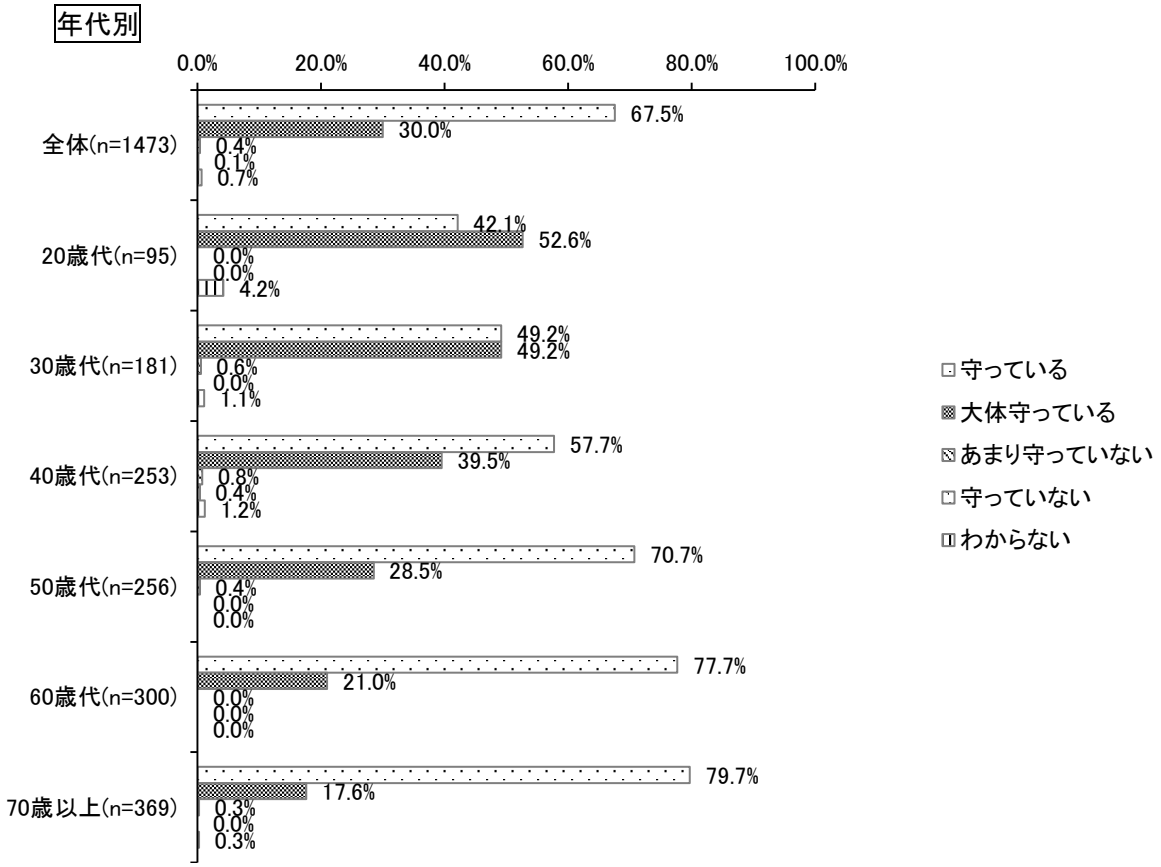
また、横浜市の広報誌・パンフレットから情報を得ている人が多いことから、これらを有効活用し、幅広い年代に３Ｒ行動の推進を促していく必要がある。

2.4　ごみの分別ルールについて

問９　あなたは、横浜市の分別ルールを守っていますか。○はひとつ。(n=1,473)

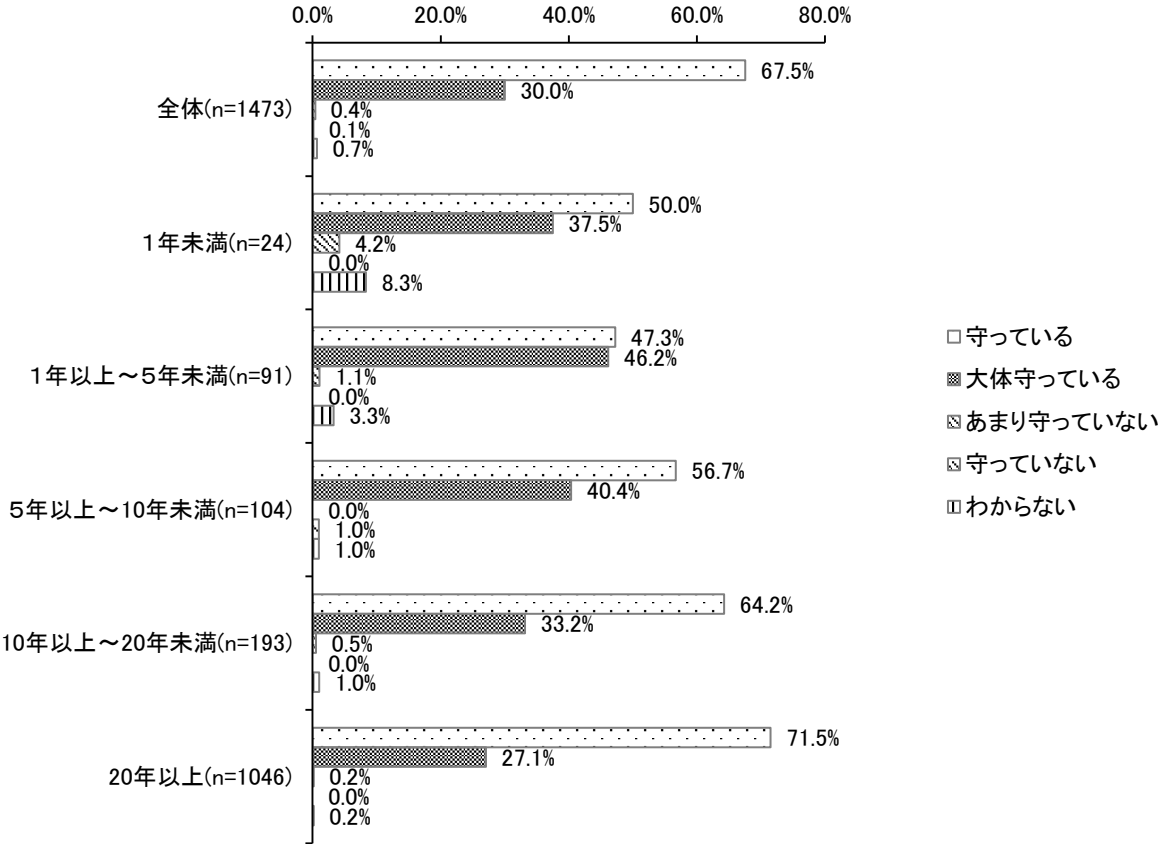


「守っている」が 67.5%で最も高く、次いで「大体守っている」が 30.0%となっており、非常に多くの人が分別ルールを守っている。



年代別に比較すると、「守っている」と回答した人は、「70 歳以上」が 79.7%で最も高く、次いで「60 歳代」が 77.7%、「50 歳代」が 70.7%と続いており、年代が上がるにつれて分別ルールを守る傾向にあることが分かる。

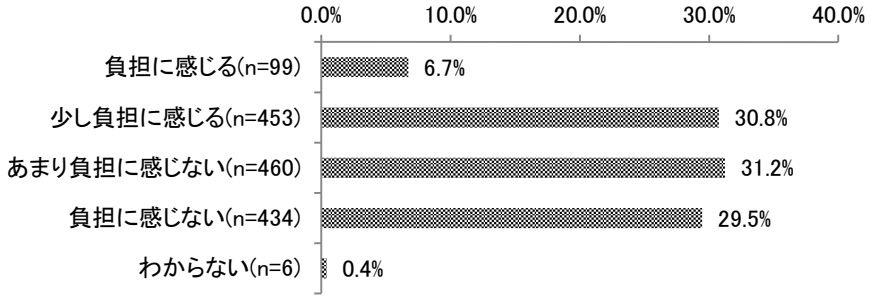
居住年数別



居住年数別に比較すると、「守っている」と回答した人は、「20 年以上」が 71.5%で最も高く、次いで「10 年以上～20 年未満」が 64.2%、「５年以上～10 年未満」が 56.7%と続いており、年代が上がるほど分別ルールを守っていることが分かる。

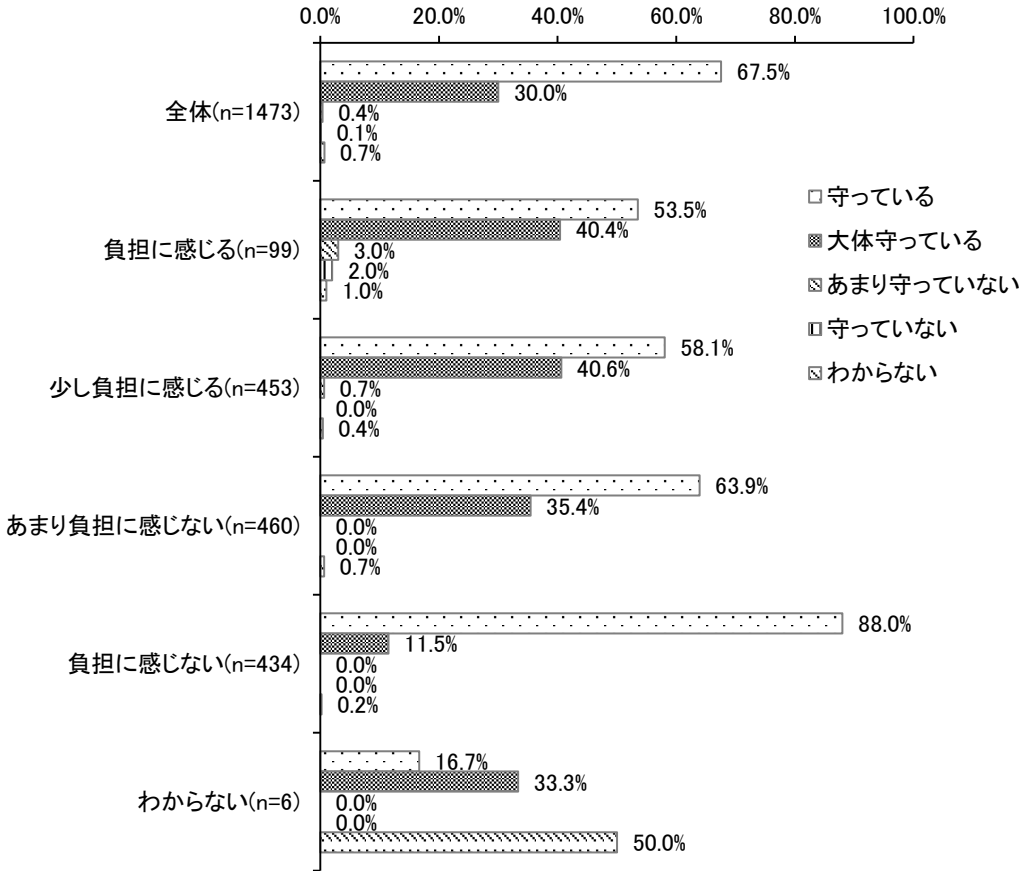
また、「わからない」では、「１年未満」は 8.3%で最も高く、次いで「１年以上～５年未満」は 3.3%で、５年以上では 1.0%以下となることから、居住年数が短い人の中には、正しく分別できているか分からないまま、ごみを排出している人が一定数いると考えられる。

問 10　あなたは、分別を負担に感じますか。○はひとつ。(n=1,473)



「あまり負担に感じない」が 31.2%で最も高く、次いで「少し負担に感じる」が 30.8%、「負担に感じない」が 29.5%と続いている。

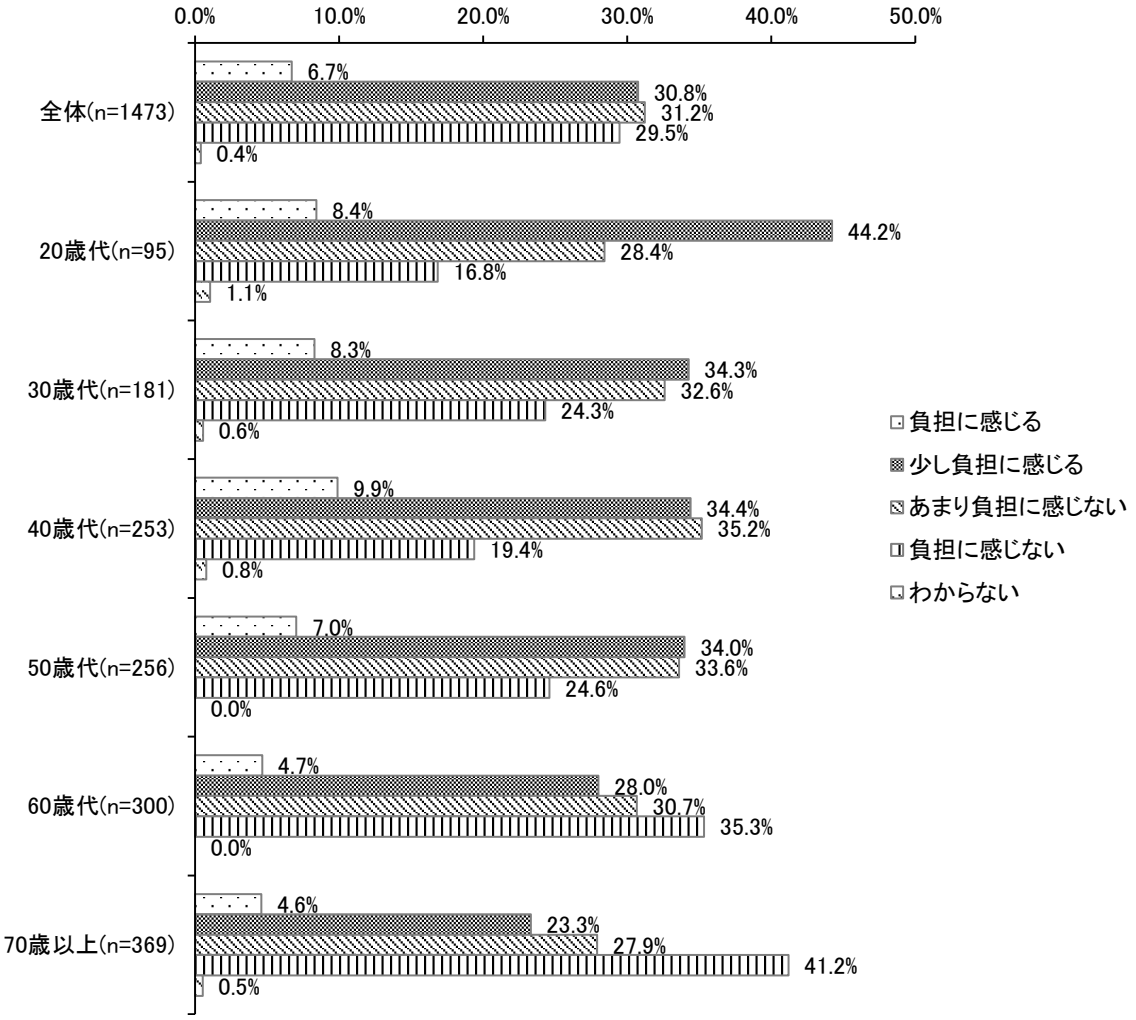
問９　分別ルール遵守との関係



「負担に感じない」と回答した人の中で、分別ルールを「守っている」と回答した比率は 88.0%となっており、「負担に感じる」と回答した人の中では 53.5%となっている。

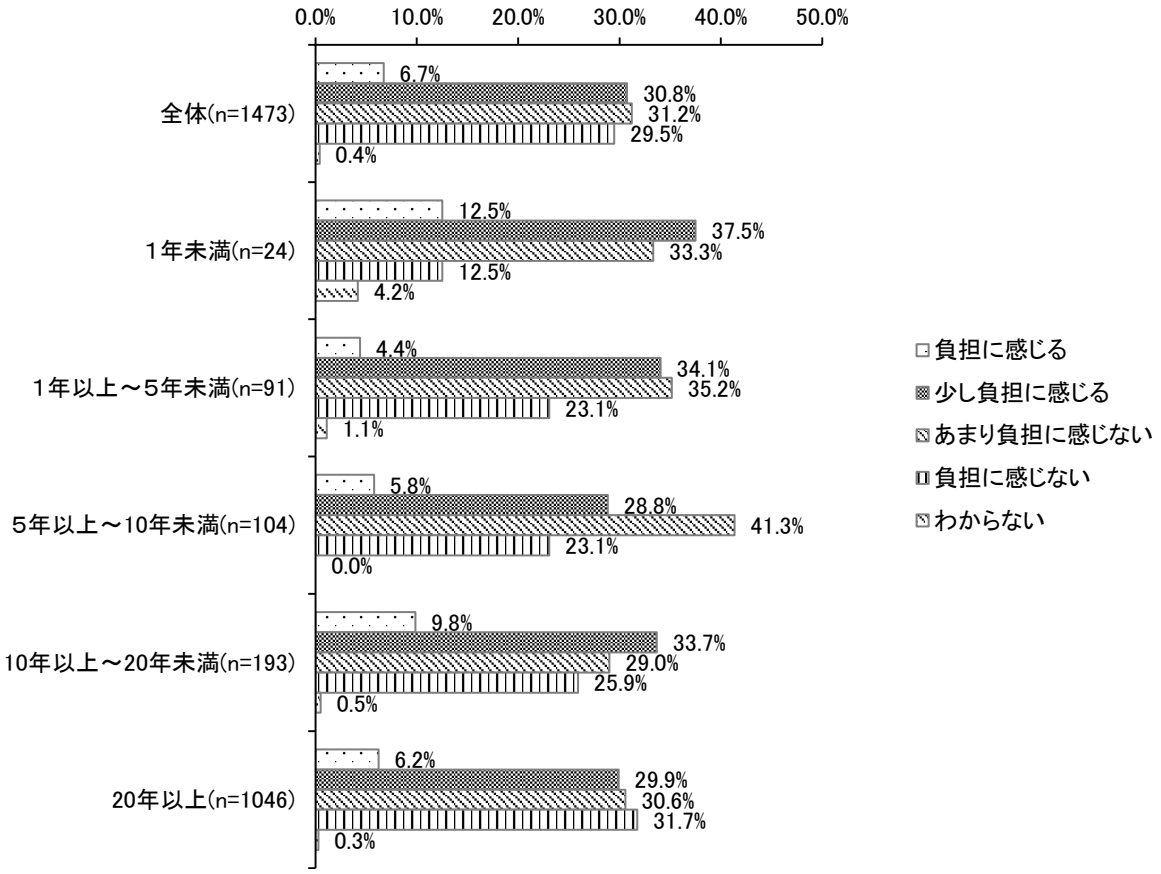
分別ルールを守っている人ほど、分別を負担に感じていないことが分かる。

年代別



年代別に比較すると、「少し負担に感じる」では「20 歳代」が 44.2%で最も高く、「負担に感じない」では、年代が上がるにつれて比率が高くなる傾向があり、「70 歳以上」が 41.2%で最も高い。年代が上がるにつれて、ごみの分別が習慣になり、負担に感じなくなると推察される。

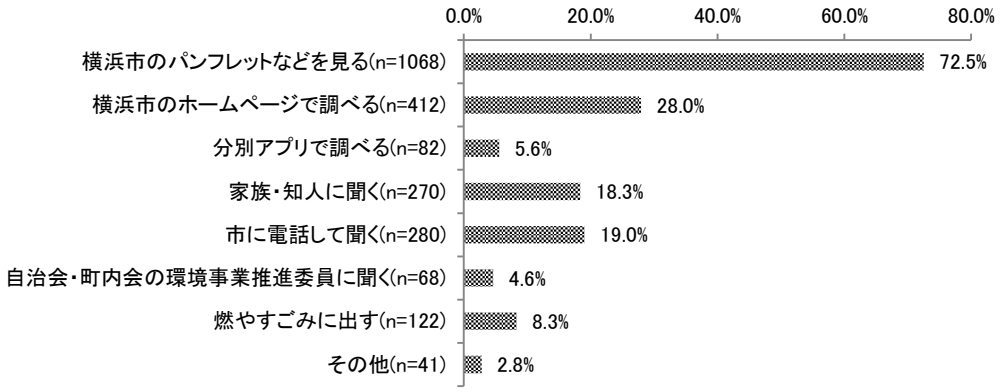
居住年数別



居住年数別に比較すると、「負担に感じない」と回答した年代は、「20 年以上」が 31.7%で最も高く、年数が短くなるにつれてその比率が低下している。

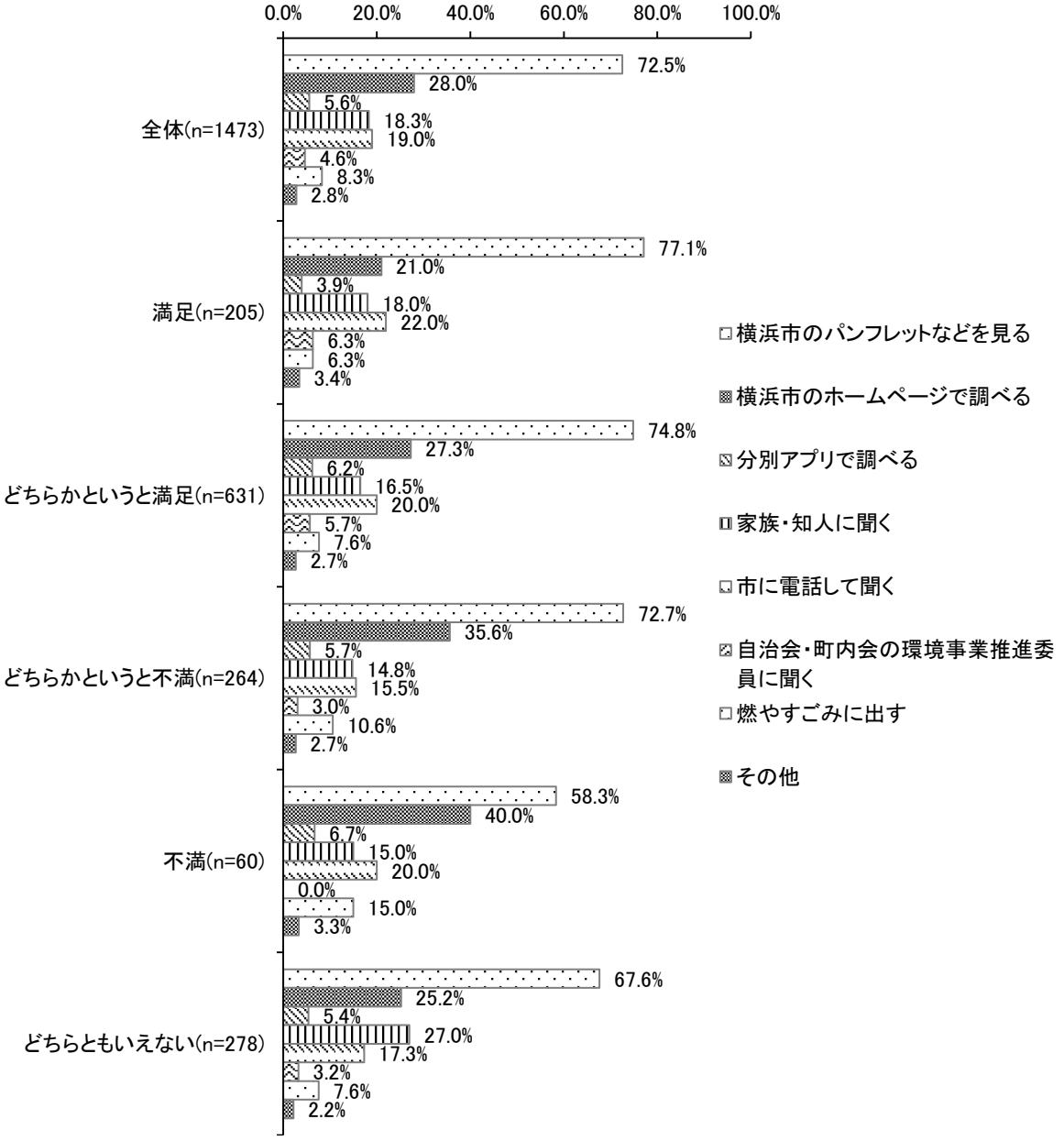
また、「負担に感じる」と「少し負担に感じる」の累積構成比は、「１年未満」が 50.0%で最も高くなっており、「わからない」も「１年未満」が 4.2%で最も高くなっていることから、居住年数が１年未満の世帯は、横浜市の分別ルールに慣れていないため、負担に感じる比率が高いと推察される。

問 11　あなたは、ごみの出し方が分からないとき、どうしていますか。○はいくつでも。
(n=1,473)



「横浜市のパンフレットなどを見る」が 72.5%で最も高く、次いで「横浜市のホームページで調べる」が 28.0%、「市に電話して聞く」が 19.0%と続いている。

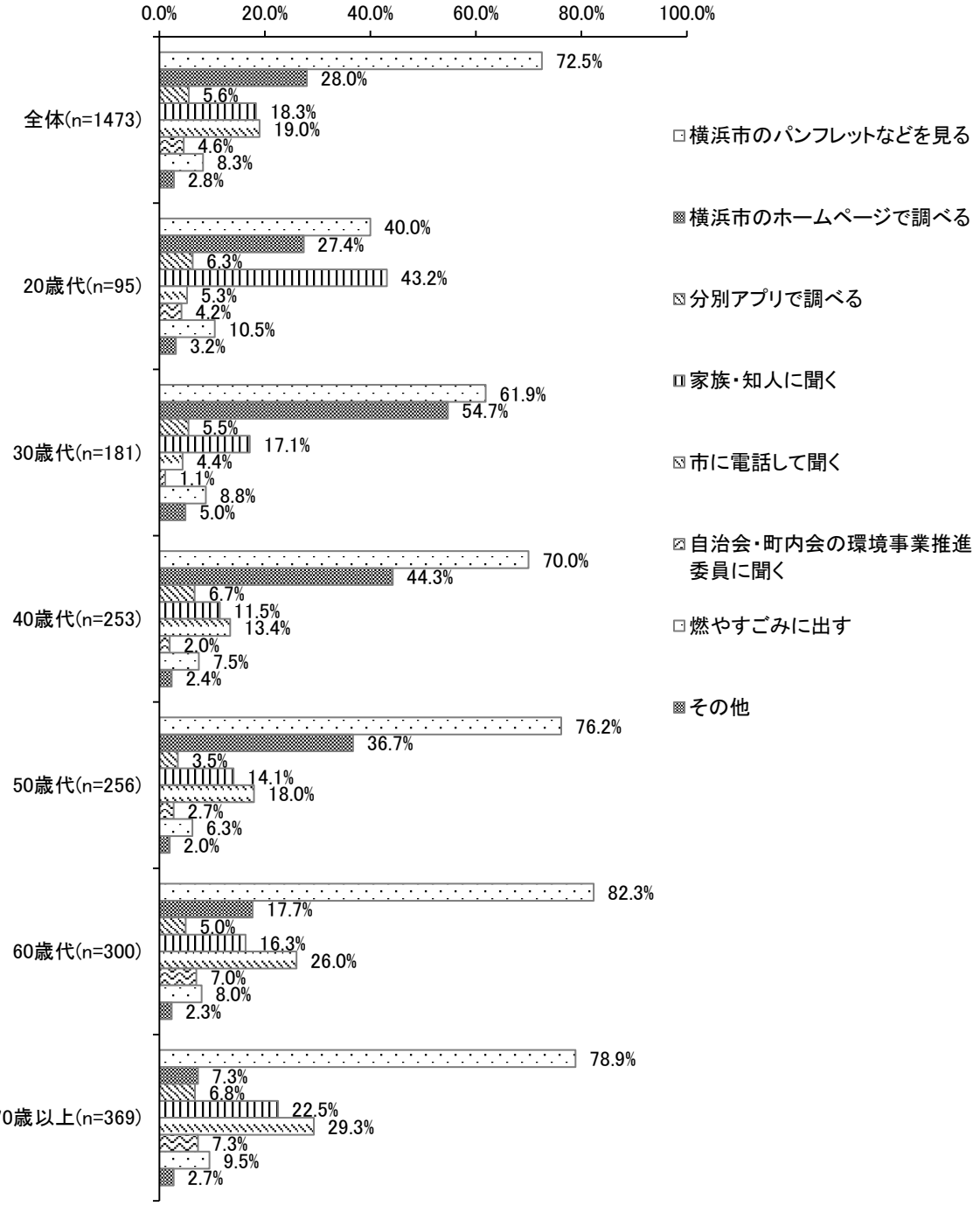
問３　ごみの情報提供の満足度との関係



ごみの情報提供に満足している人の 77.1%が「横浜市のパンフレットなどを見る」と回答した一方、不満がある人の 58.3%も「横浜市のパンフレットなどを見る」と回答している。「不満」及び、「どちらかというと不満」では、「横浜市のホームページで調べる」がそれぞれ 35.0%を超えており、ホームページで調べる人は、満足度が低下することが分かる。

ごみの出し方が分からないとき、横浜市のホームページで調べると回答した人が 28.0%いることから、ホームページ上の情報もより充実させる必要がある。

年代別

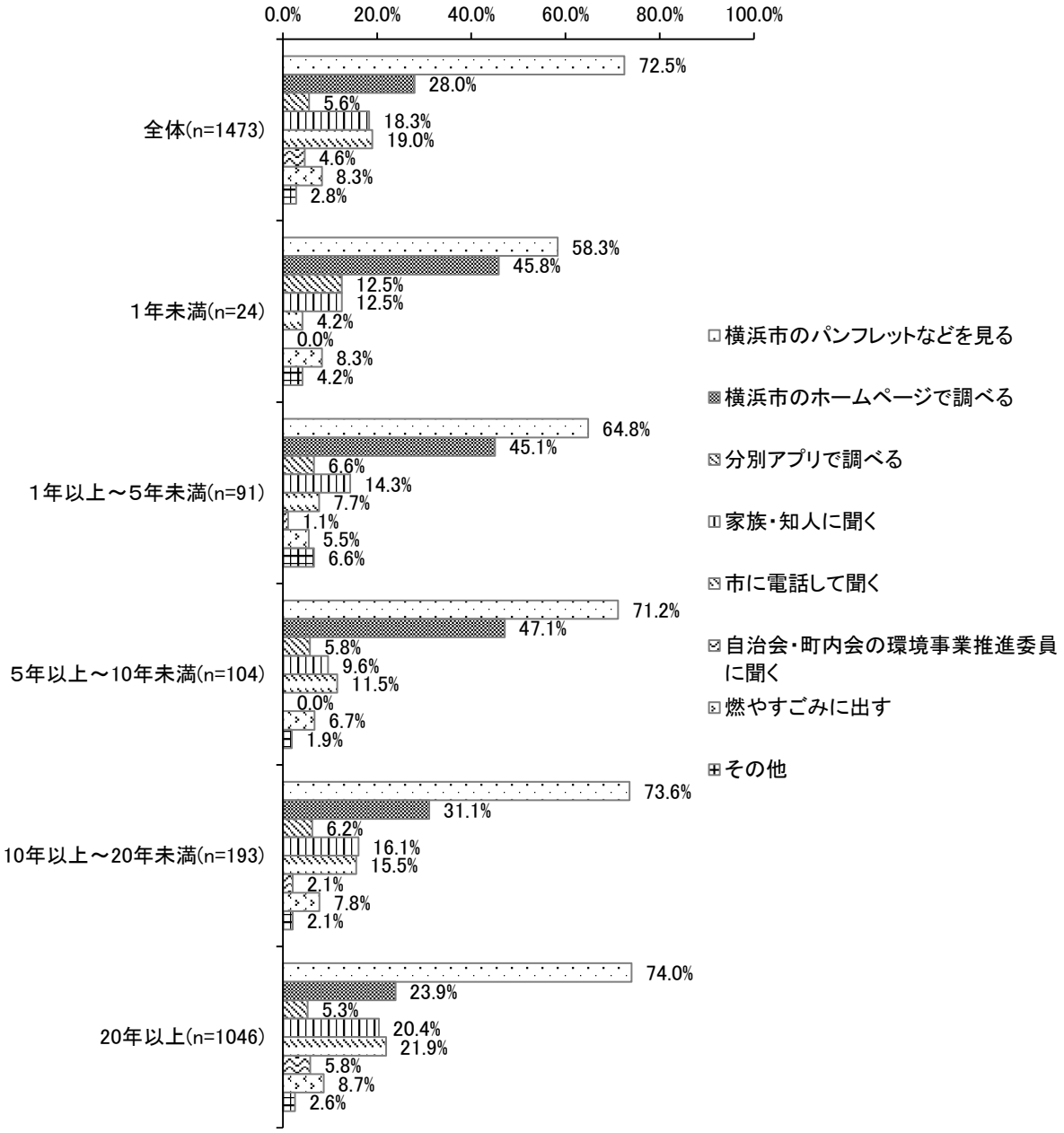


年代別に比較すると、「20 歳代」は、「家族・知人に聞く」が 43.2%で最も高いが、他の年代では「横浜市のパンフレットなどを見る」が最も高くなっており、年代が上がるにつれて、その比率も高くなっている。

「30 歳代」では、「横浜市のホームページで調べる」が 54.7%で他の年代よりも高くなっており、年代が上がるにつれてその比率は低下している。

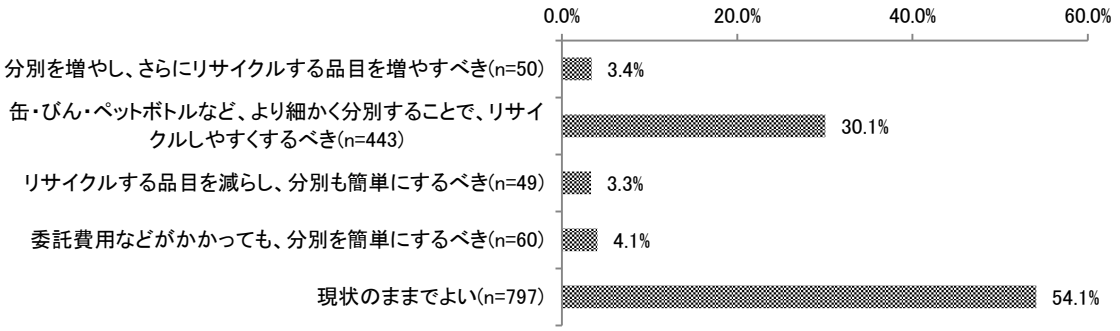
「50 歳代」以上では、「市に電話して聞く」比率も高く、「70 歳以上」の 29.3%、「60 歳代」の 26.0%が、電話で市に問い合わせている。

居住年数別



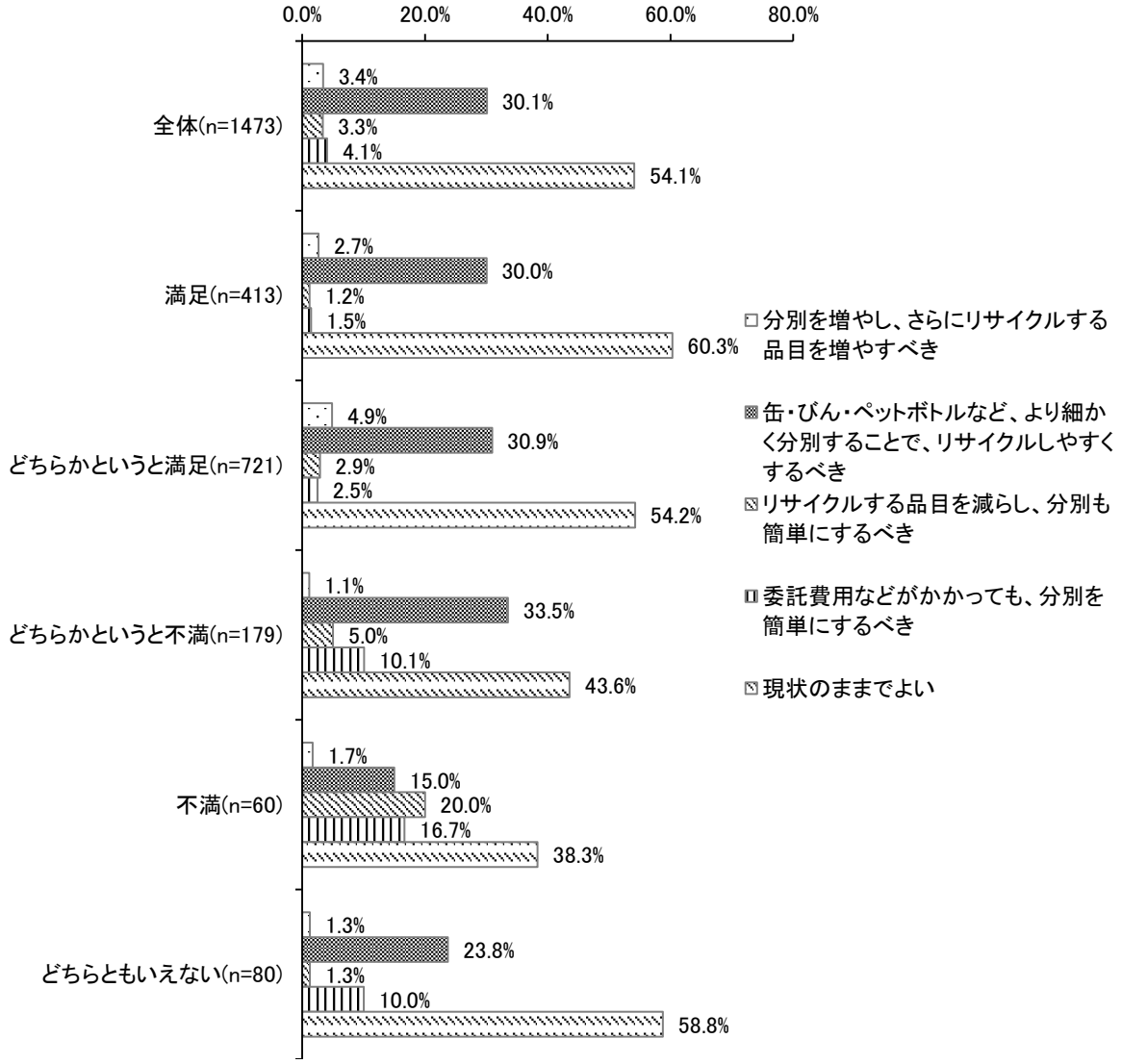
居住年数別に比較すると、「横浜市のパンフレットなどを見る」と回答した人は、「20 年以上」が 74.0%で最も高く、次いで「10 年以上～20 年未満」が 73.6%、「5 年以上～10 年未満」が 71.2%と続いており、居住年数が長くなるほど、横浜市のパンフレットなどから情報を得る傾向にあることが分かる。

問 12　あなたは、分別についての次のような考え方をどう思いますか。○はひとつ。(n=1,473)



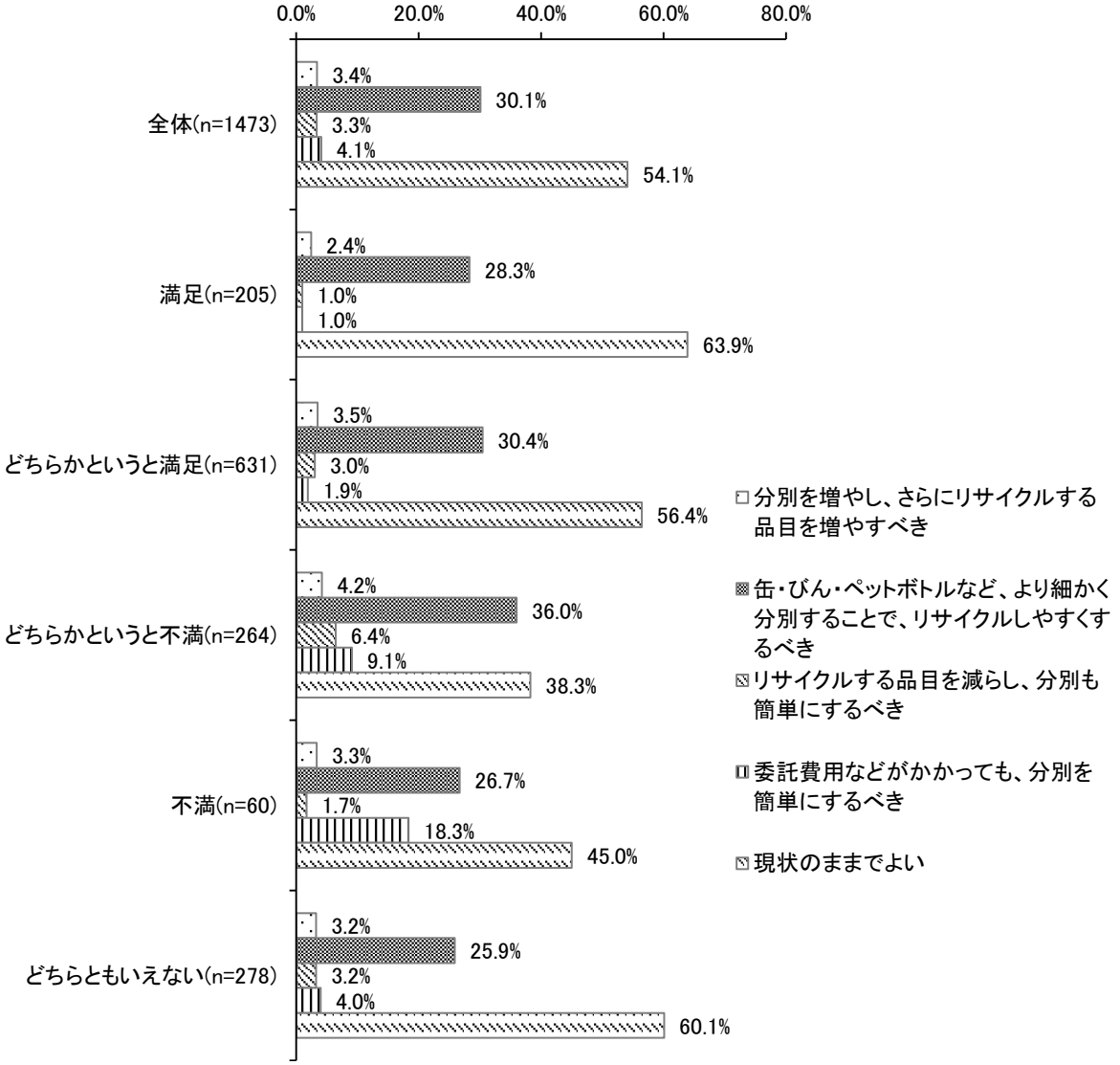
「現状のままでよい」が 54.1%で最も高く、次いで「缶・びん・ペットボトルなど、より細かく分別することで、リサイクルしやすくするべき」が 30.1%、「委託費用などがかかっても、分別を簡単にするべき」が 4.1%と続いている。

問３　ごみの収集に対する満足度との関係



「不満」では、「リサイクルする品目を減らし、分別も簡単にするべき」が 20.0%、「委託費用などがかかっても、分別を簡単にするべき」が 16.7%で、他の項目よりも高い比率になっており、ごみの収集に不満を感じている人は、現状の分別ルールでごみを排出することを煩雑に感じていると考えられる。

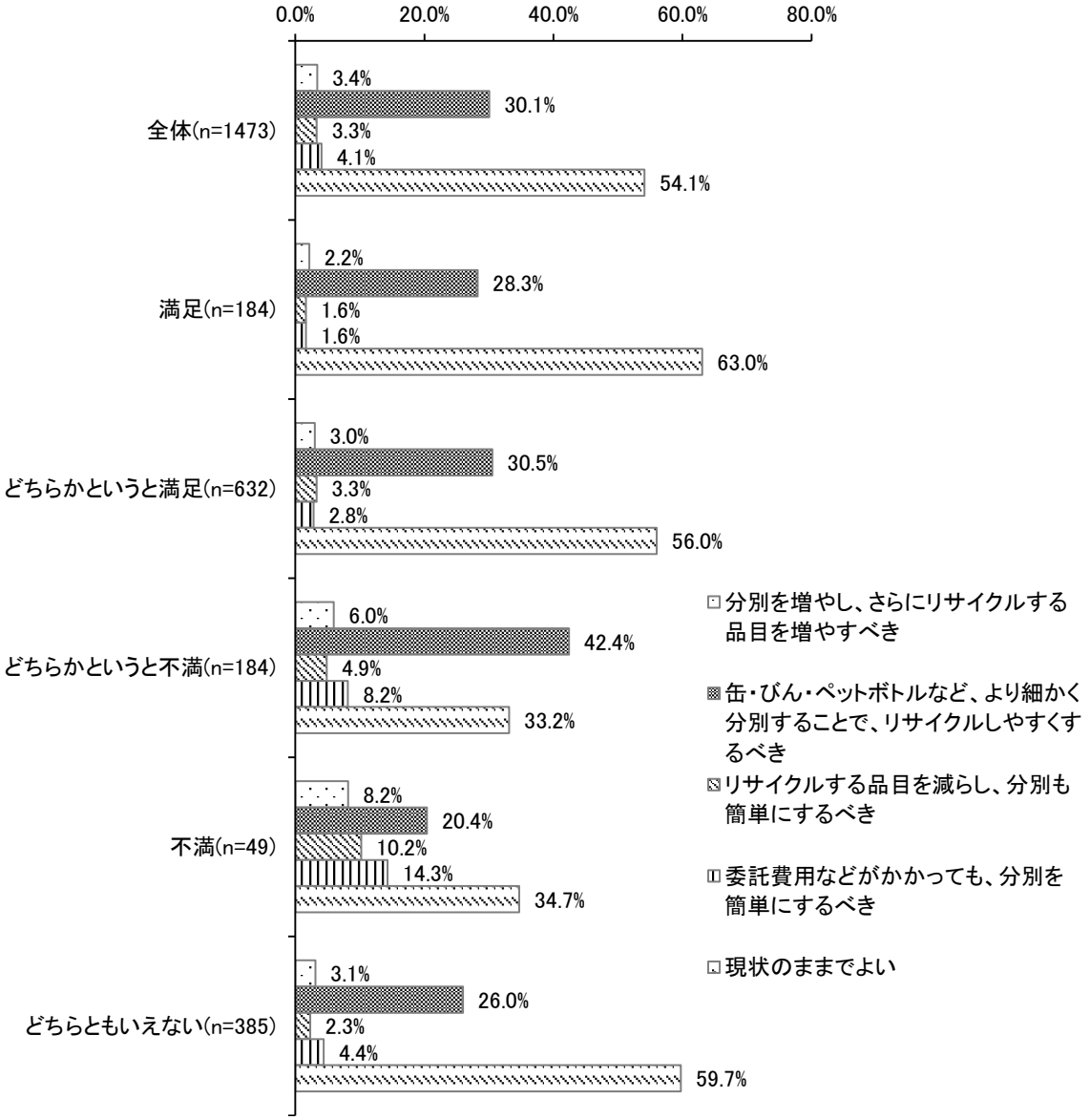
問３　ごみに関する情報提供の満足度との関係



ごみに関する情報提供の満足度との関係を見ると、「満足」と回答した人の 63.9%が、「現状のままでよい」が最も高く、「どちらかというと不満」では、38.3%が「現状のままでよい」と回答し、最も低い。

ごみに関する情報提供に不満がある人は、現状の分別ルールでごみを排出することを煩雑に感じていると考えられる。

問３　ごみ減量への取組の満足度との関係

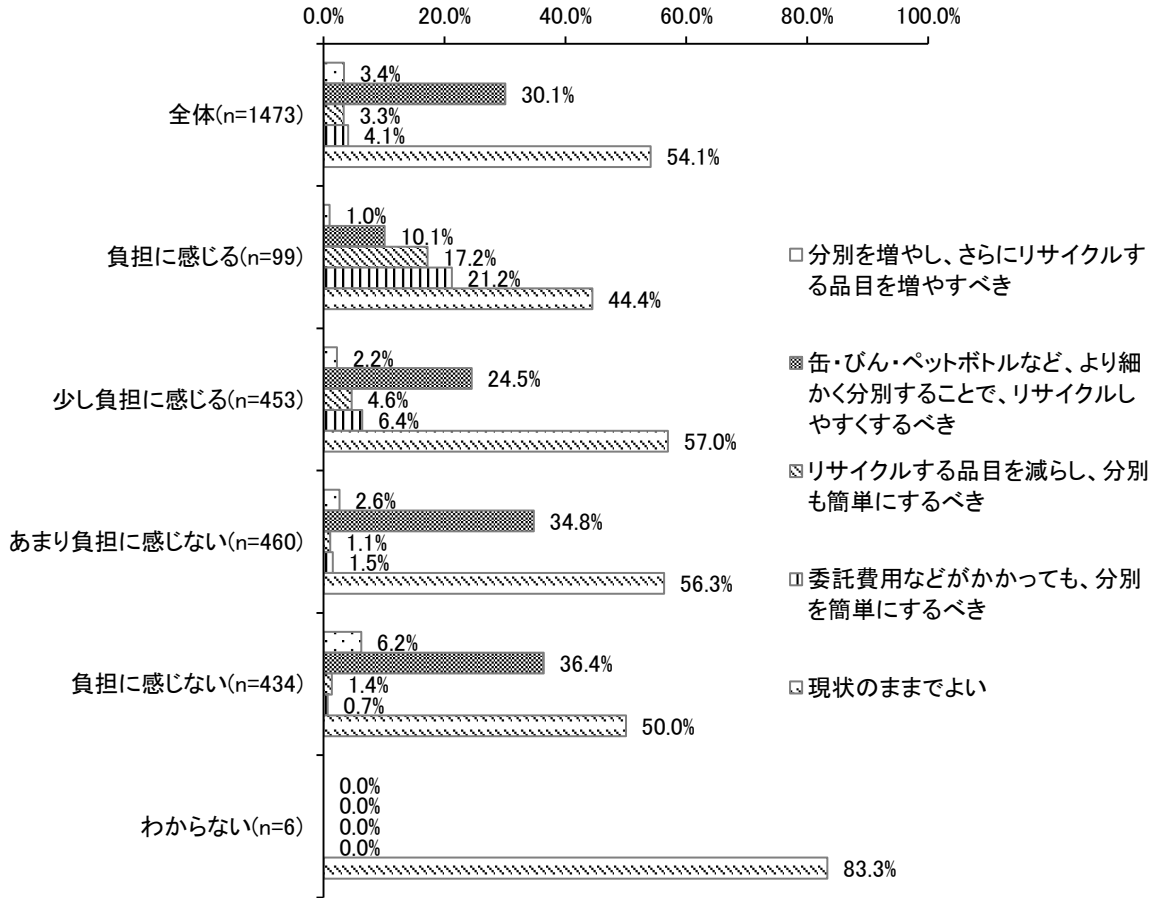


ごみ減量への取組に満足している人は、「現状のままでよい」が 63.0%で最も高く、満足度が低下するにつれて、「現状のままでよい」と回答する比率が低下している。

「どちらかというと不満」では、「缶・びん・ペットボトルなど、より細かく分別することで、リサイクルしやすくするべき」が 42.4%で最も高い。

ごみ減量への取組に満足していない人は、現状の分別に満足しておらず、より細かい分別によるリサイクルの促進を望んでいることが分かる。

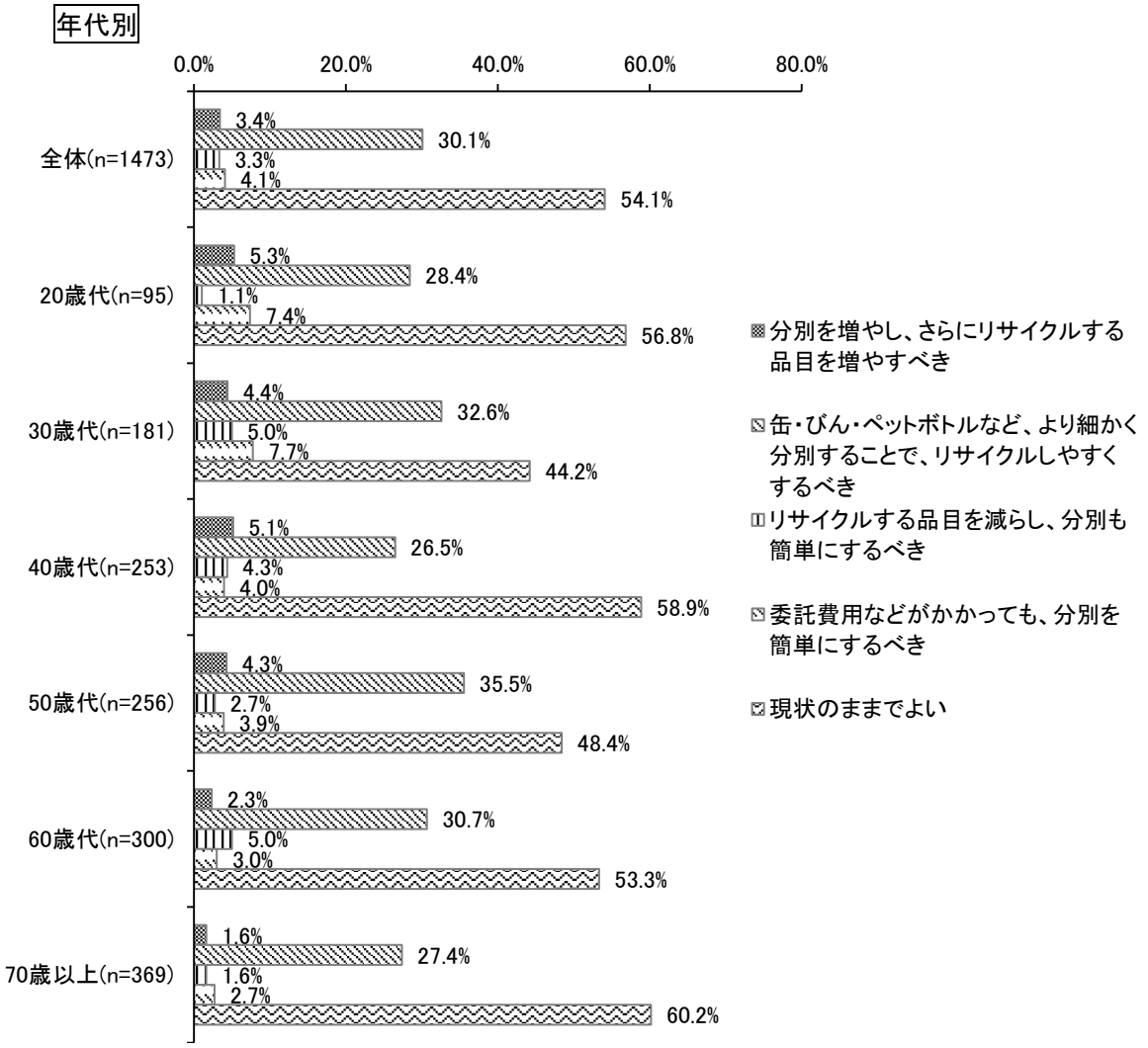
問 10　分別の負担との関係



分別を「負担に感じない」では、「現状のままでよい」が 50.0%で最も高く、「缶・びん・ペットボトルなど、より細かく分別することで、リサイクルしやすくするべき」が 36.4%と続いており、他の項目と比べて比率が高い。「負担に感じる」では、「缶・びん・ペットボトルなど、より細かく分別することで、リサイクルしやすくするべき」が 10.1%と最も低くなっている。

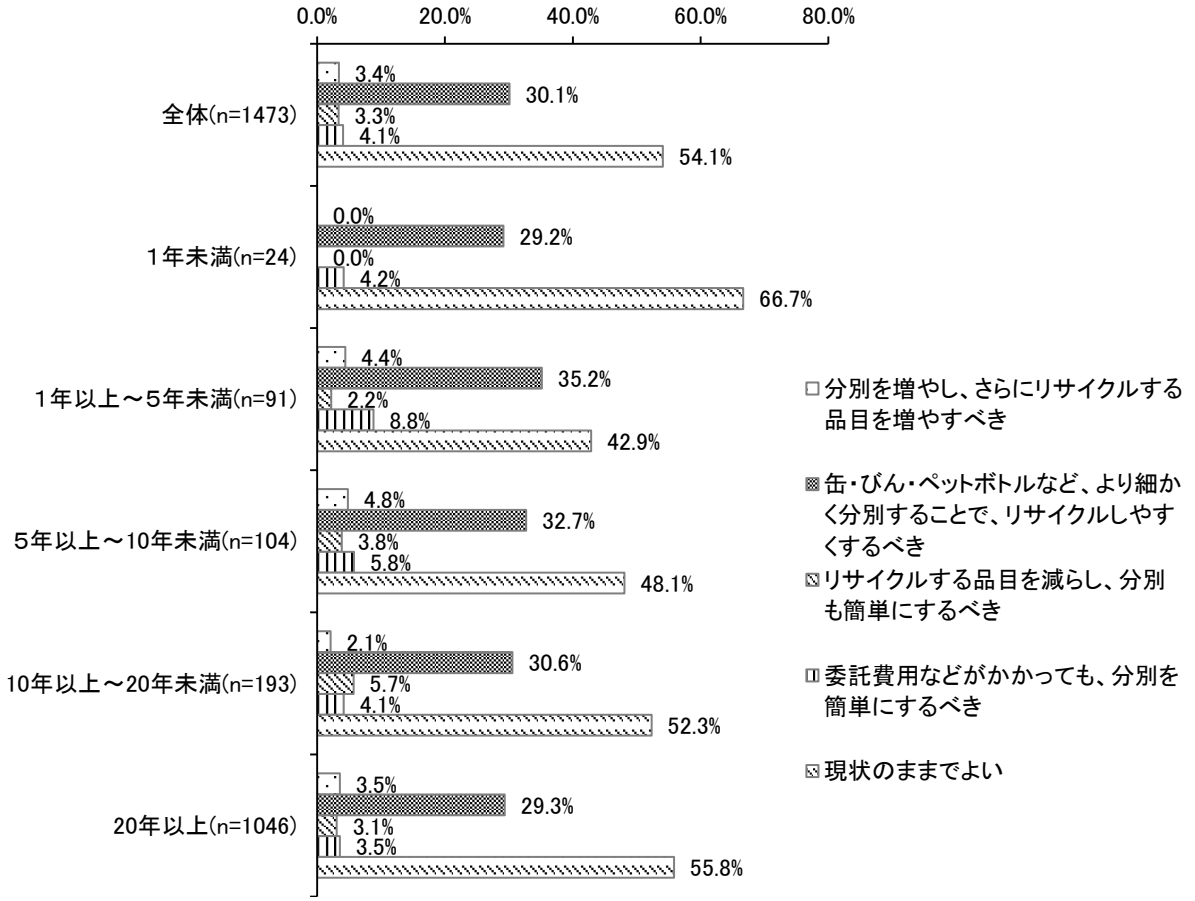
また、「負担に感じる」では、「委託費用などがかかっても、分別を簡単にするべき」が 21.1%で最も高く、「負担に感じない」では、0.7%と最も低くなっている。

このことから、分別を負担に感じている人ほど、委託費用がかかっても、分別をより簡単にするべきと考えていることが分かる。しかし、全体では、「現状のままでよい」が 54.1%で最も高く、「缶・びん・ペットボトルなど、より細かく分別することで、リサイクルしやすくするべき」が 30.1%と続いており、分別を簡単にするべきという回答の比率は、全体の中では低い。



年代別に比較すると、いずれの年代でも「現状のままでよい」が最も高く、「70 歳以上」が 60.2%、「40 歳代」が 58.9%、「20 歳代」が 56.8%と続いている。

居住年数別



居住年数別に比較すると、「現状のままでよい」と回答したのは、「１年未満」が 66.7%で最も高く、次いで「20 年以上」が 55.8%、「10 年以上～20 年未満」が 52.3%と続いている。

また、「缶・びん・ペットボトルなど、より細かく分別することで、リサイクルしやすくするべき」と回答したのは、「１年以上～５年未満」が 35.2%で最も高く、次いで「５年以上～10 年未満」が 32.7%、「10 年～20 年未満」が 30.6%と続いていることから、居住年数が長くなるにつれて、現状の分別が習慣になり、そのままでよいと回答する人が増えると推察される。

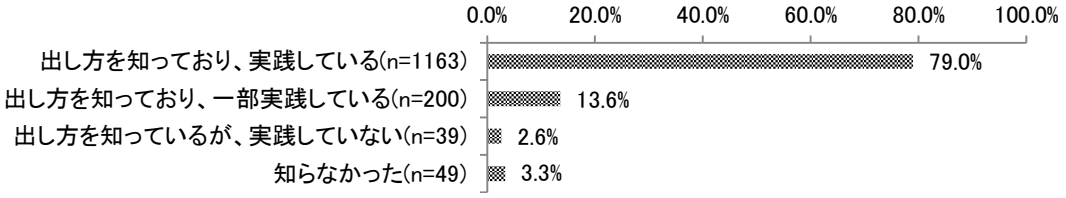
■考察　ごみの分別ルールについて

100%に近い市民が分別ルールを守っていることから、横浜市の分別ルールは市民に受け入れられていると考えられる。しかし、居住年数が１年未満では、「あまり守っていない」及び、「分からない」という回答が見られる。横浜市に転入してくる人には、早い段階で分別ルールを理解してもらう取組が必要だ。

また、分別を負担に感じているのは、居住年数が短い人であることから、分別ルールの周知が進めば、負担に感じる人の比率も低くなるのではないか。

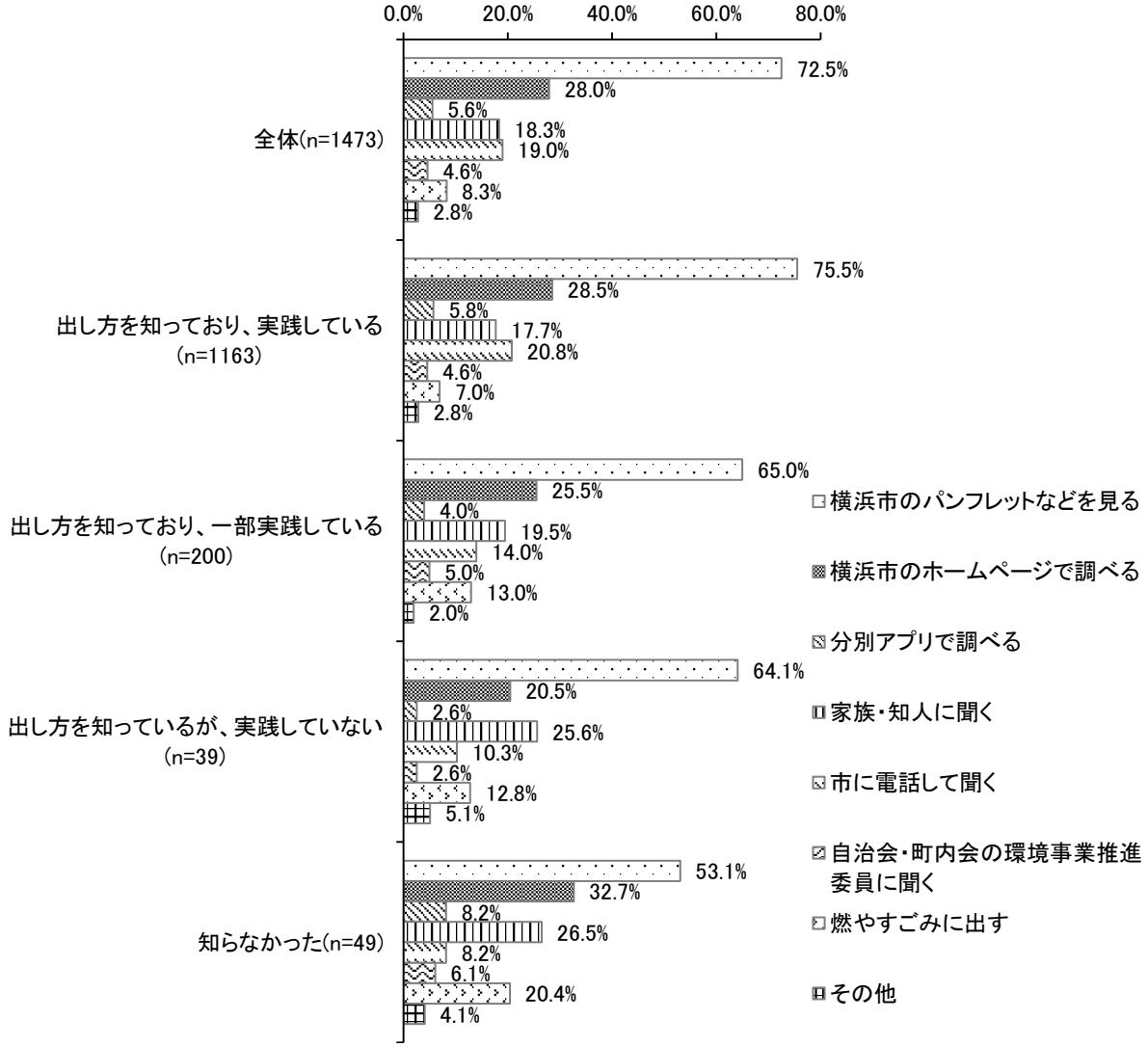
2.5　ごみと資源物の出し方について

問 13　あなたやあなたの家族は、ペットボトルをどのように出していますか。○はひとつ。
(n=1,473)



「出し方を知っており、実践している」が 79.0%で最も高く、次いで「出し方を知っており、一部実践している」が 13.6%、「知らなかった」が 3.3%と続いている。

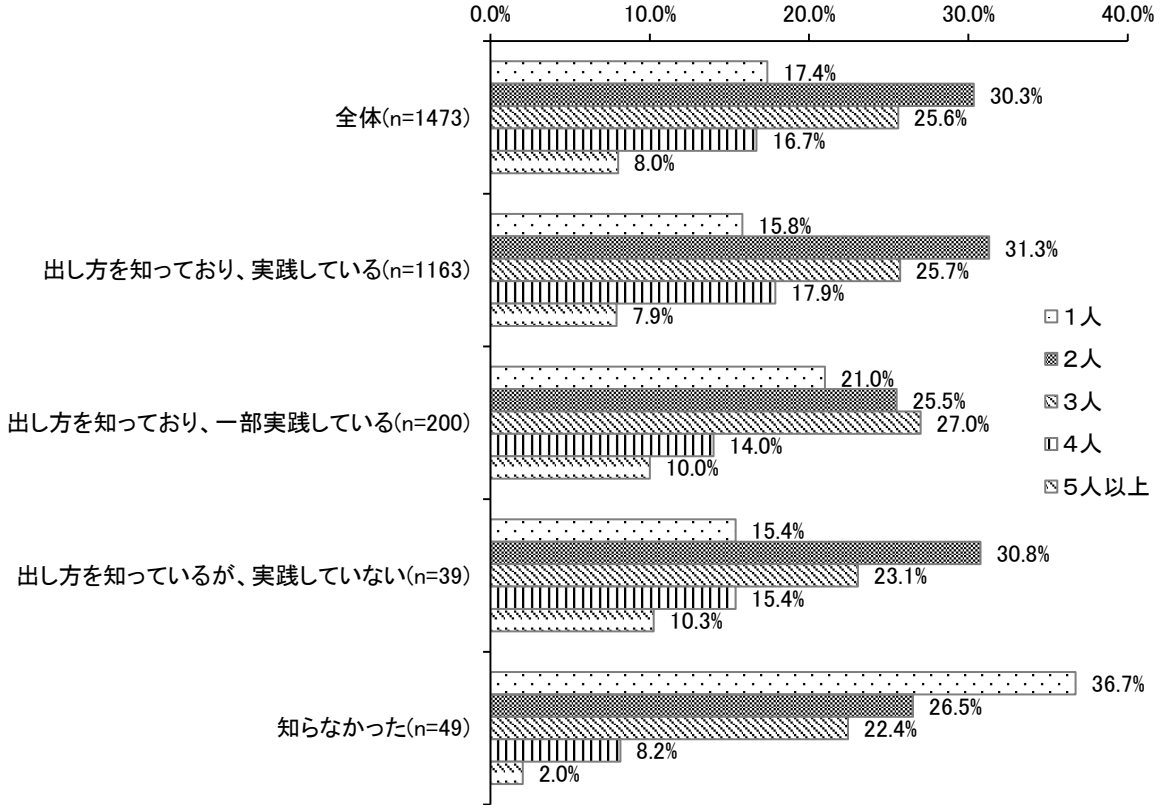
問 11　ごみの出し方が分からないときの情報源との関係



「横浜市のパンフレットなどを見る」と回答した比率が最も高いのは、「出し方を知っており、実践している」の 75.5%で、横浜市のパンフレットを参考にしている人は、ペットボトルの分別をルール通りに実践していることが分かる。

「知らなかった」では、「横浜市のパンフレットなどを見る」が 53.1%で、他の項目に比べてその比率が低く、次いで「横浜市のホームページで調べる」が 32.7%、「家族・知人に聞く」が 26.5%となり、出し方を知っている人と比較すると、出し方を知らない人は、身近な人に聞く傾向にある。また、「燃やすごみに出す」と回答する比率も、20.4%という高い結果になった。

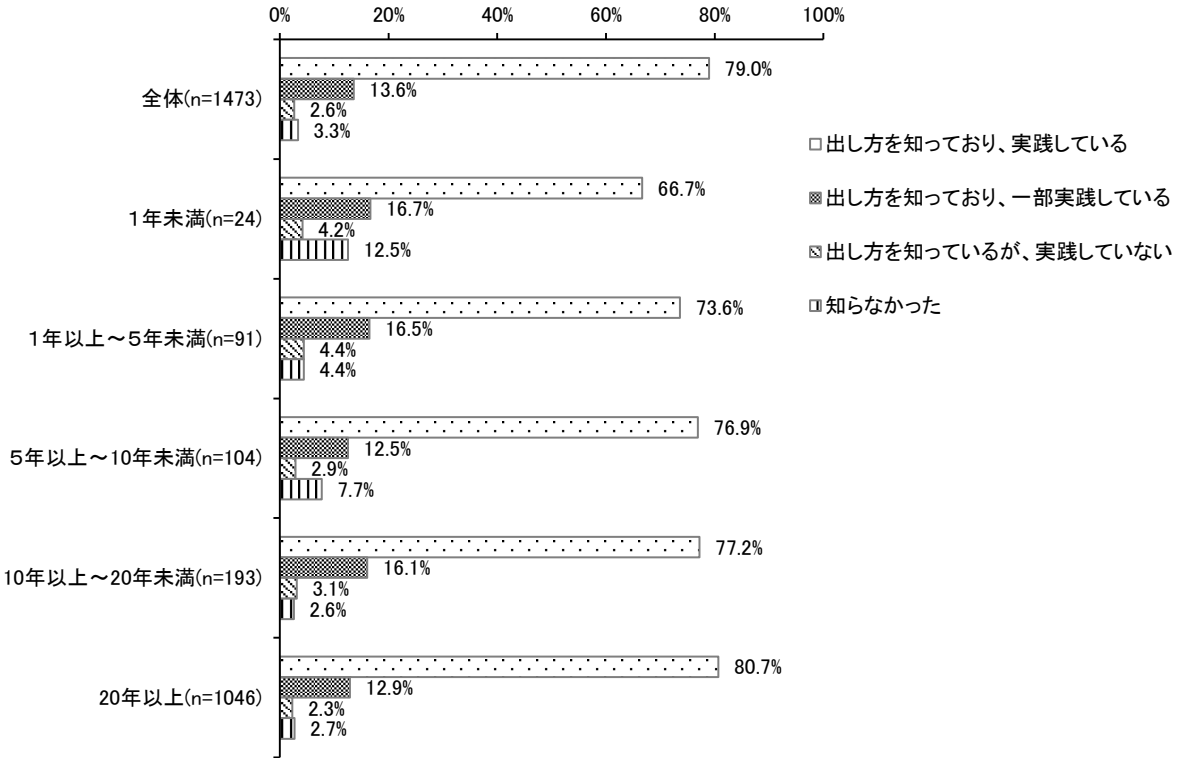
同居人数別



同居人数別に比較すると、「出し方を知っており、実践している」では、「２人」世帯の 31.3%が最も高く、次いで「３人」世帯の 25.7%となった。しかし、２人世帯は、「出し方を知っているが、実践していない」も 30.8%と高い比率になっている。

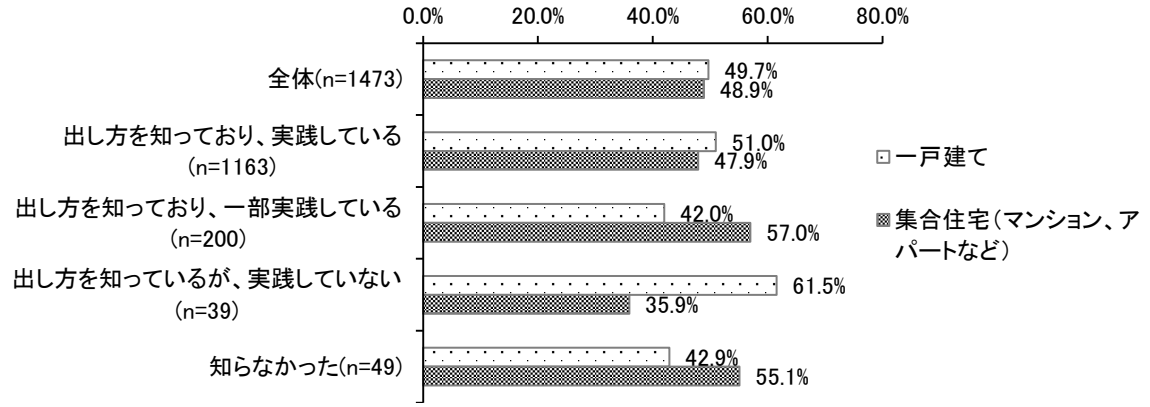
「知らなかった」では、「１人」世帯が 36.7%で、他の同居人数と比べてその比率が高い。

居住年数別



居住年数別に比較すると、「出し方を知っており、実践している」と回答したのは、「20 年以上」が 80.7%で最も高く、次いで「10 年以上～20 年未満」が 77.2%、「５年以上～10 年未満」が 76.9%と続いている。そのため、居住年数が長くなるほど、ペットボトルの分別をルール通りに実践していることが分かった。

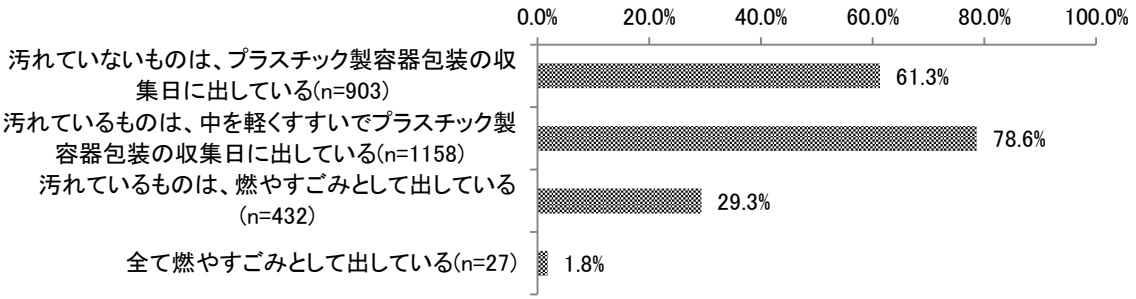
居住形態別



居住形態別に比較すると、「出し方を知っており、一部実践している」及び、「知らなかった」では、集合住宅が一戸建てを大きく上回っているが、「出し方を知っているが、実践していない」では一戸建てが集合住宅を上回っている。

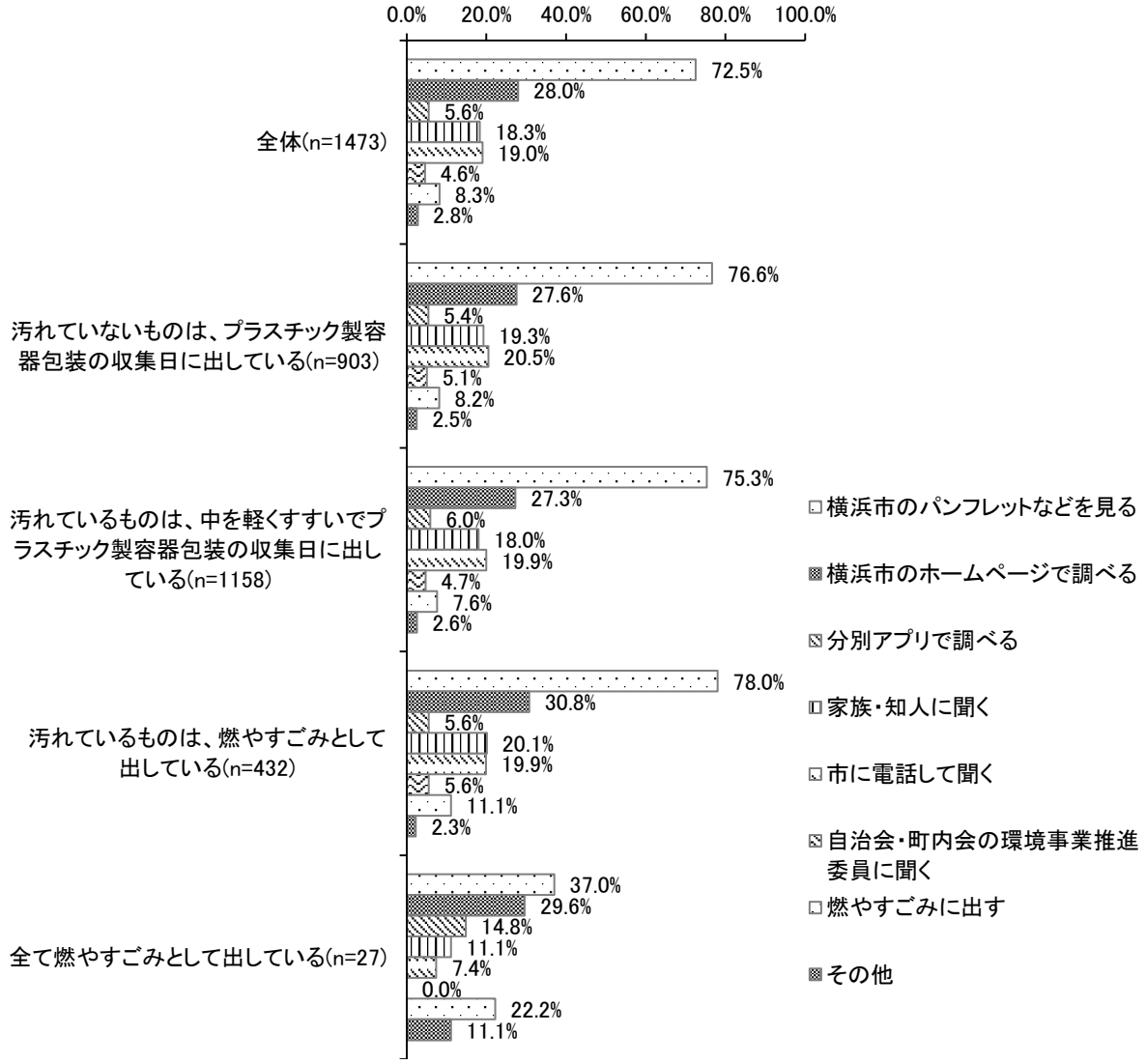
以上の比較結果から、「１人」世帯で、「集合住宅」に居住している市民を中心に、ペットボトルの排出方法を周知する必要があることが分かる。

問 14　あなたやあなたの家族は、プラスチック製容器包装をどのように出していますか。
　　○はいくつでも。(n=1,473)



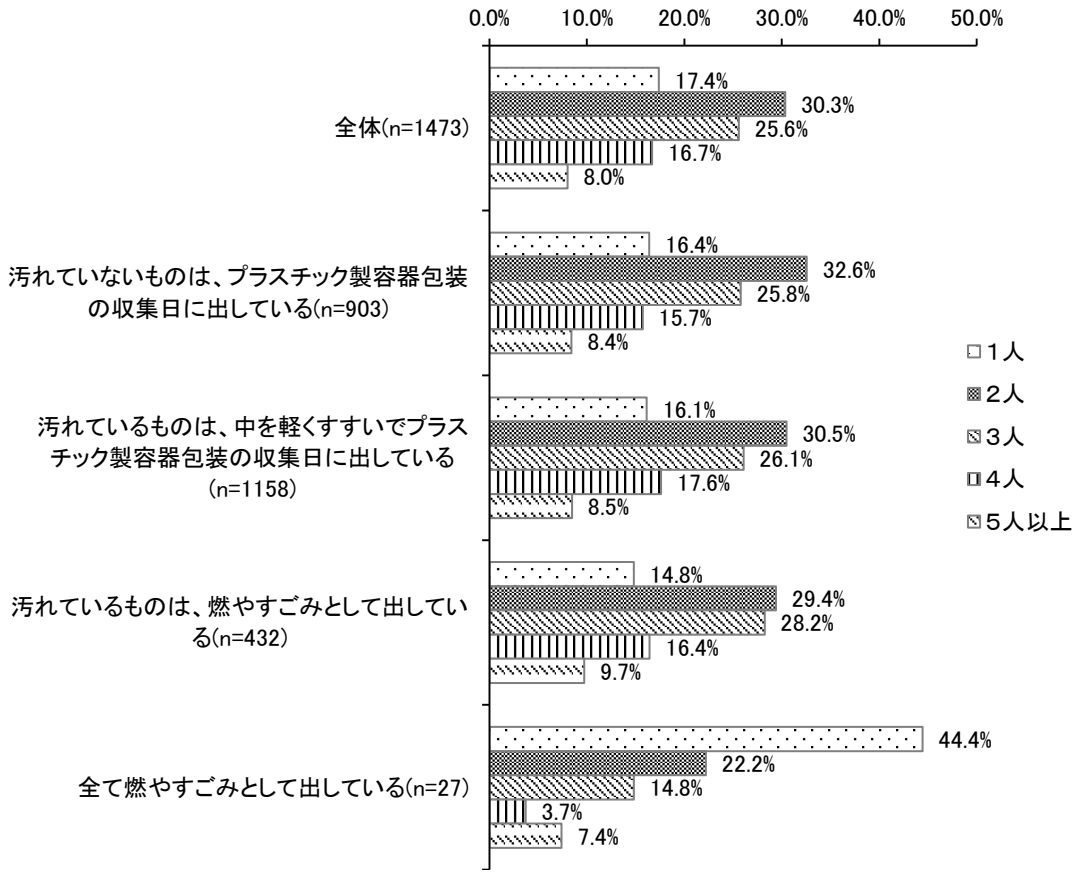
「汚れているものは、中を軽くすすいでプラスチック製容器包装の収集日に出している」が78.6%で最も高く、「汚れていないものは、プラスチック製容器包装の収集日に出している」が61.3%、「汚れているものは、燃やすごみとして出している」が29.3%と続いている。

問 11　ごみの出し方が分からないときの情報源との関係



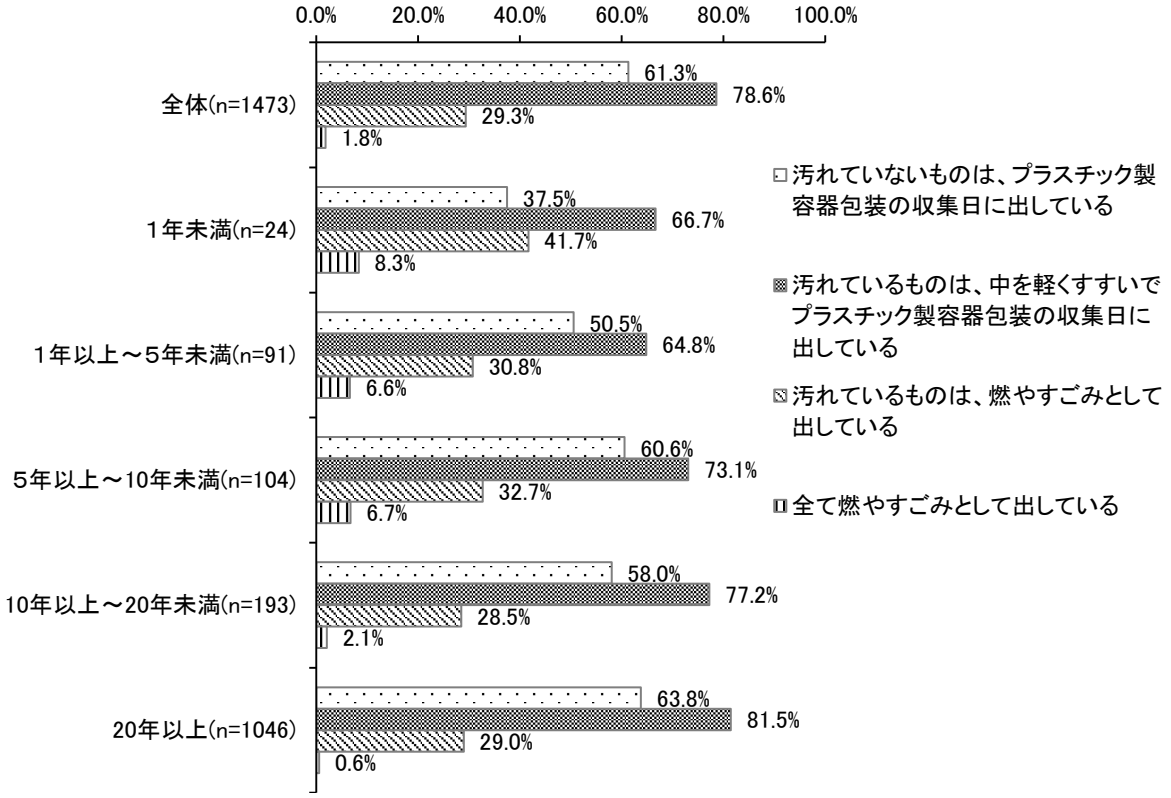
「全て燃やすごみとして出している」では、「横浜市のパンフレットなどを見る」が 37.0%で最も高いが、他の項目と比べると大幅に低下しており、「燃やすごみに出す」が 22.2%と続いている。そのため、プラスチック製容器包装にかかわらず、ごみの出し方が分からないときは、燃やすごみとして排出していると推察される。

同居人数別



同居人数別に比較すると、「１人」世帯では、「全て燃やすごみとして出している」が 44.4%で最も高くなっており、人数が増えるにつれて、「全て燃やすごみとして出している」の比率が低下する傾向がある。

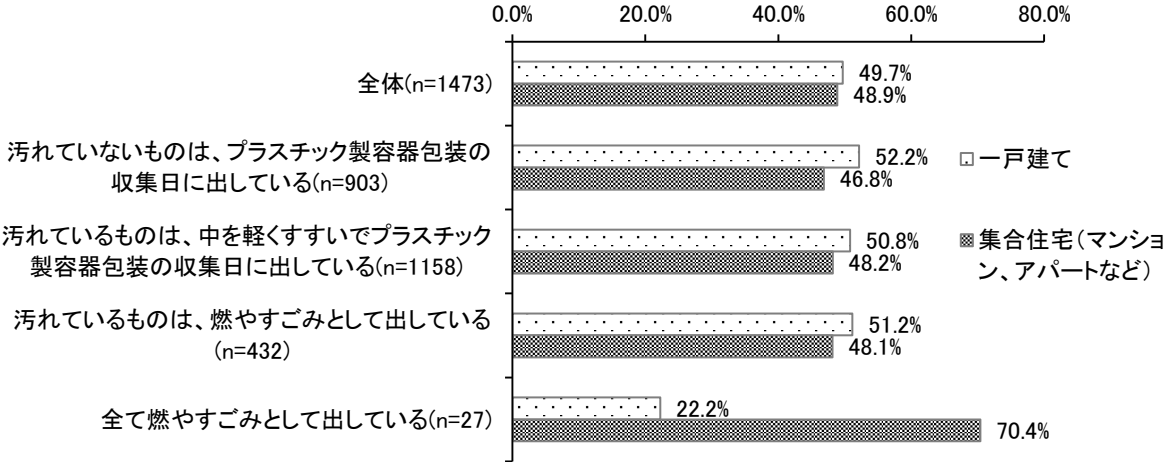
居住年数別



いずれの居住年数でも、「汚れているものは、中を軽くすすいでプラスチック製容器包装の収集日に出している」の比率が最も高いが、居住年数が長くなるほど、その比率が高くなる傾向がある。

「１年未満」では、「汚れているものは、燃やすごみとして出している」及び、「全て燃やすごみとして出している」の比率が、他の年数よりも高くなっている。居住年数が短いほど、分別ルールの認知度も低下すると考えられる。

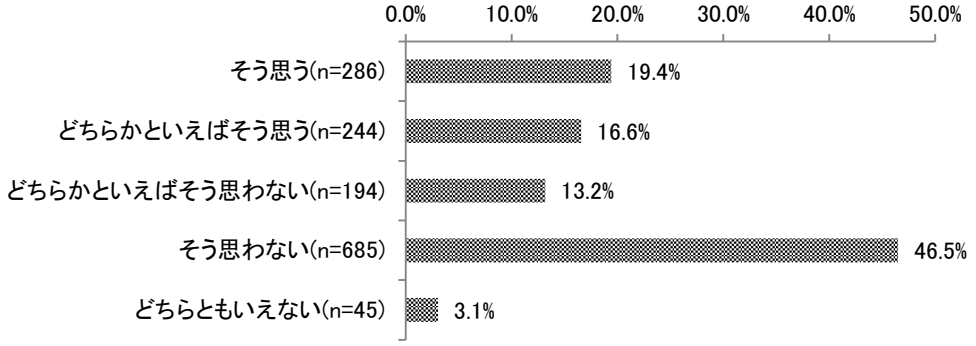
居住形態別



「全て燃やすごみとして出している」では、「集合住宅」が 70.4%で、「一戸建て」を大きく上回っている。そのため、一戸建てと比較すると、プラスチック製容器包装の分別が徹底されていないことが分かる。

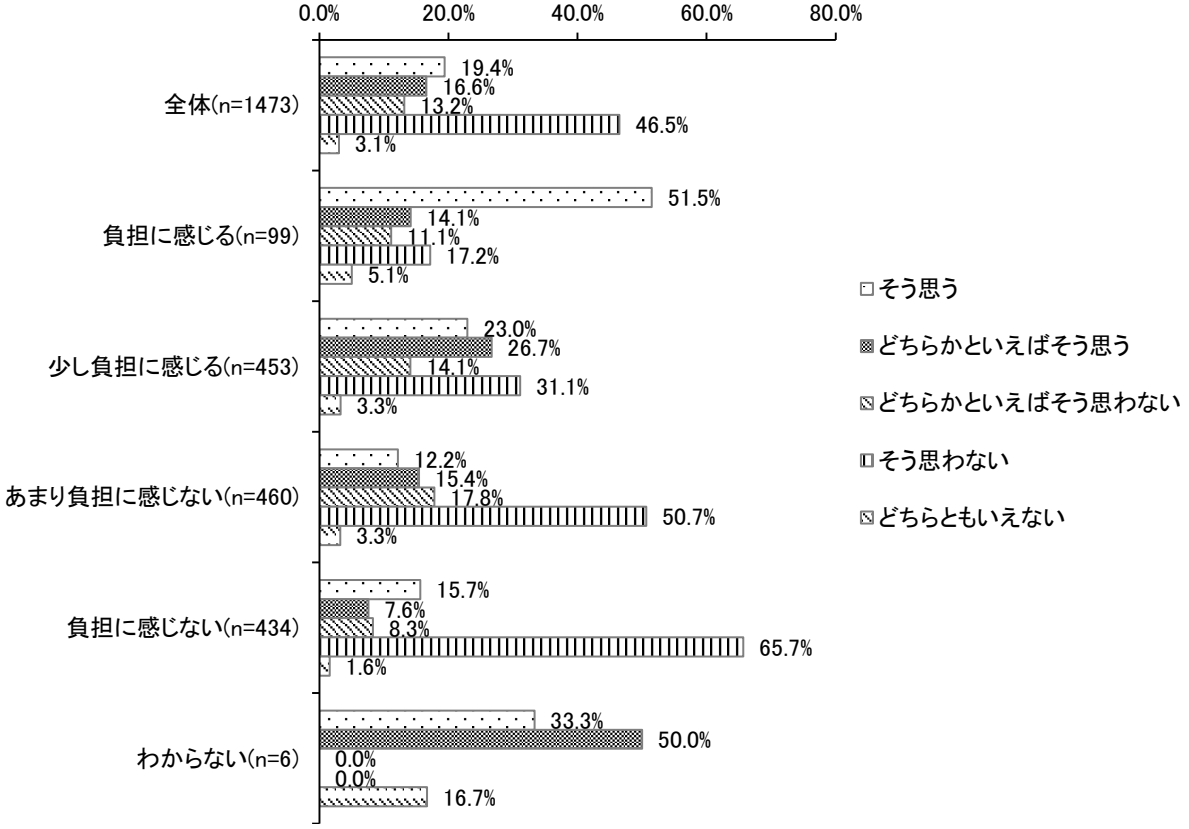
これらの比較結果から、「１人」世帯、居住年数が「１年未満」及び、「集合住宅」に居住する市民を中心に、プラスチック製容器包装の正しい排出方法を周知する必要があることが分かる。

問 15　あなたは、缶・びん・ペットボトルを別々の袋に入れて、缶・びん・ペットボトルの収集日に出すことは負担だと思いますか。○はひとつ。(n=1,473)



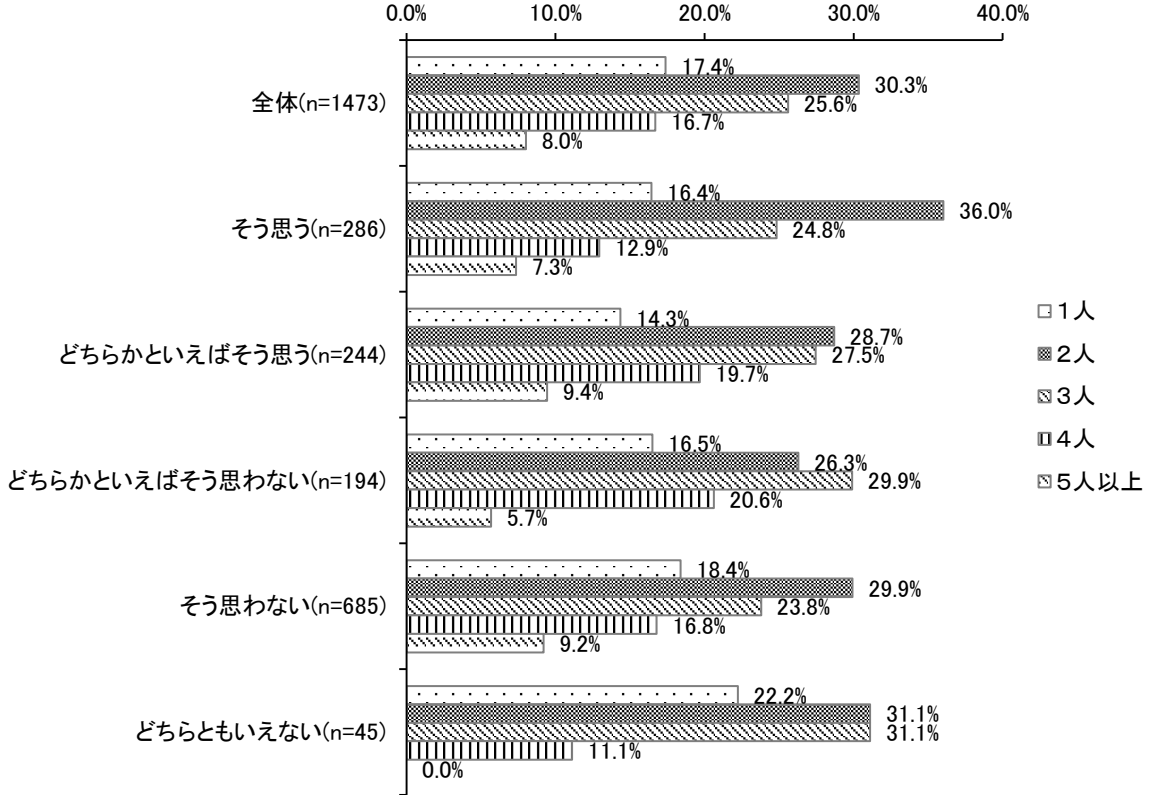
「そう思わない」が 46.5%で最も高く、次いで「そう思う」が 19.4%、「どちらかといえばそう思う」と続いている。

問 10　分別の負担との関係



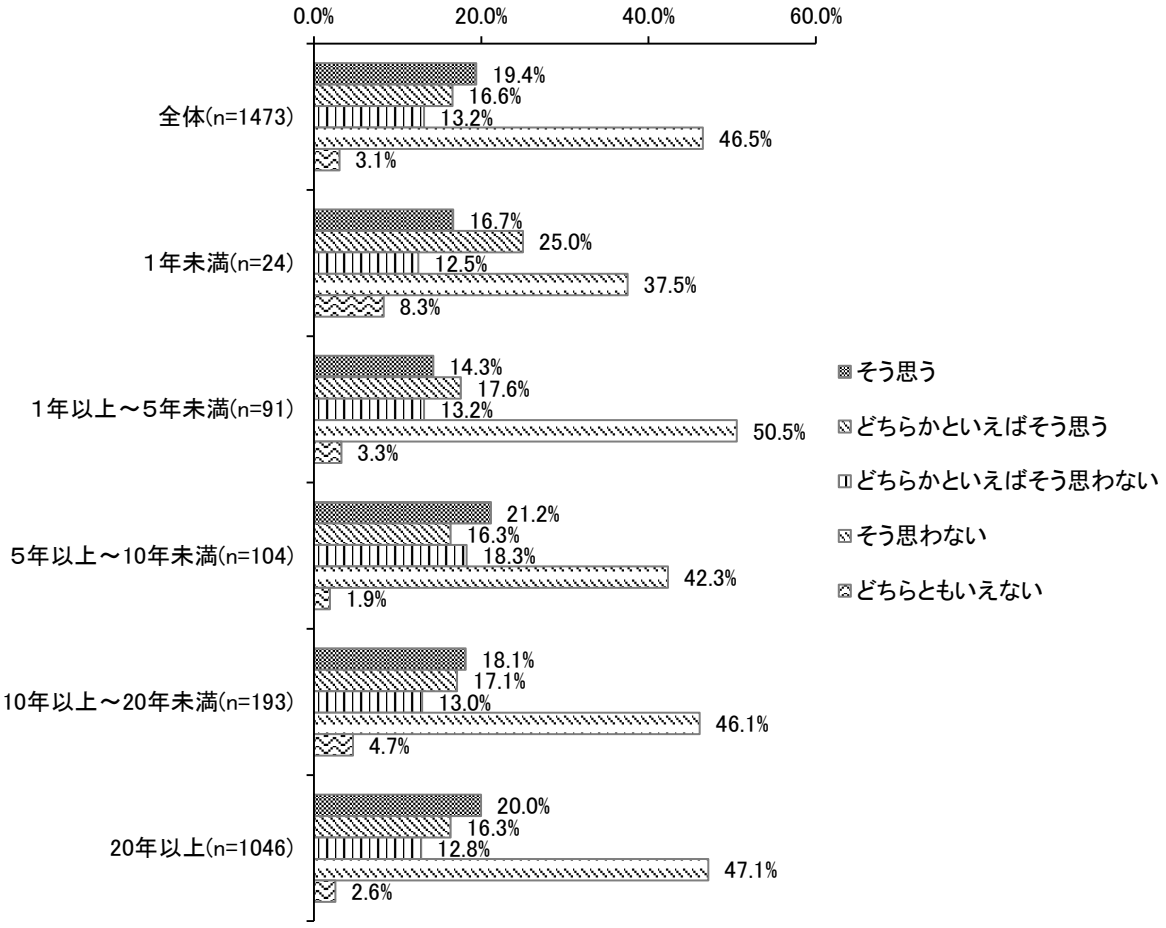
分別を「負担に感じる」と回答した人は、缶・びん・ペットボトルを別々の袋に分けることを負担に思う比率が 51.5%で最も高く、分別を「負担に感じない」と回答した人は、別々の袋に分けることを負担に思わない比率が 65.7%で最も高くなっている。

同居人数別



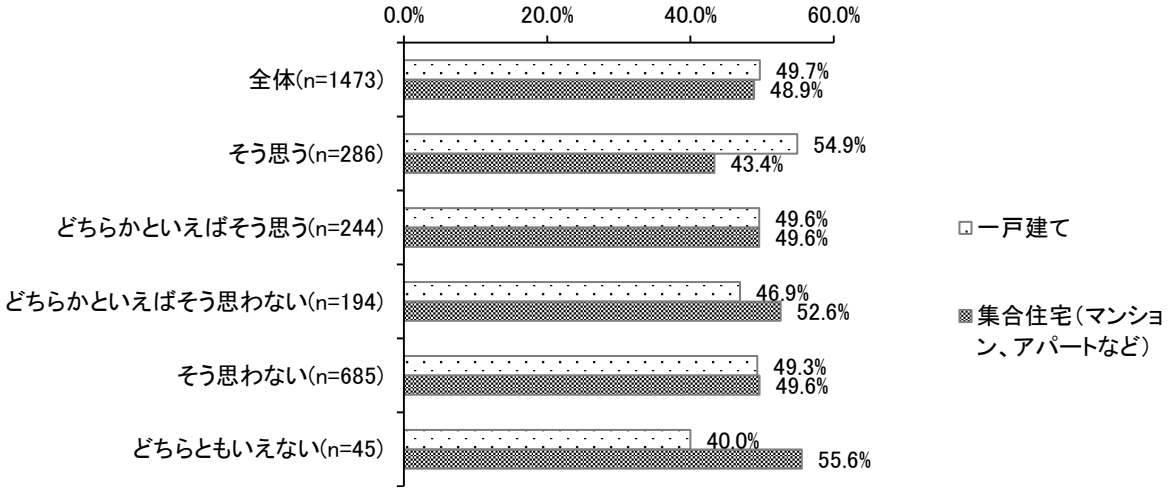
同居人数別に比較すると、「そう思う」では、「２人」世帯の 36.0%が最も高く、次いで「３人」世帯の 24.8%、「１人」世帯の 16.4%と続いた。

居住年数別



居住年数別による大きな差は見られないが、「１年未満」では、「どちらかといえばそう思う」が 25.0％で、他の居住年数より比率が高い。また、「そう思わない」は 37.5％で、他の居住年数よりその比率が低い。

居住形態別



居住形態別に比較すると、「そう思う」では「一戸建て」が 54.9％で、集合住宅を大きく上回っているが、「どちらともいえない」では「集合住宅」が 55.6％で、一戸建てを上回っている。

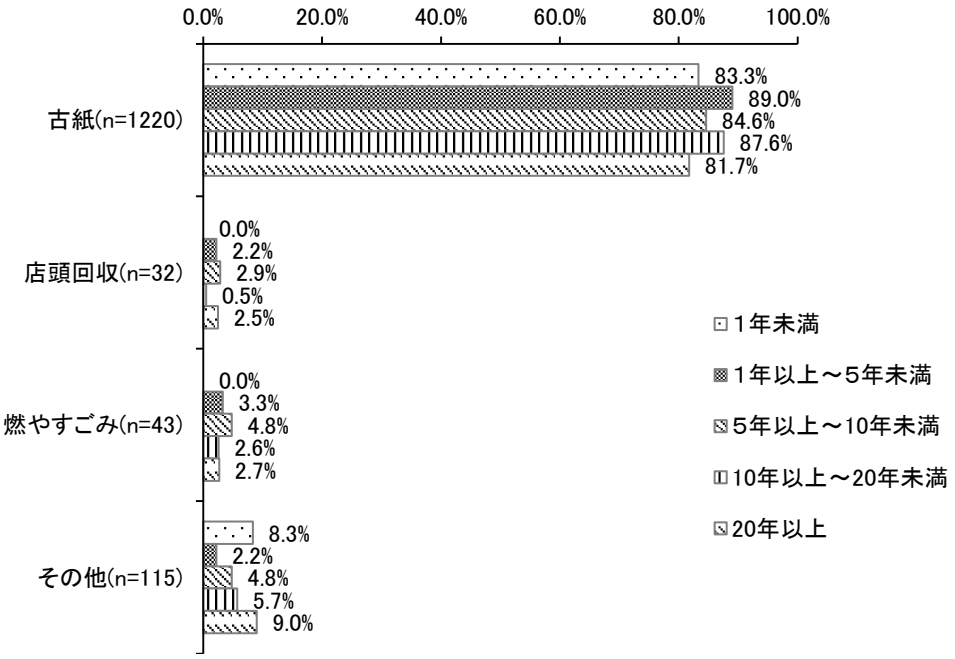
集合住宅は、敷地内にごみ集積場所が設置されているところもあり、分別や持ち出しがそれほど負担ではないと考えられる。

問 16　あなたやあなたの家族は、次の古紙をどのように出していますか。○はいくつでも。
(n=1,473)

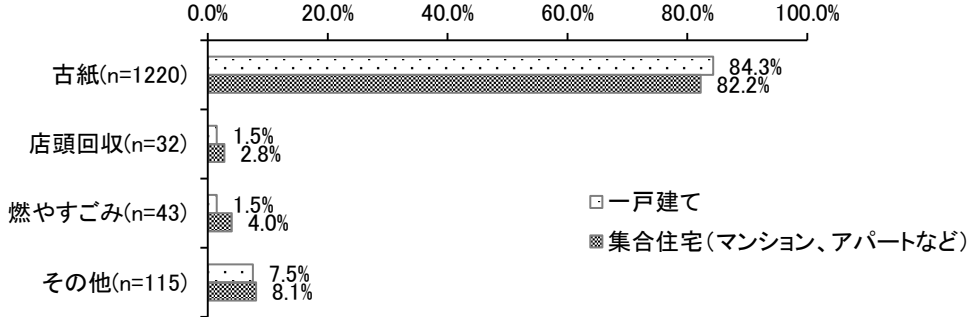
段ボール

「古紙」として排出する人が 82.8%で最も高く、「段ボールは古紙として排出する」という意識が浸透していることが分かった。

居住年数別



居住形態別

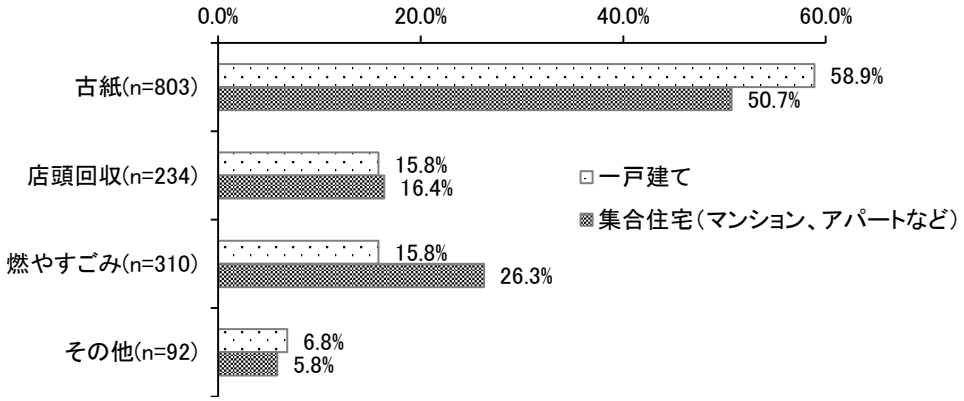


居住年数別、居住形態別にそれぞれ比較しても、全ての項目で「古紙」として排出している比率が 80.0%を超えており、居住年数、居住形態に関わらず、「段ボールは古紙として排出する」という意識が浸透していることが分かる。

紙パック

「古紙」として排出している比率が 54.5%で最も高く、次いで「燃やすごみ」が 21.0%、「店頭回収」が 15.9%と続いている。

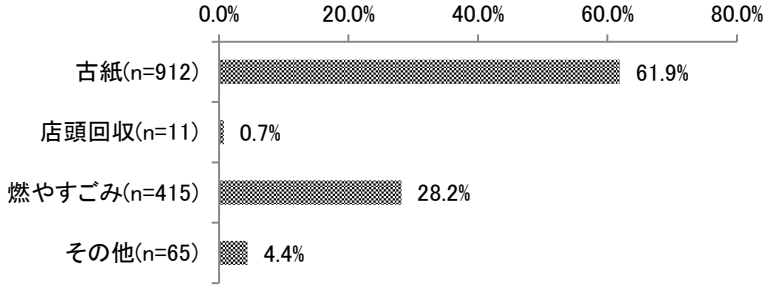
居住形態別



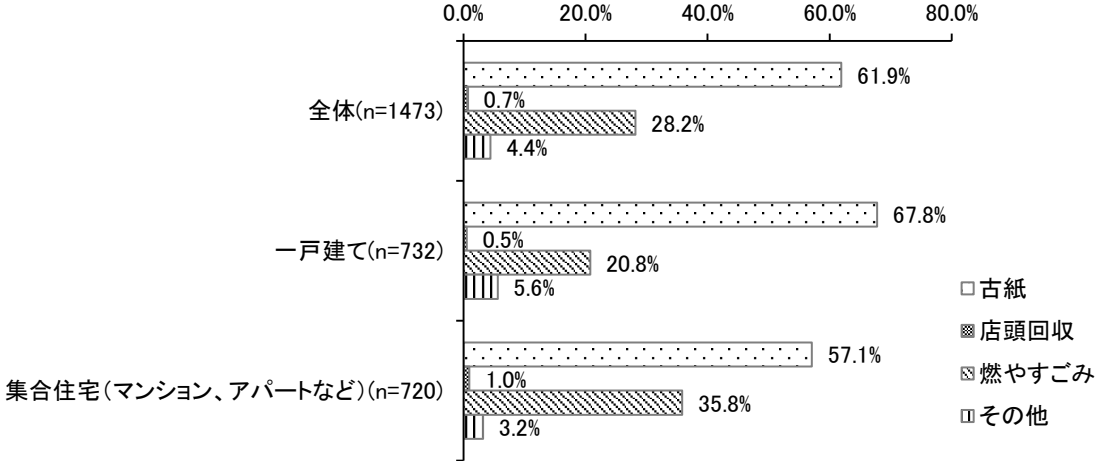
居住形態別に比較すると、「古紙」では、「一戸建て」が 58.9%で「集合住宅」よりも高いが、「燃やすごみ」では「集合住宅」が 26.3%となり、「一戸建て」を大きく上回っている。

80.0%以上が古紙として排出する段ボールに比べ、特に、集合住宅で古紙と回答する比率が大幅に下がり、燃やすごみと回答する比率が高い。

包装紙

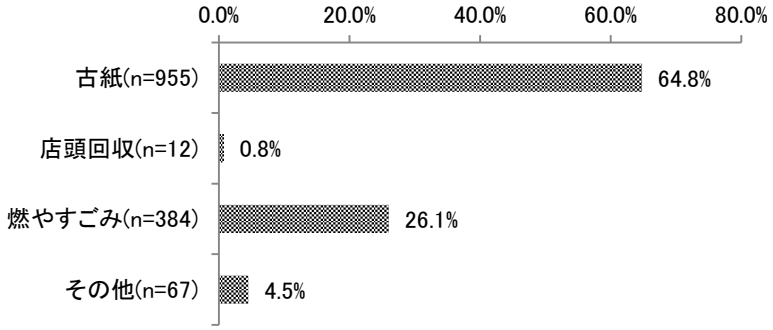


居住形態別

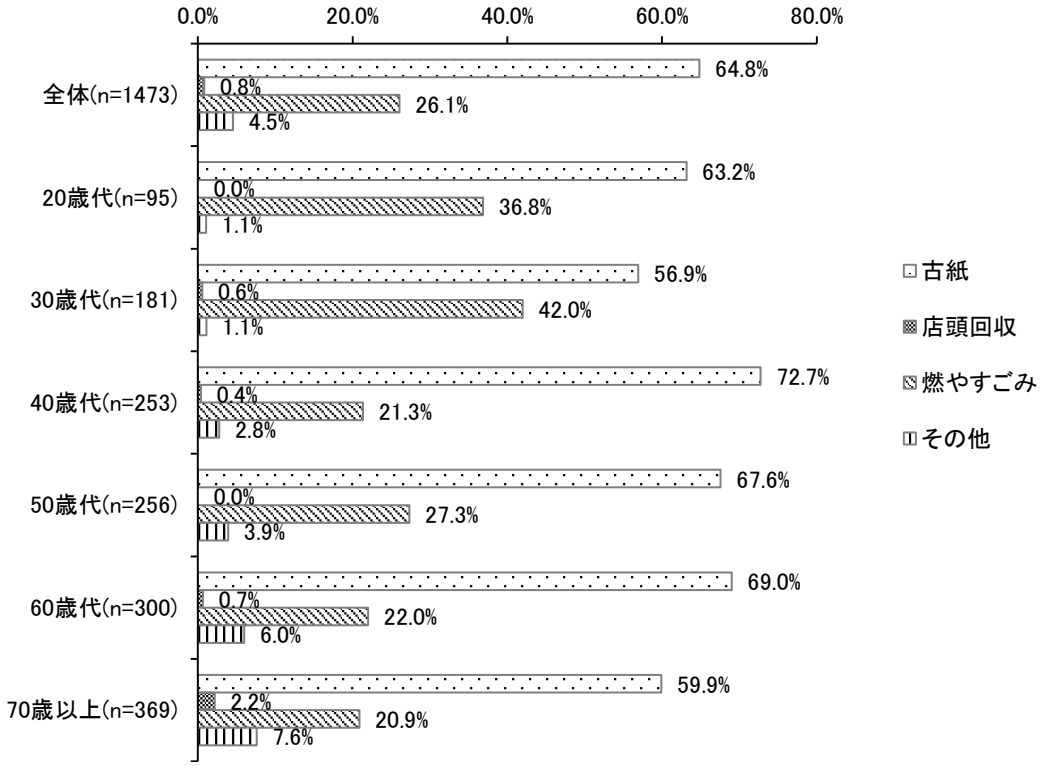


包装紙については、紙パックと同様の傾向であるが、「店頭回収」と回答する比率が 1.0%以下となった。居住形態別に比較しても、「燃やすごみ」として排出するのは「集合住宅」が 35.8%と比率が高くなっている。

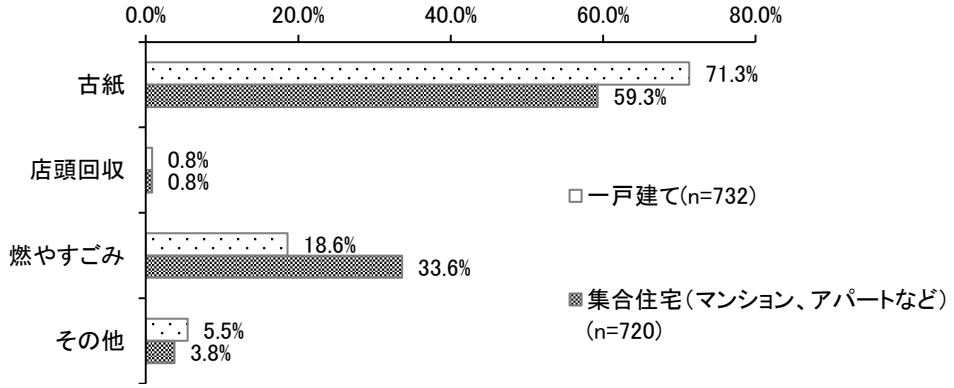
お菓子の紙箱



年代別



居住形態別

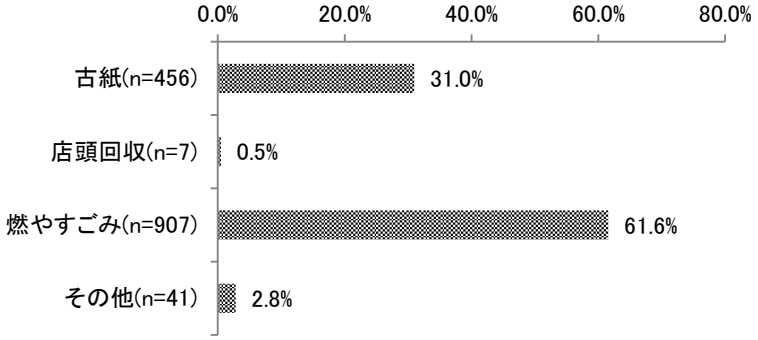


お菓子の紙箱については、紙パック、包装紙と同様の傾向であり、「古紙」として排出する比率は 64.8%にとどまり、「燃やすごみ」が 26.1%となっている。

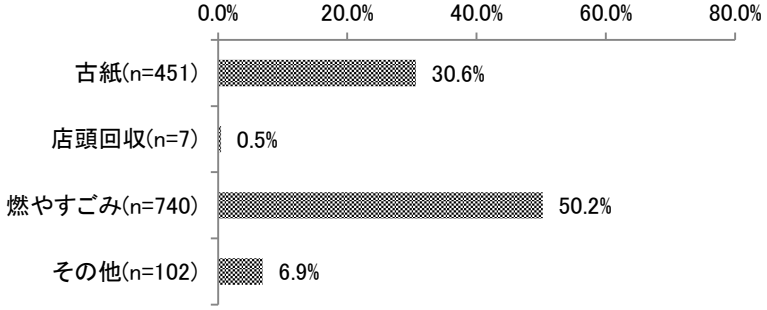
年代別に比較すると、「30 歳代」の 42.0%、「20 歳代」の 36.8%が「燃やすごみ」と回答しており、お菓子の紙箱以外の紙（紙パック、包装紙、メモ用紙、シュレッダー紙、レシート）についても、20 歳代及び、30 歳代は他の年代と比べ、燃やすごみと回答する人の比率が高い傾向にあった。

居住形態別に比較すると、「燃やすごみ」では、「集合住宅」が 33.6%となり、「一戸建て」の 18.6%を大きく上回っている。

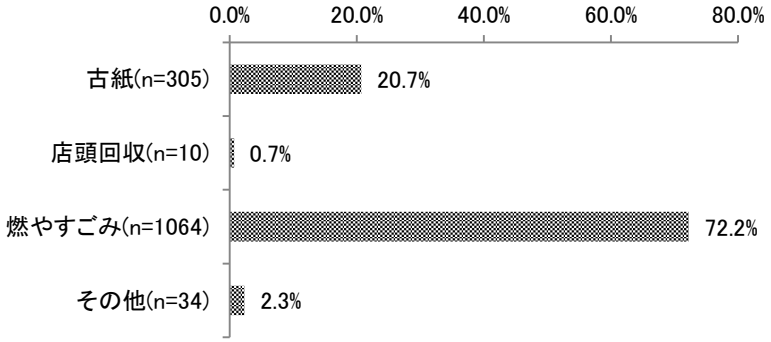
メモ用紙



シュレッダー紙



レシート

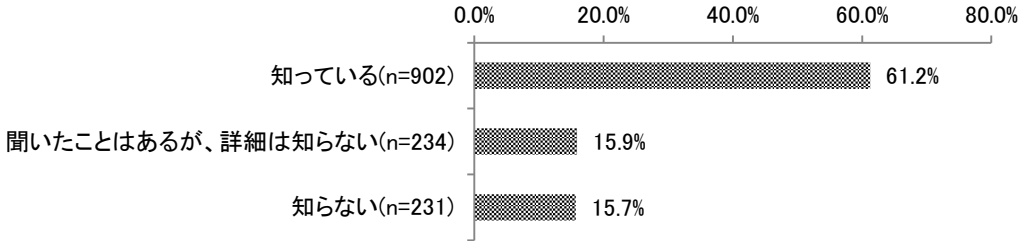


メモ用紙、シュレッダー紙、レシートについては、それぞれ同様の傾向で、「燃やすごみ」が50.0%以上となり、「古紙」の 20.7%～31.0%を大きく上回る結果となった。

これらの古紙については、問 37 の自由意見記述において、「メモなど個人情報の分かるものを出すことに抵抗がある」という意見や、「古紙の収集日が少ない」という意見があった。

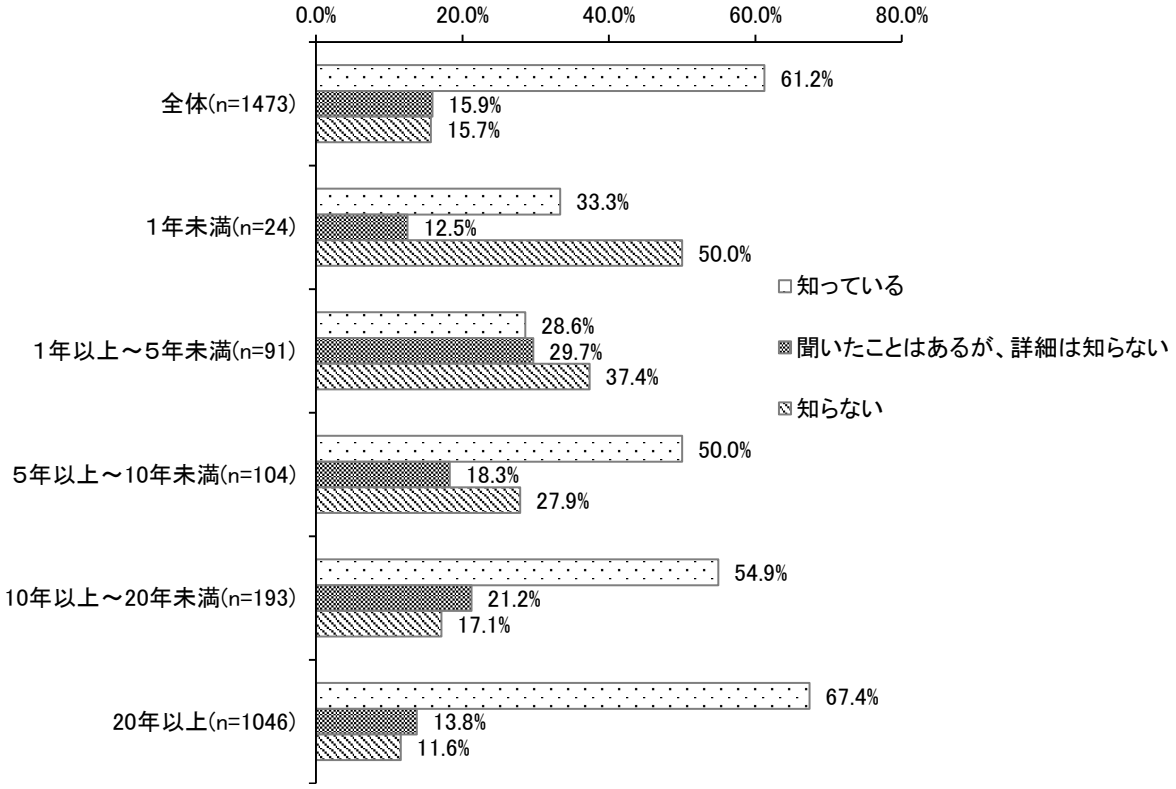
古紙として排出することに抵抗がある、または、古紙として排出したいが、やむを得ず燃やすごみとして排出している市民が一定数いると推察される。古紙の回収に関する適切な取組や情報提供ができれば、燃やすごみの大幅な減量につながると考えられる。

問 17　あなたは、古紙や古布など（地域によって異なります）は、自治会・町内会やＰＴＡなどが回収業者と直接契約を結び、資源集団回収として回収していることを知っていますか。○はひとつ。(n=1,473)



「知っている」が 61.2%で最も高く、次いで「聞いたことはあるが、詳細は知らない」が 15.9%、「知らない」が 15.7%と続いている。

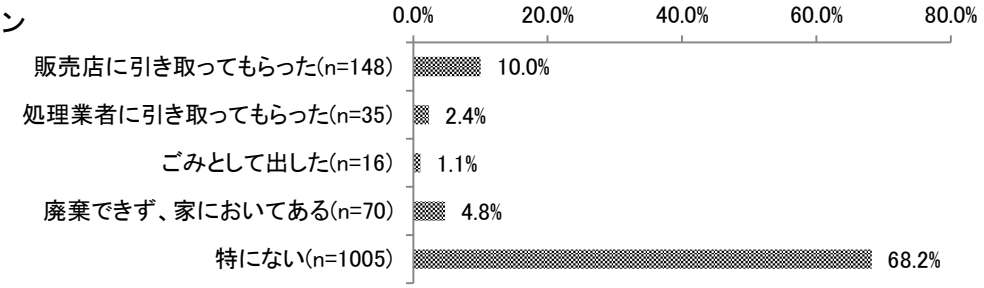
居住年数別



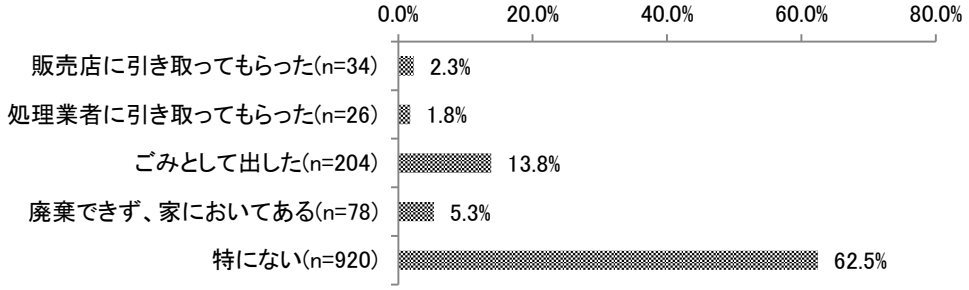
居住年数別に比較すると、「知っている」では「20 年以上」が 67.4%で最も高いが、「知らない」では「１年未満」が 50.0%で最も高くなっている。また、「聞いたことはあるが、詳細は知らない」では「１年以上～５年未満」が 29.7%で最も高くなっているため、横浜市に居住して１年以上で資源集団回収の概略を知り、さらに、居住年数が長くなるにつれて自治会・町内会と関わりを持ち、詳細まで知るようになると考えられる。

問 18　次の各品目は、通常のごみと一緒に焼却などの処理ができないため、横浜市では収集していません。あなたやあなたの家族は、これらを廃棄するとき、どのように処理していますか。○はそれぞれひとつ。(n=1,473)

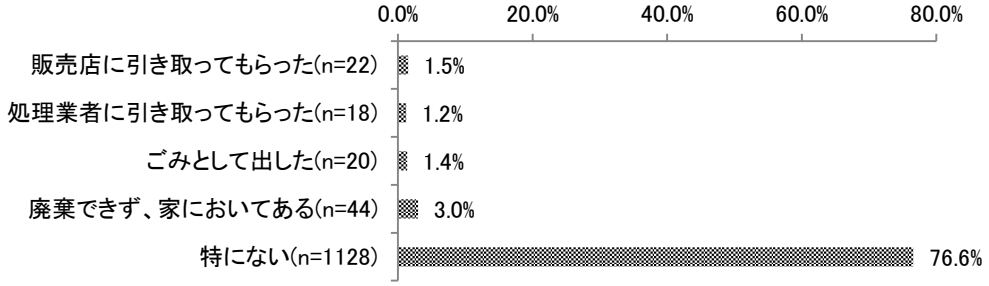
灯油・ガソリン



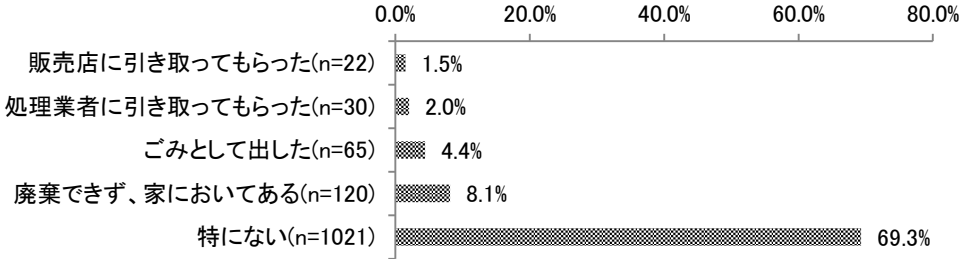
薬品



農薬



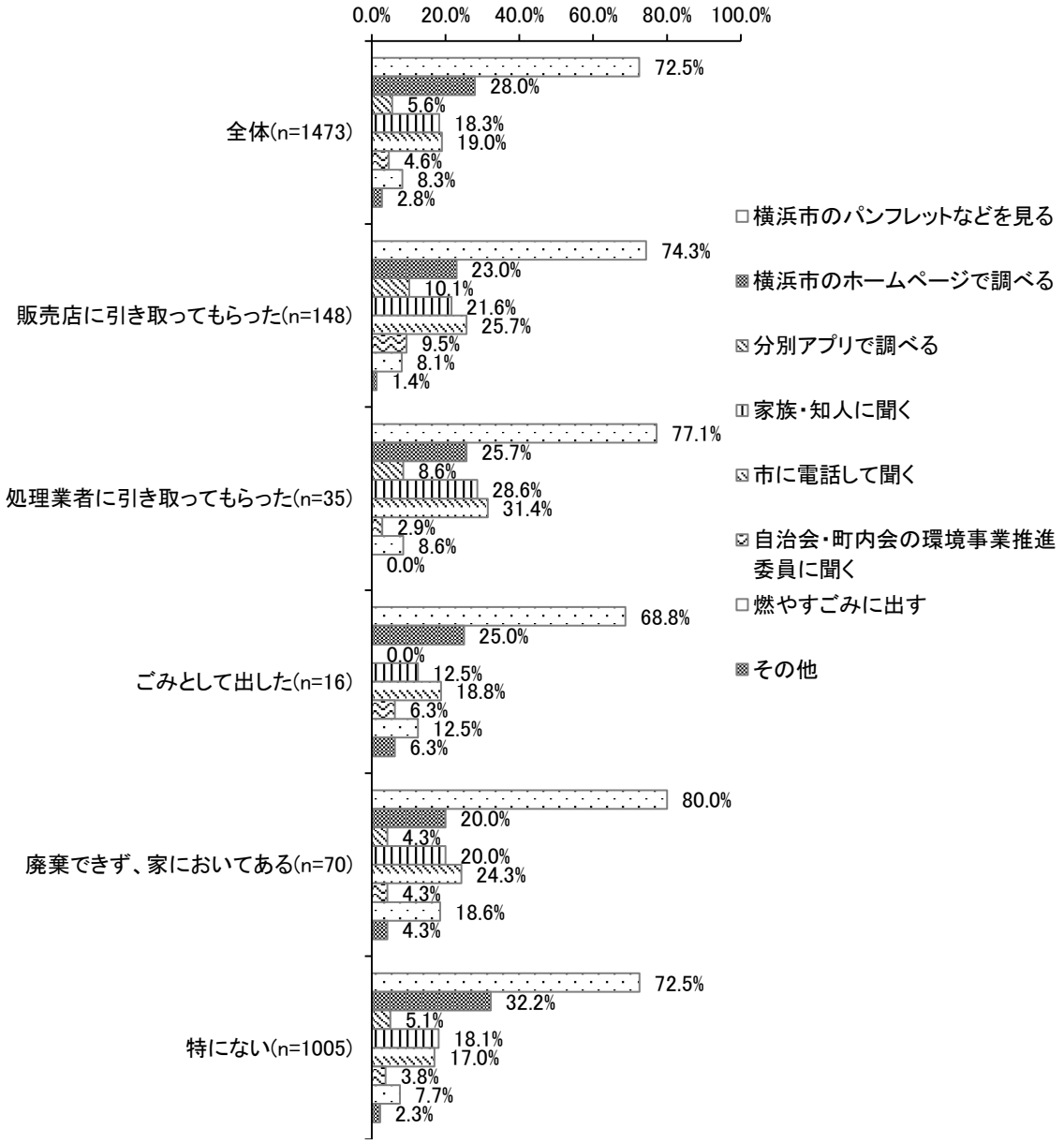
塗料



灯油・ガソリン、薬品、農薬、塗料それぞれについて、「特にない」が 60.0%以上となった。薬品のみ「ごみとして出した」の比率が 10%を超えており、実際に排出した薬品としては、「のみ残した薬（錠剤、カプセル、粉)」と回答する人が多かった。

「ごみとして出した」の具体的な排出方法としては、「布や紙に染み込ませて、燃やすごみ」が最も多く、薬品については、「中身は燃やすごみ、袋はプラスチック製容器包装」という回答が多かった。

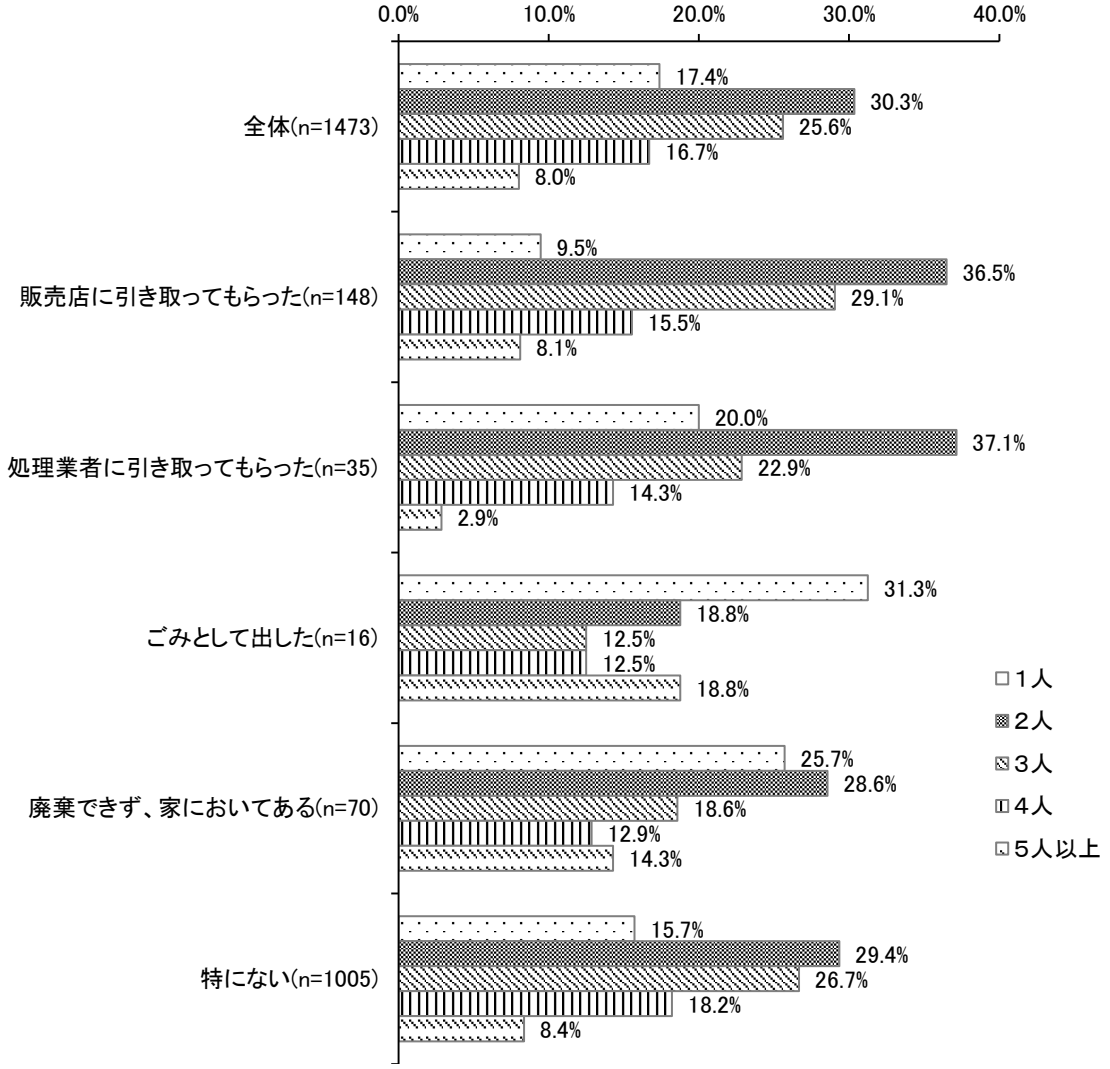
問 11　ごみの出し方が分からないときの情報源との関係（灯油・ガソリン）



「廃棄できず、家においてある」では、ごみの出し方が分からないときの情報源として「横浜市のパンフレットなどを見る」が 80.0%で最も高く、次いで「横浜市のホームページで調べる」が 20.0%となった。

ごみの出し方が分からないときに「燃やすごみに出す」と回答する人でも、「廃棄できず、家においてある」が 18.6%で最も高くなっており、灯油・ガソリンについては、他のごみと異なる扱いをしていることが分かる。

同居人数別（灯油・ガソリン）



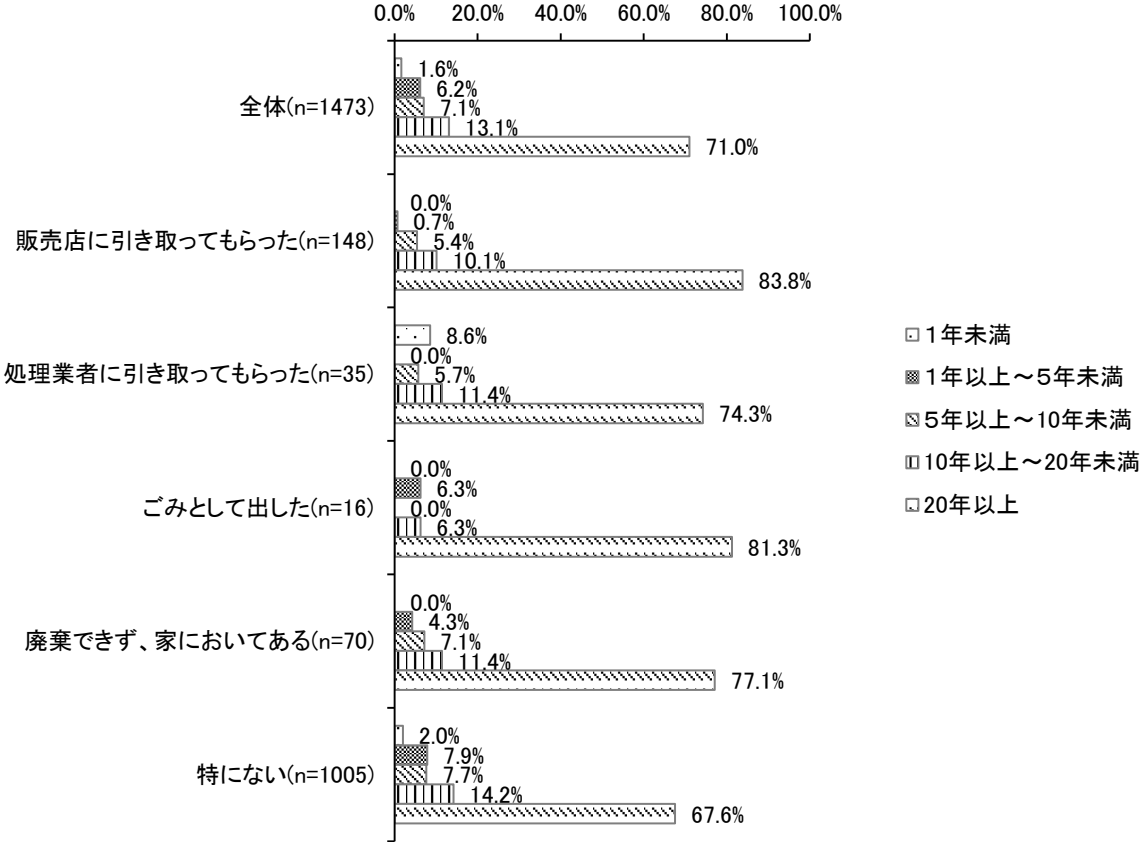
処理方法を同居人数別に比較すると、「ごみとして出した」では、「１人」世帯が 31.3%で最も高く、「２人」世帯及び、「５人以上」世帯の 18.8%と続いた。

「処理業者に引き取ってもらった」では、「２人」世帯の 37.1%が最も高く、「販売店に引き取ってもらった」においても、「２人」世帯の 36.5%が最も高くなった。

「廃棄できず、家においてある」では、「２人」世帯の 28.6%が最も高く、次いで「１人」世帯の 25.7%、「３人」世帯の 18.6%と続き、いずれの世帯でも処理に苦慮していることが分かる。

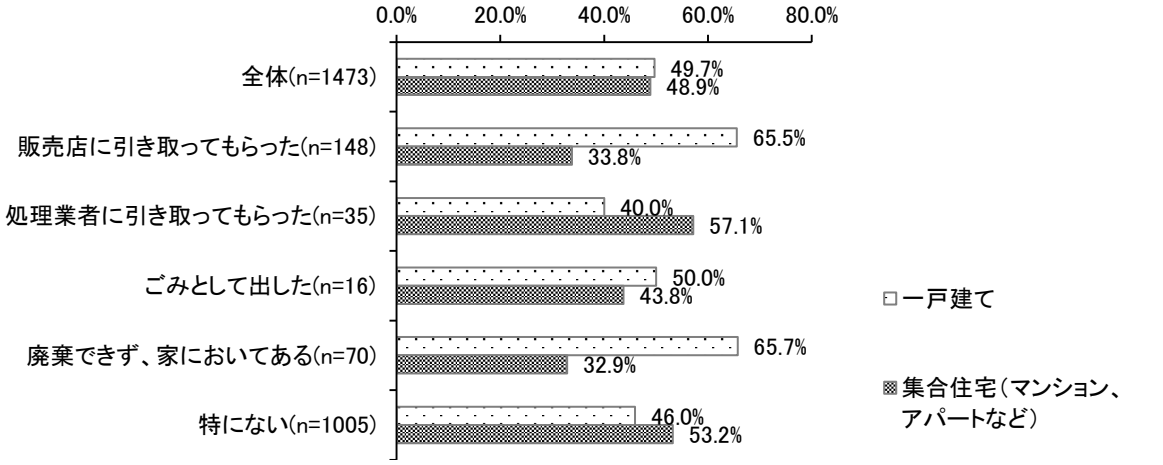
また、同居人数にかかわらず、ごみとして出すことを選択する人が一定数いることから、幅広い世帯に向けて灯油・ガソリンの正しい処理方法を周知する必要がある。

居住年数別（灯油・ガソリン）



居住年数別に比較すると、全ての項目において「20 年以上」の比率が最も高い。特に、「販売店に引き取ってもらった」では、「20 年以上」の 83.8%が回答している。

居住形態別（灯油・ガソリン）



居住形態別に比較すると、「廃棄できず、家においてある」では、「一戸建て」が 65.7%、「集合住宅」が 32.9%となった。集合住宅では処理業者に引き取ってもらう（57.1%）など適切に処理し、家においているのは、一戸建てのほぼ半数であることが分かった。

■考察　ごみと資源物の出し方について

調査結果から、ペットボトル及び、プラスチック製容器包装の出し方については、おおむね認知されていることが分かる。しかし、集合住宅に居住する人は、一戸建てに居住する人と比較して、ペットボトルの出し方を「知らなかった」とする比率が高く、プラスチック製容器包装は、「全て燃やすごみとして出している」比率が高い。また、プラスチック製容器包装を正しく排出していない人が多い回答者層は、居住年数が１年未満であり、集合住宅に居住する１人世帯だということが分かった。ごみの出し方、分別については、転入時に徹底して周知を図ることで、正しく排出する市民が増えると考えられる。

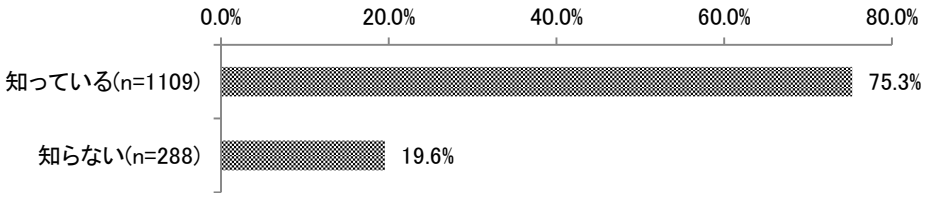
缶・びん・ペットボトルを別々の袋に入れて排出することについて、「どちらかといえば負担だと思わない」及び、「負担だと思わない」の累積構成比は 59.7％であり、将来、これらの資源物を別々に排出することになっても、市民からはおおむね理解を得られるのではないか。

古紙の排出について、段ボールは 85％の市民が古紙または店頭回収としているのに対し、紙パック、包装紙、お菓子の紙箱は、特に、20 代、30 代の集合住宅に居住する人を中心に、燃やすごみとする人が少なくない。紙パック、包装紙、お菓子の紙箱は、段ボールと比較して体積が小さいため、家庭ごみと混在させて排出する人が多いのではないか。また、メモ用紙、シュレッダー紙、レシートについては、「個人情報が分かるものを古紙として出すことに抵抗がある」という意見がある。どのような業者（団体）が回収をしているのか、どのように個人情報が守られているのか、情報提供により信頼を得られれば、回収量は増加するはずだ。

横浜市では、灯油・ガソリン、薬品、農薬、塗料の収集は行っておらず、処理については、「販売店へ相談」としている。これらの品目の処理方法が分からず、家においてある市民が一定数いることから、販売店や処理業者への相談を促したり、市民から問合せがあったときのマニュアルを詳細に設定したりするなど、適切に処理できるような環境の整備を検討することが必要だ。

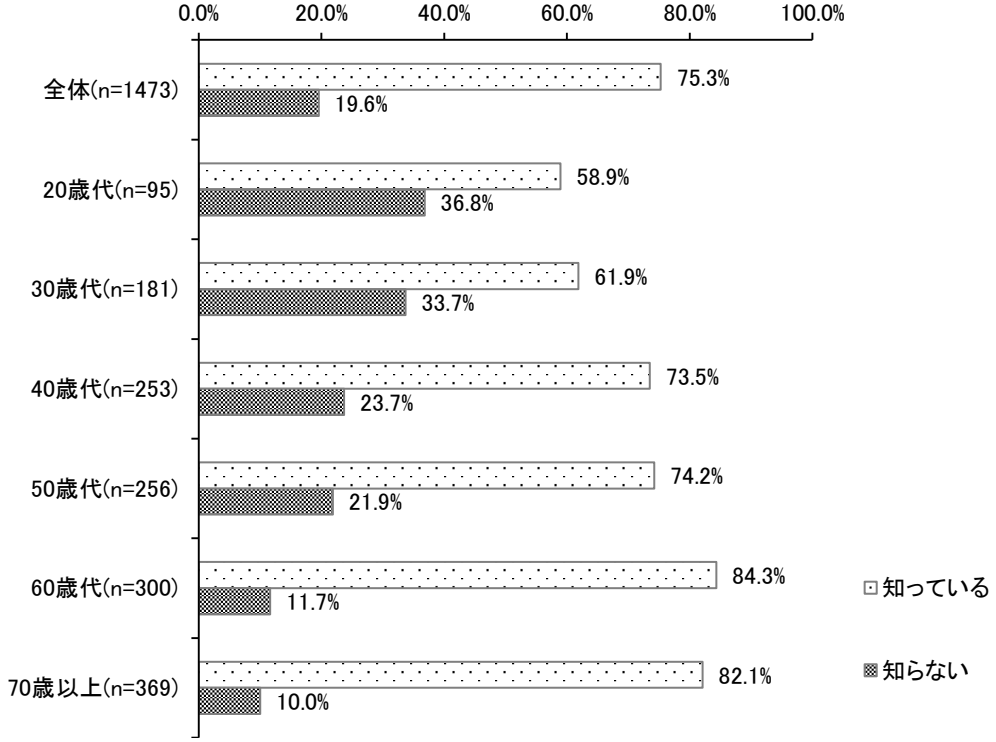
2.6　集積場所について

問 19　集積場所には設置基準があり、利用する人達が維持管理することになっていますが、あなたは知っていますか。○はひとつ。(n=1,473)



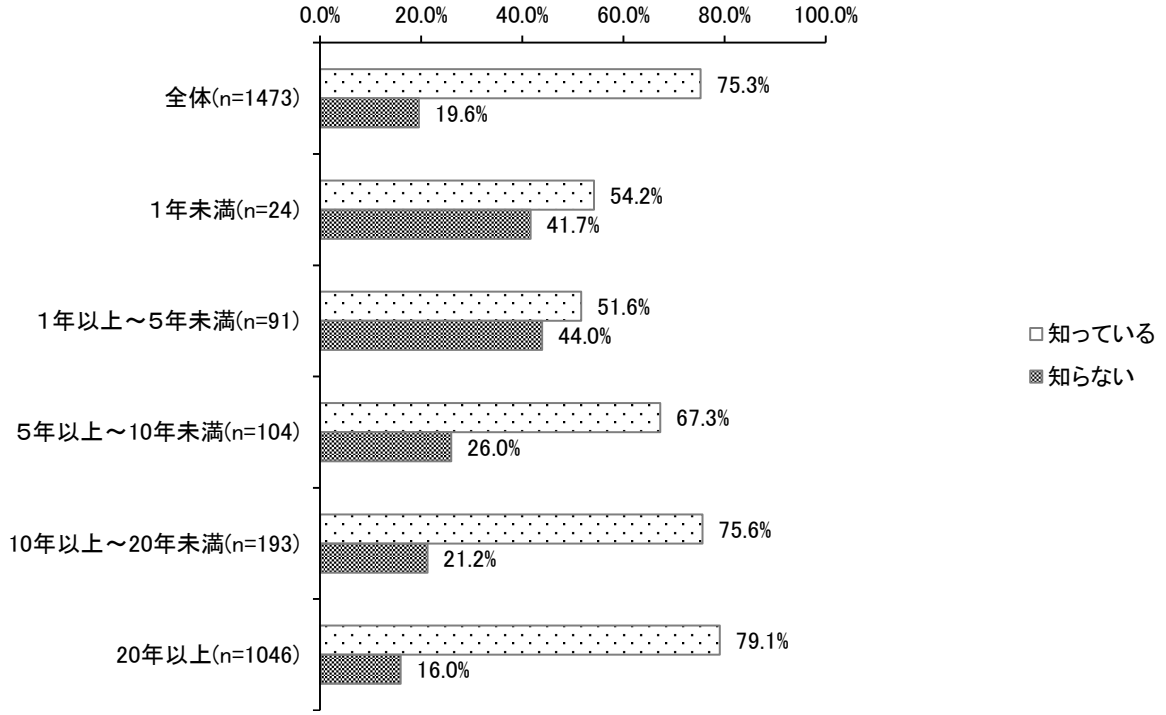
「知っている」と回答した比率が 75.3%となっており、多くの人に周知されていることが分かった。

年代別



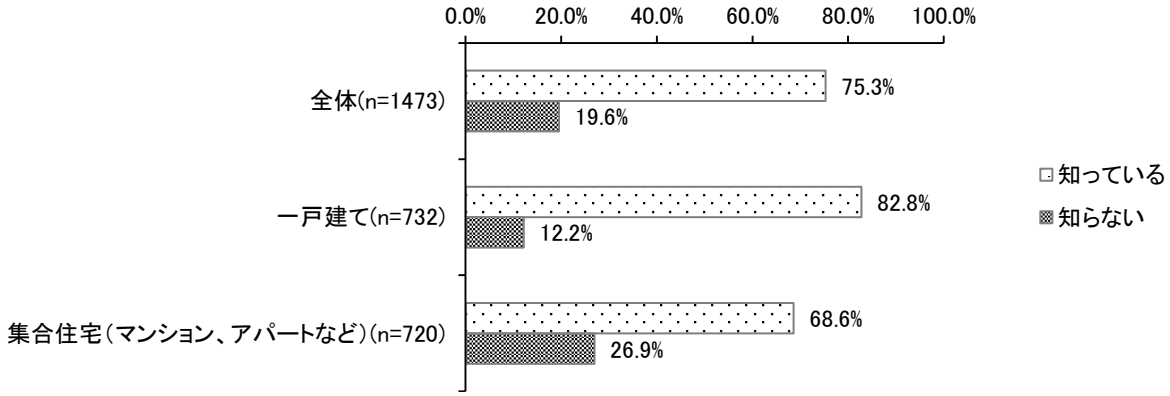
年代別に比較すると、「知っている」と回答した比率は、「60 歳代」が 84.3%で最も高く、「知らない」と回答した比率は「20 歳代」が 36.8%で最も高くなっている。年代が上がるにつれて集積場所の設置基準や、維持管理について知る人が増える傾向にあることが分かる。

居住年数別



居住年数別に比較すると、「知っている」と回答した比率は、「20 年以上」が 79.1％で最も高く、「知らない」と回答した比率は「１年以上～５年未満」が 44.0％で最も高くなっている。居住年数が長くなるにつれて集積場所の設置基準や、維持管理について知る人が増える傾向にあることが分かる。

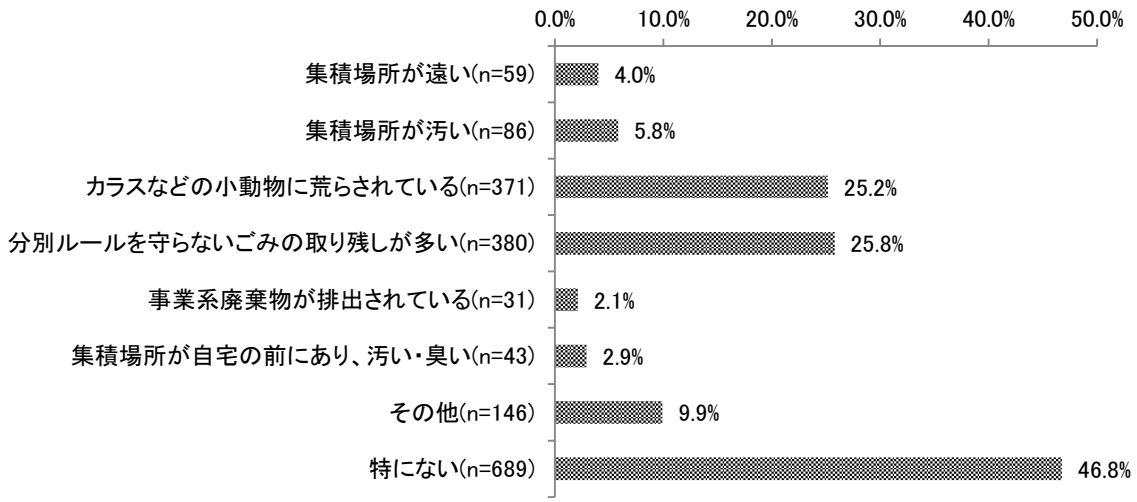
居住形態別



居住形態別に比較すると、「知っている」では、「一戸建て」が 82.8％で「集合住宅」を上回っているが、「知らない」では「集合住宅」が 26.9％で「一戸建て」を上回っている。

以上の比較から、一戸建ての方が集積場所の設置基準や、維持管理について知っている人が多いことが分かる。

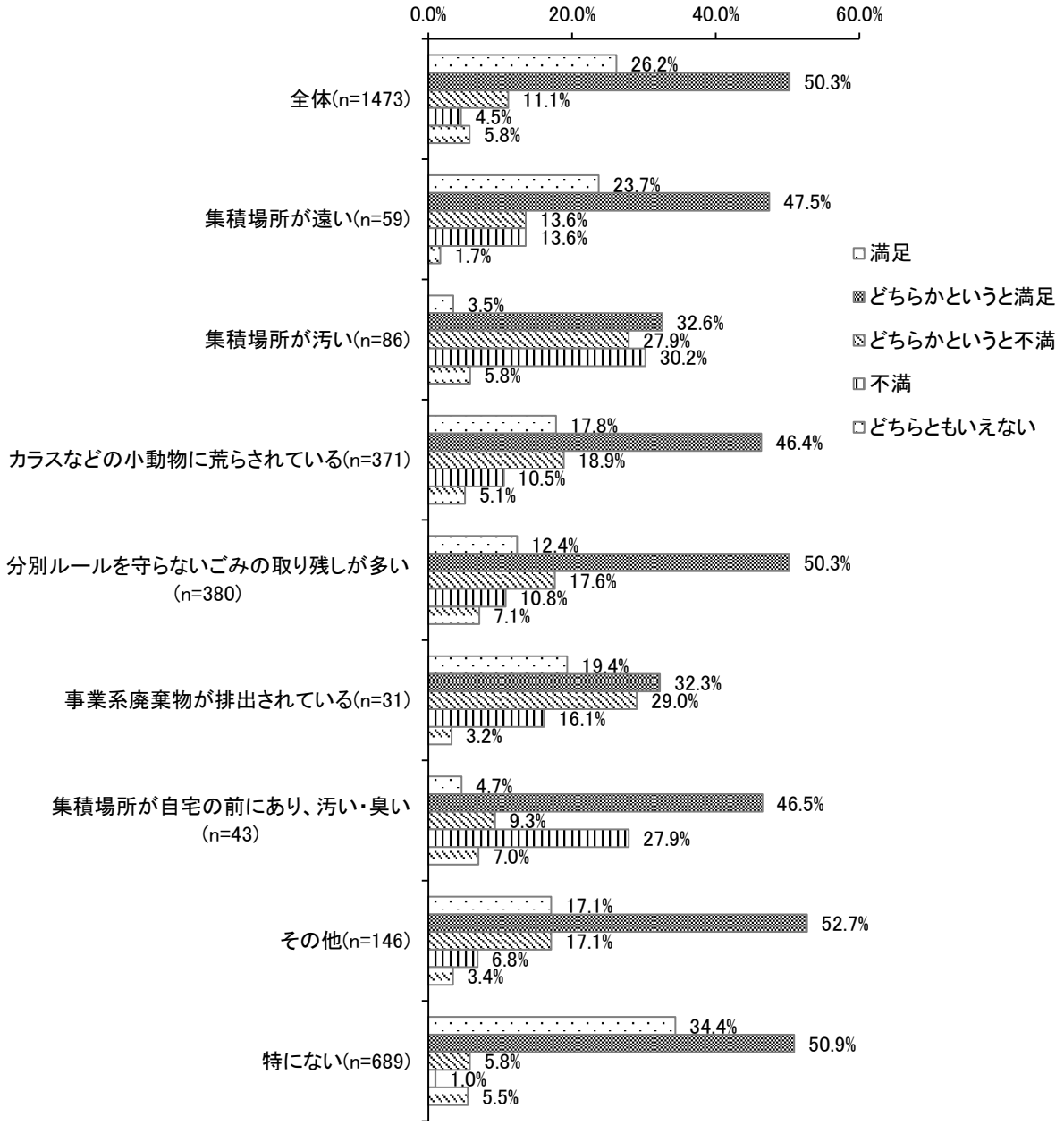
問 20　あなたが集積場所で困っていることはどれですか。○はいくつでも。(n=1,473)



「特にない」が 46.8%で最も高く、次いで「分別ルールを守らないごみの取り残しが多い」が 25.8%、「カラスなどの小動物に荒らされている」が 25.2%と続いている。

その他の意見では、「他の地域の人や、マンション外の住民がごみを捨てる」が最も多く、「集積場所が狭い」、「ごみ袋を開けて、分別されているかチェックする人がいる」などが挙げられた。

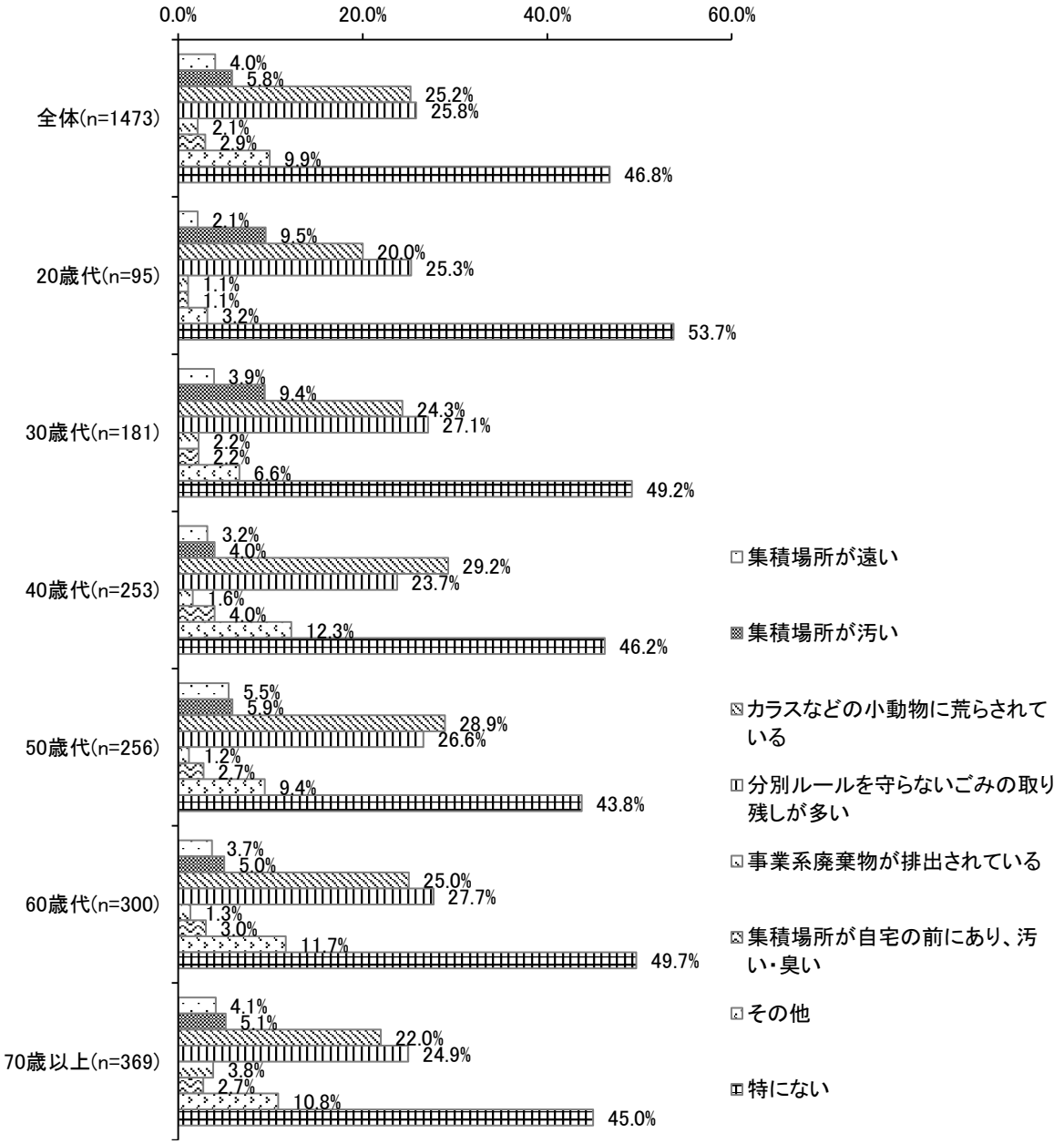
問３　住んでいる地域の清潔さの満足度との関係



地域の清潔さに「不満」と回答した人は、「集積場所が汚い」で 30.2%と最も高く、次いで「集積場所が自宅の前にあり、汚い・臭い」で 27.9%と続いている。

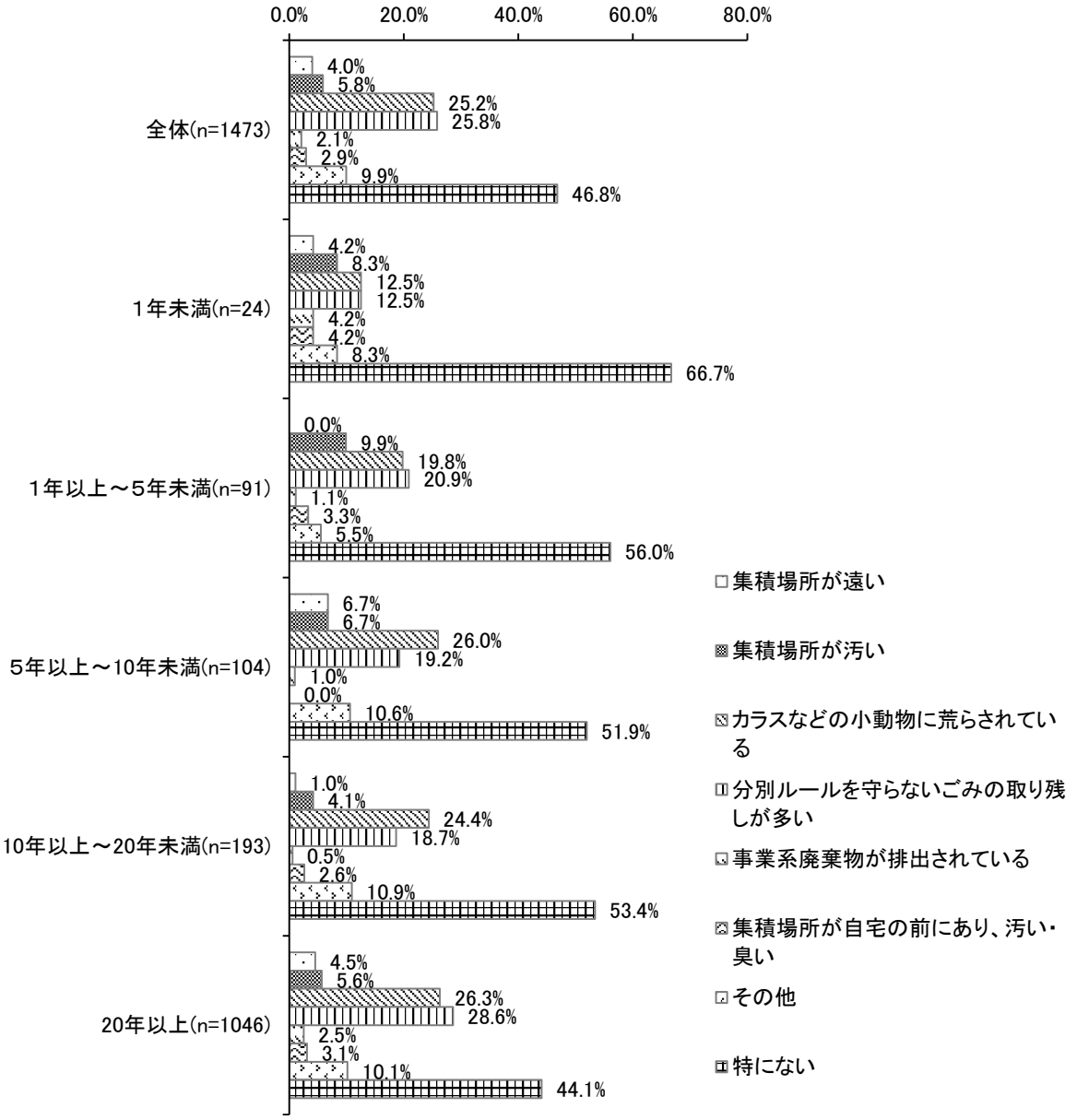
「集積場所が遠い」では、地域の清潔さに「満足」と「どちらかというと満足」の累積構成比が 71.2%となっている。そのため、住んでいる地域の清潔さに不満がある人は、特に、集積場所の汚さに対して不満を持っていることが分かる。集積場所を清潔に保つことが、住んでいる地域全体の清潔さに対する満足度を上げることにつながると考えられる。

年代別



年代別に比較すると、いずれの年代でも「特にない」が最も高く、「カラスなどの小動物に荒らされている」又は、「分別ルールを守らないごみの取り残しが多い」が続いている。

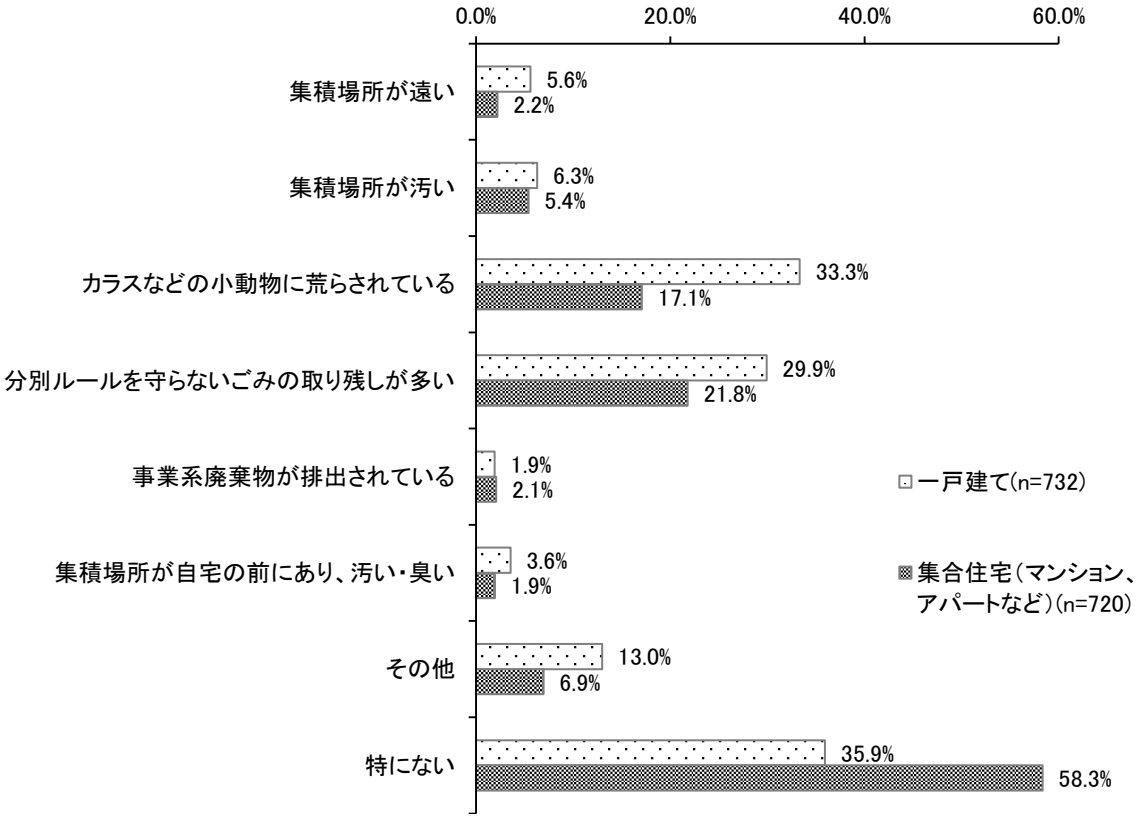
居住年数別



居住年数別に比較すると、「特にない」と回答したのは、「１年未満」が 66.7%で最も高く、次いで「１年以上～５年未満」が 56.0%と続いている。また、「カラスなどの小動物に荒らされている」、「分別ルールを守らないごみの取り残しが多い」の累積構成比は、「１年未満」では、25.0%だが、「20 年以上」では 54.9%となっている。

以上の比較結果から、居住年数が長くなるにつれて不満が大きくなり、主に「カラスなどの小動物に荒らされている」、「分別ルールを守らないごみの取り残しが多い」に対して不満があることが分かる。

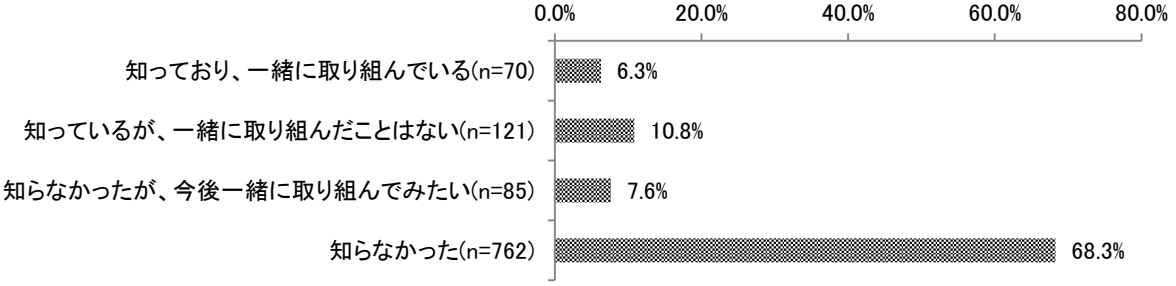
居住形態別



居住形態別に比較すると、「カラスなどの小動物に荒らされている」、「分別ルールを守らないごみの取り残しが多い」では、一戸建てが集合住宅を大きく上回っているが、「特にない」では集合住宅が 58.3%となっている。

集合住宅では、敷地内にふた付きのゴミステーションを設置していたり、建物内にごみ集積場所を設けたりするところが多いため、困っていることは特にないと回答する人が多いと推察される。

問 21　問 20 で 1 から 7 を選択した方におたずねします。あなたは、集積場所快善（改善）隊の取組を知っていますか。○はひとつ。(N=1,116)



「知らなかった」が 68.3%で最も高く、「知っており、一緒に取り組んでいる」と「知っているが、一緒に取り組んだことはない」の累積構成比が 17.1%にとどまったことからも、取組のさらなる周知が必要であることが分かった。

■考察　集積場所について

集積場所には設置基準があり、利用する人達が維持管理をすることになっているが、年代が下の世代や、居住年数が短い人の認知度は低い。これらの回答者層の認知度が低くなった理由には、自治会・町内会活動への参加率低下も関係しているのではないか。また、集合住宅に居住する人の認知度も、一戸建てと比較して低い背景には、建物内にごみ集積場所が設置されていたり、管理人が清掃をしたりするため、地域のごみ集積場所に関心がない可能性も考えられる。

集積場所で困っていることについても、集合住宅では 58.3%が「特にない」と回答し、一戸建ての 35.9%を大きく上回った。困っていることで最も多く挙げられたのは、「分別ルールを守らないごみの取り残しが多い」であり、次いで「カラスなどの小動物に荒らされている」であったことから、集積場所の清掃が一部市民の負担になっていることが示唆された。

住んでいる地域の清潔さの満足度との関係を見ても、集積場所が汚いと感じている人ほど、地域の清潔さに満足をしていないという結果が出た。集積場所を清潔に保つことが、地域全体の清潔さが向上する要因の一つになると考えられる。

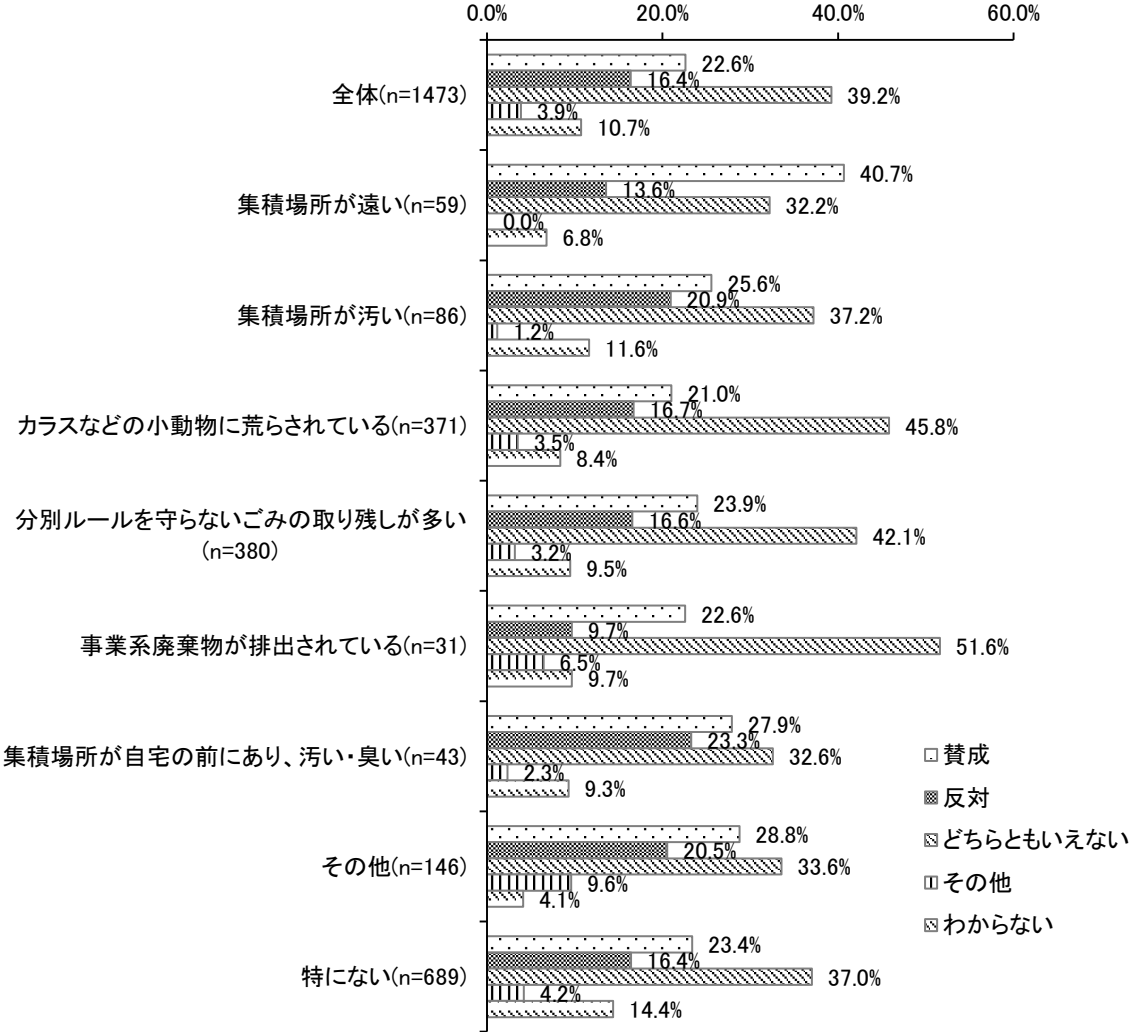
以上の理由から、集積場所の維持管理は、地域全体で取り組むべき活動であり、一部の人だけに負担が掛からないような仕組みを作る必要があるのではないか。問 37 の自由意見記述には、「分別していないゴミを出す人が分かっているときの対応はどうしたらいいか、ホームページ等で教えてほしい」という意見があった。近隣住民同士では、互いに分別指導がしにくいようだ。このようなときにもサポートをしてくれる集積場所快善（改善）隊の認知度を上げ、市民と協働で維持管理に取り組むことができれば、多くの問題が解決されるのではないか。

2.7　戸別収集について

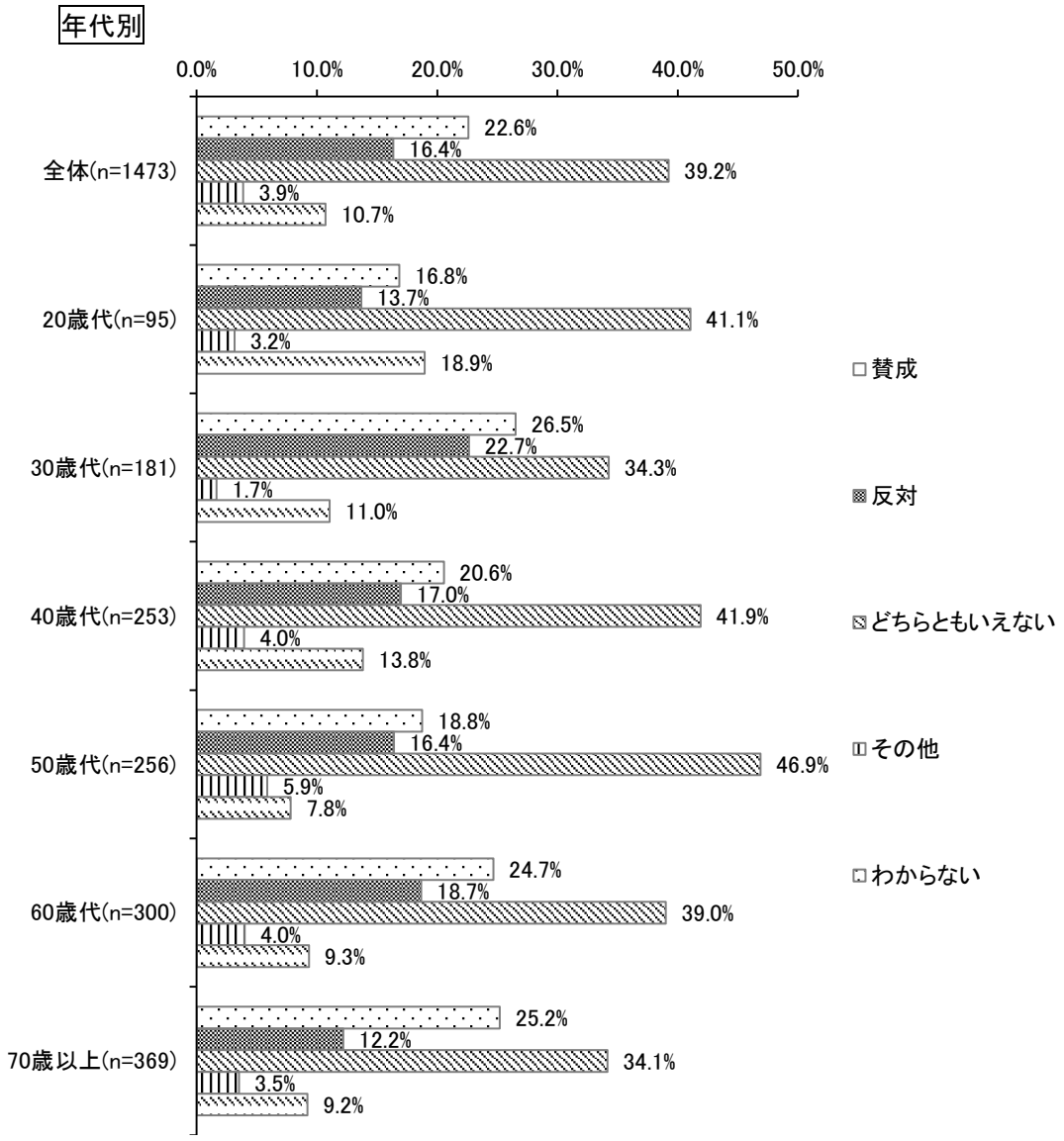
問 22　あなたは、ごみの戸別収集についてどう思いますか。○はひとつ。(n=1,473)

「どちらともいえない」が 39.2%で最も高く、次いで「賛成」が 22.6%、「反対」が 16.4%と続いている。

問 20　集積場所で困っている事との関係

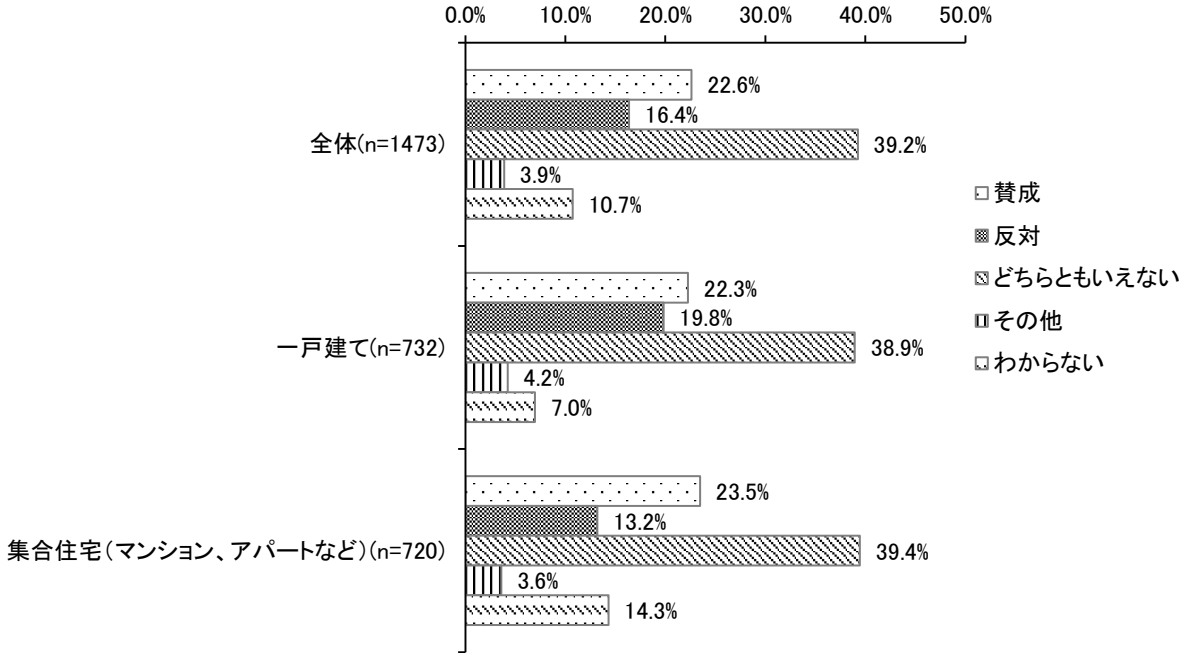


「集積場所が遠い」以外の回答では、全体集計と同様の傾向になっているが、「集積場所が遠い」では、「賛成」が 40.7%で最も高くなっている。そのため、集積場所が遠い人は戸別収集を行ってほしいと考えていることが分かった。



年代別に比較すると、いずれの年代でも「どちらともいえない」が最も高く、「50 歳代」で 46.9%、次いで「40 歳代」で 41.9%、「20 歳代」で 41.1%という結果になった。

居住形態別



居住形態別に比較すると、「一戸建て」では「反対」が 19.8%なのに対し、「集合住宅」では 13.2%となっている。そのため、「一戸建て」の世帯では、「集合住宅」と比較すると戸別収集に反対だということが分かる。

戸別収集に賛成する理由は、「各自が責任を持ってごみを出せる」が最も多く、「高齢者が増えるとごみ出しが難しい」、「街の美観が向上する」という意見も多かった。

戸別収集に反対する理由では、「収集経費（人件費など）の増加」が最も多く、「家庭ごとにカラスなどの小動物対策ができない」、「個人が特定されそう（プライバシー面での心配）」という意見も多かった。

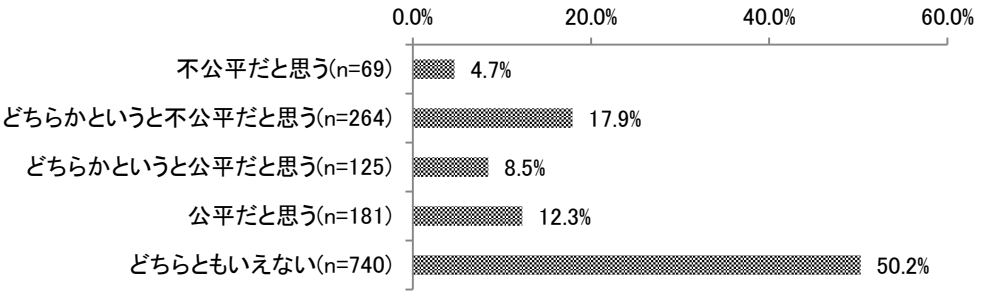
■考察　戸別収集について

戸別収集については、「どちらともいえない」とする回答が最も多く、賛成か反対かでは、賛成の方が 6.2%多かった。賛成の理由として、高齢者のごみ出しの負担を挙げた意見があったが、年齢別に比較しても、年代が上の世代に賛成が多いということはなかった。

「どちらともいえない」が多くなった理由は、横浜市民にとって、ごみは集積場所に出すことが当然であり、これまで戸別収集について考えるきっかけが少なかったのではないか。今回のアンケート調査が問題提起となり、戸別収集について考える場が増えることを期待したい。それとともに、横浜市としても継続して市民の声を聞きながら、中長期的に検討していく必要がある。

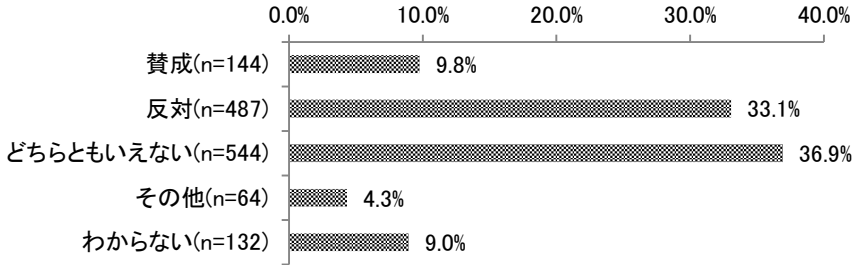
2.8　ごみ処理費用の負担のあり方について

問 23　横浜市では、出すごみの量に応じた手数料の負担を求めていないため、ごみの減量に努力した人と、たくさん出す人で、有料指定袋などの金銭的な負担に差がありません（粗大ごみ手数料は除く）が、あなたはどう思いますか。○はひとつ。(n=1,473)



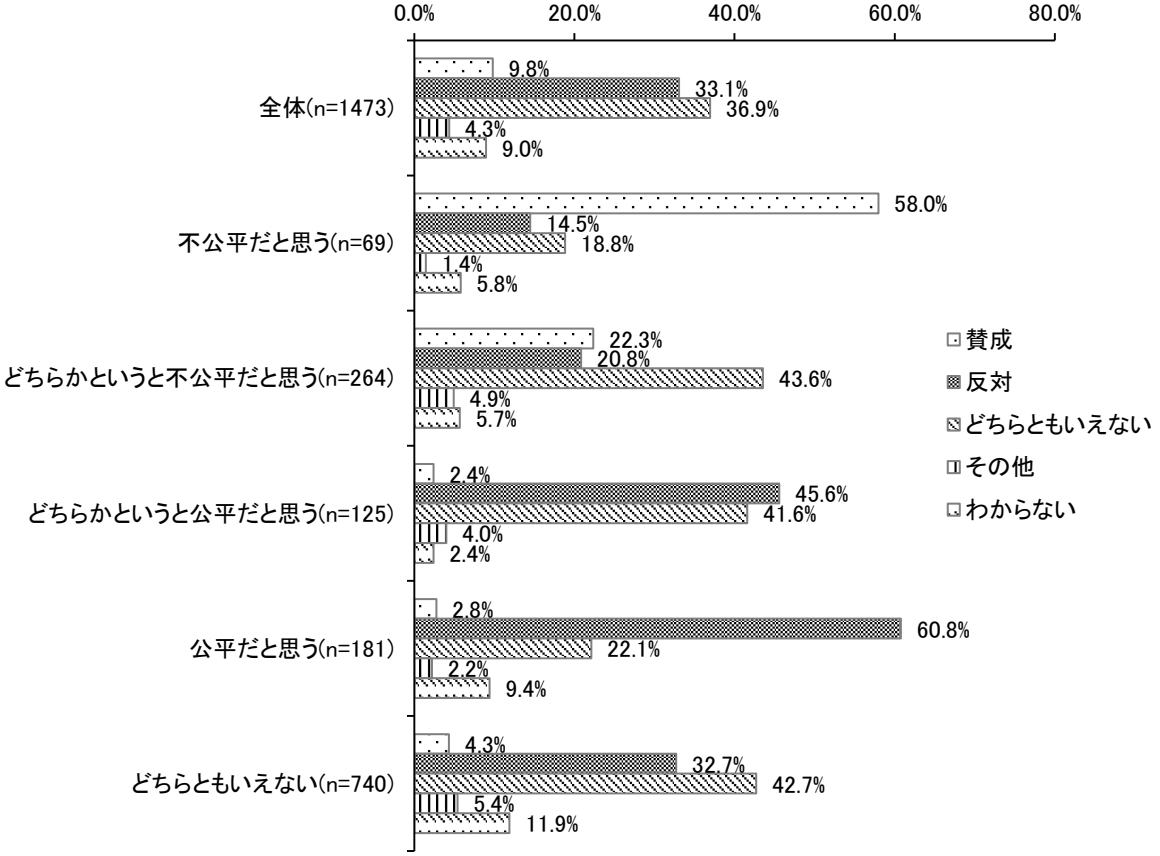
「どちらともいえない」が 50.2%で最も高く、次いで「どちらかというと不公平だと思う」が 17.9%、「公平だと思う」が 12.3%と続いている。

問 24　あなたは、家庭ごみの収集を有料化して、それぞれの市民が、出すごみの量に応じた費用を負担するという考え方についてどう思いますか。○はひとつ。(n=1,473)



「どちらともいえない」が 36.9%で最も高く、次いで「反対」が 33.1%、「賛成」が 9.8%と続いている。

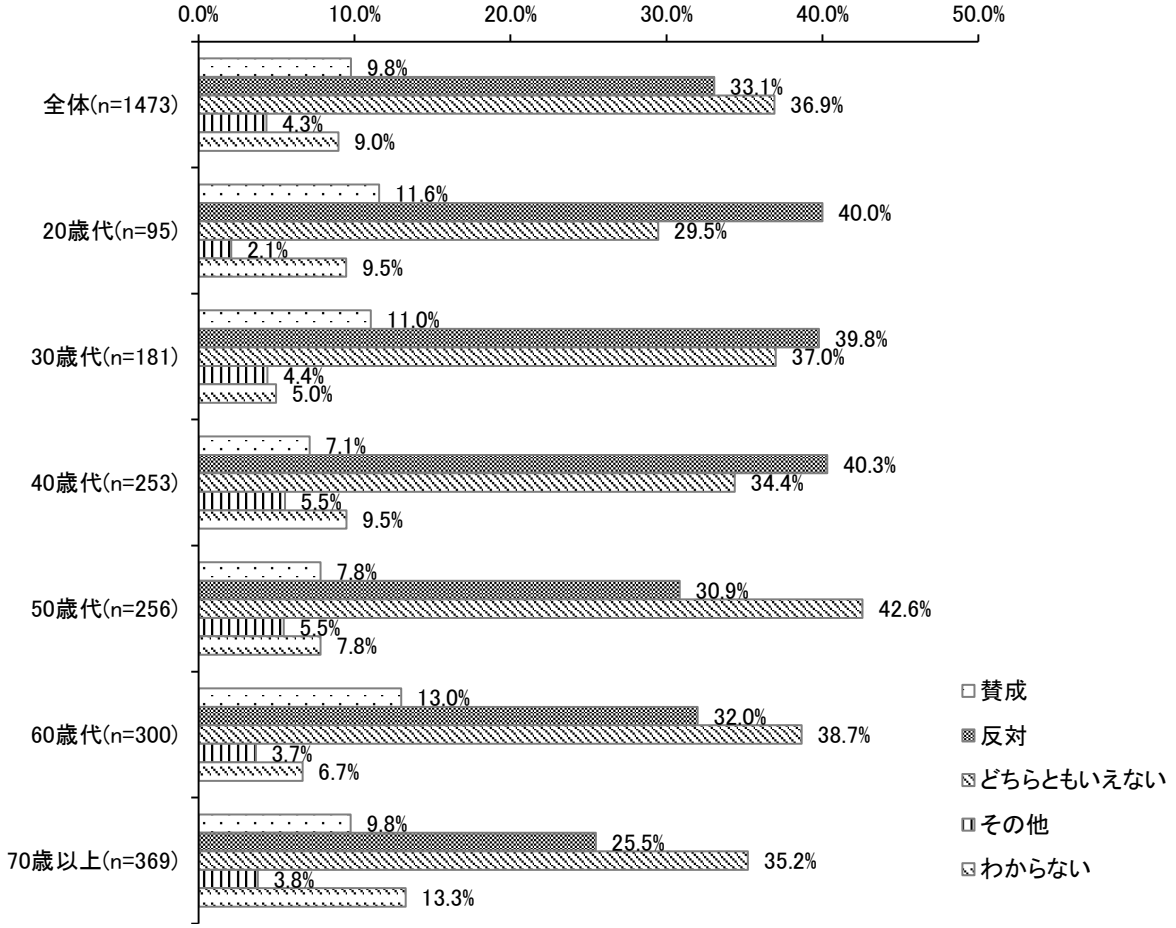
問 23 ごみ処理費用に対する意見との関係



ごみの処理に関して、金銭的な負担に差がない事を「不公平だと思う」と回答した人は、ごみ処理費用の有料化に「賛成」と回答した比率が 58.0%で最も高いが、「公平だと思う」と回答した人は、ごみ処理費用の有料化に「反対」と回答した比率が 60.8%で最も高い。

金銭的な負担に差がない事を不公平だと考えている人ほど、ごみ処理費用を有料化するべきだと考えていることが分かる。

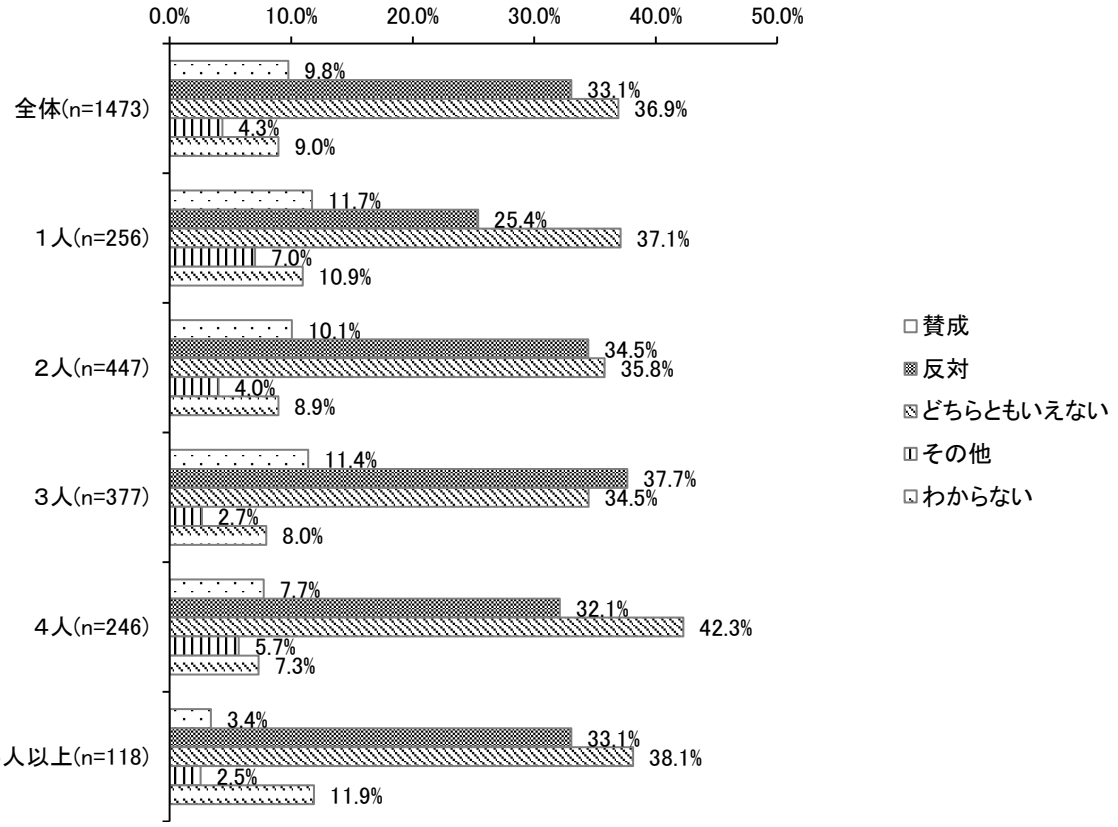
年代別



年代別に比較すると、「反対」と回答した年代は、「40 歳代」が 40.3%で最も高く、次いで「20 歳代」が 40.0%、「30 歳代」が 39.8%と続いている。また、「どちらともいえない」と回答した年代は、「50 歳代」が 42.6%で最も高く、次いで「60 歳代」が 38.7%、「70 歳以上」が 35.2%となった。

20 歳代から 40 歳代で、「反対」が最も高い理由は、「小さい子供がいる家庭では、おむつなどごみの量も多くなるため不公平」、「保育料などの支出もあり、経済的に余裕がない」など、特に子育て世帯にとって負担になるようだ。

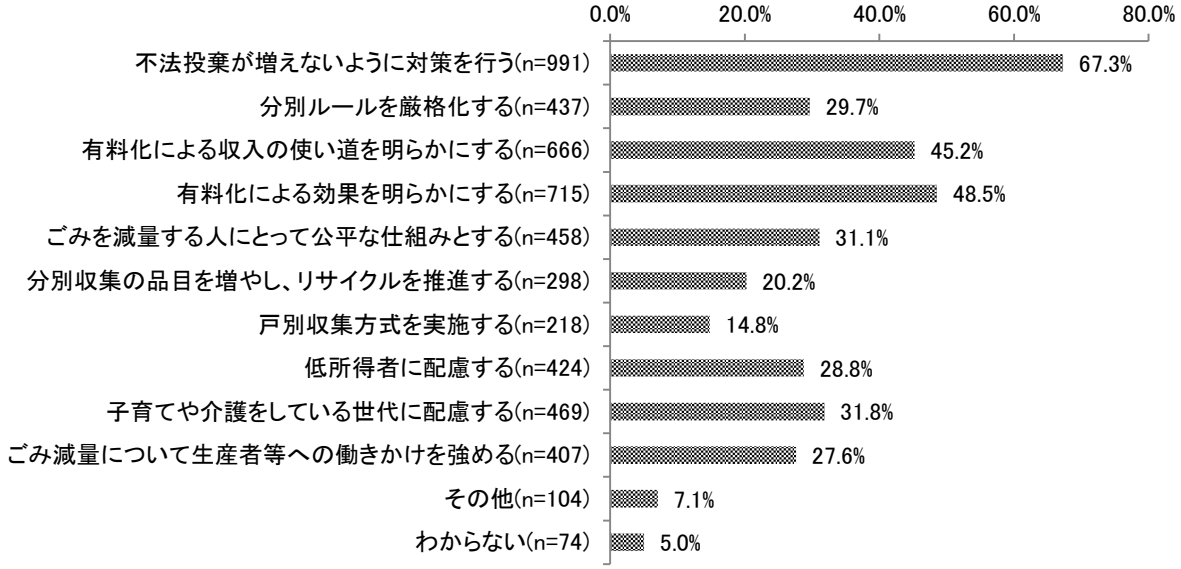
同居人数別



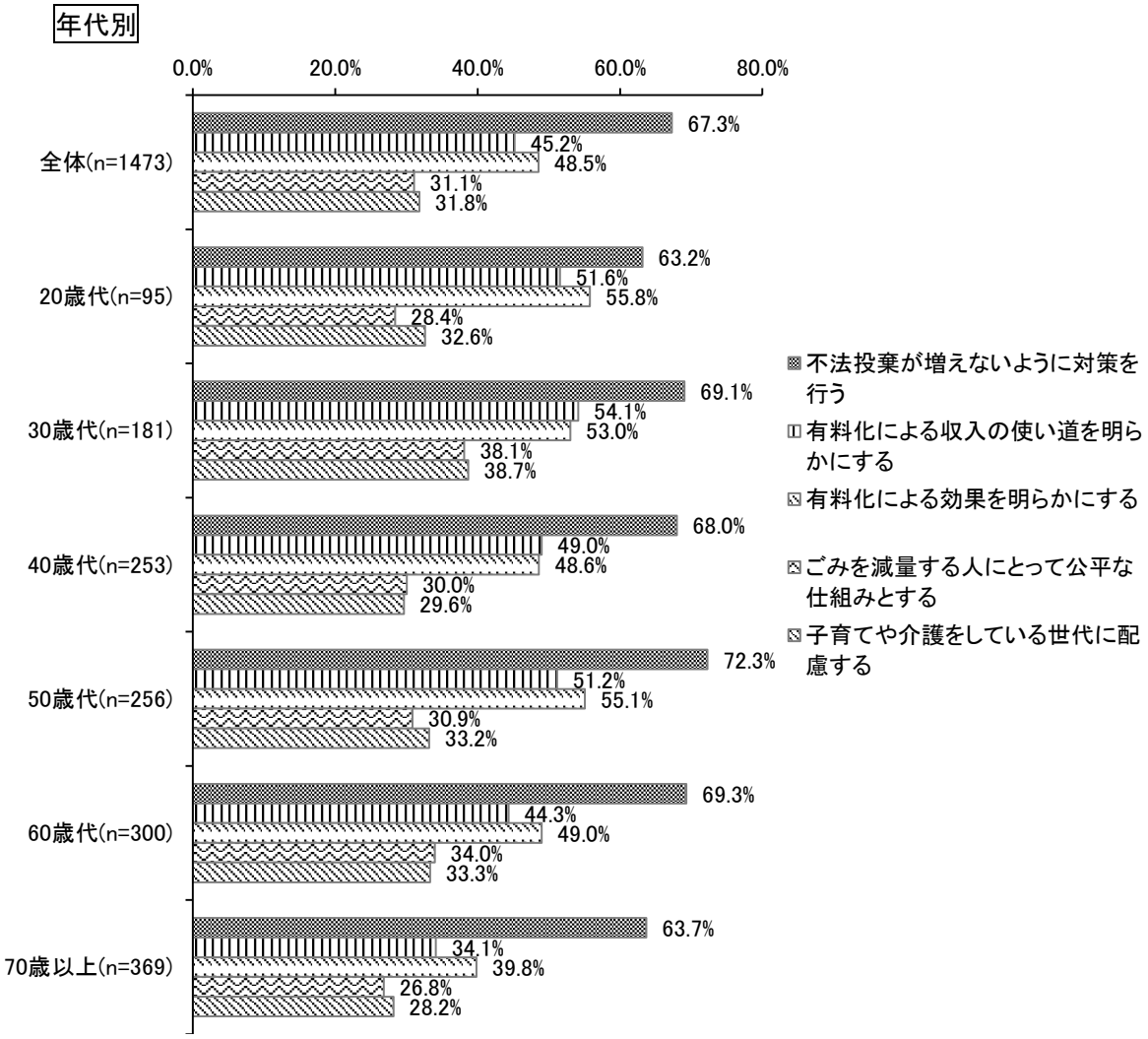
同居人数別に比較すると、「賛成」と回答したのは、「１人」世帯が 11.7%で最も高く、「５人以上」が 3.4%で最も低い。また、同居人数が２人以上の世帯では、「反対」が 30.0%を超えている。

２人以上の世帯で「反対」が多い理由は、人数が多い世帯ほど、ごみの量も多くなるためであると推察される。

問 25　仮に横浜市で、資源物以外の燃やすごみや燃えないごみの有料化制度を導入するとしたら、あなたはどのような点に配慮すべきだと思いますか。○はいくつでも。(n=1,473)

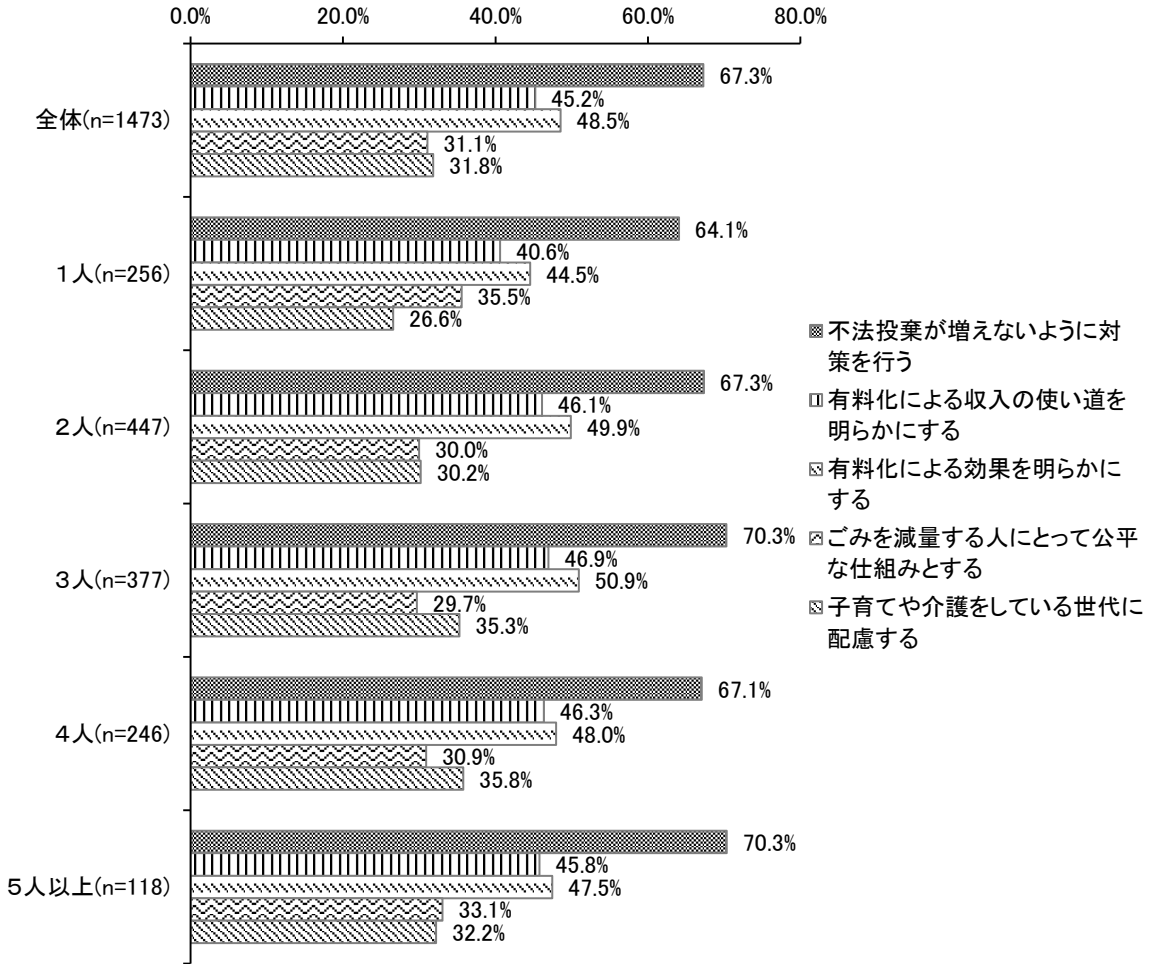


「不法投棄が増えないように対策を行う」が 67.3%で最も高く、次いで「有料化による効果を明らかにする」が 48.5%、「有料化による収入の使い道を明らかにする」が 45.2%と続いている。



年代別に比較すると、いずれの年代でも「不法投棄が増えないように対策を行う」が最も高く、「50 歳代」で 72.3%、次いで「60 歳代」で 69.3%、「30 歳代」で 69.1%という結果になった。

同居人数別



同居人数別に比較すると、「子育てや介護をしている世代に配慮する」では、「４人」世帯が 35.8%で最も高く、「３人」世帯の 35.3%と続き、最も比率が低かったのは、「１人」世帯の 26.6%だった。

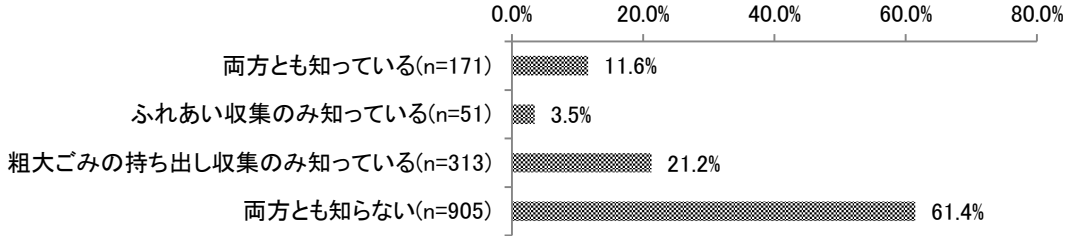
■考察　ごみ処理費用のあり方について

ごみ処理の費用の負担に差がない事について、「どちらともいえない」という人が最も多く、判断に迷っていると考えられる。しかし、不公平だと思っている人ほど、ごみ処理の有料化に賛成する傾向が顕著に表れている。その一方で、同居人数が多い世帯や、子育て世帯など、必然的にごみの量が多くなる世帯では、ごみの有料化に反対している。その他、「敷地内に街路樹や隣家の植物の葉が落ちてくる」など、外部からの影響によってごみが増加するケースもある。仮に有料化を実施する場合、家族構成や生活スタイルによっても排出されるごみの量は変動するため、多くの市民に納得してもらえる仕組みを模索する必要があるのではないか。

また、ごみの処理費用を有料化した場合、不法投棄対策及び、有料化による効果を公開することが求められる。有料化したことで、実際に不法投棄が増加した自治体もあるため、慎重な判断が必要になる。

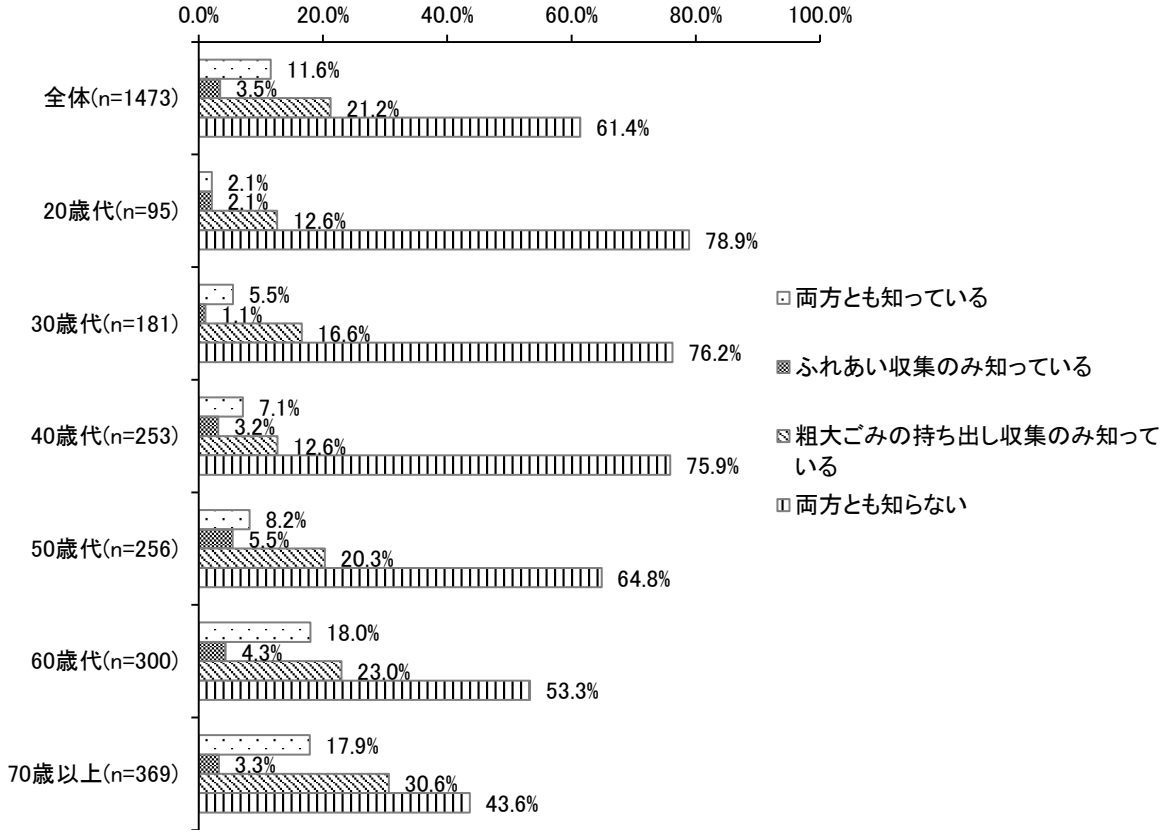
2.9　ふれあい収集などのサービスについて

問 26　あなたは、ふれあい収集や粗大ごみの持ち出し収集などのサービスを知っていますか。○はひとつ。(n=1,473)



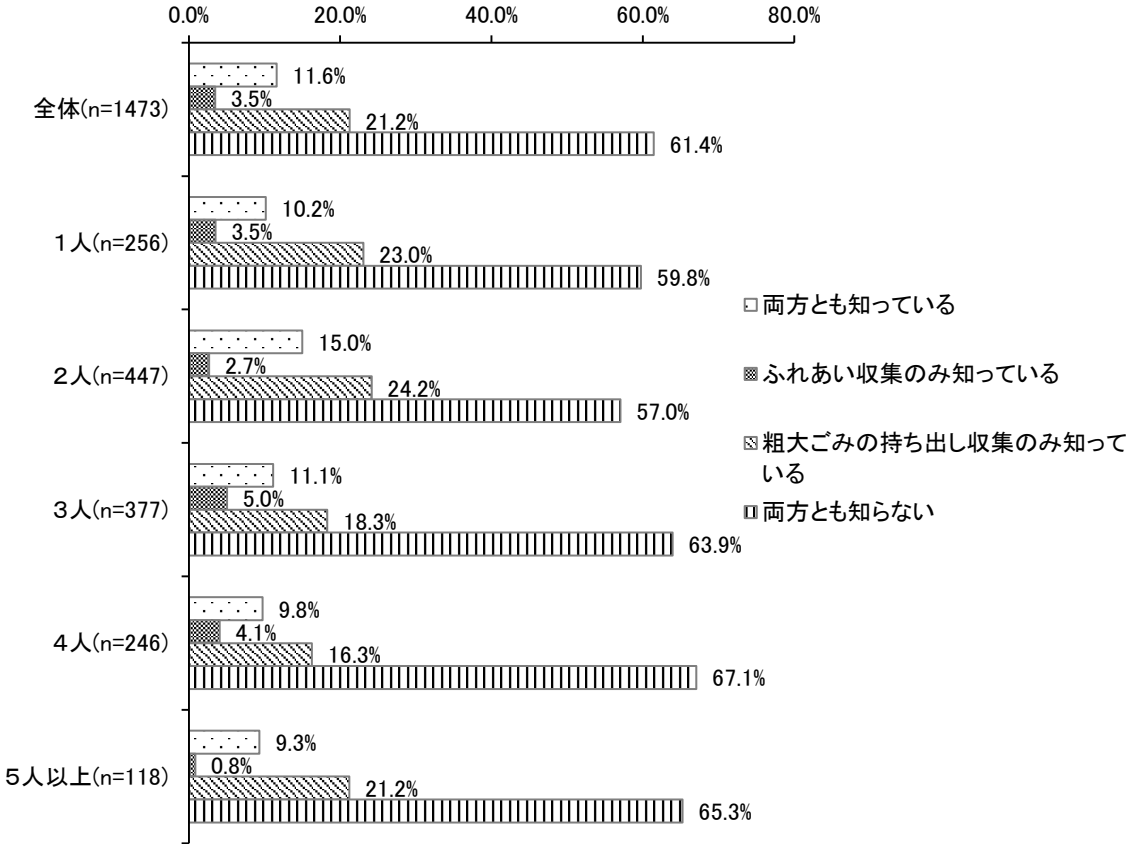
「両方とも知らない」が 61.4%で最も高く、「粗大ごみの持ち出し収集のみ知っている」が 21.2%、「両方とも知っている」が 11.6%と続いている。

年代別



年代別に比較すると、「両方とも知らない」と回答した比率は「20 歳代」で 78.9%と最も高く、年代が上がるにつれて低下する傾向がある。また、「粗大ごみの持ち出し収集のみ知っている」と回答した比率は、「70 歳以上」で 30.6%と最も高く、年代が上がるにつれて高くなっていることから、年代が上の世代は、年代が下の世代に比べて粗大ごみの持ち出し収集について認知していることが分かる。

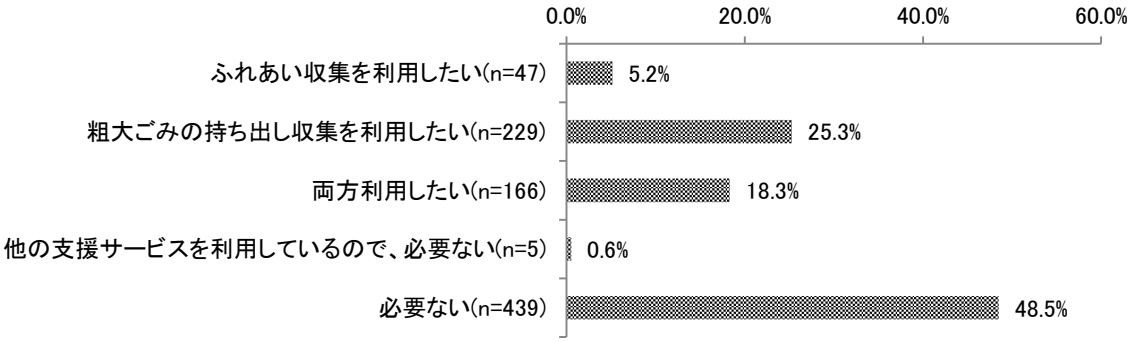
同居人数別



同居人数別に比較すると、「両方とも知らない」と回答したのは、「４人」世帯が 67.1％で最も高く、次いで「５人以上」世帯が 65.3％、「３人」世帯が 63.9％という結果になった。

これらの結果から、年代や同居人数にかかわらず、ふれあい収集の認知度が低いことが分かった。粗大ごみの持ち出し収集と併せて、特に、年代が下の世代の１人世帯を中心に周知する必要がある。

問 27　問 26 で 4 を選択した方におたずねします。条件に合えば、あなたはふれあい収集や粗大ごみの持ち出し収集などのサービスを利用したいですか。○はひとつ。(N=905)



「必要ない」が 48.5%で最も高く、次いで「粗大ごみの持ち出し収集を利用したい」が 25.3%、「両方利用したい」が 18.3%と続いている。

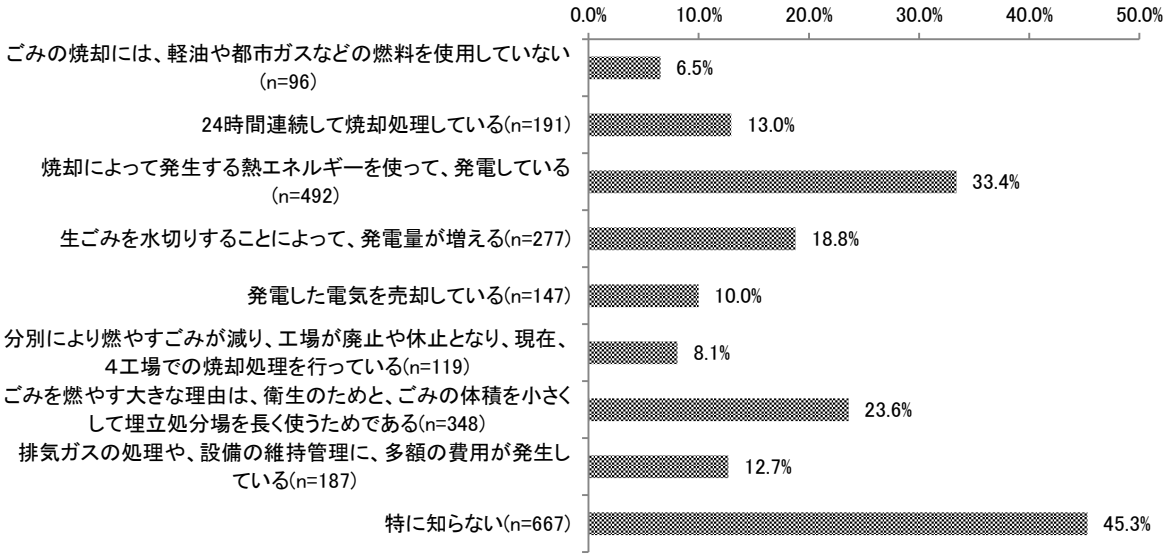
いずれかの収集サービス及び、「両方利用したい」の累積構成比は 48.8%となることから、現状のサービス対象者だけではなく、乳幼児がいる世帯など、さらに多くの市民を対象とすることを検討する必要がある。

■考察　ふれあい収集などのサービスについて

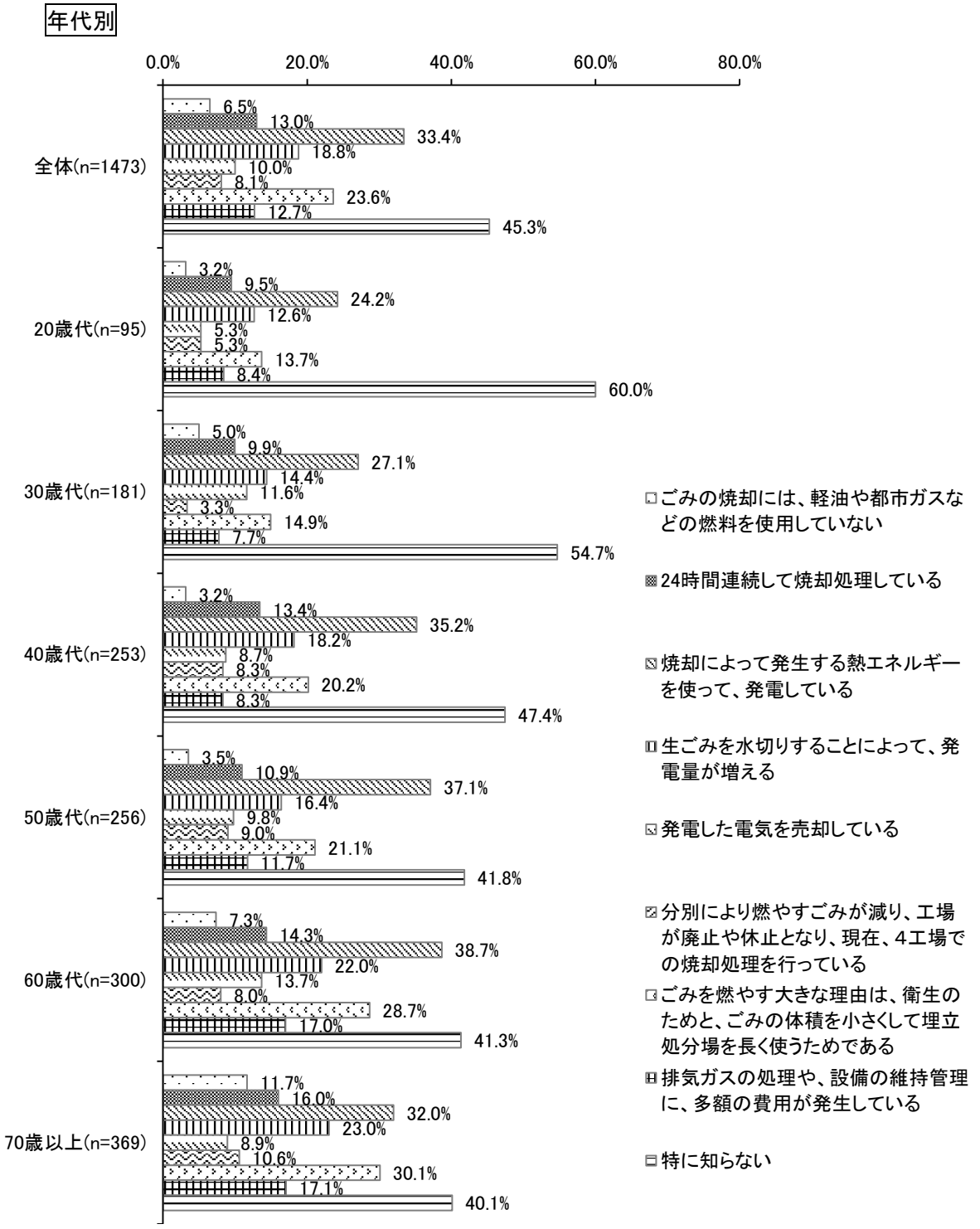
ふれあい収集、粗大ごみの持ち出し収集のいずれも認知度が低く、年代が下がるほど「両方とも知らない」の比率が高くなっている。しかし、「両方とも知らない」と回答した人で、いずれかの収集サービス及び、「両方利用したい」と考えている人が 48.8%いることから、広く存在を知らせることで利用者が増えるのではないか。

2.10　焼却工場について

問 28　あなたは、市内にあるごみ焼却工場について知っていることはどれですか。○はいくつでも。(n=1,473)



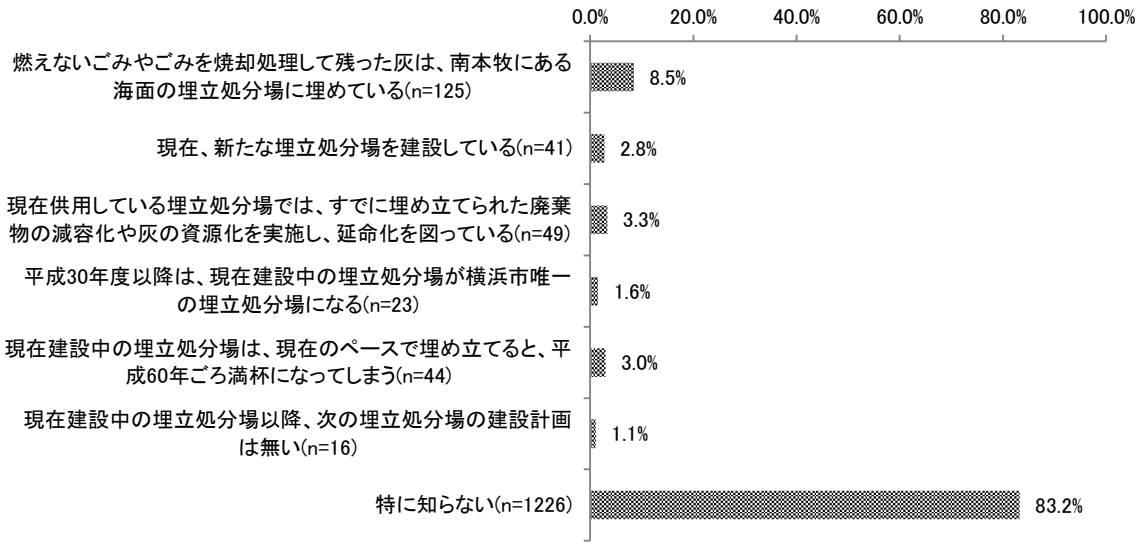
「特に知らない」が 45.3%で最も高く、次いで「焼却によって発生する熱エネルギーを使って発電している」が 33.4%、「ごみを燃やす大きな理由は、衛生のためと、ごみの体積を小さくして埋立処分場を長く使うためである」が 23.6%と続いている。



年代別に比較すると、「特に知らない」の比率は、「20 歳代」が 60.0%で最も高く、次いで「30 歳代」が 54.7%、「40 歳代」が 47.4%と続いている。また、「焼却によって発生する熱エネルギーを使って、発電している」、「発電した電気を売却している」及び、「特に知らない」以外の全ての項目で「70 歳以上」の比率が最も高く、「焼却によって発生する熱エネルギーを使って、発電している」、「発電した電気を売却している」では「60 歳代」の比率が最も高いため、年代が上がるほどごみ焼却工場について知っていることが分かる。

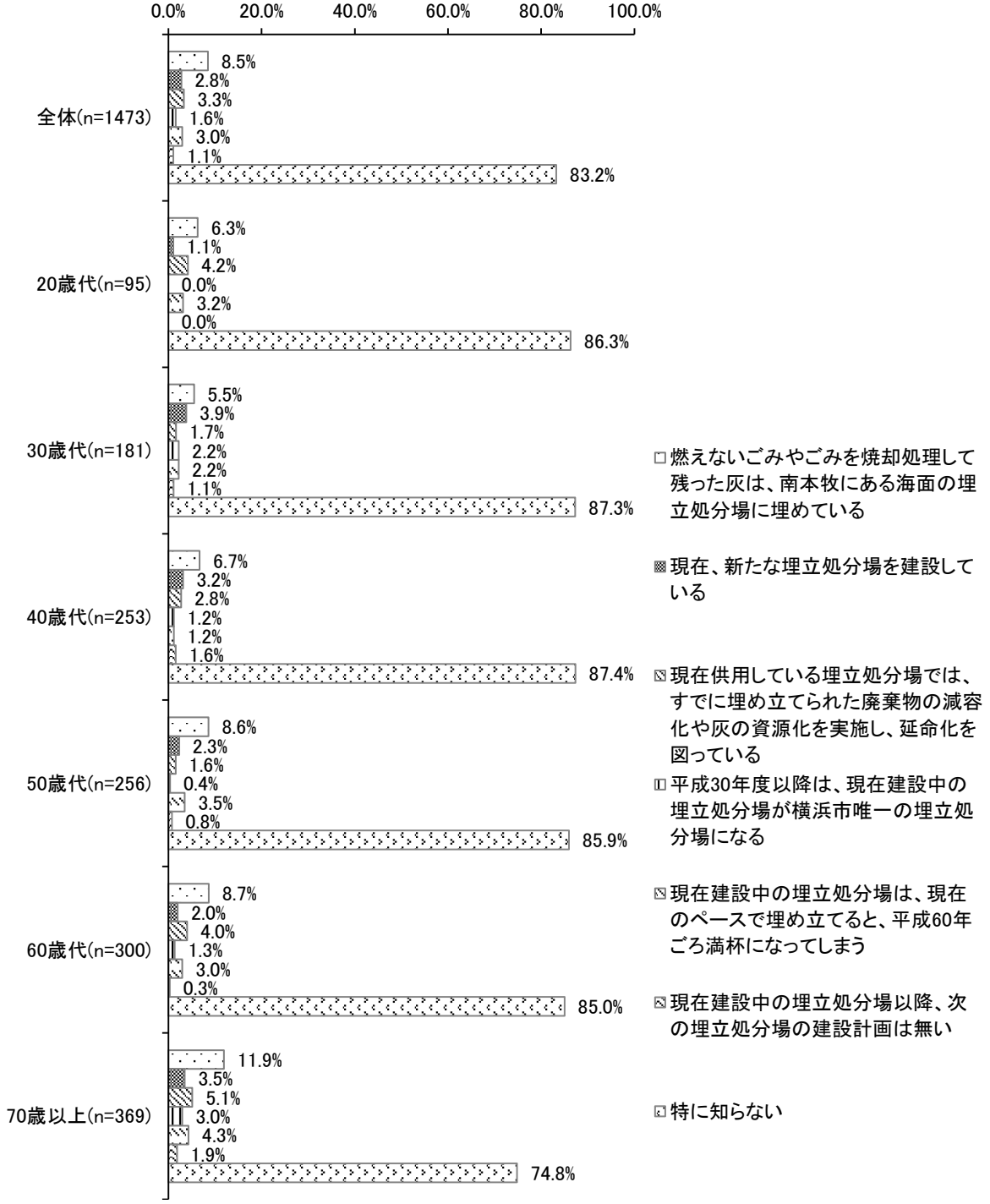
2.11　埋立処分場について

問 29　あなたは、市内にある埋立処分場について知っていることはどれですか。○はいくつでも。(n=1,473)



「特に知らない」が 83.2%で最も高く、「燃えないごみやごみを焼却処理して残った灰は、南本牧にある海面の埋立処分場に埋めている」が 8.5%と続いており、埋立処分場についての周知が課題であると考えられる。

年代別



年代別に比較すると、「特に知らない」と回答した比率は、「70 歳以上」以外の全ての年代で 80.0%を超えており、「70 歳以上」でも 74.8%となっていることから、年代に関わらず認知度が低いことが分かる。

■考察　焼却工場・埋立処分場について

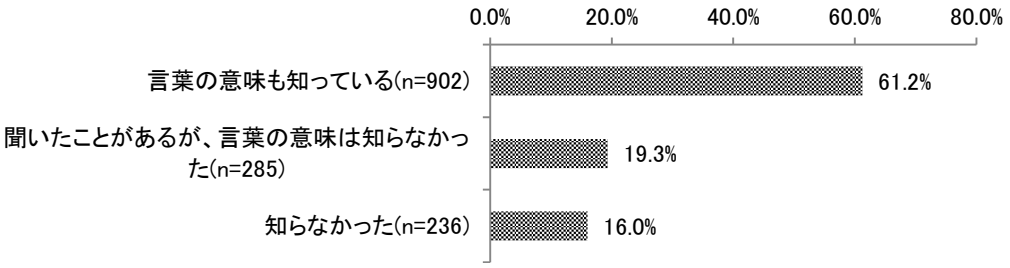
ごみ焼却工場及び、埋立処分場のいずれも認知度が低く、特に、埋立処分場は、83.2%が「特に知らない」という結果になった。

ごみ焼却工場及び、埋立処分場については、問 37 の自由意見記述において、「焼却工場や埋立処分場については全然知らないので、横浜の広報で特集するなど、周知してほしい」、「埋立処分場の深刻な現状をもっと市民に知らせるべき」という意見があった。

また、そのような施設を見学する機会が欲しいという声もあり、周知には行政だけではなく、地元企業や学校とも連携した取組が必要かもしれない。

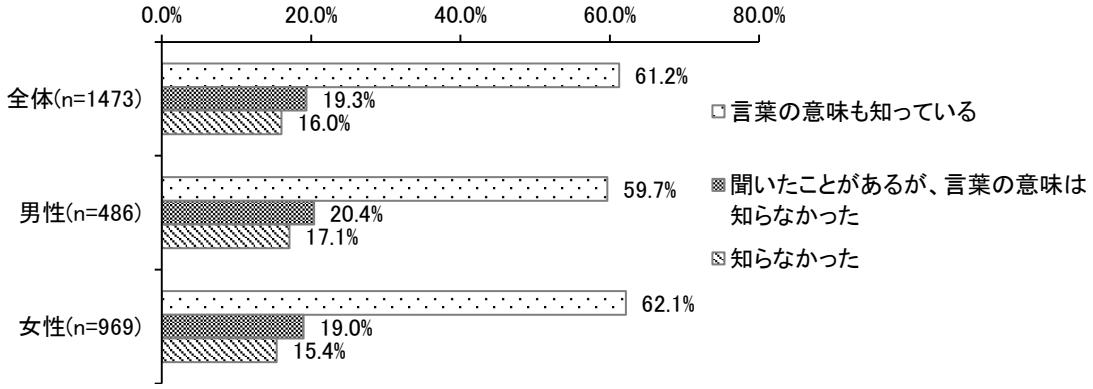
2.12　食品ロス・生ごみの削減について

問 30　あなたは「食品ロス」という言葉を知っていますか。○はひとつ。(n=1,473)

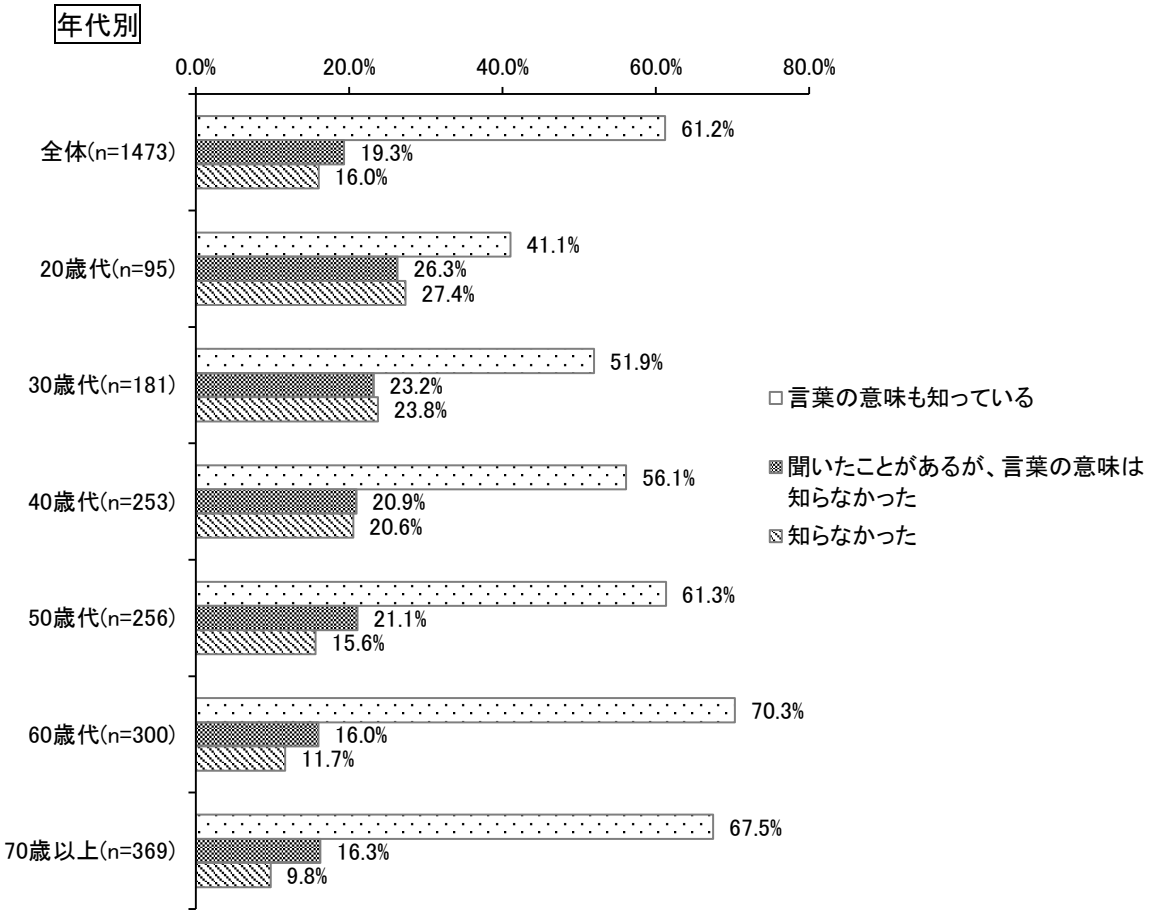


「言葉の意味も知っている」が 61.2%で最も高く、「聞いたことがあるが、言葉の意味は知らなかった」が 19.3%、「知らなかった」が 16.0%と続いている。

男女別



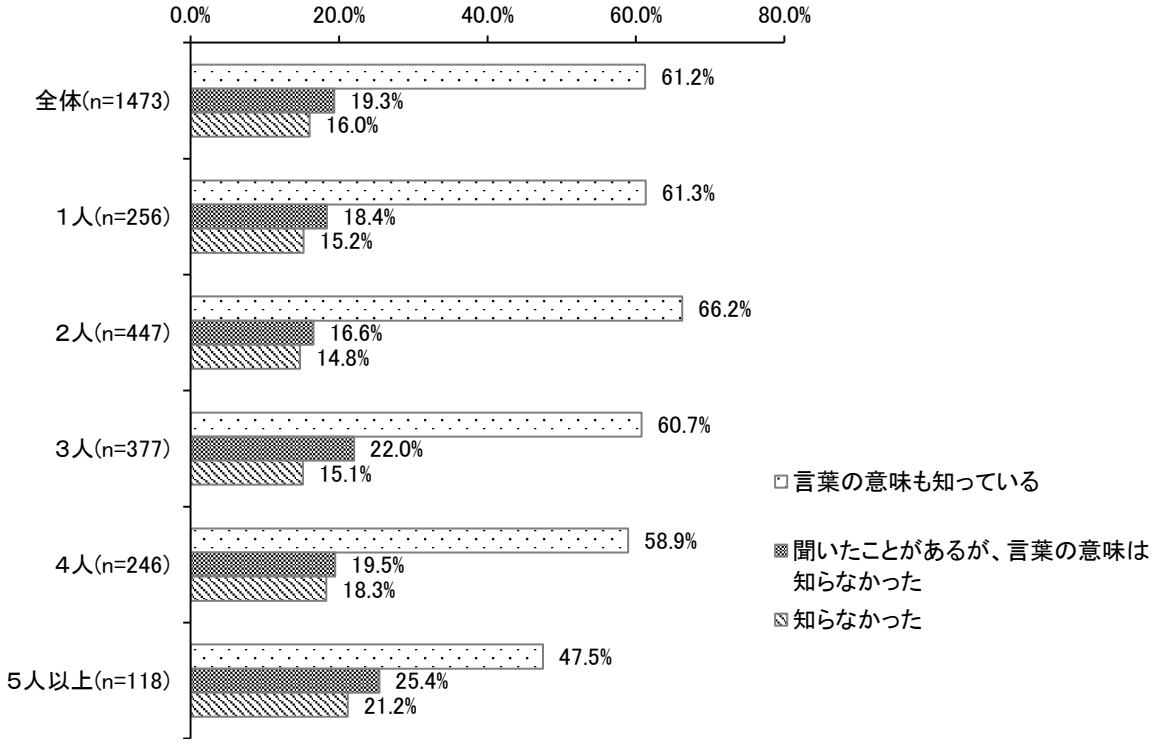
男女別の比較では、回答に大きな差は見られなかったことから、性別に関係なく認知されていることが分かる。



年代別に比較すると、「言葉の意味も知っている」と回答したのは「60 歳代」が 70.3%で最も高く、次いで「70 歳以上」で 67.5%、「50 歳代」で 61.3%と続いている。また、「聞いたことはあるが、言葉の意味は知らなかった」と「知らなかった」の累積構成比は、「20 歳代」が 53.7%で最も高く、年代が下がるにつれて認知度が低下する傾向がある。

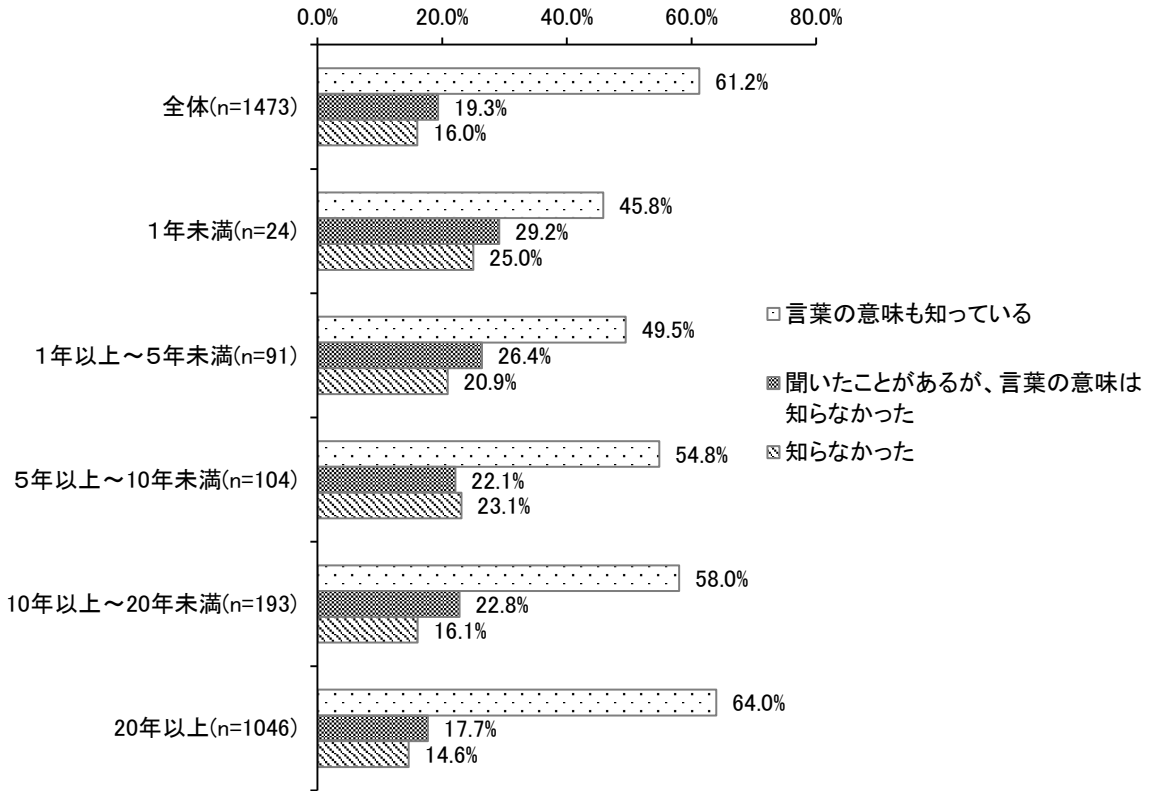
以上の比較結果から、年代が上がるほど「食品ロス」の言葉の意味まで知っていることが分かる。

同居人数別



同居人数別に比較したところ、「言葉の意味も知っている」と回答したのは、「２人」世帯が 66.2%で最も高く、次いで「１人」世帯が 61.3%、「３人」世帯が 60.7%と続いている。

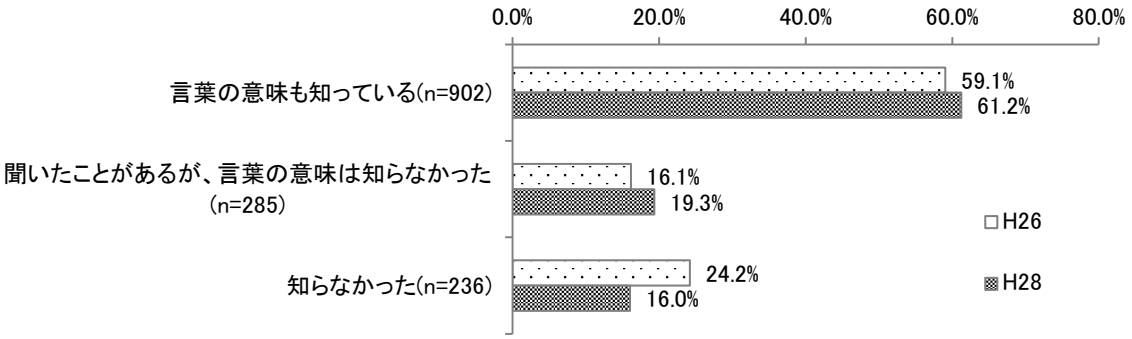
居住年数別



「言葉の意味も知っている」では「20 年以上」が 64.0%で最も高く、居住年数が短くなるにつれて言葉の意味も知っている比率は低下している。また、「知らなかった」では「1 年未満」が 25.0%で最も高く、居住年数が長くなるにつれて「知らなかった」の比率は低下している。

以上の比較結果は、横浜市では食品ロスの削減を重点事業としており、市民が「食品ロス」という言葉に触れる機会が多いためであると考えられる。

経年変化



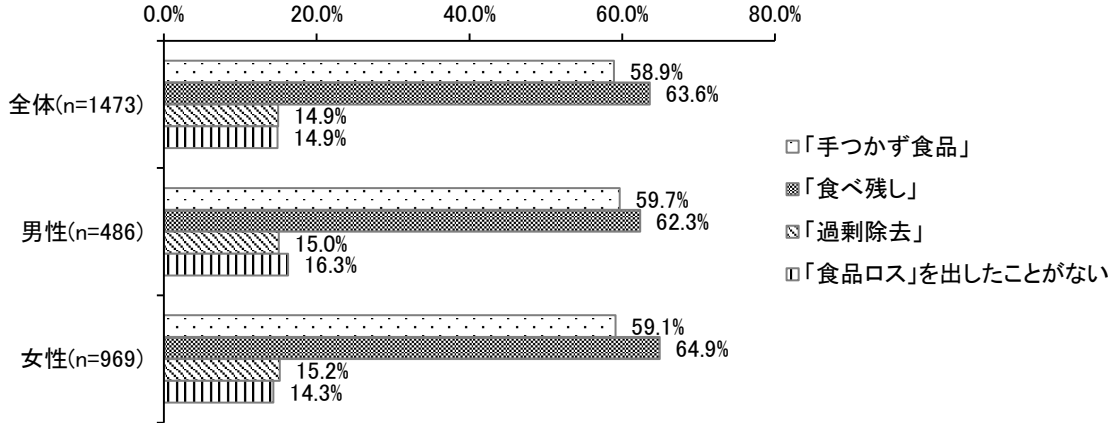
平成 26 年度調査との比較では、「言葉の意味も知っている」、「聞いたことはあるが、言葉の意味は知らなかった」は、上昇しており、「知らなかった」は低下している。

継続した食品ロス削減の取組により、「食品ロス」という言葉が市民に浸透してきていることが分かる。

問 31　あなたやあなたの家族が出したことのある「食品ロス」はどれですか。○はいくつでも。
(n=1,473)

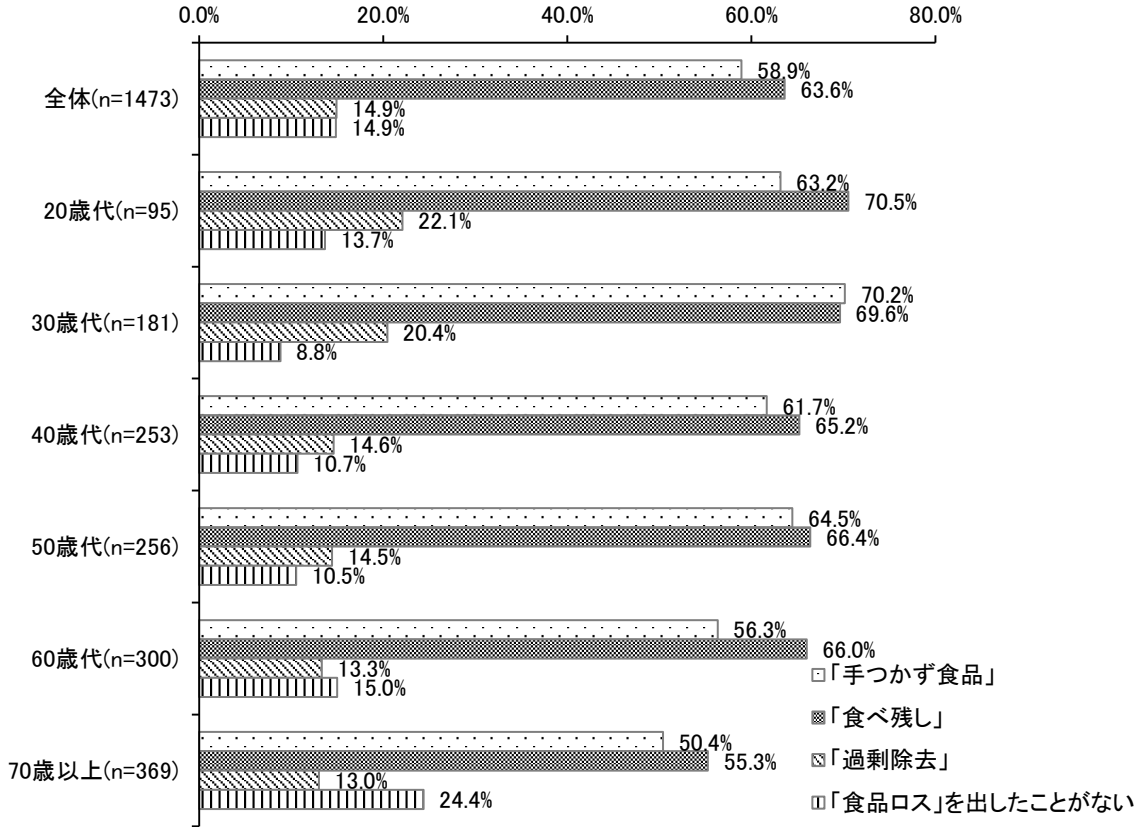
「食べ残し」が 63.6%で最も高く、次いで「手つかず食品」が 58.9%、「過剰除去」、「『食品ロス』を出したことがない」が同率で 14.9%と続いている。

男女別



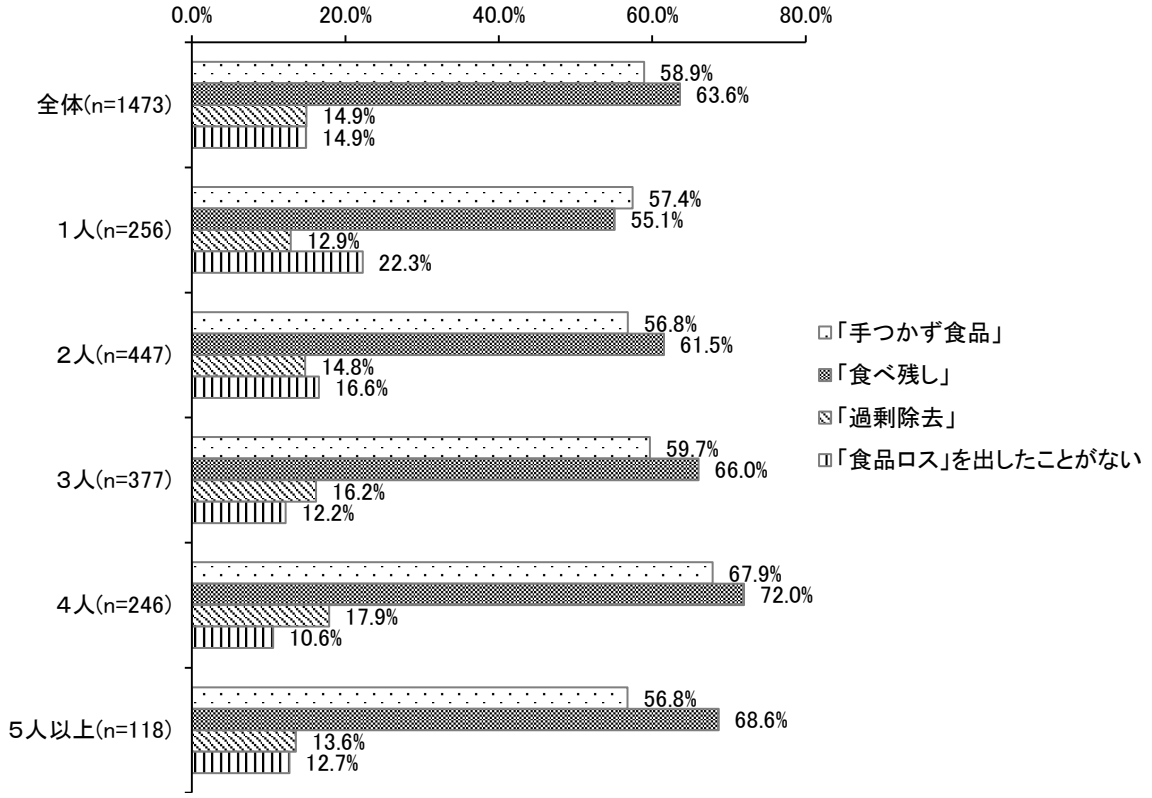
男女別に比較したところ、回答に大きな差は見られなかった。

年代別



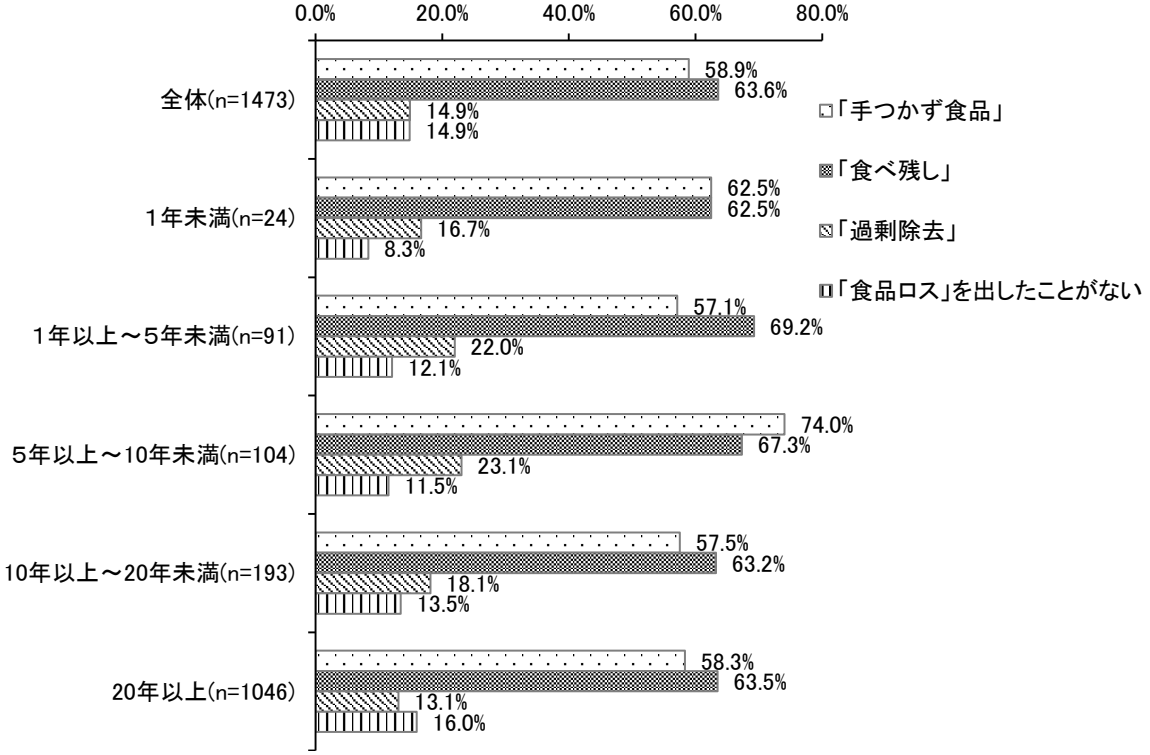
年代別に比較すると、出したことのある食品ロスは、「手つかず食品」、「食べ残し」、「過剰除去」では、「70 歳以上」が最も低く、「『食品ロス』を出したことがない」では、「70 歳以上」が 24.4%で最も高かった。以上の比較結果から、年代が上の世代ほど、食品ロスの発生量が少ないことが分かる。

同居人数別



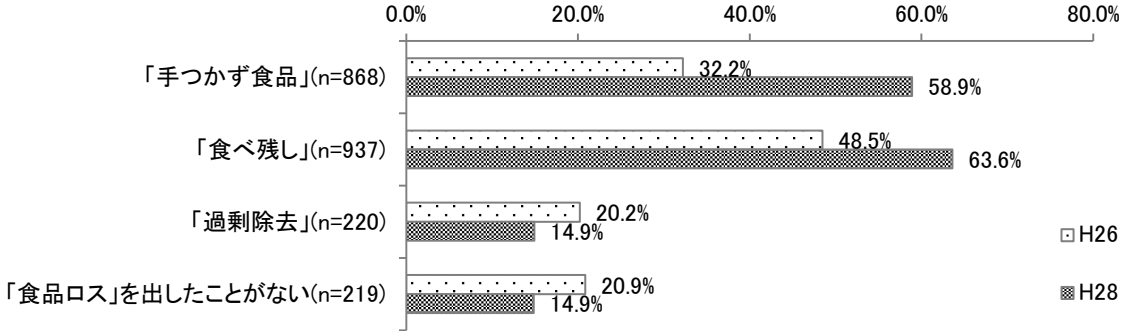
同居人数別に比較すると、「食べ残し」と回答した比率は、「４人」世帯が 72.0％で最も高く、次いで「５人以上」世帯が 68.6％、「３人」世帯が 66.0％と続いている。また、「『食品ロス』を出したことがない」は、「１人」世帯が 22.3％で最も高く、「４人」世帯が 10.6％で最も低いことから、同居人数が多くなるほど発生する食品ロスも増加する傾向にあることが分かる。また、「手つかず食品」が「食べ残し」を上回ったのは、１人世帯のみだった。

居住年数別



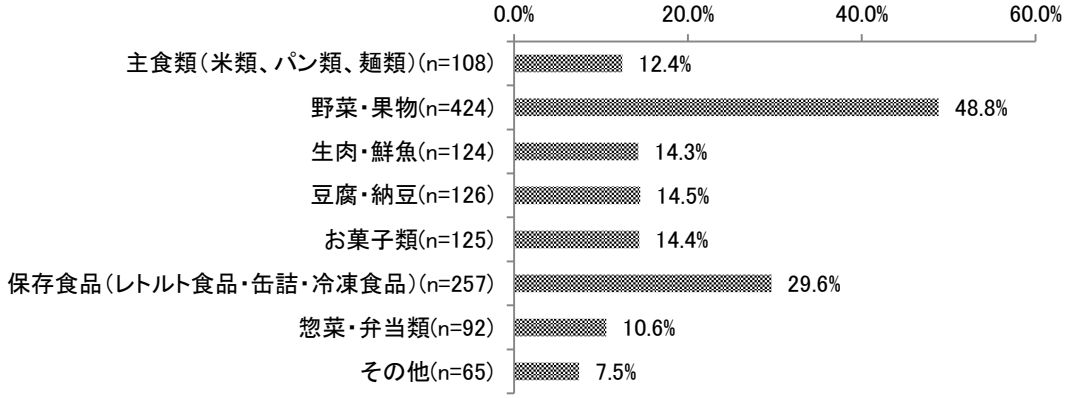
居住年数別に比較すると、「手つかず食品」と回答した人は、「５年以上～10 年未満」が 74.0%で最も高く、次いで「１年未満」が 62.5%、「20 年以上」が 58.3%と続いており、「手つかず食品」が「食べ残し」を上回ったのは、「５年以上～10 年未満」のみだった。

経年変化



平成 26 年度調査との比較では、「手つかず食品」、「食べ残し」の比率は大幅に増加しているが、「過剰除去」、「『食品ロス』を出したことがない」は低下した。

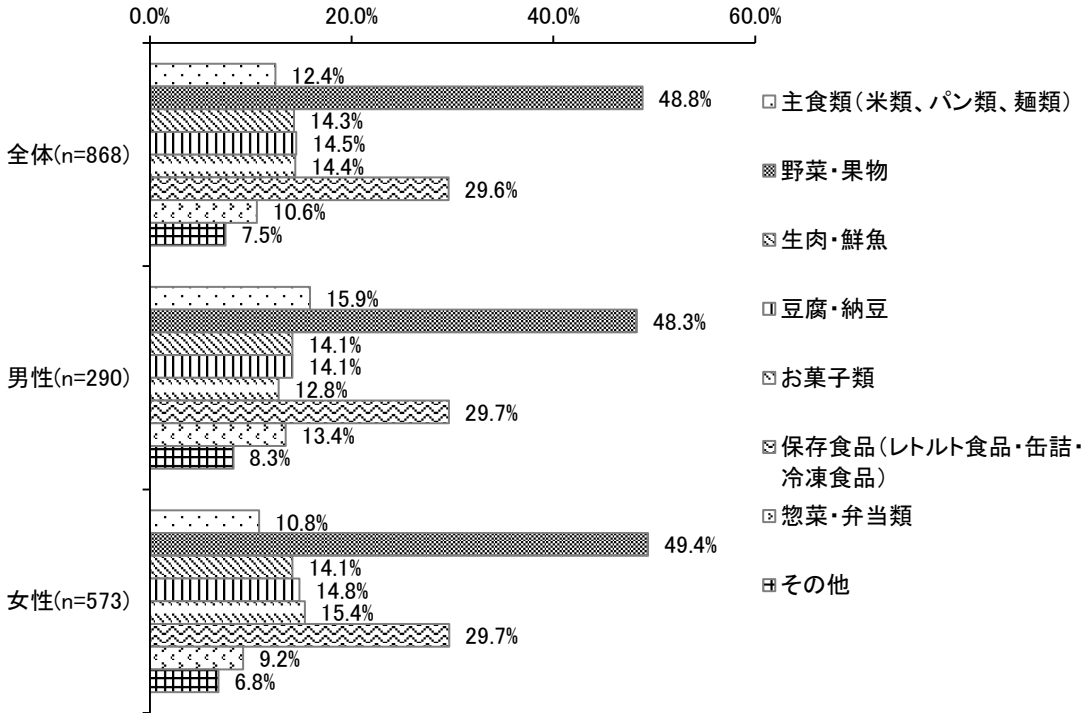
問 32　問 31 で 1 を選択した方におたずねします。あなたやあなたの家族がよく出してしまう「手つかず食品」はどれですか。○はいくつでも。(N=868)



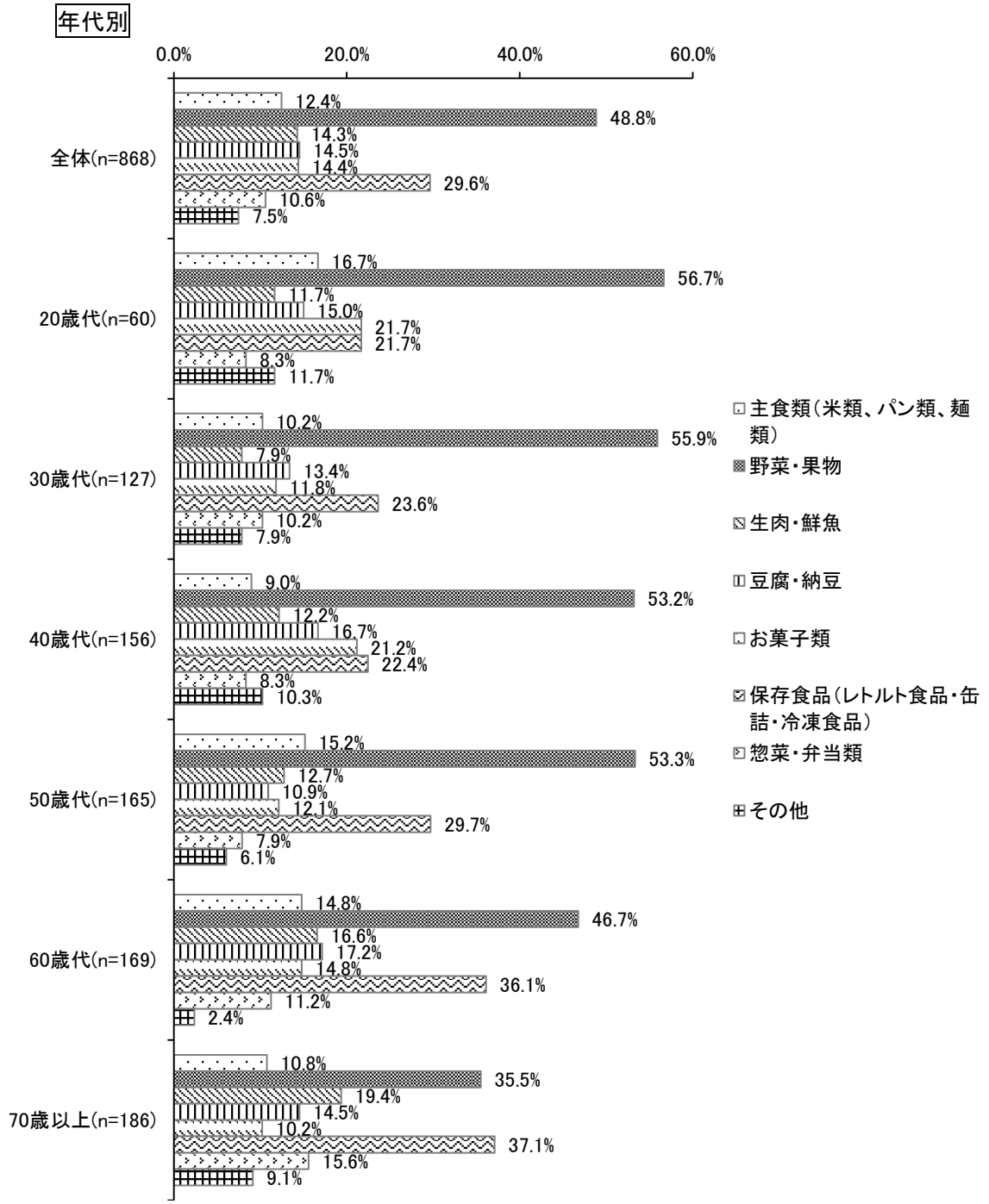
「野菜・果物」が 48.8%で最も高く、次いで「保存食品（レトルト食品・缶詰・冷凍食品)」が 29.6%、「豆腐・納豆」が 14.5%と続いている。

また、その他の意見として、「調味料」、「ヨーグルト等の乳製品」などが挙げられた。

男女別



男女別に比較したところ、回答に大きな差は見られなかった。



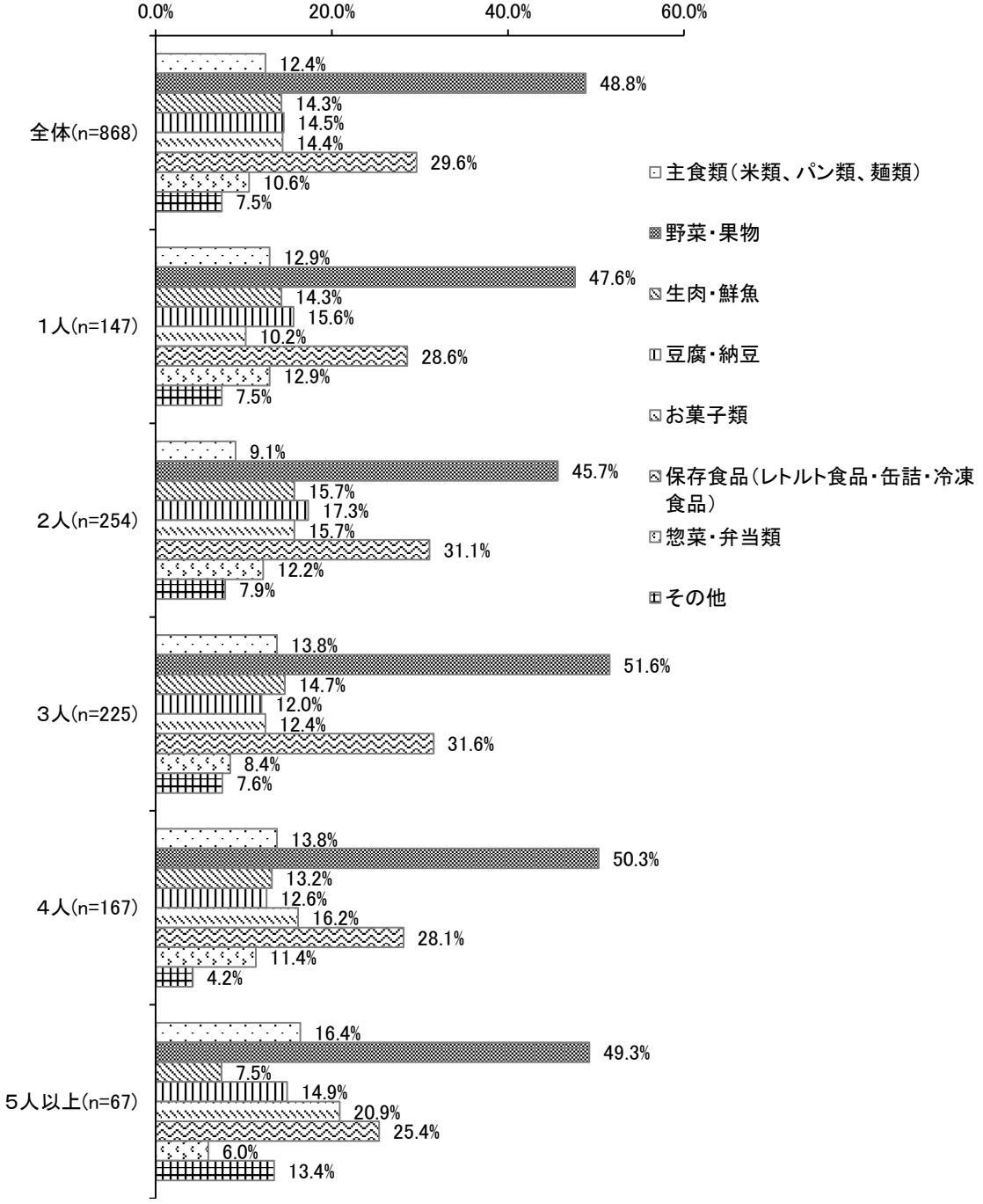
年代別に比較すると、「20 歳代」の 56.7%が「野菜・果物」と回答しており、最も高い。次いで「30 歳代」の 55.9%、「50 歳代」の 53.3%と続いている。

「20 歳代」の 21.7%、「40 歳代」の 21.2%が「お菓子類」と回答しており、他の年代に比べて比率が高い。

「70 歳以上」の 37.1%が「保存食品（レトルト食品・缶詰・冷凍食品)」と回答しており、最も高い。次いで「60 歳代」が 36.1%、「50 歳代」が 29.7%と続いており、年代が上がるにつれて、保存食品の廃棄が増える傾向にある。

70 歳以上は、「野菜・果物」の比率が他の年代に比べて低いが、加工食品が廃棄される比率が高い。しかし、「お菓子類」の比率は 10.2%で最も低くなっている。

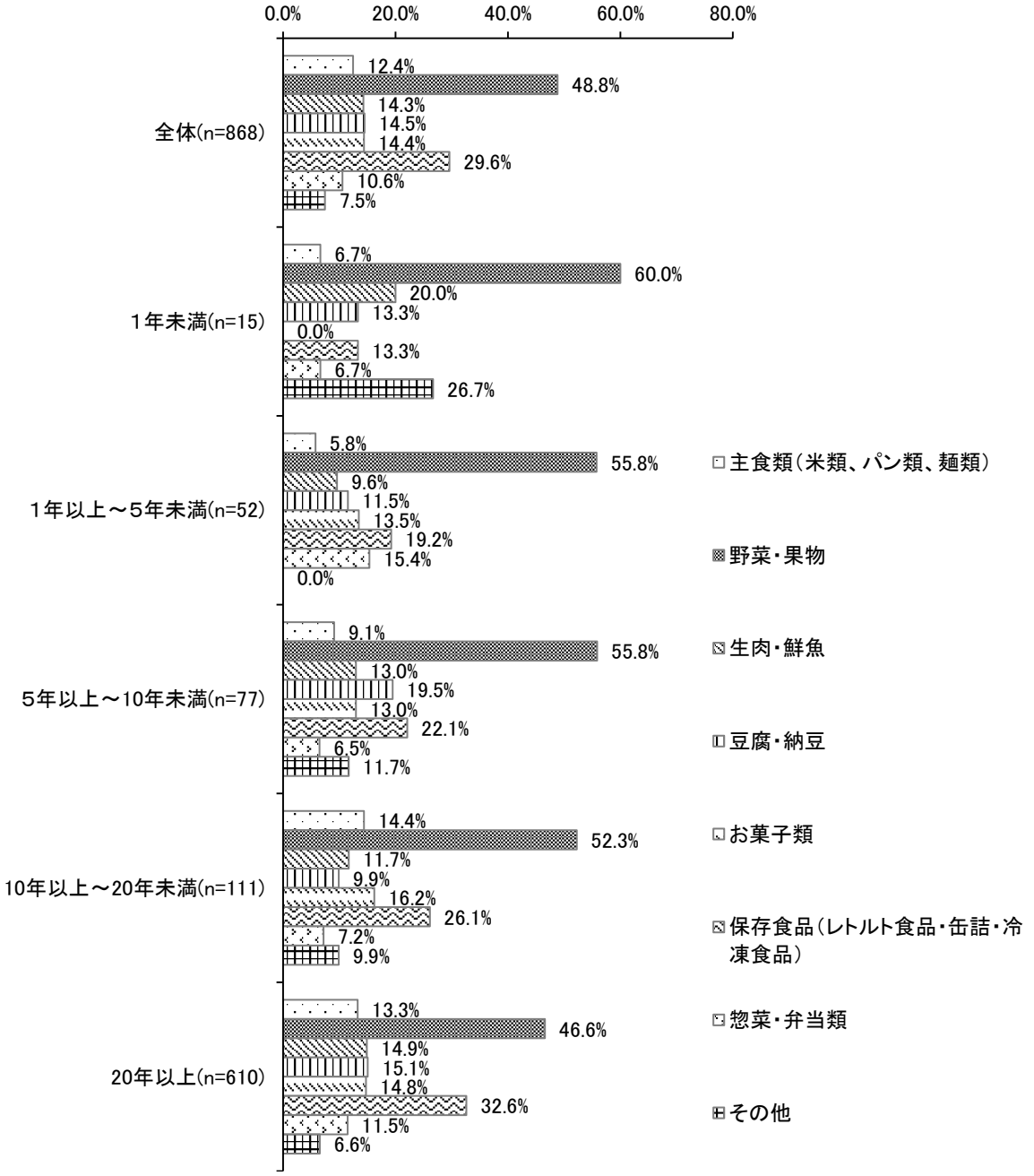
同居人数別



同居人数別に比較すると、「５人以上」世帯では、「生肉・鮮魚」及び、「惣菜・弁当類」の比率が最も低いが、「お菓子類」については、20.9%で最も比率が高い。

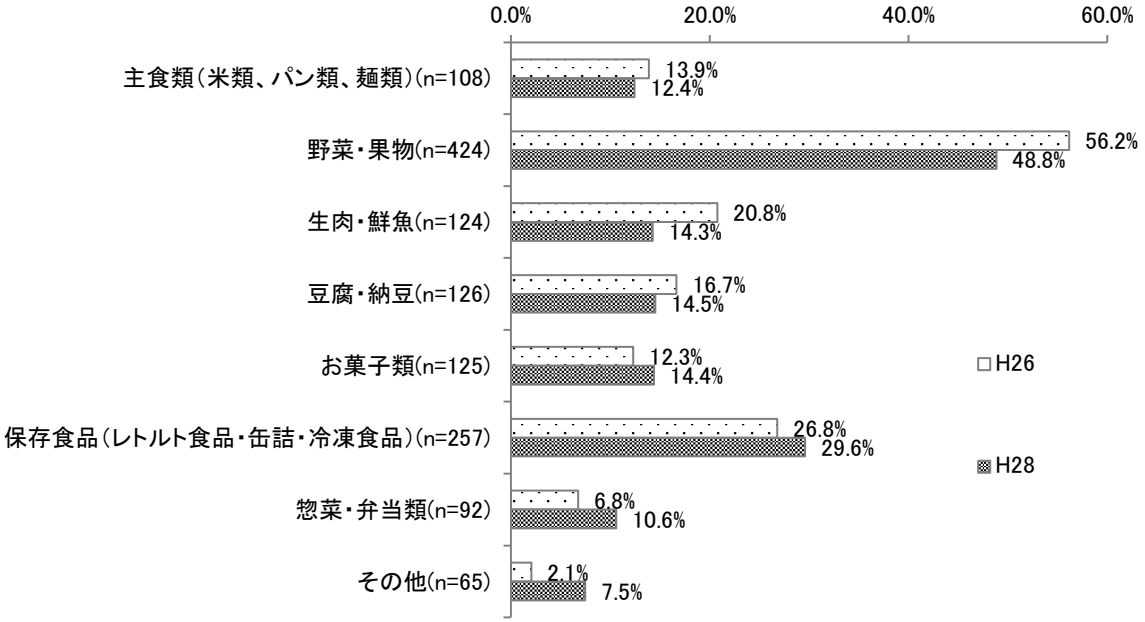
「保存食品（レトルト食品・缶詰・冷凍食品)」については、「３人」世帯の 31.6%が最も高く、次いで「２人」世帯の 31.1%、「１人」世帯の 28.6%と続いている。

居住年数別



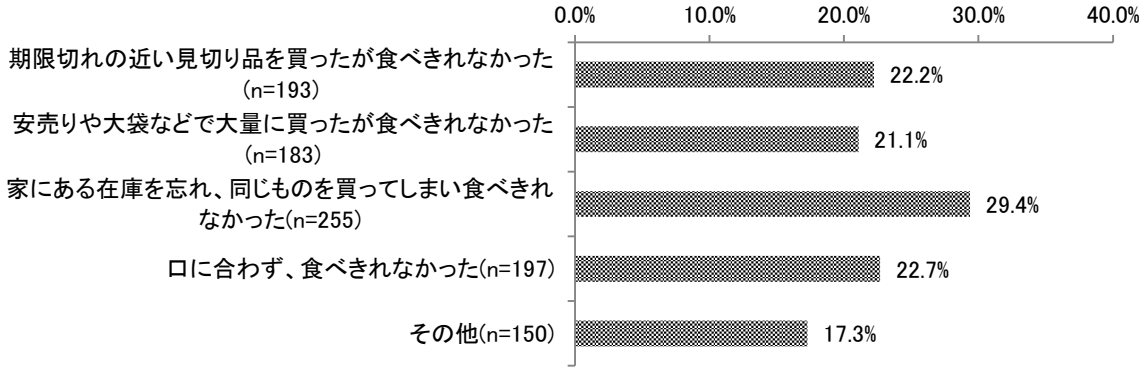
居住年数別に比較すると、「保存食品（レトルト食品・缶詰・冷凍食品)」については、「20 年以上」の 32.6%が最も高く、次いで「10 年以上～20 年未満」の 26.1%、「５年以上～10 年未満」の 22.1%と続き、居住年数が長くなるほど、その比率が高くなる傾向にあることが分かる。

経年変化



平成 26 年度調査との比較では、手つかず食品として廃棄したことがある食品は、「野菜・果物」、「生肉・鮮魚」などの生鮮食品の比率は低下しているが、「お菓子類」、「保存食品」及び、「惣菜・弁当類」などの加工食品の比率は上昇している。これらの原因として、中食産業の拡大や、未婚率の上昇、共働き世帯の増加など、社会的な要因もあると考えられる。

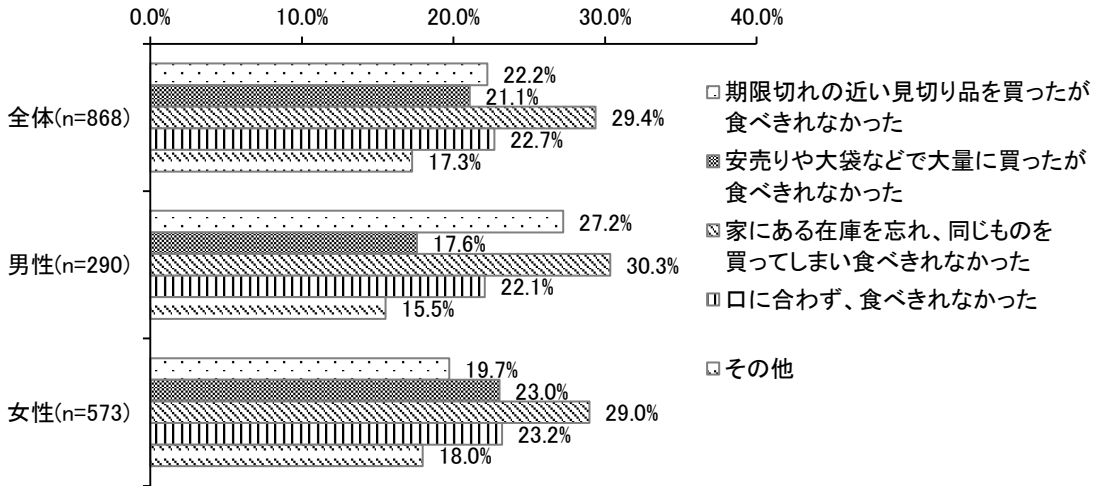
問 33　問 31 で 1 を選択した方におたずねします。あなたやあなたの家族が「手つかず食品」を出してしまう主な理由はどれですか。○はいくつでも。(N=868)



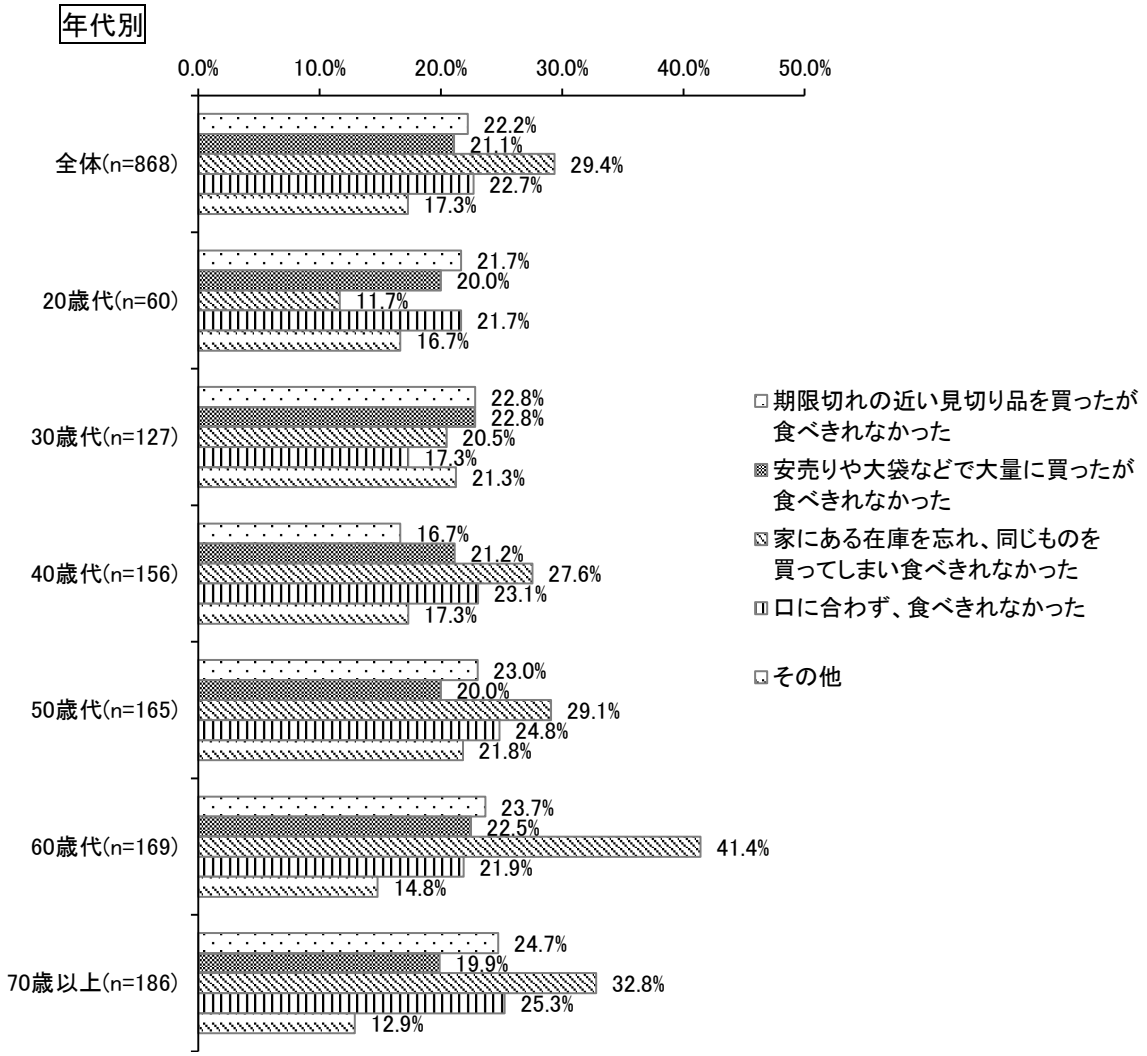
「家にある在庫を忘れ、同じものを買ってしまい食べきれなかった」が 29.4%で最も高く、次いで「口に合わず、食べきれなかった」が 22.7%、「期限切れの近い見切り品を買ったが食べきれなった」が 22.2%と続いている。

また、その他の意見として、「非常食として保存していたが、消費期限が過ぎていた」、「食べるのを忘れていて、消費期限が過ぎていた」、「家で食べることができなかった（仕事、外食など)」、「いただき物を食べなかった」などが挙げられた。

男女別

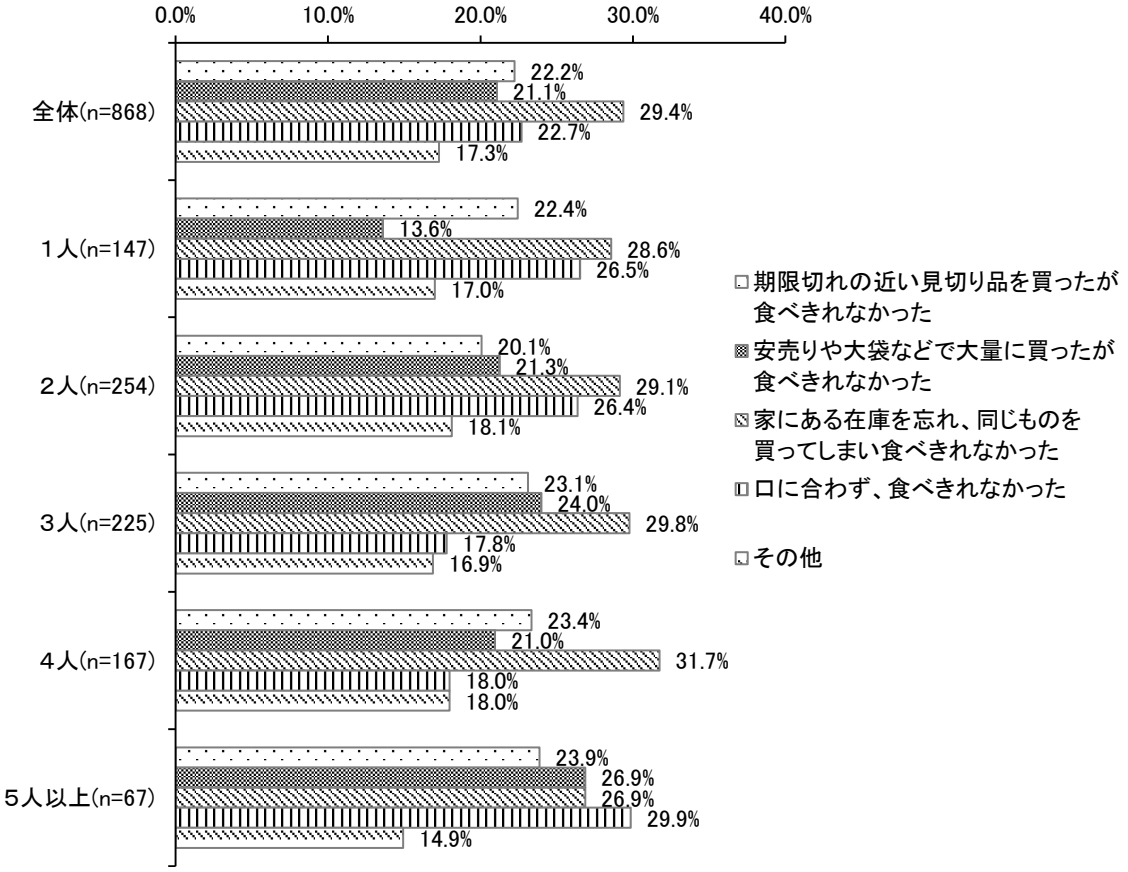


男女別に比較すると、「期限切れの近い見切り品を買ったが食べきれなかった」については、「男性」が 27.2%で、「女性」の 19.7%を上回った。



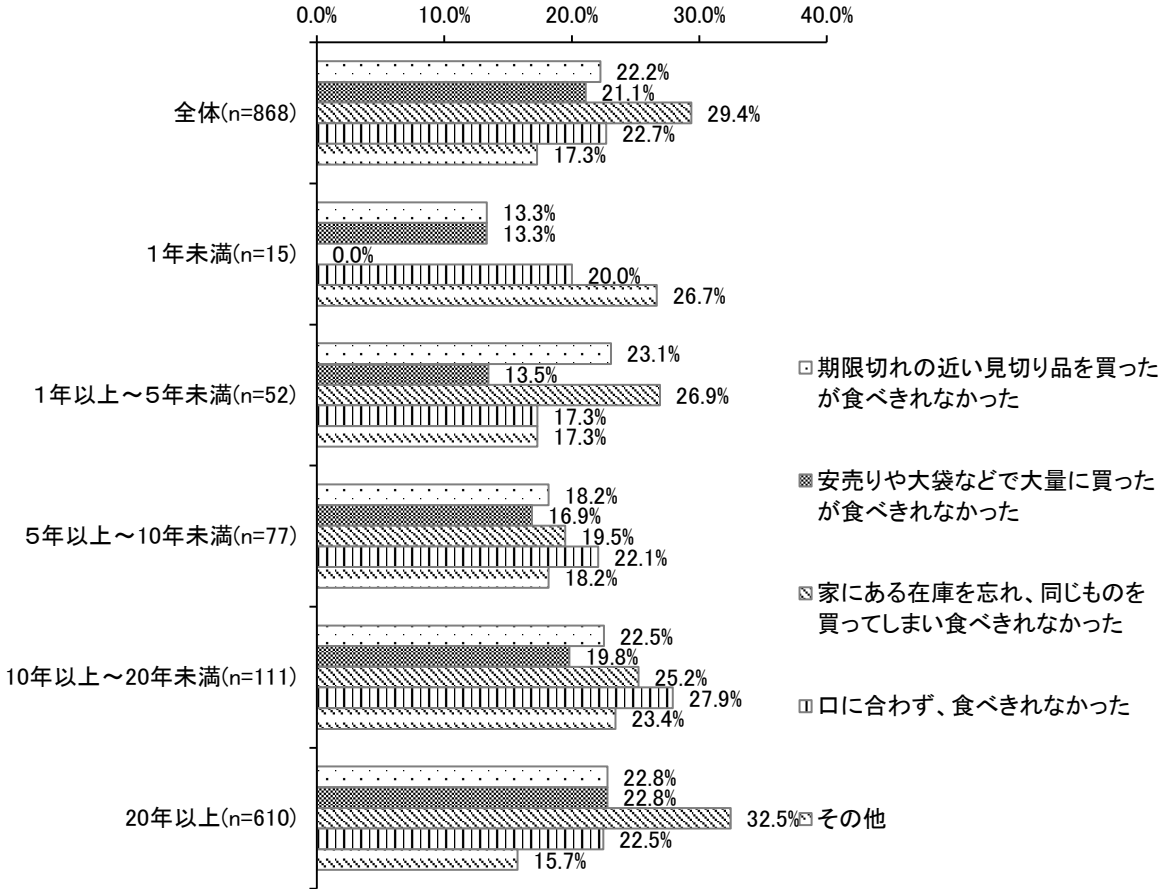
年代別に比較すると、「60 歳代」の 41.4%が、「家にある在庫を忘れ、同じものを買ってしまい食べきれなかった」と回答し、最も比率の低い「20 歳代」とは、29.7%の差があった。年代が上の世代ほど、同じものを買ってしまう傾向にあることが分かる。

同居人数別



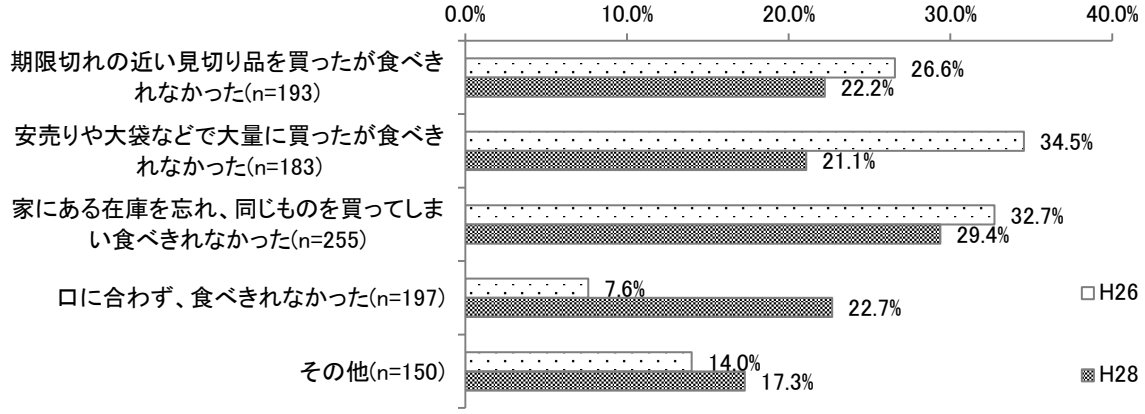
同居人数別に比較すると、「１人」世帯では、「安売りや大袋などで大量に買ったが食べきれなかった」と回答する比率が 13.6%で最も低く、最も高いのは「５人以上」世帯の 26.9%だった。２人以上の世帯では、この比率が 20.0%を超えることから、「１人」世帯は他の世帯に比べて、食品は適量を購入していると考えられる。

居住年数別



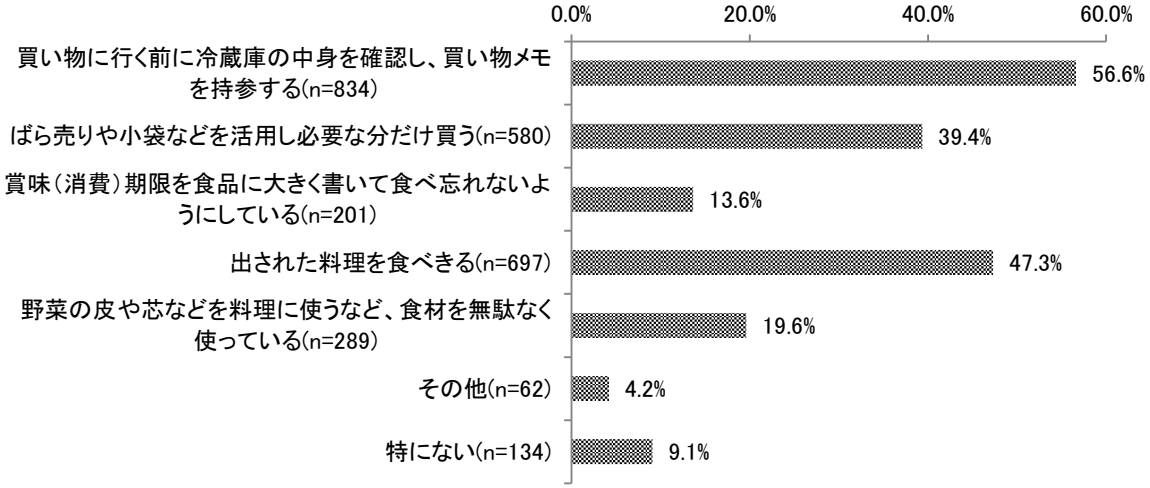
居住年数別に比較すると、「１年未満」では「家にある在庫を忘れ、同じものを買ってしまい食べきれなかった」は 0.0%だったが、「口に合わず、食べきれなかった」は 26.7%で、他の世帯に比べてその比率が高い。

経年変化



平成 26 年度調査との比較では、「口に合わず、食べきれなかった」、「その他」以外の比率は低下しているが、「口に合わず、食べきれなかった」については、15.1%増加している。

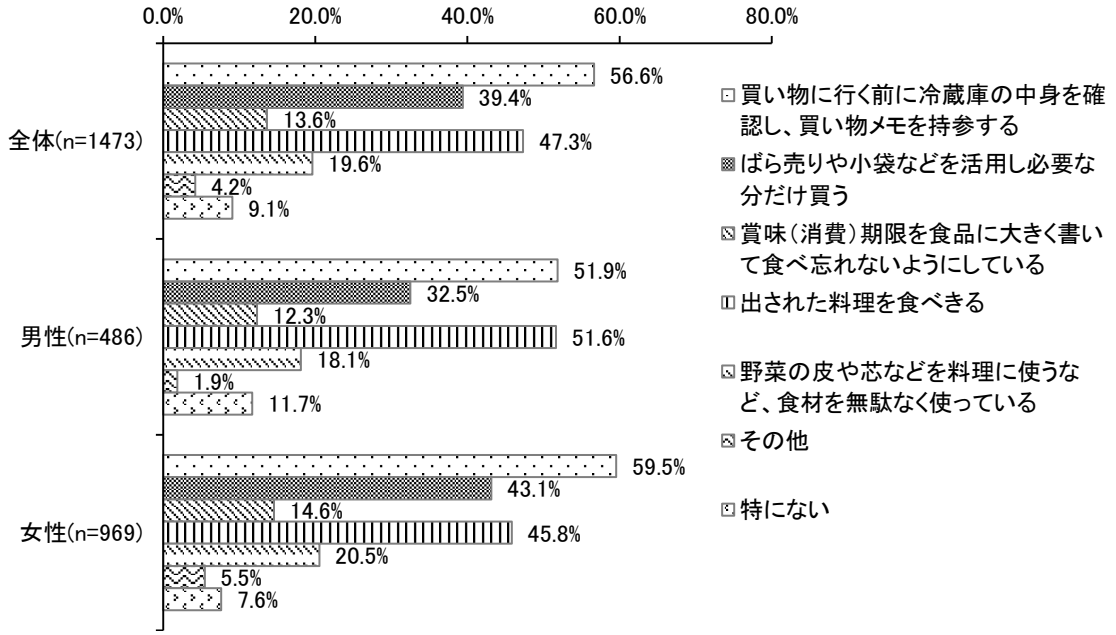
問 34　あなたやあなたの家族が「食品ロス」を出さないために、工夫していることはありますか。○はいくつでも。(n=1,473)



「買い物に行く前に冷蔵庫の中身を確認し、買い物メモを持参する」が 56.6%で最も高く、次いで「出された料理を食べきる」が 47.3%、「ばら売りや小袋などを活用し必要な分だけ買う」が 39.4%と続いている。

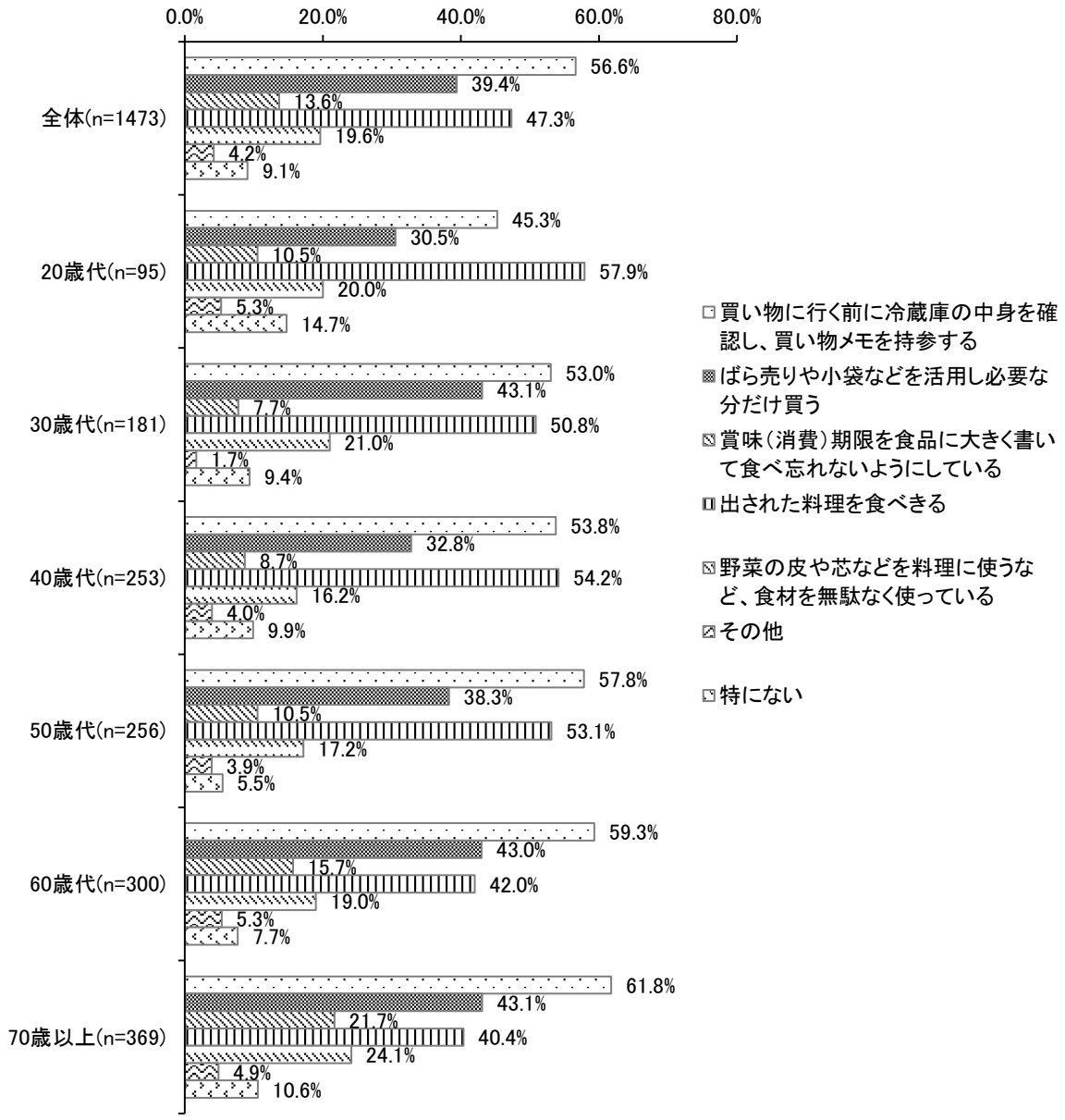
また、その他の意見として、「食品を冷凍して保存する」、「賞味（消費）期限を過ぎていても気にしない」、「料理を作りすぎない」などが挙げられた。

男女別



男女別に比較すると、「出された料理を食べきる」のみ男性が女性を上回ったが、他の項目では、女性の比率が高かった。

年代別

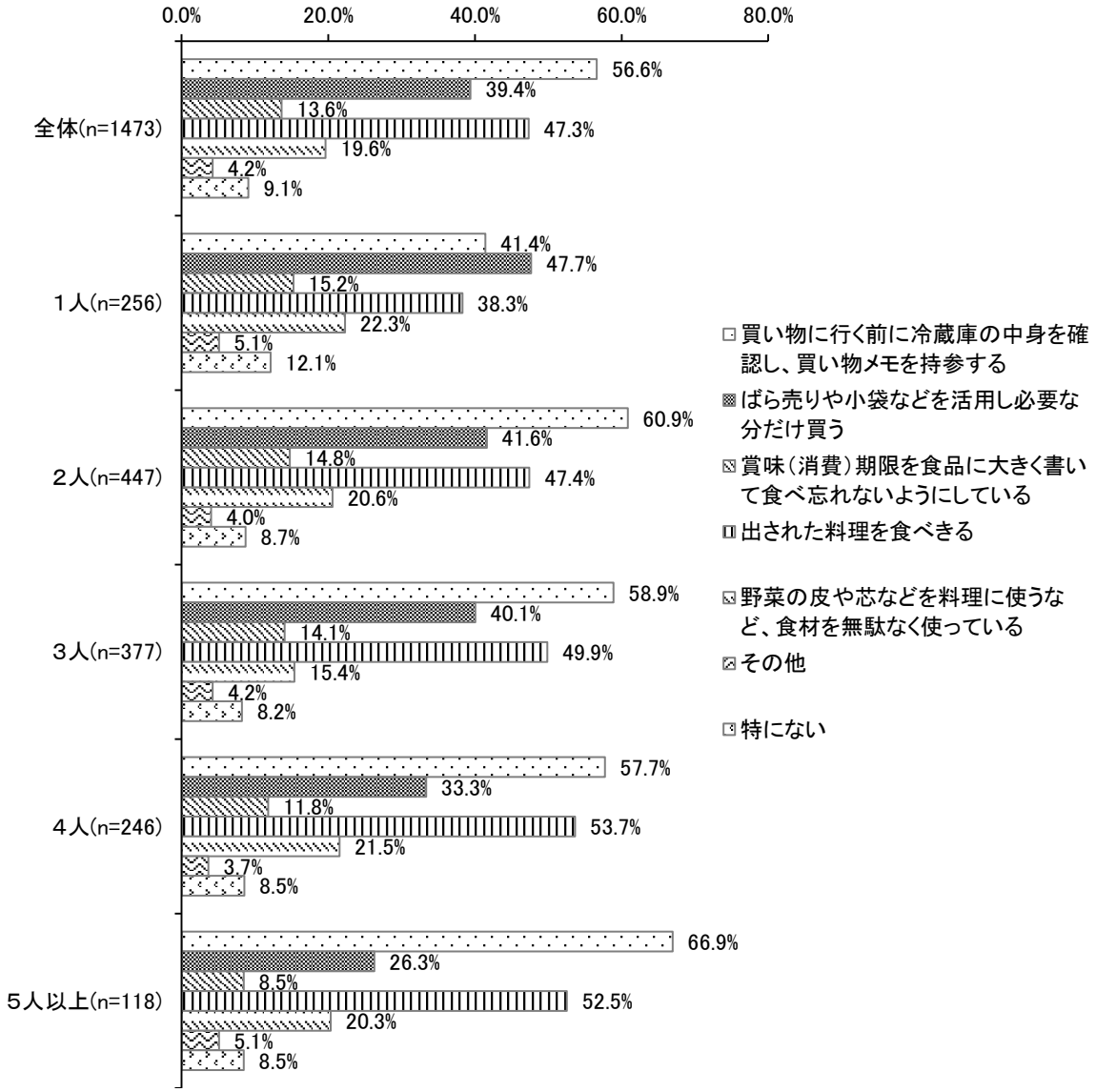


年代別に比較すると、「買い物に行く前に冷蔵庫の中身を確認し、買い物メモを持参する」では、「70 歳以上」の比率が 61.8%で最も高く、年代が下がるにつれて、比率も低下している。

また、「出された料理を食べきる」、「特にない」では、「20 歳代」が最も高くなっている。

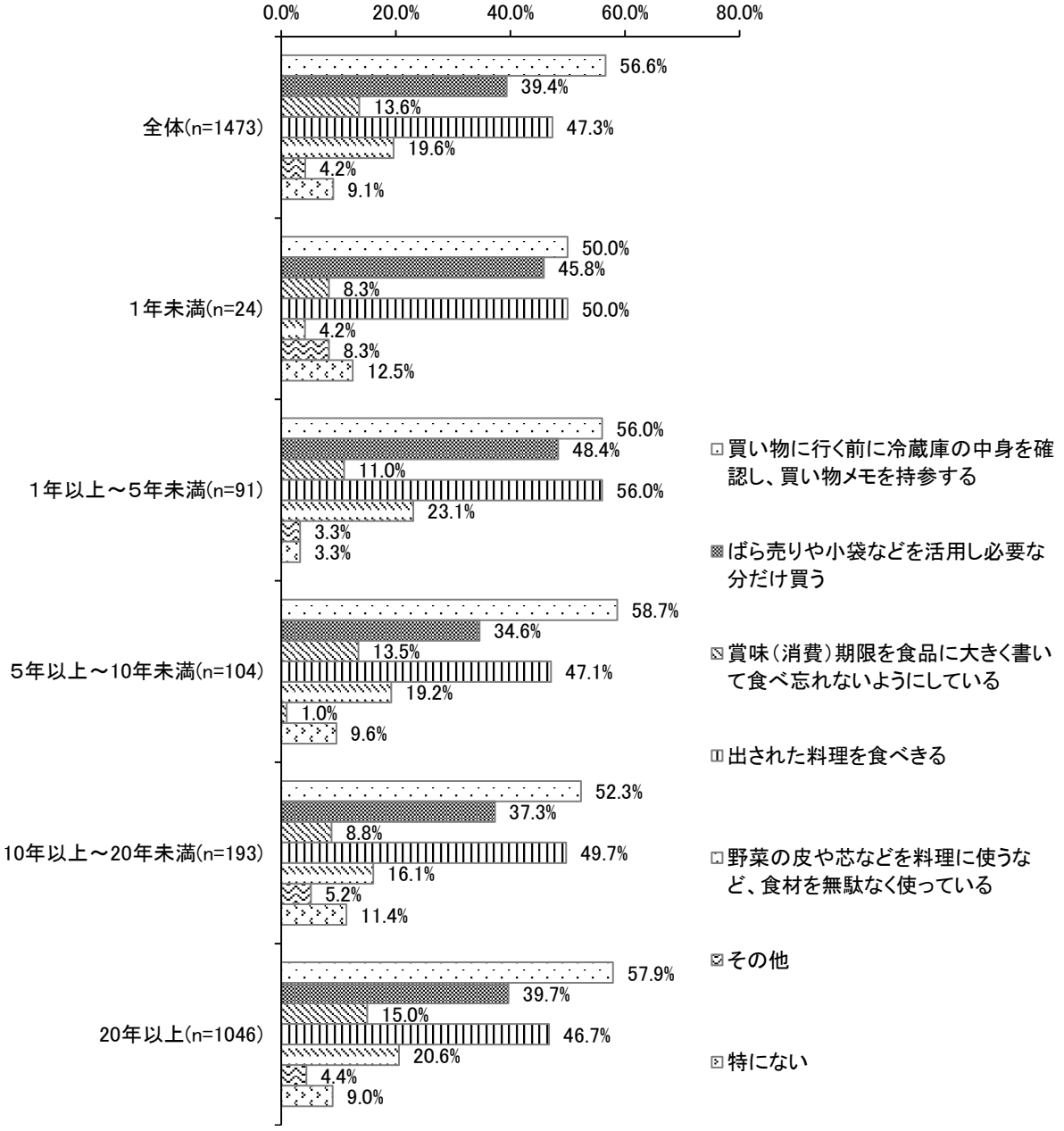
「買い物に行く前に冷蔵庫の中身を確認し、買い物メモを持参する」、「野菜の皮や芯などを料理に使うなど、食材を無駄なく使っている」など、食材を無駄にしない取組は、年代が上の世代の比率が高い傾向にある。問 31 において、「『食品ロス』を出したことがない」の回答は、年代が上の世代の比率が高かったことから、適量を購入することが、食品ロスの削減につながると考えられる。

同居人数別



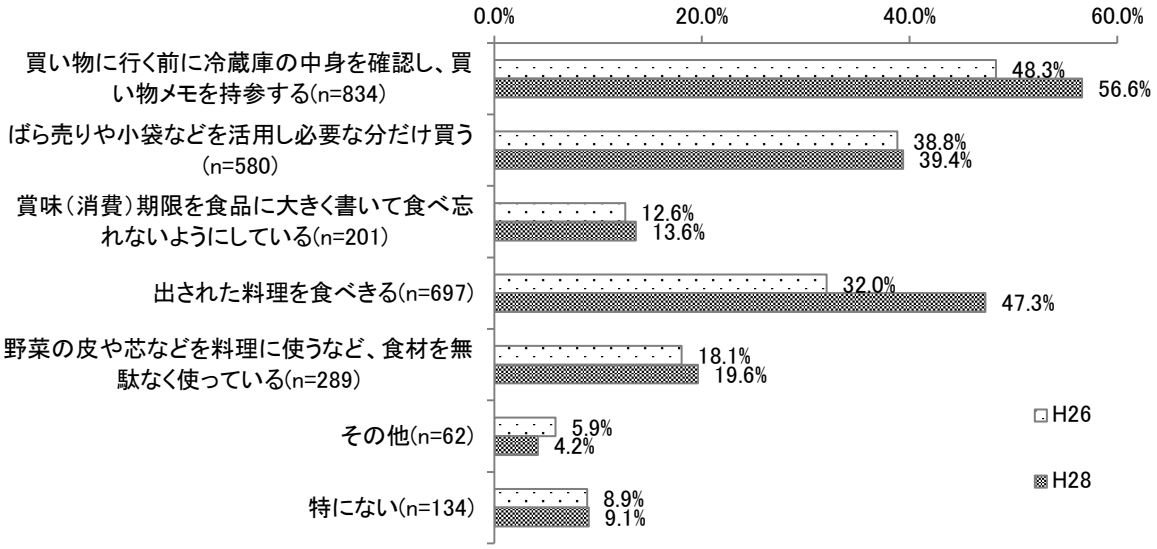
同居人数別に比較すると、「ばら売りや小袋などを活用し必要な分だけ買う」は、「１人」世帯の 47.7%が最も高く、次いで「２人」世帯の 41.6%、「３人」世帯の 40.1%と続いた。同居人数が少ないほど比率が高くなることから、人数が少ない世帯では、適量を購入していることが分かる。

居住年数別



居住年数別に比較すると、「１年未満」で「野菜の皮や芯などを料理に使うなど、食材を無駄なく使っている」と回答したのは4.2%で、他の居住年数と比べて大幅に低い比率となった他は、居住年数別で大きな差は見られなかった。

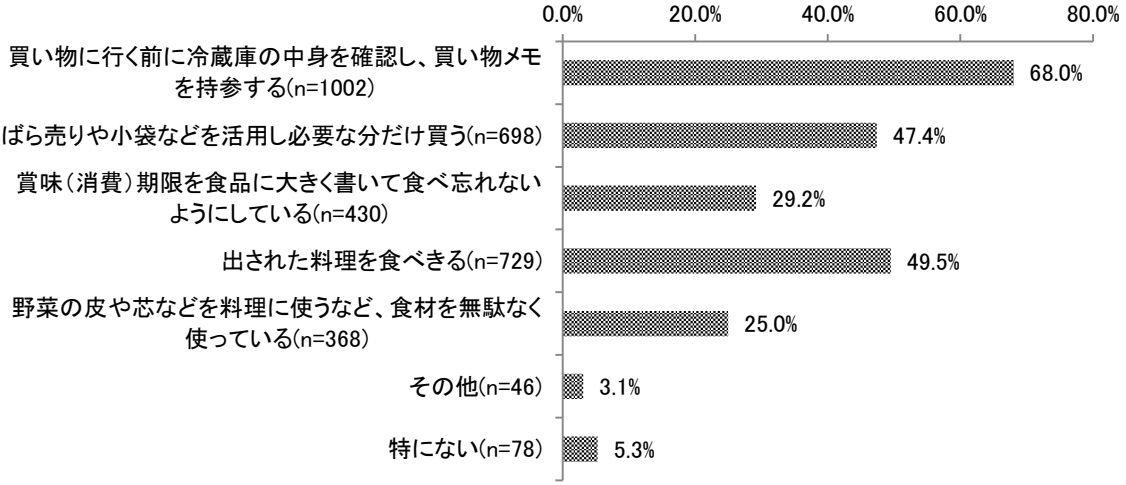
経年変化



平成 26 年度調査との比較では、「その他」以外の全ての項目の比率が増加している。食品ロスを出さないための取組を実践している世帯は増加しており、今後も継続して食品ロス削減の取組を呼び掛けていく必要がある。

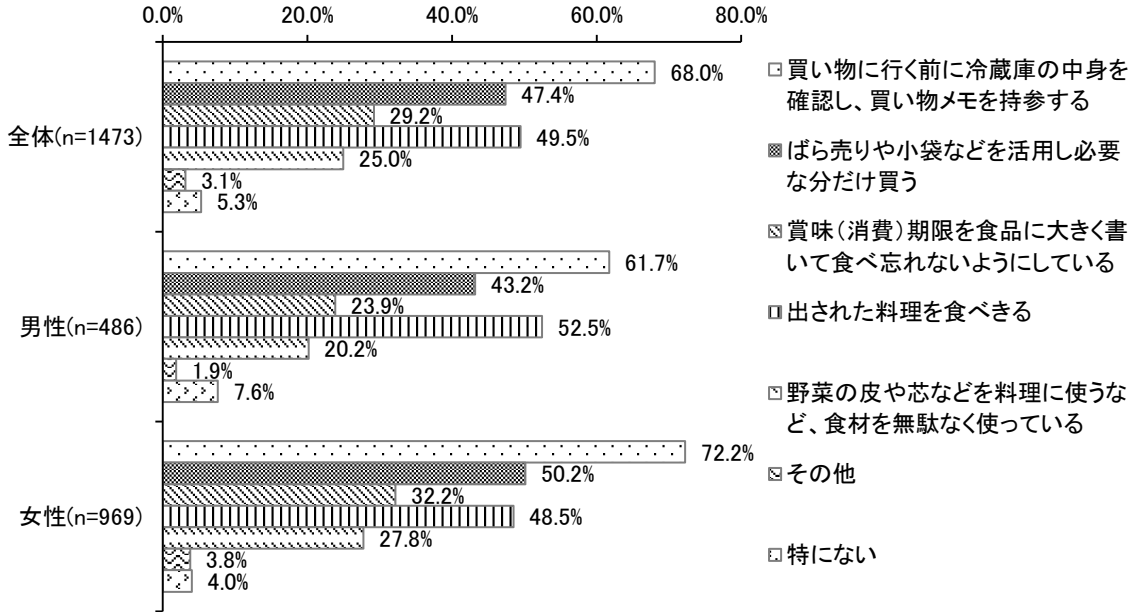
しかし、問 31 において、「手つかず食品」、「食べ残し」の比率は平成 26 年度調査と比較して、大幅に増加していることから、発生した食品ロスの具体的な食材を精査した上で、食品ロス削減の取組を検討することが重要だと考えられる。

問 35　あなたやあなたの家族が「食品ロス」を出さないために、取り組みやすいと思うものはありますか。○はいくつでも。(n=1,473)



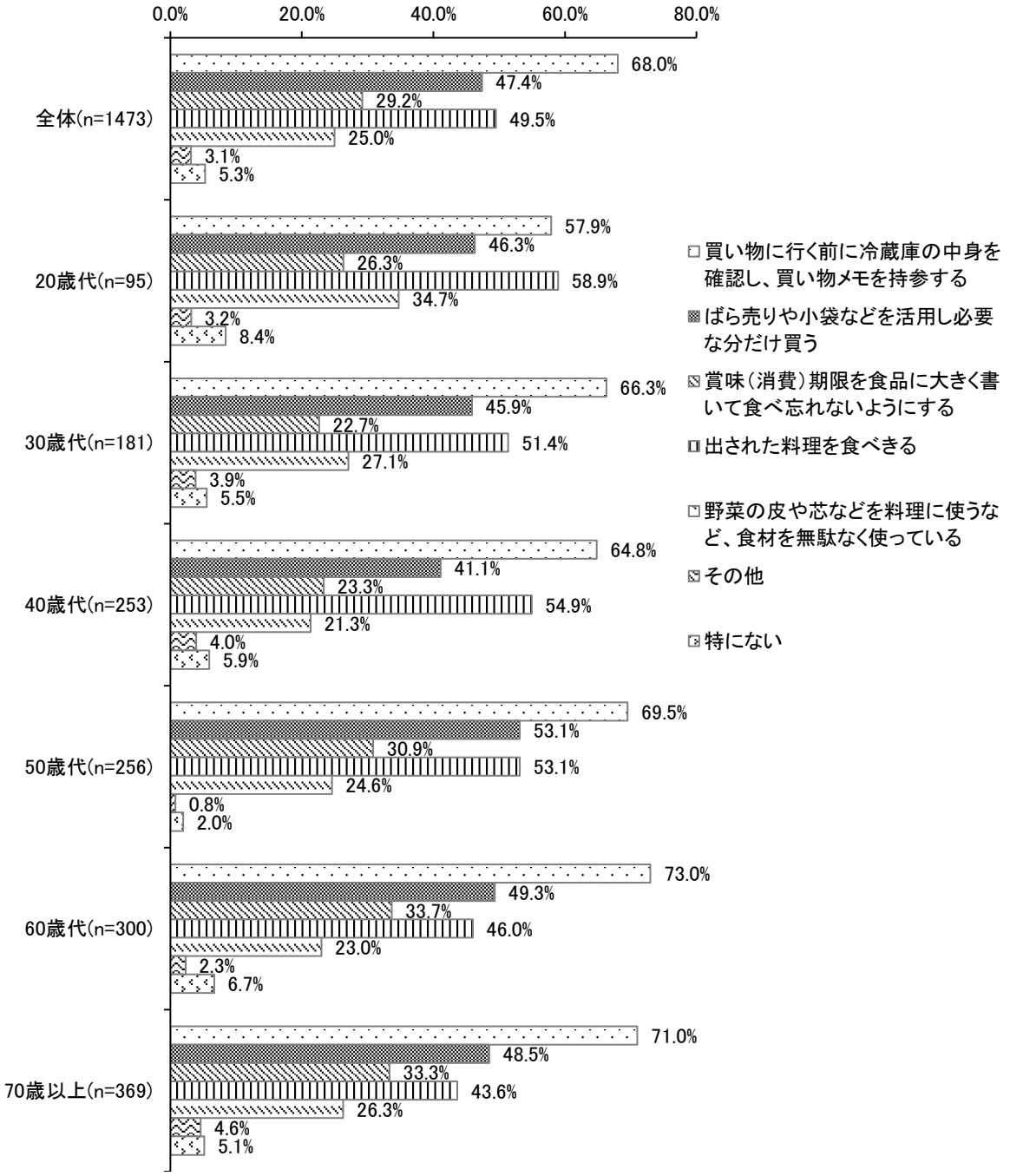
「買い物に行く前に冷蔵庫の中身を確認し、買い物メモを持参する」が 68.0%で最も高く、次いで「出された料理を食べきる」が 49.5%、「ばら売りや小袋などを活用し必要な分だけ買う」が 47.4%と続いている。

男女別



問 34 の現在取り組んでいる工夫と同様の回答傾向であり、「出された料理を食べきる」のみ男性が女性を上回ったが、他の項目では、女性の比率が高かった。

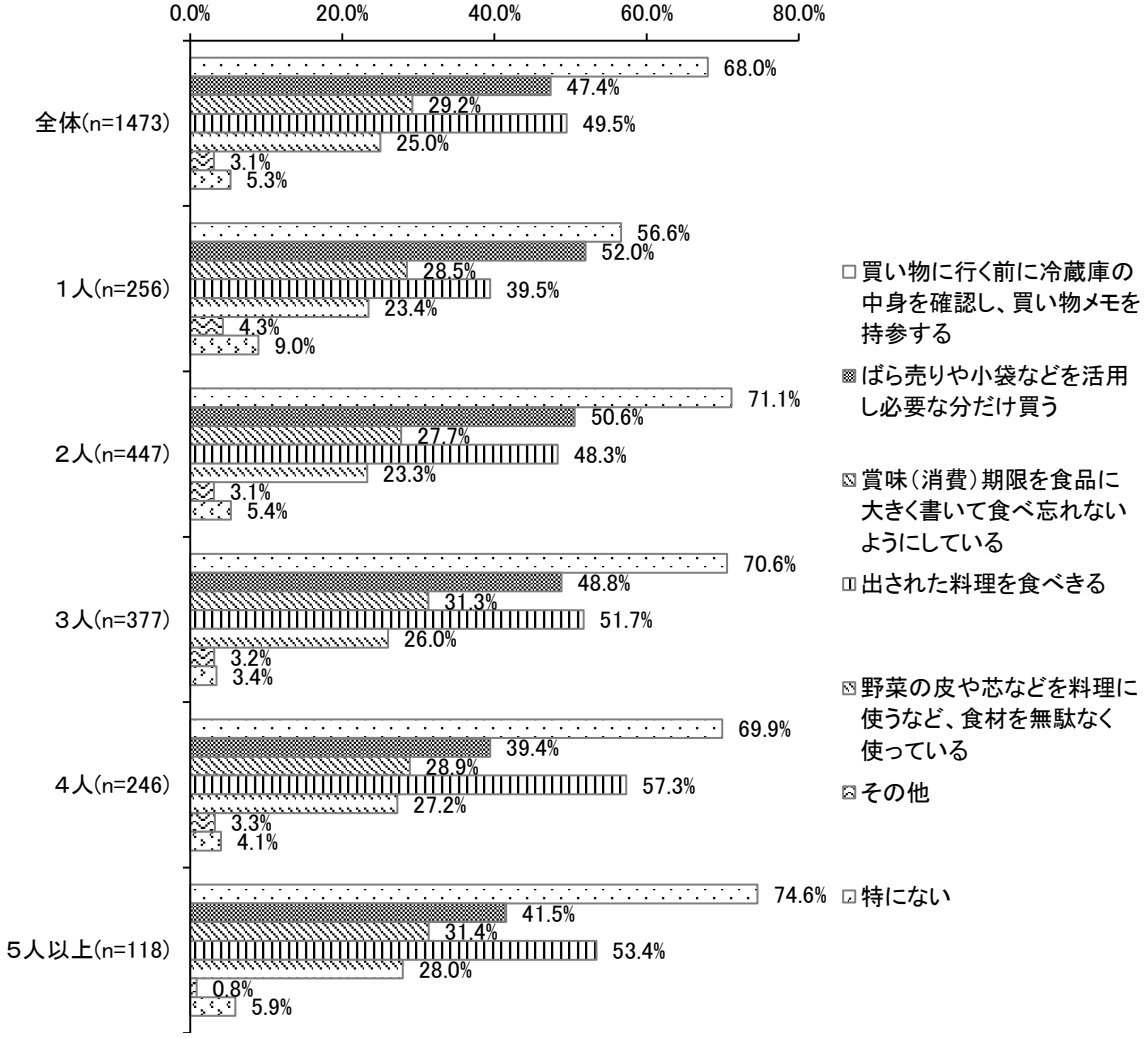
年代別



年代別に比較すると、「買い物に行く前に冷蔵庫の中身を確認し、買い物メモを持参する」と回答したのは、「60 歳代」が 73.0%で最も高く、「賞味（消費）期限を食品に大きく書いて食べ忘れないようにする」においても、「60 歳代」が最も高かった。また、「出された料理を食べきる」と回答したのは、「20 歳代」が 58.9%で最も高かった。

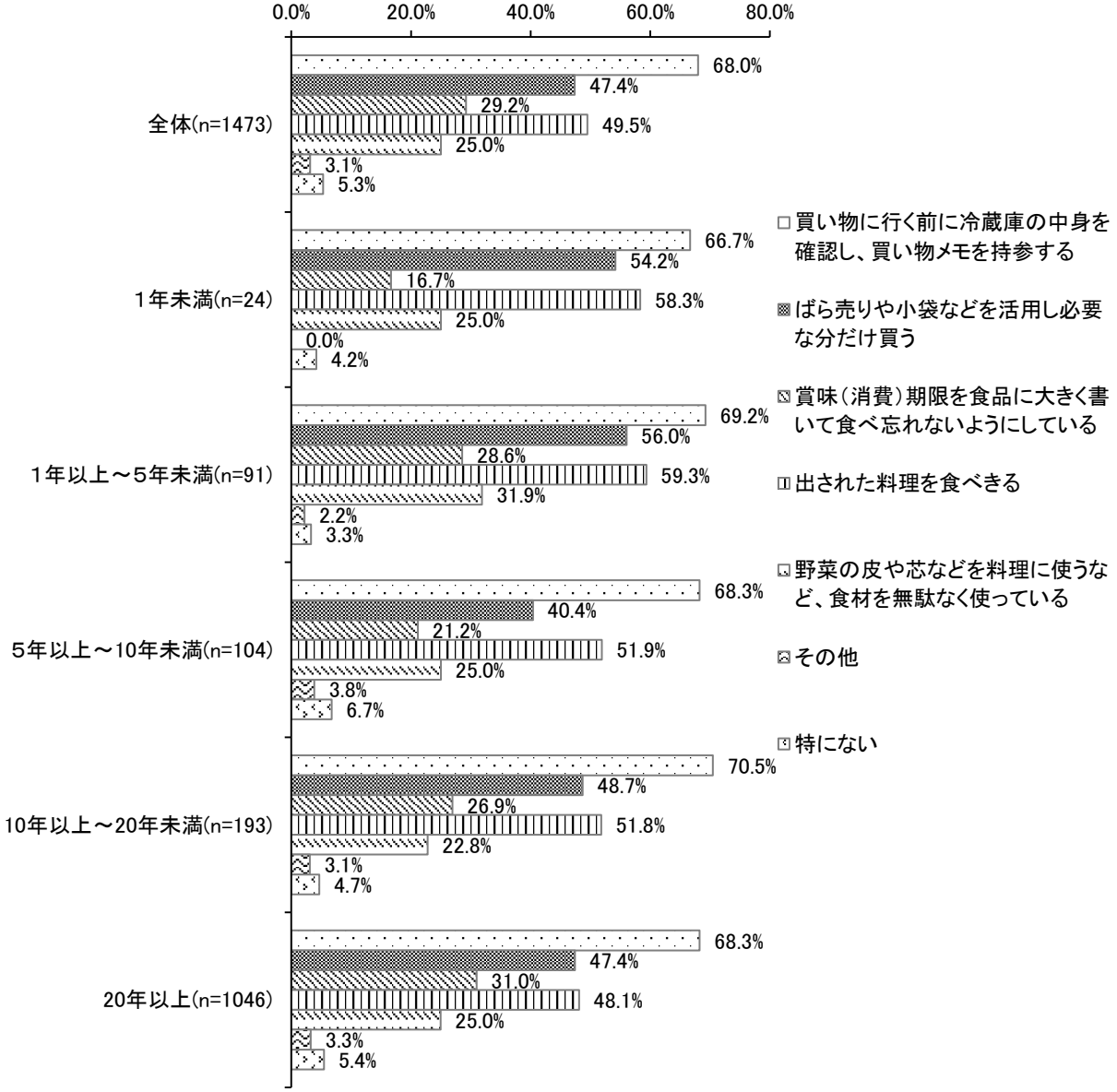
以上の比較結果から、年代が下の世代では、出された料理を食べきることが取り組みやすく、年代が上の世代は、メモを取って管理することが取り組みやすい傾向にあることが分かった。これらの取り組みやすさは、外食又は、自宅で料理する頻度とも関係すると考えられる。

同居人数別



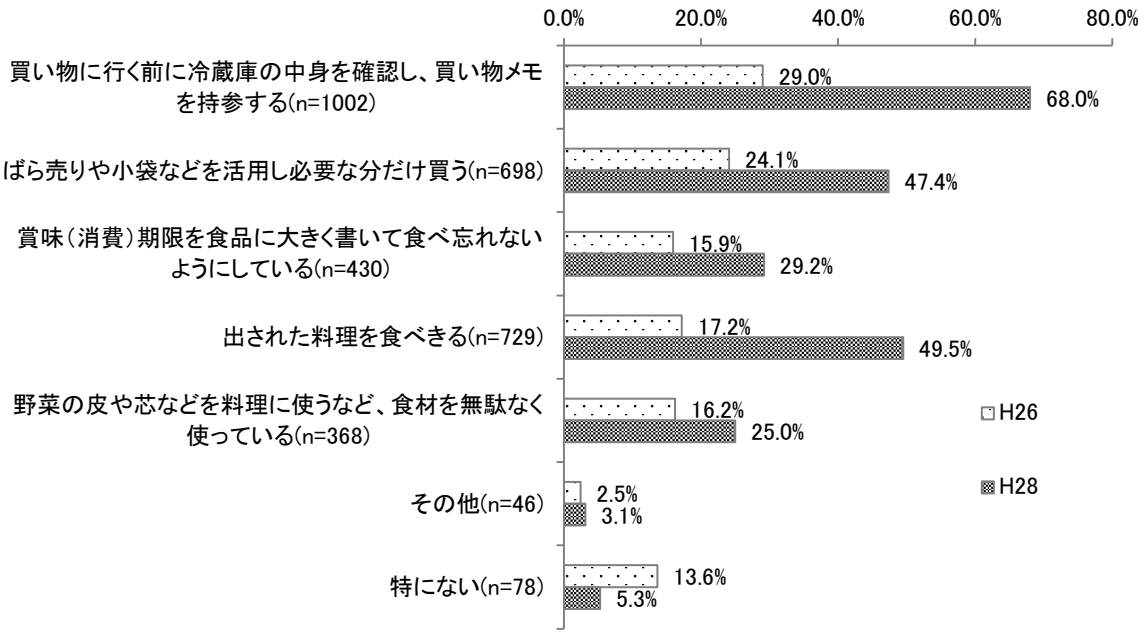
問 34 の現在取り組んでいる工夫と同様の回答傾向であり、「ばら売りや小袋などを活用し必要な分だけ買う」は、「１人」世帯の 52.0%が最も高く、次いで「２人」世帯の 50.6%、「３人」世帯の 48.8%と続いた。

居住年数別



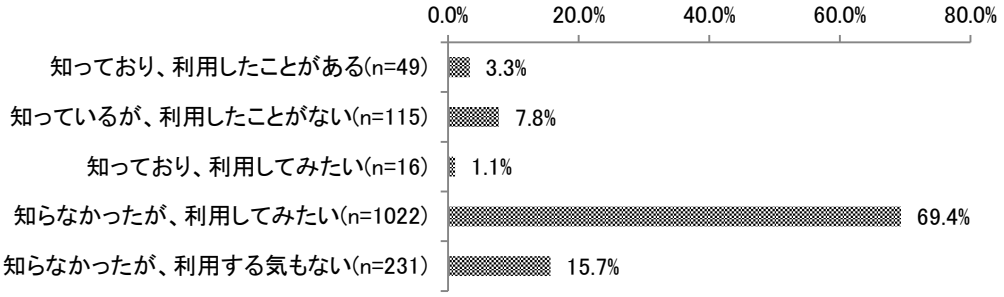
居住年数別に比較したところ、回答に大きな差は見られなかった。

経年変化



平成 26 年度調査と比較して、「特にない」以外のすべての項目で増加している。特に、「買い物に行く前に冷蔵庫の中身を確認し、買い物メモを持参する」では、平成 26 年度から 39%増加し、「出された料理を食べきる」では、32.3%増加した。平成 26 年度より、食品ロスを減らす取組に関心が強くなっていることが分かる。

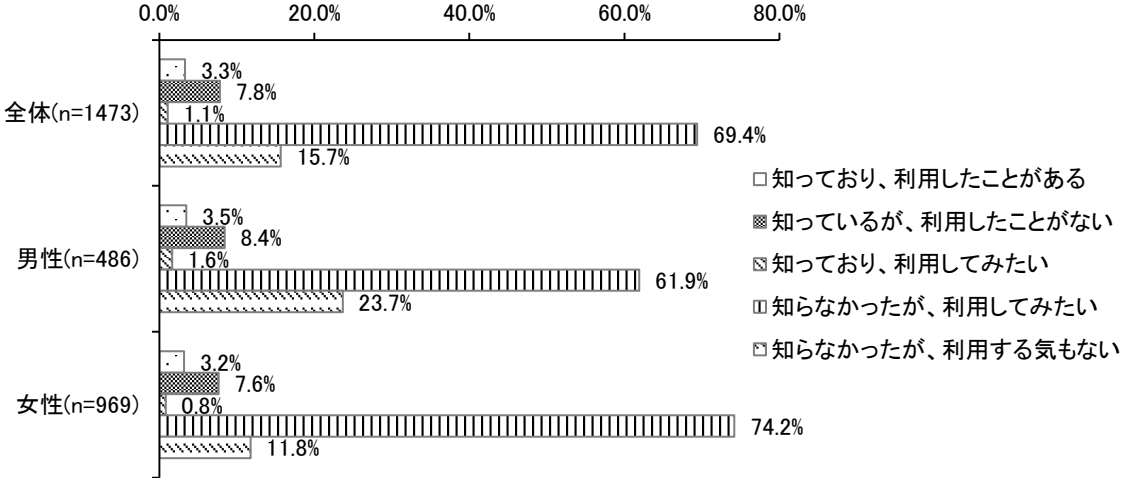
問 36　あなたは、「食べきり協力店」を知っていますか。○はひとつ。(n=1,473)



「知らなかったが、利用してみたい」が 69.4%で最も高く、次いで「知らなかったが、利用する気もない」が 15.7%と続いている。利用の有無にかかわらず、「知っている」と回答したのは 12.2%にとどまった。

「知らなかったが、利用してみたい」と考える市民が非常に多いため、食べきり協力店の周知を図ることで、利用客の増加につながると考えられる。

男女別

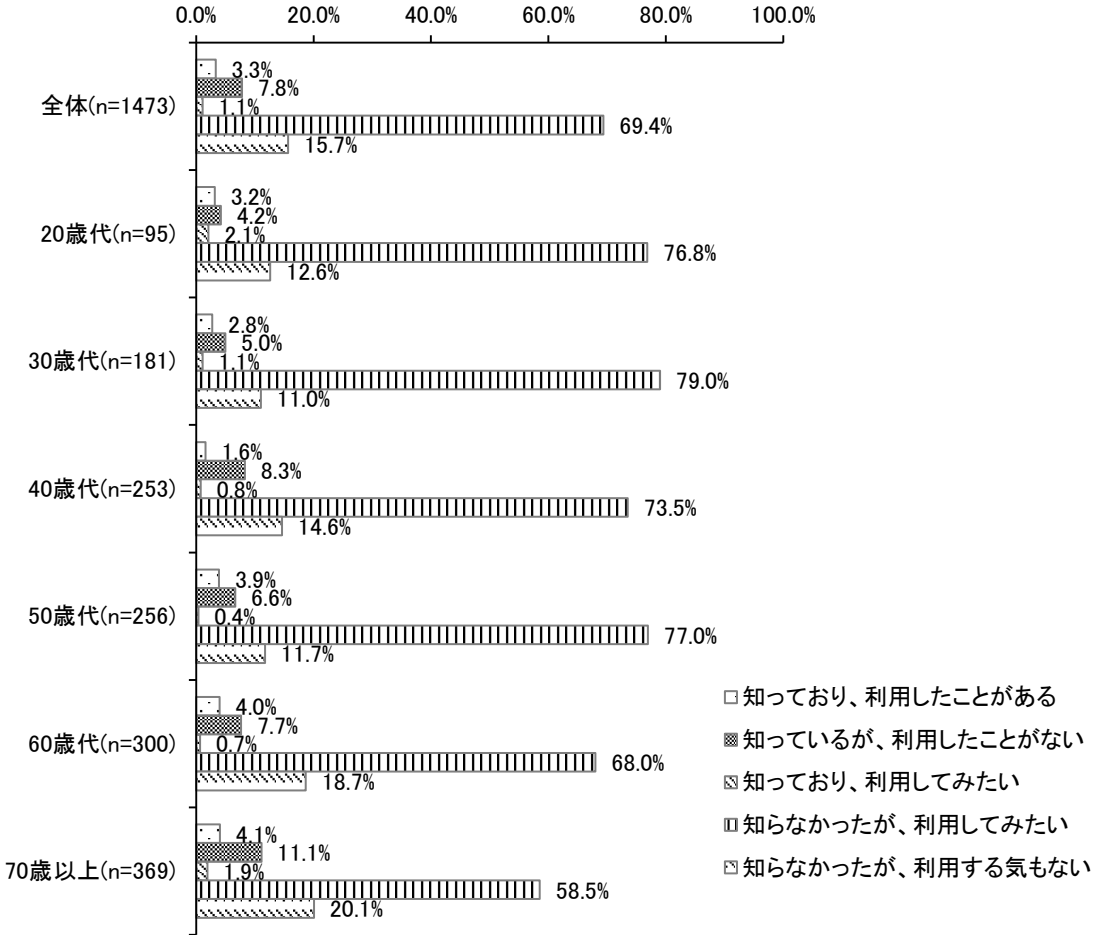


男女別に比較すると、「食べきり協力店」の認知度に差は見られなかったが、「知らなかったが、利用してみたい」では、「女性」が 74.2%で、「男性」の 61.9%を上回った。

一方、「知らなかったが、利用する気もない」では、「男性」が 23.7%で、「女性」の 11.8%を上回った。

「食べきり協力店」については、特に、女性に周知を図ることで利用客の増加につながると考えられる。

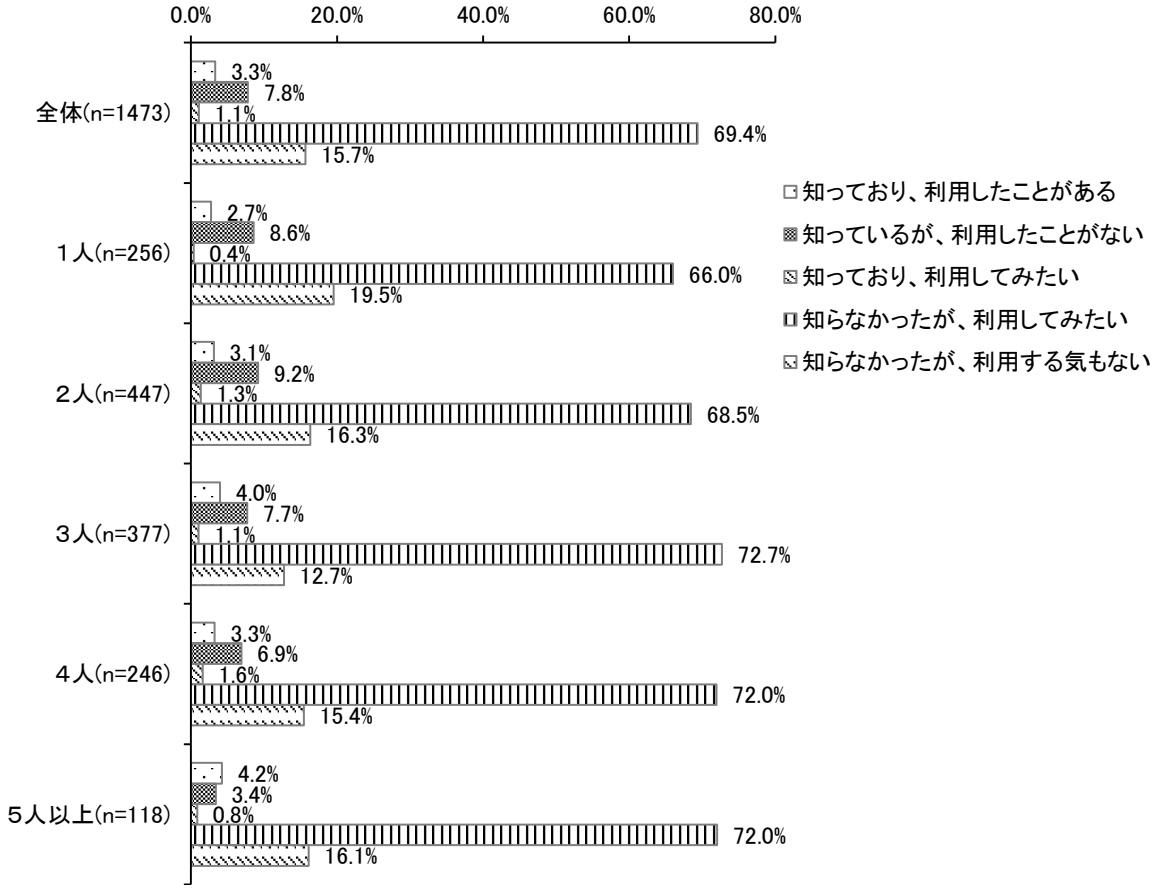
年代別



年代別に比較すると、「知らなかったが、利用してみたい」と回答する比率が、「70 歳以上」が 58.5%で最も低く、「60 歳代」の 68.0%が続いた。

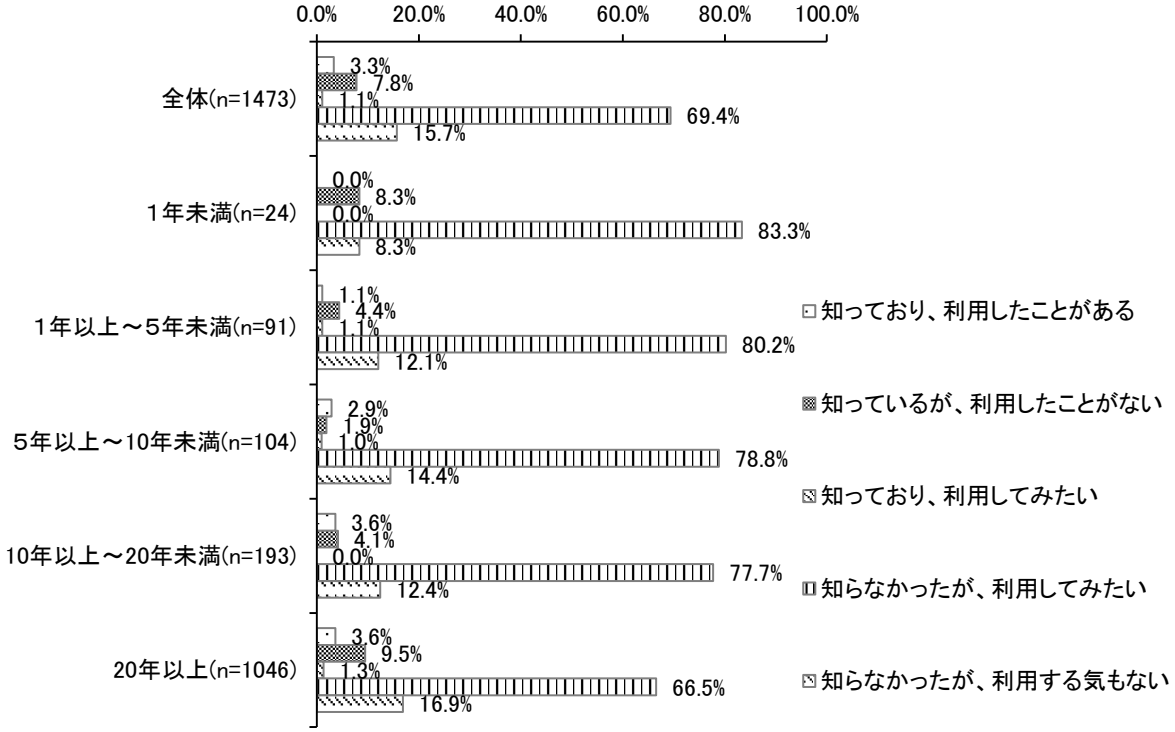
また、「知らなかったが、利用する気もない」においても、「70 歳以上」が 20.1%で最も高く、「60 歳代」の 18.7%が続いた。

同居人数別



同居人数別に比較したところ、回答に大きな差は見られなかった。

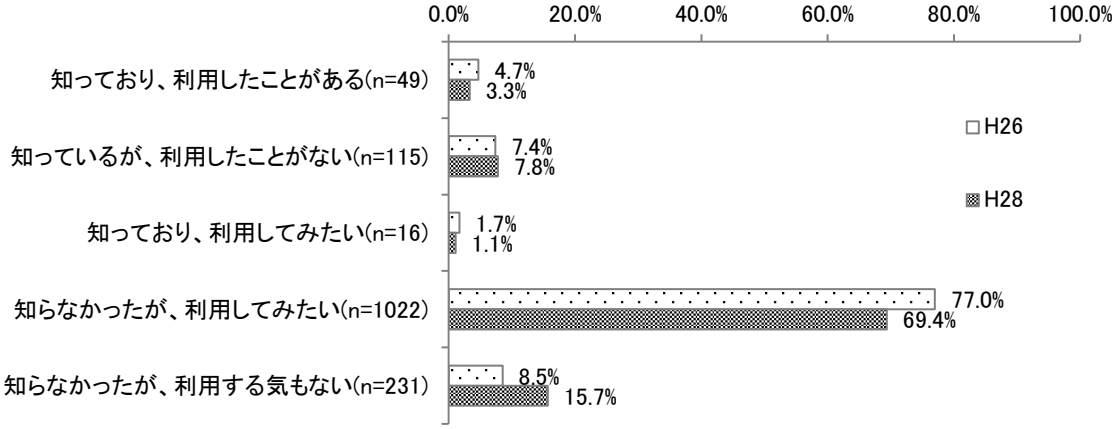
居住年数別



居住年数別に比較すると、「知らなかったが、利用してみたい」と回答する比率が、「20 年以上」が 66.5%で最も低く、「10 年以上～20 年未満」の 77.7%が続いた。

また、「知らなかったが、利用する気もない」においては、「20 年以上」が 16.9%で最も高く、「５年以上～10 年未満」の 14.4%が続いた。

経年変化



今回の調査（平成 28 年度）では、「知らなかったが、利用してみたい」、及び「知らなかったが、利用する気もない」の累積構成比は 85.1%であり、平成 26 年度でも、この比率は 85.5%であるため、認知度に変化がないことが分かる。

■考察　食品ロスについて

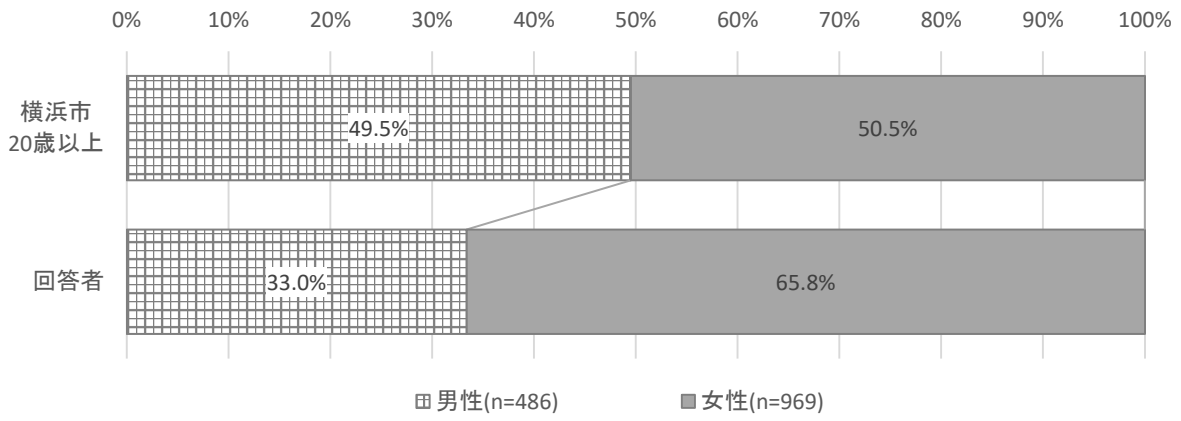
「食品ロス」という言葉の意味は、年代が上がるほど認知度も高くなり、食品ロスの発生量も減少している。一方で、年代が上がるほど、保存食品を「手つかず食品」として排出する傾向があった。また、平成 26 年度調査と比較すると、保存食品や惣菜・弁当類などの比率が上昇している。「手つかず食品」は、大幅に増加している食品ロスでもあるため、今後、高齢化が進行することで、保存食品の「手つかず食品」がさらに増加すると考えられる。年代が上の世代では、「家にある在庫を忘れ、同じものを買ってしまい食べきれなかった」という理由で「手つかず食品」を排出してしまうため、「冷蔵庫１０・３０運動」などの在庫の確認を推奨することで、全体の「手つかず食品」の減量につながるのではないか。

しかし、年代が上の世代では、買い物メモの持参や、料理の際、食材を無駄なく使うなど、積極的に食品ロス削減に取り組み、結果として食品ロスの発生を抑えることに成功している。食品の在庫をこまめにチェックし、無駄なものは買わないよう促したい。外食に関しても、「食べきり協力店」の周知を徹底することが望ましい。

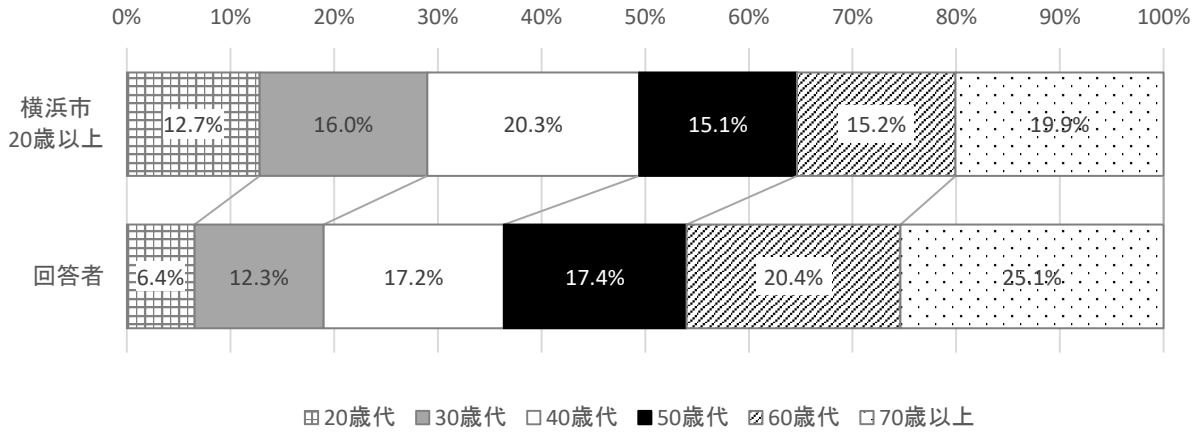
広報活動の効果もあり、平成 26 年度調査と比較すると、食品ロスに対する市民の関心が高まっている。しかし、「手つかず食品」及び、「食べ残し」は増加している。具体的な食品ロス削減の手段を周知することで、市民も食品ロス削減に取り組みやすくなるのではないか。

2.13　回答者の属性

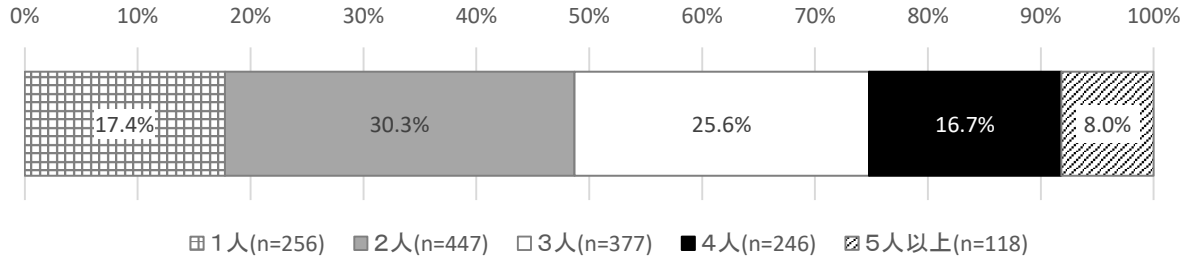
Ｆ１　あなたは、男性ですか、女性ですか。(n=1,473)



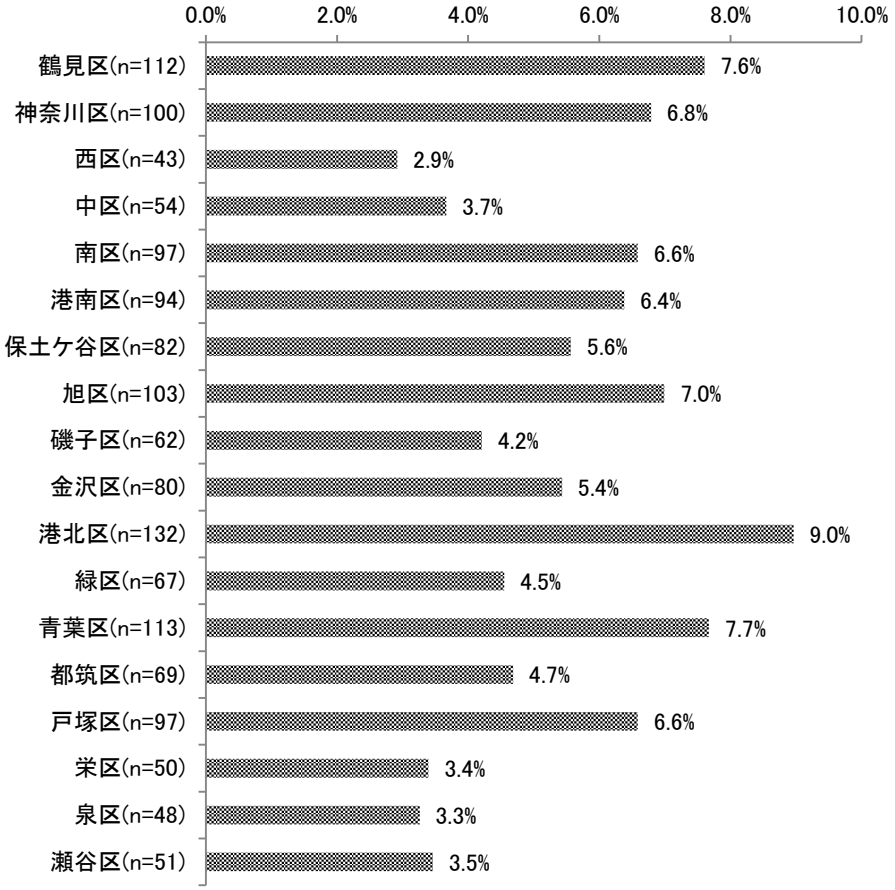
Ｆ２　あなたの年齢は、いくつですか。(n=1,473)



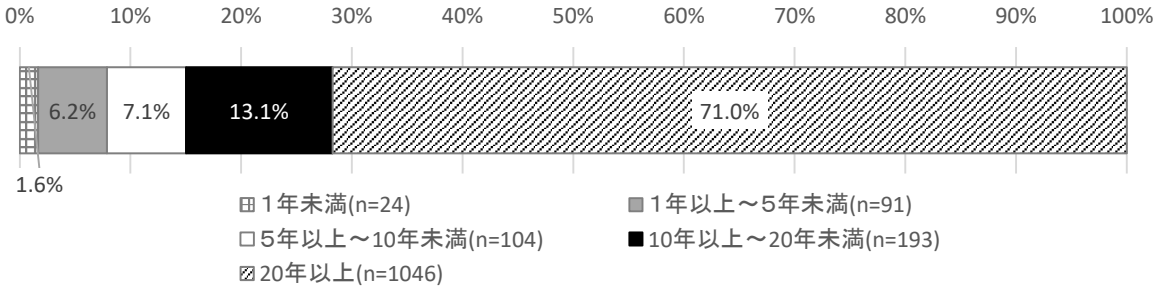
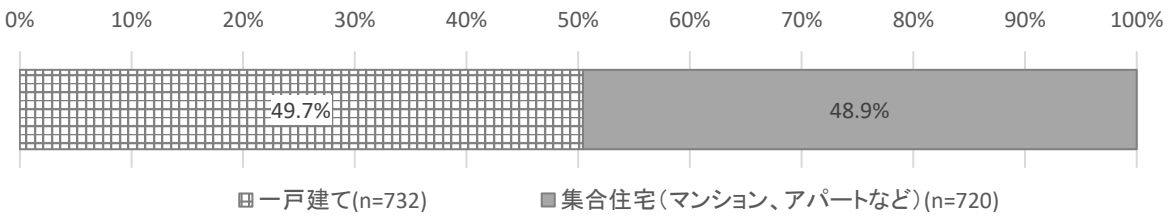
Ｆ３　現在、いっしょに住んでいる家族の人数は、あなたを含めて何人ですか。(n=1,473)



Ｆ４　あなたのお住まいは、何区ですか。(n=1,473)



Ｆ５　あなたは、横浜市に何年くらい住んでいますか。(n=1,473)



Ｆ６　あなたのお住まいは、次のどれにあてはまりますか。(n=1,473)